

かながわの考古学

2002.3

財団法人 かながわ考古学財団

かながわの考古学

2002.3

財団法人 かながわ考古学財団

はじめに

今年度は、各時代の研究プロジェクトから出された共同研究の成果7本と、研究論文1本の計8本を載せることができました。

縄文時代PJ、古墳時代PJ、奈良・平安時代PJは、引き続き前年からの継続研究の成果が、中世PJは過去5年にわたる研究のまとめとしての成果がそれぞれ発表されています。

旧石器時代PJと弥生時代PJは今年度は新たに、遺構と遺物からの観点でテーマを設定し、近世PJは以前に行った近世遺跡の集成の補遺をテーマとして設定しました。

各時代PJとも、継続または新たなテーマのもと意欲的に取り組んできました。各論考とともに盛りだくさんの成果が込められており、これらの研究上欠くことのできない論考となると考えております。

また、今回は職員等の研究論文として、鎌倉で発見されたやぐら内の埋葬と供養というテーマでの論考が掲載されております。

今後も、共同研究という場において最大限成果が發揮されるテーマに取り組み、より内容を充実させる所存です。

最後に、本書が埋蔵文化財の調査や考古学研究に広く活用されることを願うとともに、皆様方の一層のご指導・ご批判を賜りますよう願っております。

2002年3月

財団法人 かながわ考古学財団

理事長 熊田節郎

目 次

神奈川県内における旧石器時代の遺構（1）－漸移層～L1H層－	旧石器時代研究プロジェクトチーム 1
神奈川における縄文時代文化の変遷VI	
中期後葉期 加曾利E式土器文化期の様相 その2 土器編年案－	縄文時代研究プロジェクトチーム 17
宮ノ台式土器の研究（1）	弥生時代研究プロジェクトチーム 35
横穴墓の研究（8）	
形態・構造面からの検討を中心に－	古墳時代研究プロジェクトチーム 51
神奈川県における奈良・平安時代の考古学的研究（Ⅲ）	
その歩みと今後の視点－	奈良・平安時代研究プロジェクトチーム 67
神奈川県内の「かわらけ」集成（6）	中世研究プロジェクトチーム 87
神奈川県内の近世遺跡の集成（2）	近世研究プロジェクトチーム 101
－研究論文－	
やぐらの埋葬と供養－山王堂東谷やぐら群で発見された切石基壇と経石をめぐって－	宍戸信悟・池田治・船場昌子 127

凡例

1. 本書は、財団法人かながわ考古学財団および神奈川県教育庁教育部生涯学習文化財課の職員で構成する研究プロジェクトチームが、時代ごとに計画的に共同研究を行った結果である。
2. 各研究プロジェクトチームの構成は以下のとおりである（五十音順）。
 - ・**旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム**
井関文明・大塚健一・加藤勝仁・栗原伸好・鈴木次郎・砂田佳弘・島中俊明・三瓶裕司・御堂島正吉田政行
 - ・**縄文時代研究プロジェクトチーム**
天野賢一・井澤 純・井辺一徳・小川岳人・恩田 勇・長岡文紀・松田光太郎・山本輝久
 - ・**弥生時代研究プロジェクトチーム**
阿部友寿・飯塚美保・池田 治・伊丹 徹・櫻井真貴・新開基史・谷口 雄・村上吉正・渡辺 外
 - ・**古墳時代研究プロジェクトチーム**
上田 薫・植山英史・柏木善治・川島信乃・近野正幸・長谷川厚
 - ・**奈良・平安時代研究プロジェクトチーム**
岩田直樹・大上周三・加藤久美・河野喜映・木村尚二・富永樹之・中澤正人・中田 英・葉山俊章・依田亮一
 - ・**中世研究プロジェクトチーム**
宍戸信悟・鈴木庸一郎・服部実喜・宮坂淳一
 - ・**近世研究プロジェクトチーム**
市川正史・木村吉行・久保田俊夫・樹洞規彰・柳川清彦
3. 本書の挿図・挿表については各プロジェクトチームで作成し、図・表番号は各論文ごとに付している。また、執筆分担については各々の文末に記した。

神奈川県における旧石器時代の遺構（その1）

－漸移層～L 1 H層－

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

本プロジェクトでは、神奈川県内の遺跡資料の集成を基礎として編年研究を行い、昨年度は遺跡間接合の問題を検討してきたが、本年度からは旧石器時代の遺構について検討することとした。それは、近年、疊群、炭化物集中箇所等從来から知られていた遺構に加えて、清川村サザランケ遺跡で炉址、相模原市田名向原遺跡で住居状遺構、横須賀市打木原遺跡では陥し穴とみられる上坑等が発見され、人為的な掘り込みや櫛配置をもった確実な遺構がみられるようになり、現段階での整理を行っておく必要があると考えたからである。

とりあげた遺構は、疊群、炭化物集中箇所、炉址、配石、住居状遺構、土坑、ピット等で、旧石器時代から一部縄文時代初頭の遺構について集成・分析し、その内容や変遷、ブロックとの関係等について検討する基礎をしたいと考えた。本年度は、漸移層からL 1 H層にかけて集成を行った。

（御堂島 正）

漸移層からL 1 H層の遺構について

疊 群（第1図1～6・第2図1～3・第1表）

本遺構は31遺跡129事例を数え、漸移層～L 1 H層では最多の遺構である。長軸は0.2～15.4mの範囲にあり、その平均は2.91mである。構成疊数の平均は21（18、以下括弧内示す数字は接合個体別数）で、分布の状態は密集9、集中42、やや集中8、散漫56、やや散漫2となり、集中するものと散漫なものが半々であるといった傾向が窺える。また集成データからは大半のものが被熱に関わるものと判断され、石器がその中に含まれるもののが25例あり、全体の約1/5を占める他、疊群もしくはブロックとの関連を指摘しうるもののが約半数に及ぶ。

層位毎に長軸と構成疊数の平均を比較すると以下のようになる。F B層下部では9疊群中、長軸の平均値は3.4mで、構成疊の平均数は9点となる。漸移層では5疊群中、長軸平均値は2m、構成疊平均数10点となる。L 1 S層中では13疊群中、長軸平均値2.2m、構成疊平均数は16（9）点となる。B O層中では26疊群中、長軸平均値が4.8m、構成疊平均数は28（24）点となる。L 1 H層中では45疊群中、長軸平均値が2.2m、構成疊平均数は26（23）点となる。これらのことから、F B層下部とB O層を除く長軸の平均値は2～2.2mにとどまるにもかかわらず、構成疊の平均数はB O層を境に上層になるに従い、減少する傾向が窺える。

炭化物集中（第2図4～6・第2表）

本遺構は11遺跡20事例を数え、漸移層～L 1 Hの各層で確認されている。長軸は0.5～6mの範囲にある。本遺構の中には住居状遺構に作る炉の可能性が指摘されるものや、散漫な分布を示すことから遺構として扱い難いものもある。また遺物との関係を積極的に見いだしがたい点が本遺構の特徴を示していると考えられる。

炉 址 (第3図1・2・第3表)

本遺構は2遺跡3事例を数え、B.O層下部とL1H層中部で確認されている。サザランケ遺跡では、長軸は1m、掘り込みの深さは0.15mを測り、「コ」もしくは「U」字状に礫を配置した石匂炉も検出されている。

配 石 (第3図3~5・第4表)

本遺構は5遺跡12事例を数え、漸移～L1H層の間で確認されている。報告されている本遺構の構成種数は接合しない状態では1~41点で、その平均は約12点である。接合状態では1~13点で、その平均は約6点となる。長軸は0.20~3.60mの範囲にあり、その平均値は約2mである。分布は散漫なものが大半であるが、これらの構成種のうち、記載のあるものについては少なくとも被窓の痕跡が指摘される点で、漸移層～L1H層の確群構成と共通する。また本遺構はその石材組成から在地系の河床礫で構成されている可能性が考えられる。石器との共伴関係が認められるものが3例、他の遺構との関連が認識されるものが4例ある。

住居状遺構 (第4図1~3・第5表)

本遺構は5遺跡6事例を数える。確認層位はFB～L1S層までであり、この内5例は縄文時代初頭とされるものである。長軸は約3~7mの範囲で捉えられ、内部に柱穴を持つことが本遺構等を他の遺構と区別する目安となっている。炉址を持つものは、慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡II区の1例しか見受けられない。

土 坑 (第5図1~5・第6表)

本遺構は8遺跡12事例を数え、確認層位はFB層～L1S層までとされるが、この内の7例は漸移層の所産とされる。長軸は0.25~2.85mの範囲にあり、その平均値は1.1mである。この内、石器や炭化物等の遺物との関連が認められるものは3例程度である。平面形は楕円形を呈するものが大半を占めるが、円形や方形もある。断面形は、半円形・U字形・逆台形等、多様である。

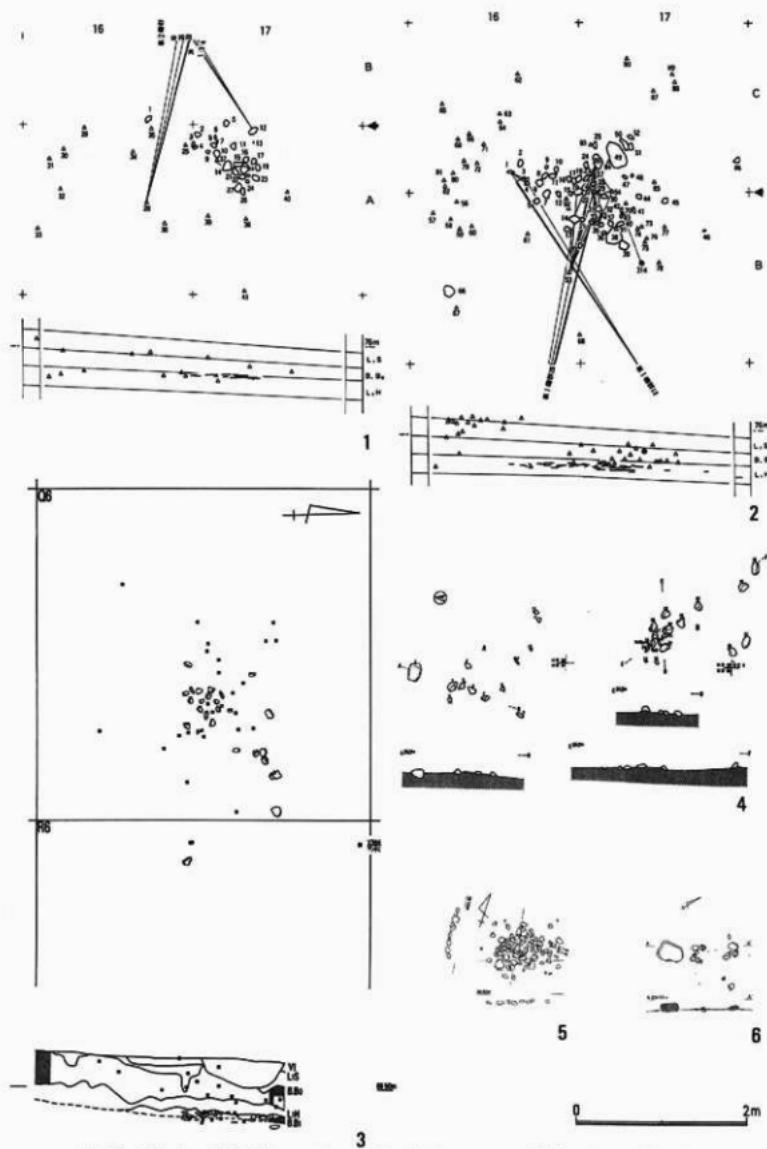
ピット (第5図6・第7表)

本遺構は3遺跡50事例を数え、FB層～L1S層で確認され、全て縄文時代初頭の所産とされる。長軸は0.13~0.57mの範囲にあり、その平均は0.31mで、深さは0.07~0.56mの範囲にあり、その平均は0.23mである。記載のあるものについて、平面形は、円形24、楕円形4で、円形が主体である。また、断面形は、逆台形21、U字形5、半円形1となり、逆台形が主体とされる。

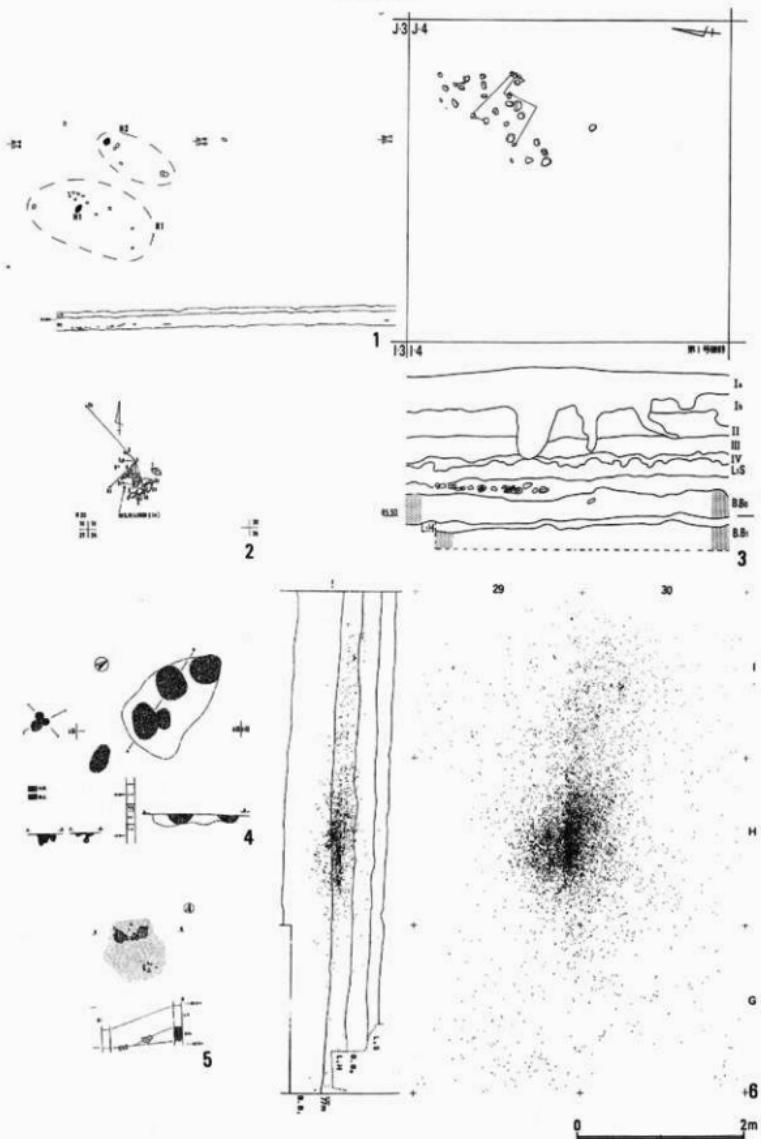
テ ポ (第8表)

本遺構は2遺跡2事例が確認されている。確認層位はL1S層とFB層下部で、いずれも縄文時代初頭の所産とされる。遺物数は少なく、器種と石材において繊りが見られるという特徴は共通する。とはいえ、下部に土坑を伴う例は吉岡遺跡群D区のみの事例である。

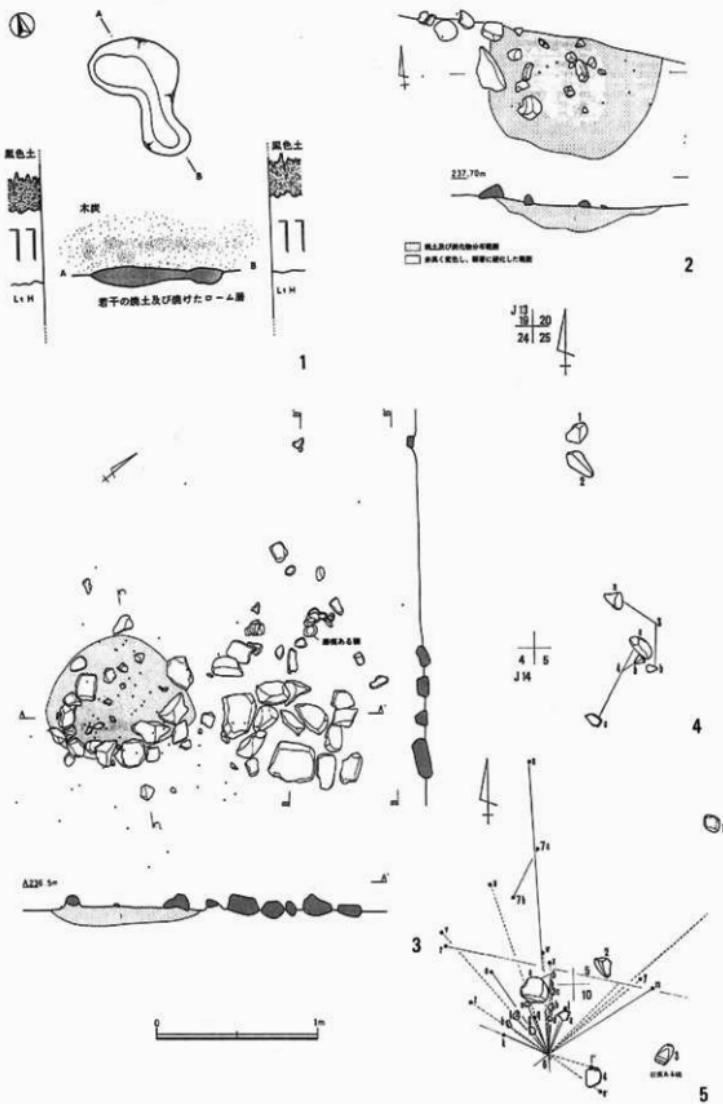
以上が今回項目別に取り上げ、その傾向・性状等について記述した「遺構」である。また資料集成にあたっては、これまでの『かながわの考古学』で掲載された文献を基本とさせていただいた。(井間文明)



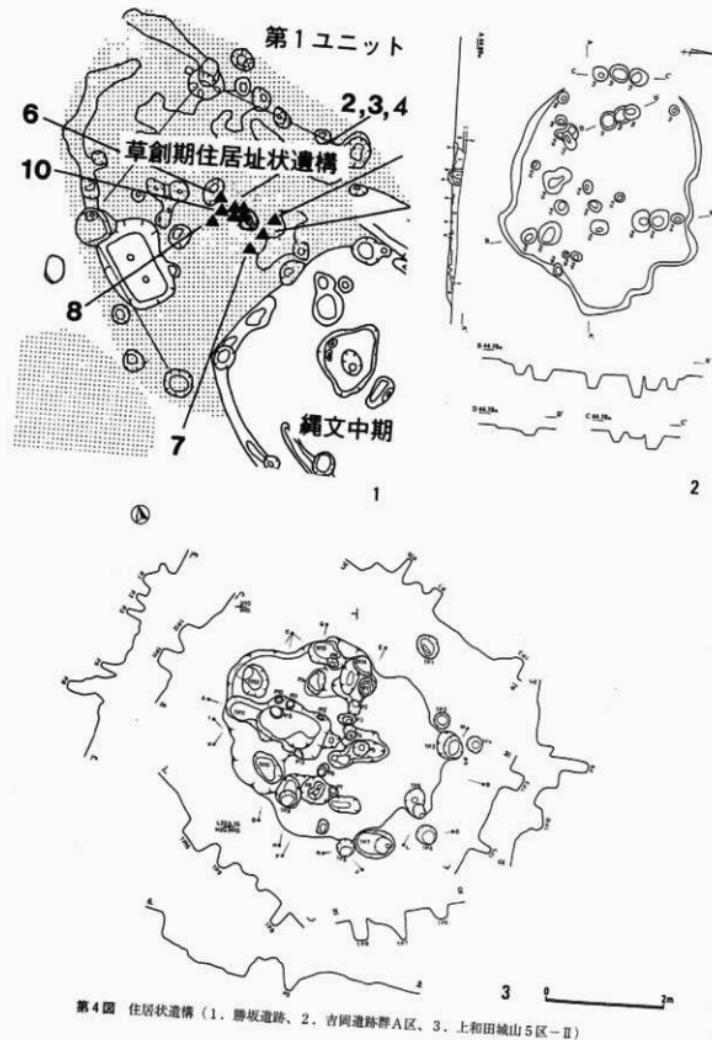
第1図 磨群（1. 月見野上野1-N、2. 月見野上野1-N、3. 長堀北-N、4. 寺尾-II、
5. 上土櫛南3次-I、6. サザランケ-II）



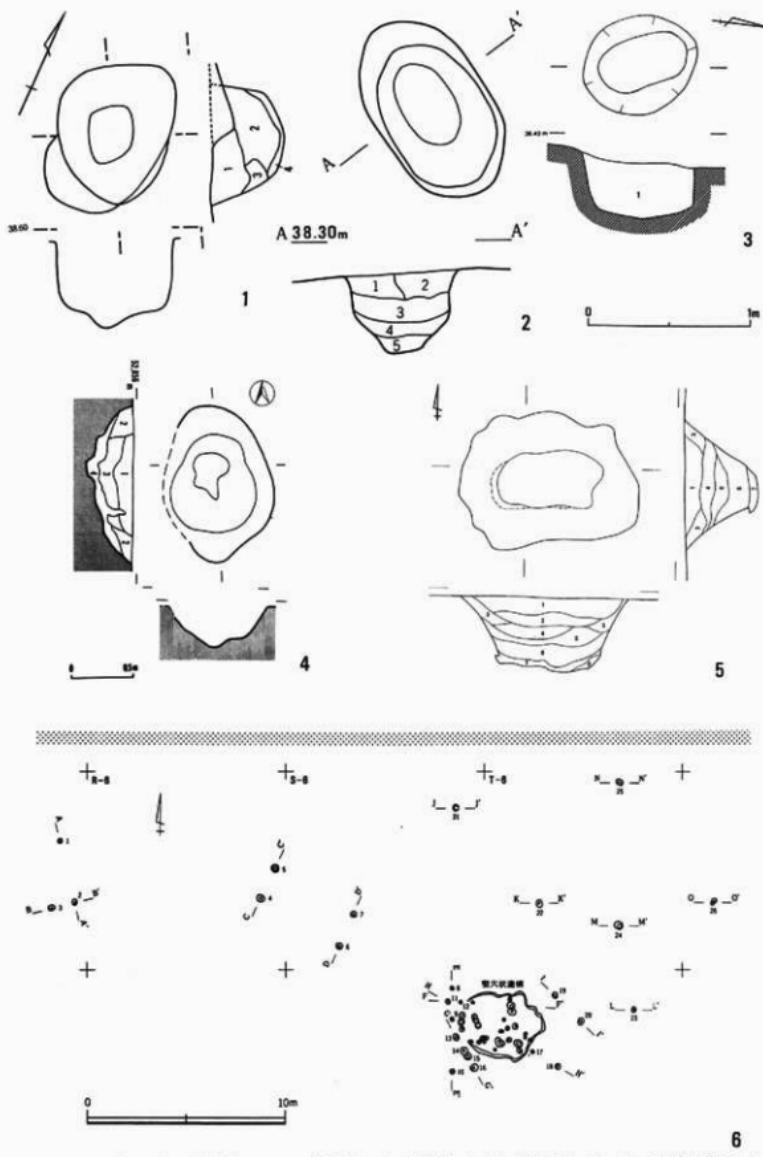
第2図 踏群、炭化物集中 (1. 柏ヶ谷長ワサーⅢ、2. 果原中丸-I、3. 相模原市No203、4. 長堀-I、
5. 上草柳1-I、6. 月見野上野1-IV)



第3図 炉址、配石（上和田城山一・II、2. サザランケーⅢ、3. サザランケーⅣ、4. 栗原中丸一・II、
5. 栗原中丸一・II）



神奈川県における旧石器時代の遺構（その1）



第5図 土坑、ビット (1. 代官山-I、2. 吉岡A区、3. 南葛野、4. 柏ヶ谷長ツサ-1、5. 三ノ宮下谷戸-1、6. 吉岡A区)

遺跡 No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸	短軸	標数	分布	標の状態	種群	石材組成	備考(共伴遺物等)
102	吉岡 C区	-	-	3種ブロック	2.10	0.20	5	密集	赤化:3/5 スス:5/5 タール:5/5 破片:1/5	砂2、安3	文化層は草創期 石器集中とは重なりなし	
102	吉岡 C区	-	-	4種ブロック	7.30	3.40	24	集中	赤化:20/24 スス:18/24 タール:18/24 破片:20/24	硬細粒1、中粗2、火 山凝2、安1、砂7、陶 8	文化層は草創期 石器集中とは重なりなし	
102	吉岡 C区	-	-	5種ブロック	2.10	1.50	4	散漫	赤化:3/4 スス:4/4 タール:4/4 破片:2/4	中粗1、火山凝1、ホ 1、砂1	文化層は草創期 石器集中とは重なりなし	
102	吉岡 C区	-	-	6種ブロック	7.20	2.80	11	散漫	赤化:6/10 スス:4/10 タール:4/10 破片:10/10	硬細粒1、中粗2、粗 凝1、火山凝1、黄1、 安1、斑3	文化層は草創期 石器集中とは重なりなし	
102	吉岡 C区	-	-	7種ブロック	4.40	2.10	5	散漫	赤化:2/5 スス:2/5 タール:2/5 破片:3/5	硬細粒1、中粗1、黄 1、砂1、斑1	文化層は草創期 石器集中とは重なりなし	
102	吉岡 C区	-	-	8種ブロック	0.60	0.30	5	密集	赤化、スス、ターラー がすべて認められる	硬細粒1、中粗1、黄 1、砂1、斑1	文化層は草創期 微細剝離を有す剥片と 剥片が1点ずつ出土	
109	代官山	漸移層L	I	第1集中地点	-	-	9	-	すべて破損	-	-	-
109	代官山	漸移層L	I	第2集中地点	2.00	0.80	9	散漫	破損:4 完形:5	-	-	-
109	代官山	L15-BB0	II	礫集中1	-	-	-	-	-	-	-	-
109	代官山	L15-BB0	II	礫集中2	-	-	-	-	-	-	-	-
109	代官山	L15-BB0	II	礫集中3	0.45	0.40	3or4	散漫	-	-	-	-
109	代官山	L15-BB0	II	礫集中4	0.75	0.65	4	散漫	-	-	-	-
109	代官山	L15-BB0	II	礫集中5	1.00	0.75	10	集中	-	-	-	-
109	代官山	L15-BB0	II	礫集中6	-	-	-	-	-	-	-	-
109	代官山	L15-BB0	II	礫集中7	-	-	-	-	-	-	-	-
109	代官山	L15-BB0	II	礫集中8	-	-	-	-	-	-	-	-
111	南鍛冶山	漸移層U	III	1号礫集中	1.20	0.90	6	散漫	赤化:3点(うち2 点は先端付近が 明瞭に赤化する) 破片:4点	ホ1・砂1・閃1・閃も くは閃ビン3	遺物1点(打製石斧・ 玄)、構成層の内2点に 接合関係が認められる	
111	南鍛冶山	漸移層U	III	2号礫集中	2.60	1.50	32	散漫	赤化:7点 破片:1/3が1 点、1/4が1 点、1/4が2 点、26点	赤11・砂7・火山凝1 ・閃2・閃ビン2・安 1・桂1・シルト1	構成層の内21点に本遺 物外出土種を含めた接 合関係が認められる	
111	南鍛冶山	漸移層U	III	3号礫集中	3.40	0.80	12	散漫	1/4~2/3の 破片が4点 破片が3点 完形ないしほぼ 完形が5点	閃ビン2・砂2・燧2 ・安1・閃1・火山凝 1・シルト1・ホ1	遺物2点(磨石・燧洞、 木材・不明2) 構成層の内6点に本遺 物外出土種を含めた接 合関係が認められる	
120	川尻	L11BM	III	1号礫群	1.60	1.10	46	-	赤化:多い	真14、赤砂14、礁真 9、砂8、ホ1	遺物7点(後先形尖頭器 4(+1・理真1・黒2)、R F1(破片)、UF2(黑 2))	
121	風間	BB0	Ib	1号礫集中	4.20	2.90	59	集中	赤化:42 スス:2	砂23、泥2、礁泥2、 粘4、ナ1(接合後の 数)	2号礫集中と接合関係 あり 1号ユニットと混在、磨 石2、敲石10含む(礫群 間に転用)	
121	風間	BB0	Ib	2号礫集中	4.20	2.40	48	集中	赤化:30 スス:2 タール:4	砂17、泥4、粘4、礁 3、チ2(接合後の数) あり 石核1、砾石3含む(礫 群間に転用)	1号礫集中と接合関係 あり	

遺跡 No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸	短軸	深さ	炉址	柱穴	柱穴数	柱穴規模	備考
111	南鎌治山	南移層下層	縄	1号住居状遺構	3.30	2.80	0.17	無	有	3	[長軸*短軸*深さ、単位はcm] P1:12*11*20, P2:12*11*11(推定値), P3:13*10*26, 柱の立ち上がりはほぼ直立。上部構造、樺木に垂木を渡す構造を想定。 P2は掘り直されている。	
111	南鎌治山	南移層下層	縄	2号住居状遺構	3.40	3.00	0.07~0.13	有 (炉址 状の 落ち 込み と記 載)	有	5	[長軸*短軸*深さ、単位はcm] P1:30*26*11, P2:26*25*9, P3:20*19*9, P4:30*26*11, P5:22*20*13, 柱の立ち上がりはほぼ直立。上部構造、樺木に垂木を渡す構造を想定。	遺物: 陶製紋土器9点
118	愛媛美野 湘南藤沢 キャンパス内 II区	LISU U	縄	住居状遺構	6.92	6.32	0.03~0.04	有	有	9	[長軸*短軸*深さ、単位はcm] (12) P1:53*41*47, P2:50*48*56, P3:52*47*42(下部に竹根の埋没)、 P4:37*32*31, P5:48*39*53, P6:46*44*50, P7:46*41*35, P8:41*40*34, P9:40*38*34, P10:(P10~12は住居遺構との関連 は薄い), P11:32*32*13, P12:25*25*13	ピットの周囲 から住居入り 口は西南部 (斜面方向) であった可能 性を指摘。

第6表 土坑

遺跡 No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸	短軸	深さ	平面形態	断面形態	備考
74	柏ヶ谷長ワサ	LIS	I b	土坑1	1.26	0.90	0.38	横円形	浅鉢状	石器集中と重なりなし
74	柏ヶ谷長ワサ	LIS	I b	土坑2	1.05	0.50	0.35	横円形	碗状	石器集中と重なりなし
99	早川大仲森	LISU	I	土坑	2.00	1.00	0.04 ~ 0.14	不整方形	皿状	炭化材を作り
100	吉岡 A 区	無移層	-	1号土坑	1.20	0.65	0.50	長横円形	乳房状	文化層はLIS層、石器集中との重なりはなし、坑底はBO上部
100	吉岡 A 区	無移層	-	2号土坑	0.45	0.35	0.60	長横円形	柱穴状	文化層はLIS層、石器集中との重なりはなし、坑底はBO上部
100	吉岡 A 区	無移層	-	3号土坑	0.25	0.18	0.15	横円形	浅い柱穴状	文化層はLIS層、石器集中との重なりはなし、坑底はBO上部
101	吉岡 B 区	FBL~ LIS	-	土坑	0.50	0.50	0.20	円形	皿状	文化層は草創期、槍先形尖頭器石器群と重なり、吉岡田でJ2号土器とされていた、覆土は無移層主体
103	吉岡 D 区	FBL	-	埋納遺構 下部土坑	1.34	0.53	0.20	長横円形	バケツ状	文化層は草創期、覆土上層に櫛笄と櫛器が出土、柱穴をともなう。
109	代官山	無移層	I	土坑	0.80	-	-	いびつな円形	乳房状	開口部の直径80cm、坑底の直径40cm: 短径30cm 墓具349点、器種: 槍、有舌、櫛器、櫛器、R F、U F、剝片、碎片、残核、石材: 安、粘、チ、黒、縞、珪質、砂
116	南葛野	無移層	縄	1号土坑	0.71	0.59	0.32	横円形	たらい状	
116	南葛野	無移層	縄	2号土坑	1.00	0.61	0.18	不整横円形	皿状	
166	三ノ宮・下谷戸 (No.14)	無移層	EU	I 土坑	2.85	2.21	1.18	横円形	すり鉢	3404点、有舌尖頭器35、有舌尖頭器未製品5、槍先形尖頭器5、尖頭器未製品1、石器1、櫛形石器1、加工痕の見られる剥片17、使用痕のある剥片5、櫛11、剥片類3314、残核1、古石1、無歯土器5 “坑底から約15cmの高さで滑り面が確認され、この滑り面を境に遺構の上部と下部が主として南西方向に約10cmずれている。”

遺跡 No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸	短軸	深さ	平面形態	断面形態	備考
118	慶應義塾湘南藤沢 キャンパス内 I 区	LISUU	縦	No.312	0.42	0.30	0.41	楕円形	U字形	覆土は漸移層。
118	慶應義塾湘南藤沢 キャンパス内 I 区	LISUU	縦	No.313	0.24	0.22	0.25	円形	U字形	覆土は漸移層。
118	慶應義塾湘南藤沢 キャンパス内 I 区	LISUU	縦	No.315	0.30	0.29	0.08	円形	楕形	覆土は漸移層。
118	慶應義塾湘南藤沢 キャンパス内 I 区	LISUU	縦	No.407	0.36	0.32	0.24	円形	楕形	覆土は漸移層。土器(その他の個体No.11出土)。
118	慶應義塾湘南藤沢 キャンパス内 I 区	LISUU	縦	No.408	0.38	0.36	0.17	楕丸 方形	楕形	覆土は漸移層。
118	慶應義塾湘南藤沢 キャンパス内 I 区	LISUU	縦	No.409	0.29	0.28	0.12	楕丸 方形	U字形	覆土は漸移層。
118	慶應義塾湘南藤沢 キャンパス内 I 区	LISUU	縦	No.411	0.45	0.28	0.12	楕円形	直形	覆土は漸移層。
118	慶應義塾湘南藤沢 キャンパス内 I 区	LISUU	縦	No.412	0.25	0.19	0.13	円形	U字形	覆土は漸移層。
118	慶應義塾湘南藤沢 キャンパス内 I 区	LISUU	縦	No.418	0.28	0.21	0.14	円形	楕形	覆土は漸移層。
118	慶應義塾湘南藤沢 キャンパス内 I 区	LISUU	縦	No.419	0.31	0.27	0.12	楕円形	逆台形	覆土は漸移層。
118	慶應義塾湘南藤沢 キャンパス内 I 区	LISUU	縦	No.420	0.26	0.21	0.11	円形	楕形	覆土は漸移層。
118	慶應義塾湘南藤沢 キャンパス内 I 区	LISUU	縦	No.421	0.33	0.28	0.13	円形	楕形	覆土は漸移層。
118	慶應義塾湘南藤沢 キャンパス内 I 区	LISUU	縦	No.422	0.28	0.26	0.09	円形	直形	覆土は漸移層。
118	慶應義塾湘南藤沢 キャンパス内 I 区	LISUU	縦	No.423	0.32	0.22	0.35	楕円形	楕形	覆土は漸移層。
118	慶應義塾湘南藤沢 キャンパス内 I 区	LISUU	縦	No.344	0.37	0.36	0.27	円形	逆台形	覆土は漸移層。
118	慶應義塾湘南藤沢 キャンパス内 Ⅲ区	*	縦	*	*	*	*	*	*	* 織文時代早期以降のビットが混じっている可能性有り。
118	慶應義塾湘南藤沢 キャンパス内 V 区	漸移層と LIS観	縦	ビット	0.57	0.46	0.23	円形	逆台形	追跡帳での調査のため、周辺にビット群を成すかは判断できない。

第8表 デボ

遺器 No.	遺跡名	確認層位	文化層	遺構名	長軸	短軸	遺物数	分布状態	遺物の相	石材組成	備考
116	南葛野	LIS	縦	デボ	0.42	0.18	3	集中	貝のみ。全て石様	遺物数：3点 岩種：石核3、石材：貝岩3	
103	吉岡 D 区	FBL	—	理納溝積	0.22	0.20	2	密集	扁平な 河原石 凝角礫I、II	文化層は草削削。下部土坑をともなう 河原石の下約2cmからホルンフェルス製の 鍛錬炉と鍛錬器が出土。さらにその周辺部から は鍛錬器と打製石斧が出土	

※紙面の都合上、第1～8表において石材名称を略表記した。以下の対照表を参照されたい。(順不同)

砂：砂岩、泥：泥岩、礫：礫岩、頁：頁岩、綈砂：綈質砂岩、粘：粘板岩、角閃安：角閃安山岩、
 砂礫：砂礫岩、角礫：角礫岩、ひん：ひん岩、ひんひん：閃緑ひん岩、珪頁：珪質頁岩、チ：チャート、
 矽砂：矽質砂岩、凝質：凝灰質頁岩、凝角礫：凝灰角礫岩、珪：珪岩、珪配：珪質珪岩、玄：玄武岩
 矽：矽灰岩、粗粒：粗粒矽灰岩、中凝：中粒矽灰岩、細凝：細粒矽灰岩、シルト：シルト岩、
 硬中凝：硬質中粒矽灰岩、硬細凝：硬質細粒矽灰岩、火山凝：火山矽凝灰岩、閃：閃緑岩、
 ホ：ホルンフェルス、流：流紋岩、石閃：石英閃綠岩、黒雲母安：黒雲母安山岩、庶：斑頗岩、
 安：安山岩、ガラス黑安：ガラス質黑色安山岩、輝：輝綠岩

神奈川における縄文時代文化の変遷VI

—中期後葉期 加曽利E式土器文化期の様相 その2 土器編年案—

縄文時代研究プロジェクトチーム

I. はじめに

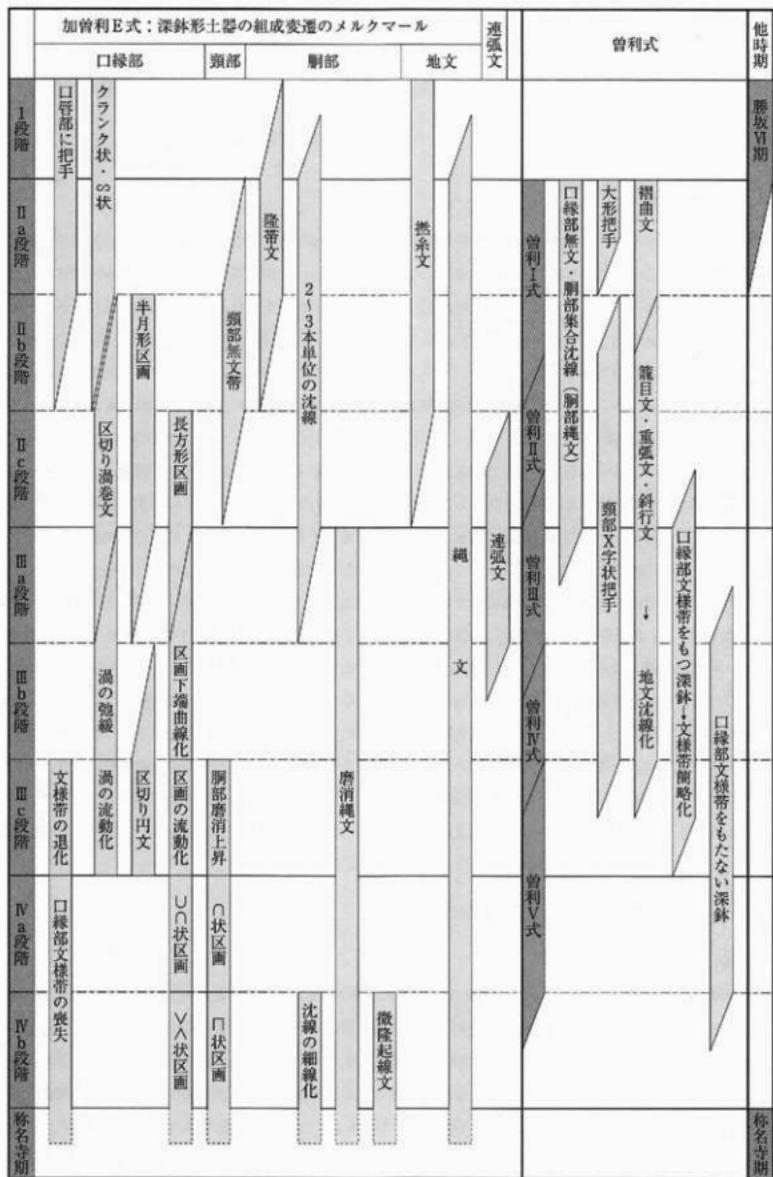
本年度は、昨年度行った主要遺跡の集成及び重複・一括出土事例の検討成果にもとづいて、神奈川における加曽利E式土器の編年案を構築する作業を行った。神奈川における中期後葉期の編年案については、これまでに神奈川考古同人会によって「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年試案 第Ⅰ版」(『神奈川考古』第4号 1978)がまとめられ、それを発展させる形で、東京・長野の研究者に呼びかけて、昭和55(1980)年12月に神奈川考古同人会が主催して行ったシンポジウム「縄文中期後半の諸問題ーとくに加曽利E式と曾利式土器との関係についてー」(『神奈川考古』第10号 1980.12)において、その改訂編年案が発表されている(以下、「神奈川編年」と呼ぶ)。今回、この神奈川編年を土台として、その後の資料の増加を踏まえて再検討を試みたが、以下に示したように基本的には、神奈川編年で示した4段階区分を踏襲し、各段階の細分を目指した。その結果、II段階を3細分したことによる変化はないが、神奈川編年では傾向は指摘しえたものがあえて細分を行わなかったIII段階を3細分、IV段階を2細分することとなった。基本的な視点は、加曽利E式(系)土器の変遷観を基軸として、それと伴出する曾利式(系)土器(折衷土器を含む)を横並べに置くという、神奈川編年で示した手法と大きな変化はないが、細部は以下に示したように神奈川編年とは違いが生ずることとなった。段階設定とその細分は、住居址を中心とした伴出資料の重視という視点からすると、必ずしも、明解な線引きは可能とはいはず、過渡的な様相を含んでおり、細分に苦慮したことも事実である。今後、この新神奈川編年案の妥当性をめぐる検証が必要となるであろう。なお、その変遷観は、変遷模式図と図版解説を参照願いたい。関東・中部域における中期後葉期土器編年の構築は、周知のように神奈川考古同人会のシンポジウム以降、各地域で活発に行われてきた。その主要な文献は、前号の『研究紀要』6にあげたとおりである。隣接地域における当該期の編年の比較対照については、また別な機会に取り組んでみたい。

来年度はこの編年案にもとづいて、その文化的諸様相について検討を加えることとしたい。 (山本)

II. 神奈川における加曽利E式土器編年案

I段階(第2図1~42)

I段階は、加曽利E式のキャリパー形深鉢が成立する段階である。勝坂式の最終段階(VI期)の土器と共にすることが多く、勝坂式期から加曽利E式期への過渡的段階とも言える。代表的資料として梶山北遺跡5号住居址、大熊町遺跡41号住居址、山田大塚遺跡1号住居址、下原遺跡36号住居址などがある。深鉢だけが際立っているが、IIa段階に見られるような無文の鉢もある。深鉢の文様帶は基本的に口縁部と胴部の二帯構成をとるが、6のように文様帶の境界が不明瞭なものもある。口縁部文様帶には、クランク状のモチーフ(1~4)、△状のモチーフ(5~8)、△の片側が欠落した鍵の手状のモチーフ(9~12・14~16)、鍵の手状のモチーフを変形したり複雑化したもの(13~17~20)などが見られる。施文には隆帯を用いるが、1・5・9・13~17の



第1図 段階設定のメルクマール

ように隆帯上に刻みや指痕圧痕、「口」状文の交互刺突を加えたものがあり、勝坂式の施文手法の影響を受けていることが窺われる。また、口唇部に無文帯を巡らすもの（8・17）や、大形の把手を付けるもの（3・14）も勝坂式の手法を踏襲したものと考えられる。胸部文様帶にモチーフを施すことは少ないが、口縁部文様帶の直下から隆帯を垂下させたり（7・8）、半截竹管や沈線でL字状のモチーフ等を描く（11・16）ことがある。地紋は基本的に撚糸文を多用しており、縄文は希である。型式学的変遷を念頭に置くなら、施文手法に刻み等の勝坂式的な手法が残るものが古相、縄文を地紋にもつものは新相と言える。21～23は口縁部文様帶に錫状の張り出しを持つもので、キャリバー形とは異なるタイプの深鉢である。24はどちらかと言えば勝坂式の範疇に含まれるものだが、二蒂構成の文様帶やキャリバー形の器形など、加曾利E式的な色彩が強い。共伴する勝坂式土器には小形円筒形の深鉢（25）、円筒形の深鉢（26・28）、胸部文様帶を有する深鉢（31～33）、底部と口縁部が球状に膨らむ深鉢（35～37・41）、口縁部文様帶下部が「く」字状に膨らむ大形の深鉢（39・40）などがある。

(長岡)

II段階（第3・4図）

II段階は加曾利E式の深鉢形土器の頭部に無文帯が出現する段階を上限とし、胸部に懸垂磨消帯が出現する前の段階までとする。深鉢では頭部無文帯をもつ土器が多いが、もたない土器の存在も認めることにする。本論では口縁部文様に着目し、口縁部文様帶内に明確な区画文様がない段階をIIa段階、口縁部に半月形区画文が成立する段階をIIb段階、長方形区画文が主となる段階をIIc段階とする。加曾利E式土器以外では勝坂式土器とそれが変化した曾利式土器が伴出する。なお後述するIIc段階の新相は神奈川編年（1980）の第Ⅲ期の一部に相当するが、胸部に未だ懸垂磨消帯をもたないので本段階に組み入れた。

IIa段階（第3図43～52、第4図96～117）

本段階は加曾利E式の深鉢形土器の頭部に無文帯が出現するが、口縁部文様帶内に明確な区画文をもたない段階である。代表的資料として大熊仲町遺跡33号住居址、田名花ヶ谷戸遺跡遺跡48号住居址、受地だいやま遺跡13号住居址、恩名沖原遺跡30号住居址、上中丸遺跡1A号住居址出土資料などがある。43～52は加曾利E式の深鉢形土器、96・97は鉢形土器である。深鉢形土器では平縁がほとんどである。43～45、48～50が頭部無文帯をもつ資料であるが、頭部無文帯をもたないもの（46・47）も遺構内で伴出する。しかしそれらは単体ではI段階との区別はつかない。口縁部文様は2条1単位の隆帯でが描かれるが、隆帯の両脇や間にしばしば棒状工具による浅いなぞりが施される。文様はクランク文（43）やS字状文（44）を基本とするが、S字状文同士を斜線で連結したもの（45）やS字状文を文様帶上下区画線と連結したもの（46）など複雑な文様も存在する。胸部文様は隆線や数本の沈線によって縦位懸垂文や縦位蛇行沈線（43）、曲線的文様（45）などが描かれている。地文は撚糸文（45・48）と縄文（43・46）がある。51・52は波状口縁をもつもので、前段階の21～23との関連が考えられる資料である。鉢形土器は勝坂式土器のものとは異なり内消する鉢が多くなり、頭部でくびれ、口縁部が外反するものに統一されてくる。器面は無文のものと胸部上半に文様をもつものがあるが、無文のものも赤彩文様があつたと推測される。

(松田)

本段階の勝坂式終末～曾利I式には、98～117が該当する。型式比定の難しい資料が多く、今後資料の蓄積と検討を要する。98・99は、加曾利Eの器形を呈し、口縁部に渦巻状沈線が描かれるなどを特徴とする。頭部にも同意匠が描出される98では、余白充填に三叉文が用いられ、勝坂式と判断されるが、同遺構出土の99では、頭部に無文帯が配され、胸部に縦位沈線が施文されるなど、加曾利E・曾利の両属性が観察される。



第2図 神奈川における加曾利E式土器編年案 I段階

100~113は、口縁部に無文帯が配され、胴部に大柄なU字状隆線等と継位沈線が施される一群で、頭部には横位や波状・横U字状等の区画隆線が巡らされている。中でも口縁部に継位隆線が垂下する資料は、双孔状突起や隆線上の矢羽状沈線・交差刺突等勝坂の属性の観察されることが多く、頭部に波状隆線が付く場合でも、これが単条で振り幅の大きいといった特徴がみられる。114~117は、内湾する口縁部にU字状を基調とした隆線が貼付される一群で、これらは曾利I式の褶曲文土器に連続する。

(恩田)

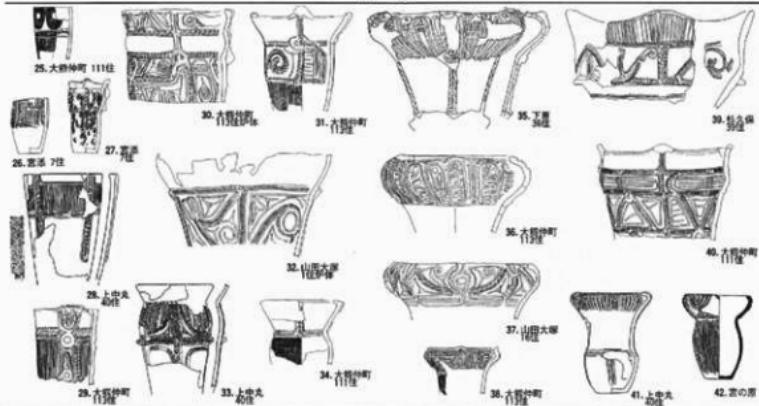
II b段階 (第3図53~76図、第4図118~150)

加曾利E式の深鉢形土器の口縁部に半月形区画文が成立する段階である。代表的資料としては大口台遺跡28号住居址・杉久保中原遺跡5号住居址・当麻遺跡18号住居址・市ノ沢团地遺跡C区8号住居址、上白根おもて遺跡46号住居址、原東遺跡19号住居址出土資料などがある。53~76は加曾利E式の深鉢形土器、118~119・121は鉢形土器、120は器台である。53~75は口縁部が平縁のもので、頭部無文帯をもつものが大多数を占める。文様はS字状文やクランク文を基本とするが、それらが上下区画線に接着したり、他の隆帶で連結されたりし、更に隆帶脇のなぞりが強調され、文様帶上下区画線のなぞりと一体化して、口縁部に、隆帶に沿う沈線で開閉した半月形区画文(58~59)が成立する(古相)。半月形区画文の弧線の末端には小溝巻文があるが、後に小溝巻文が大型化し、区切り文となり、区切り溝巻文が付いた長方形区画文(70~71)が成立する。また、半月形区画文が連弧状になったり(67)や長方形区画文の一端が弧線化したもの(68~69)などが出現するようになる(新相)。このうち連弧状の半月形区画文は曾利式のつなぎ弧文と類似している。また72は大形突起をもつもの、74~75は胴部文様のみのもの、76は波状口縁をもつものである。胴部文様は3本沈線で描くものに取扱されてくる。地文は縦文が多いが撲糸文もある。

(松田)

本段階の曾利式には、122~150が該当する。古相では曾利I式が主体を占めるが、新相では曾利I式に加え曾利II式的資料がみられるようになる。ちなみに、122~124~126~133~138~146は古相に、123~127~132~139~145~147~150は新相に認められる資料である。122~123は前段階からの流れを汲むもので、123の胴部には曾利II式の特徴とされる撲糸文地文に継位波状の隆線貼付がみられる。124~135・139~143も前段階か

勝坂



らの流れを汲む一群で、胴部に大柄なU字状等の隆線と縦位沈線が施文される一群で、138・144・145は新出の縄文施文の一群である。136・137・146～148は摺曲文、149・150は重弧文で、特に148の頭部無文帯は前段階資料からの連続と変化を示唆している。

(思田)

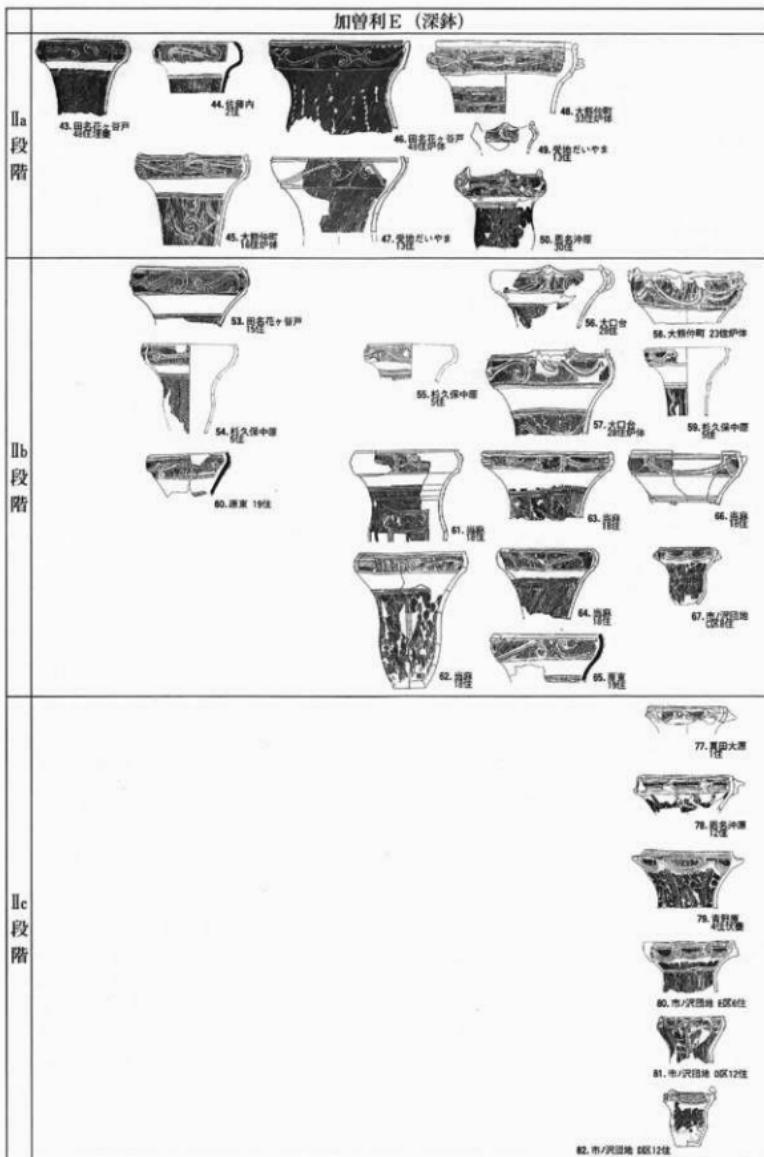
Ⅱc段階（第3図77～95、第4図151～190）

本段階は、加曾利E式の深鉢形土器が口縁部に長方形区画文をもつを主体とする段階である。代表的資料としては上白根おもて遺跡3号住居址や恩名沖原遺跡12号住居址、真田大原遺跡1号住居址、市ノ沢团地遺跡D区12号住居址資料などがある。77～95は加曾利E式の深鉢形土器、151～155は同鉢形土器、156は器台、152～158は連弧文土器あるいはそれに類するものである。遺構内一括資料を見ると、頭部無文帯をもつ土器が主体をなす資料と頭部無文帯をもたない土器からなる資料があり、前者（古相）から後者（新相）への時間差があると考えられる。古相は連弧状の半月形区画文（77～79）や渦巻文で区切られた長方形区画文（83～88）などの文様からなる。地文には縄文と撚糸文がある。連弧文（153）や連弧文に類似したもの（152）も伴出することがあるが、その事例は少ない。新相では口縁部文様は古相と同じであるが、頭部無文帯をもつ土器はない（80～82・90～95）。90～93のように頭部の横位区画線自体無い個体もある。胴部は3本沈線が垂下するが、未だ沈線間の磨り消しは行われていない。口縁部文様は大抵沈線が沿う隆帶で形成されるが、沈線が沿わざ隆帶が器面に密着していないもの（92・93）もある。また口縁部区画内に縦位沈線を充填したものの条線を地文とするもの（94・95）があるが、これらはⅢ段階の曾利Ⅲ式と関係があろう。その他胴部にのみ文様をもつ土器（89）や鉢形土器や器台（154～156）、連弧文土器（157・158）が伴う。

(松田)

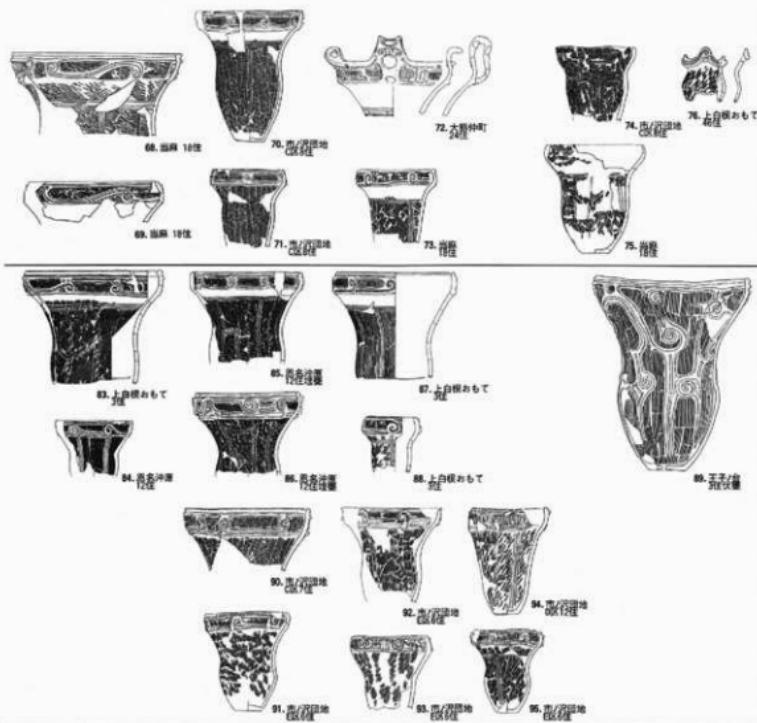
本段階の曾利式には、159～190が該当する。古相では曾利Ⅲ式的資料を認めつつも曾利Ⅱ式が主体を占め、新相では曾利Ⅲ式的資料がより多くみられるようになる傾向がある。ちなみに、159・160・166～176・178は古相に、162～164・179～190は新相に伴う資料である。159～183は前段階からの系譜にある沈線・縄文・撚糸文施文の一群で、直線的に開く口縁部形態となり、180のように上端に文様帯が配される資料も散見される。170～176・184～190は重弧文・籠目文・斜行文等で、文様の粗雑化と形態の変化を表す資料が存在する。（思田）

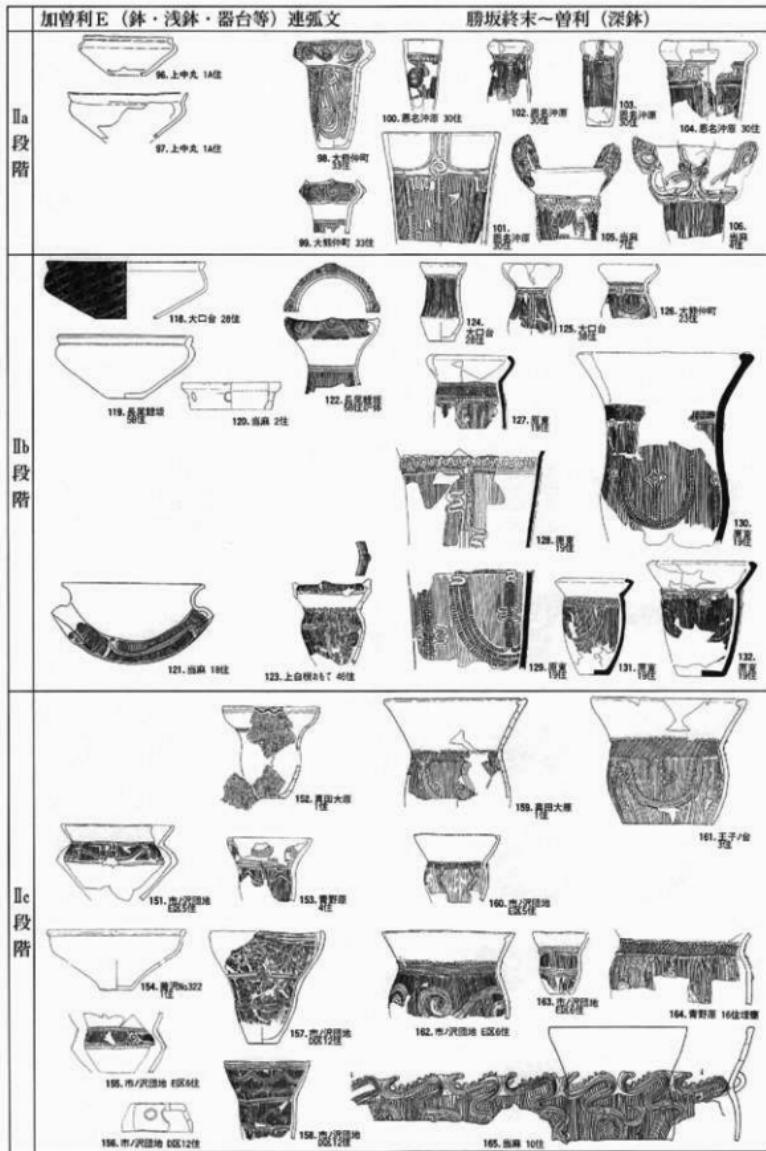
加曾利E(深鉢)



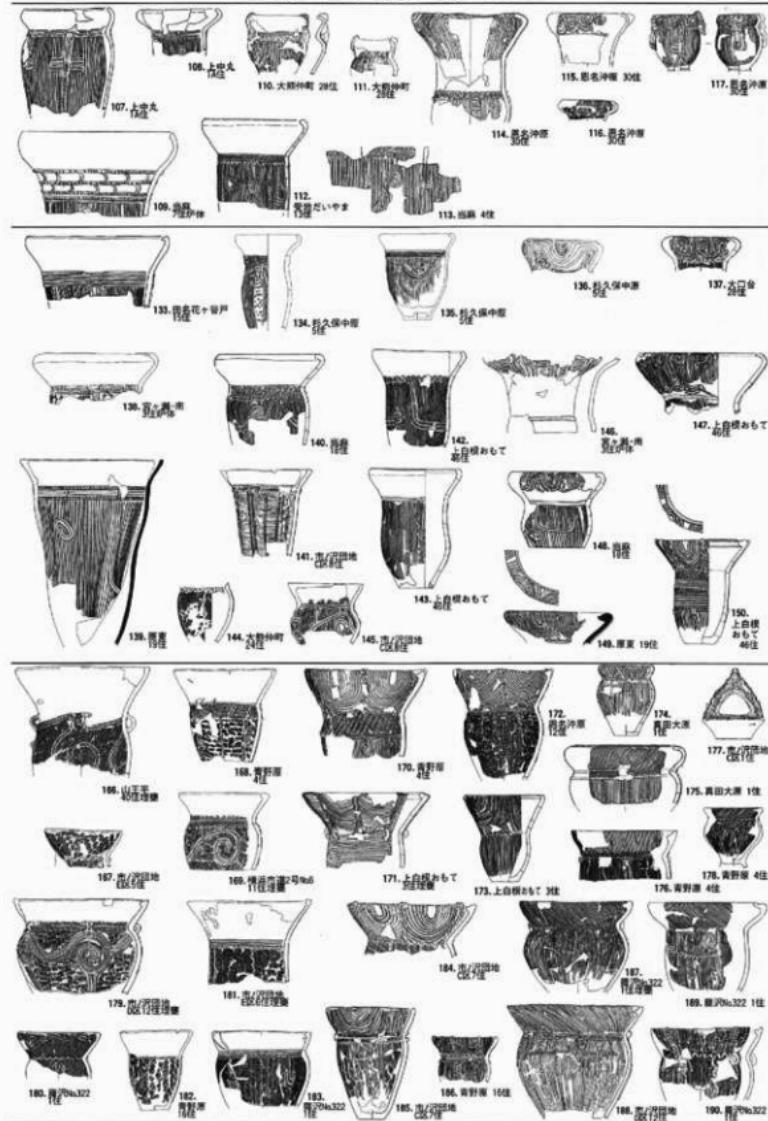
第3図 神奈川における加曾利E式土器編年案 II段階 (1)

加曾利E（深鉢）





勝坂終末～曾利（深鉢・台付・吊手等）



III段階（第5・6図）

III段階は、加曾利E式深鉢における胴部懸垂磨消帶の成立段階から、口縁部文様帯を喪失する前の段階までとする。加曾利E式深鉢の変化を軸としてIIIa～IIIcの段階設定を行い、併伴関係にある加曾利E式鉢、速弧文土器、曾利式土器（折衷土器を含む）等を系統別に配列している。本段階の加曾利E式土器の組成は、深鉢を主体に把手付鉢・有孔調付土器等が加わる。深鉢はキャリバー形を主体とする。口縁部は平縁・波状口縁が存在し、極少量4単位の小突起を有するものが認められる。鉢は前段階から継続して安定的に組成しているが、本段階に至り、括れ部に橋状把手を付す把手付鉢の形態を探るもののが確実な組成が認められる。系統別に見ると、量的には曾利式土器・折衷土器が卓越し、特に県央・西域の遺跡では曾利式・折衷土器及び速弧文土器のみで組成する一括資料も少なくない。本県における本段階の特徴として捉えられる事象であるが、同時に、加曾利E式土器のみを用いての幅年構築に限界を感じられる。

IIIa段階（第5図191～207、第6図253～267）

IIIa段階は、加曾利E式深鉢における本段階のメルクマールとした胴部懸垂磨消帶を有する資料と、3本単位の胴部懸垂文や胴部懸垂文内部の地文残置といったII段階的な特徴を有する資料が一括出土資料内で併存する段階とし、加知久保遺跡8号住居（191～193）、市ノ沢团地遺跡D区16号住居（195・196）、山王平遺跡19号住居（201・202）を好例として抽出した。また、青野原バイパス15号住居（194）、橋本遺跡42号住居（197・199）、新戸遺跡2号住居（198）、山王平32号住居（200）等、単体資料において上記双方の特徴を具有するものに関しては古相の資料と判断し、単体のみで段階判別が可能な一群として本段階に配置している。加曾利E式深鉢は、口縁部文様帯を有するもの（191～201）と、口縁部直下に区画線のみが配されるもの（202）が存在する。前者は口縁部・胴部文様帯の二蒂構成を採り、平縁・波状口縁を問わず口縁部文様帯の区切りとして渦巻文が多用されるが、区切文を用いず方形基調の区画文が横帯する資料（197・199）も散見される。口縁部の区画文モチーフは方形・半円形・梢円形等バリエーションに富むが、基調を窺知できる比較的整然としたものが多い。IIc段階にも認められた鉢（203・204）や速弧文土器（205～207）は本段階においても安定的に組成している。曾利式土器（260～267）は、III式的資料を主体とする。肥厚口縁をなすもの（260）や口縁部が4単位の波状をなし口縁部直下に連弧状の弧線を付す特徴的な資料（261・262）が組成する他、量的には減少傾向にあるが、重弧文（265）・斜行文（266）・X字状把手を付す資料（267）等、II段階から継続するものが認められる。折衷土器（253～259）は地文が斜位・縱位の条線で処理されていることを除けば、加曾利E式深鉢と極近似した文様帯構成・文様モチーフを取り、本期において確実な併存事例が躍進的に増加する。

IIIb段階（第5図208～233、第6図268～298）

IIIb段階は、加曾利E式深鉢において3本単位の胴部懸垂文を施す資料や胴部懸垂文内部に地文を残置する資料が組成から欠落し、胴部懸垂磨消帶を有する資料のみに収斂する段階とする。本段階において加曾利E式深鉢に口縁部区画文の流動化・形態化への胎動が看取され、その様相が比較的顕著なものを新相（221～229）として分離し図版の下段に配置している。古相として寺原遺跡2号住居、同102号住居、新戸遺跡13号住居、新相として大熊仲町遺跡145号住居、新戸遺跡10号住居、尾崎遺跡34号住居等を抽出した。古相とした加曾利E式深鉢は、口縁部文様帯を有するもの（208～215）と口縁部直下に区画線のみが配され明瞭な口縁部文様帯を持たないもの（216）が存在する。前者は口縁部文様帯に区切り渦巻文を配さない資料（212～219）が増加傾向にあるが、総体的にはプロポーション・文様帯構成・区画文モチーフとも前段階との大きな差異は認められない。従って、胴部懸垂磨消帶のみを有する深鉢をもってa段階とb段階古相を分かつことは困難

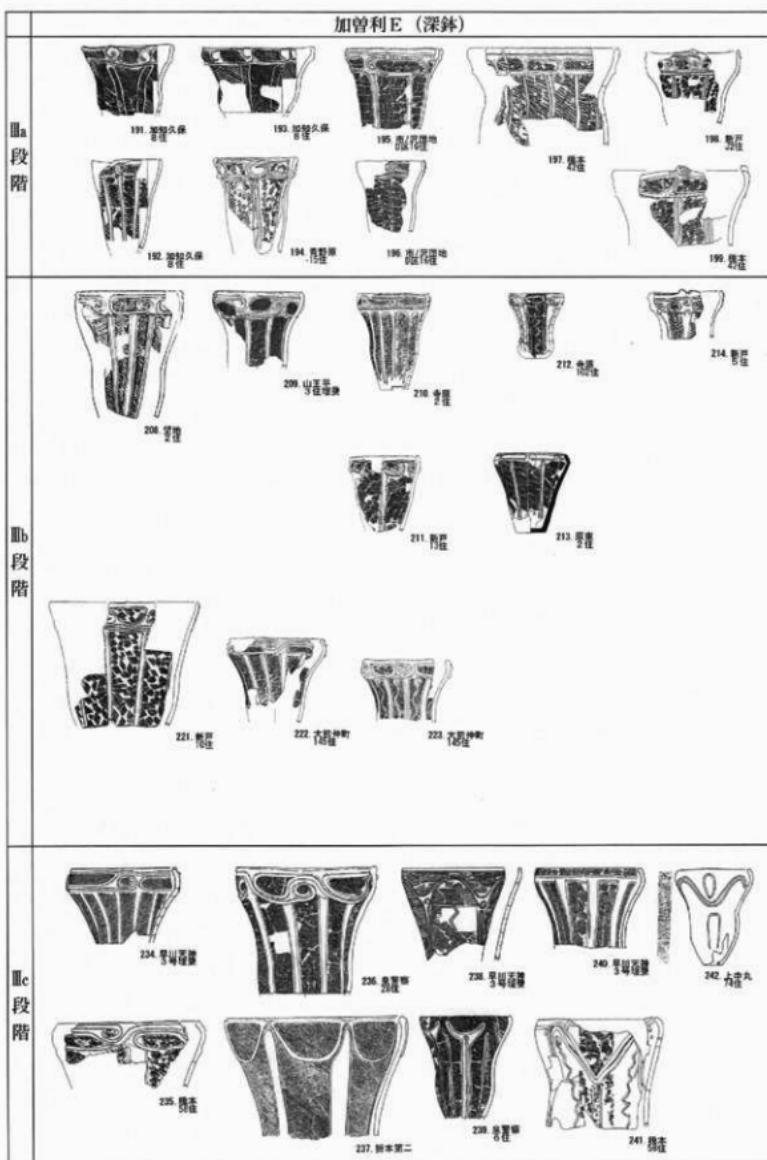
である。鉢類は有孔鈎付土器(218)の他、縦位条線を施す鉢(217)の組成が併存関係から確認された。把手付鉢は確実な併存例が認められなかったが、290の存在から加曾利E式のものも組成すると推察される。連弧文土器(219・220)は古相における組成は確実であるが、終焉期として捉えられるかどうか検討の余地がある。曾利式土器・折衷土器の組成は前段階から大きな変化は認められないが、曾利式においては重弧文・斜行文の資料が明らかな減少傾向にあり、良好な併存事例を抽出し得なかった。また、口縁部文様帯を喪失し、幅広短筒状の区画文が器面全面に展開する曾利IV式的な資料(285・287・288)が散見されるようになる。(井辺)

Ⅲb段階新相としたものは、加曾利E式の口縁部文様帯の長方形区画の崩れが大きくなり、区切り満巻文と入り組み、その下端が曲線化していく。221~223は口縁が平縁の加曾利E式、224~228は波状口縁のものである。上述のごとく、古相に比較して長方形区画が崩れ、222~224~227では満巻文との入り組みが著しい。226~227は区切り満巻文自体が弛緩している。229は口縁部文様帯が形骸化した加曾利E式である。230~231は胸部に縦位条線を施した鉢、232は有孔鈎付土器である。古相同様、加曾利E系の把手付鉢を組成している良好な事例はあげられなかった。古相に見られた連弧文系土器も見られない。233は所属時期と系統を明示できなかった。口縁部文様帯を有し、胸部上半部は縦文、胴下半部は条線を地文とする。胸部には満巻き状の文様を配している。292~296は口縁部文様帯を有する折衷土器である。292~296は地文を条線とするが、297の胸部の地文は縦文である。加曾利E式同様に口縁部文様帯の崩れが大きくなっている。299~308は口縁部文様帯を有さない曾利式である。299~301は藤手状の沈線を垂下させるもの、302~305は区画内に綾杉条の条線を施し、蛇行する沈線を配するものである。306~307は縦位の条線を施すもの。306と307は302~305同様の区画を有し、306と308は蛇行沈線を垂下させている。309はキャリパー状の器形を呈するもの。Ⅲa段階の斜行文の系譜上に位置する土器と思われるが、蛇行隆帯は押圧された隆帯に置換され、口縁部も形骸化している。310は曾利式の蓋形土器、311は釣手土器である。

Ⅲc段階(第5図234~252、第6図312~320)

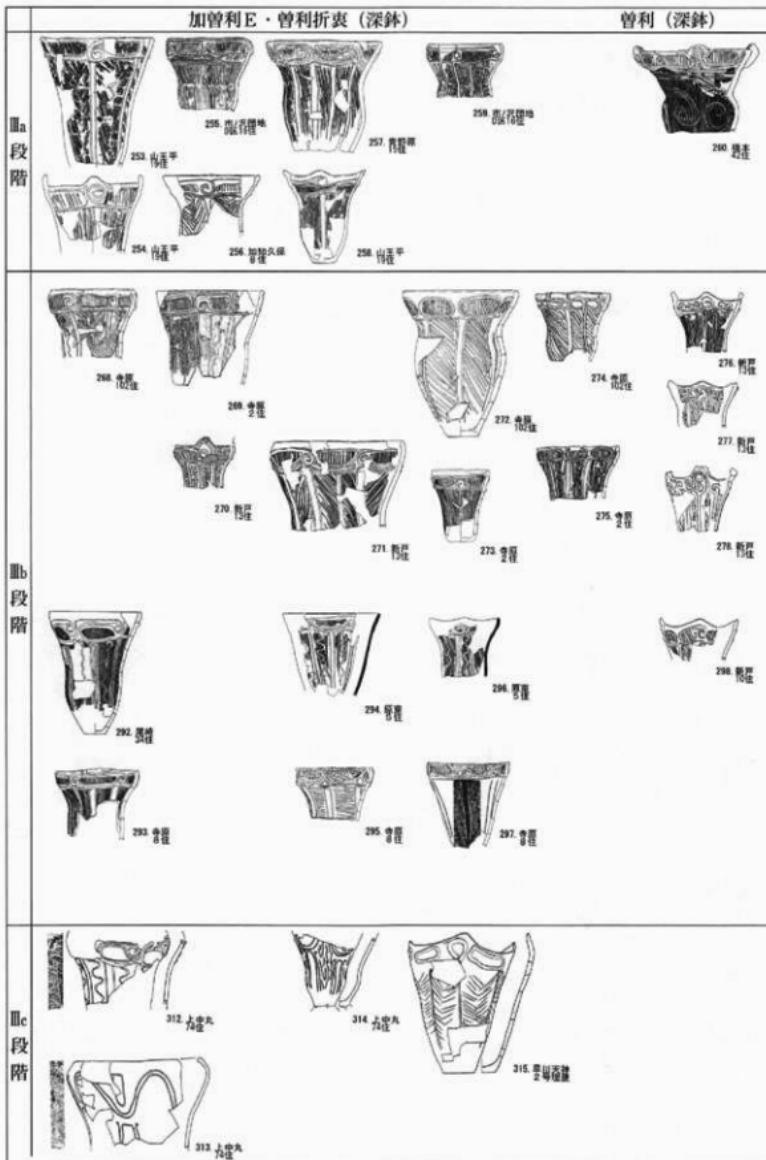
加曾利E式の口縁部文様帯の形骸化・退化が著しくなる段階である。満巻文の弛緩・流動化がより顕著になり、個体によっては区画下端が垂下し、胴部懸垂磨消帶がここに貫入していく。234~237は口縁部が平縁を呈し、その区画が隆帯によって構成されるものである。区画の崩れと満巻文の弛緩が著しく、236~237は区画下端が垂れ下がり、237は区切りの満巻文があった位置に胴部懸垂磨消帶が貫入している。238~241は平縁で、沈線によって口縁部を区画するもの。240は横位の沈線で口縁部を区画している。238~239・241~242は沈線で湾曲化した区画を構成する。238~239は垂れ下がった区画の下端に胴部の磨消しが融合している。これらは口縁部文様帯自体が形骸化し、特に239は区画が途切れ文様帯の呈をなしていない。243~246は波状口縁を呈するもの。口縁部文様帯の崩れは、234~237同様に著しい。243~245は胴部の懸垂磨消帶が発達し、U字・逆U字状の区画が上下に対置される。244の胴部の構成が238~239と類似していることが注意されよう。247~248も口縁部文様帯が形骸化したもの。247は前段階の229と著しく類似し、これらは238~242とは別にⅢb段階以前からの系譜を有するとしてよいだろう。249は条線を施した鉢、250は無文の浅鉢、251は加曾利E式系の把手付鉢である。312~315は口縁部文様帯を有する曾利式である。口縁部文様帯の変化は加曾利E式にはほぼ連動し、同様にその崩れは著しい。313の構成は加曾利E式の242にはほぼ一致する。312は条線、313~314はハの字状の短沈線をそれぞれ地文とする。316~319は口縁部文様帯を有さない曾利式である。316~318はハの字状の短沈線、319は条線をそれぞれ地文としている。320はX字状把手を有する深鉢。器形はⅢb段階以前のものとほぼ同様であるが、地文にハの字状の短沈線を充填している。(小川)

加曾利E(深鉢)



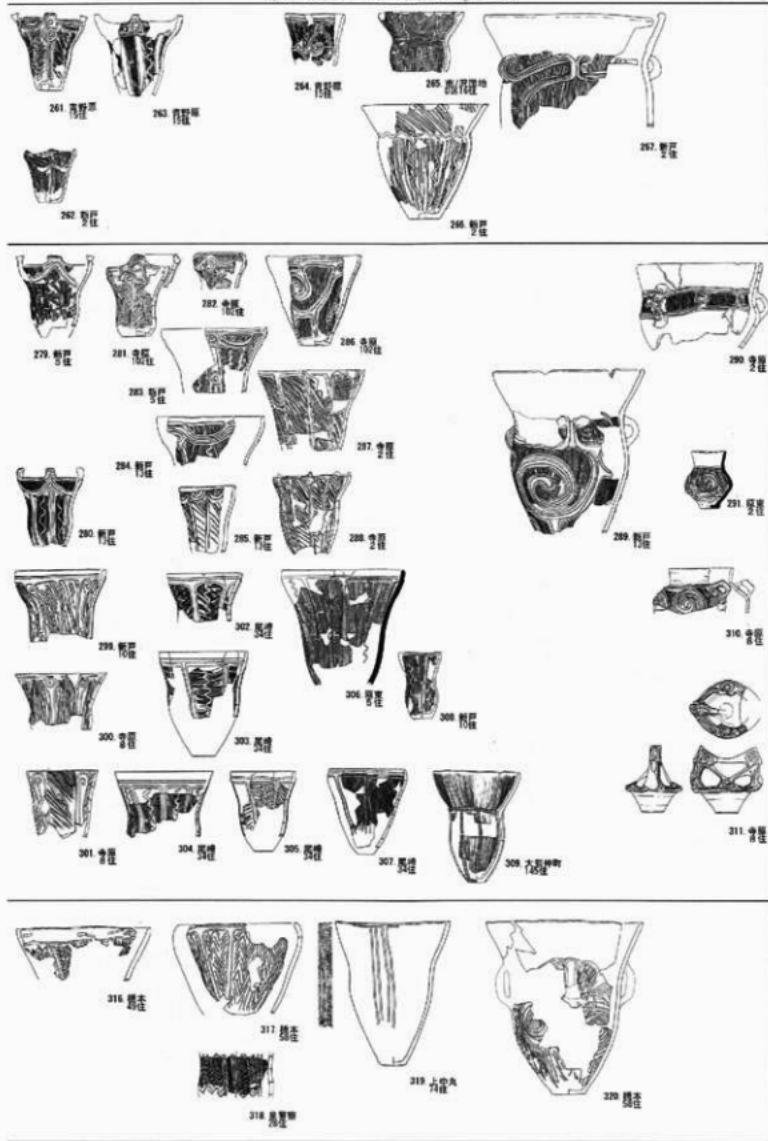
第5図 神奈川における加曾利E式土器編年案 III段階(1)

加曾利E (深鉢)	加曾利E (鉢・浅鉢等) 連弧文

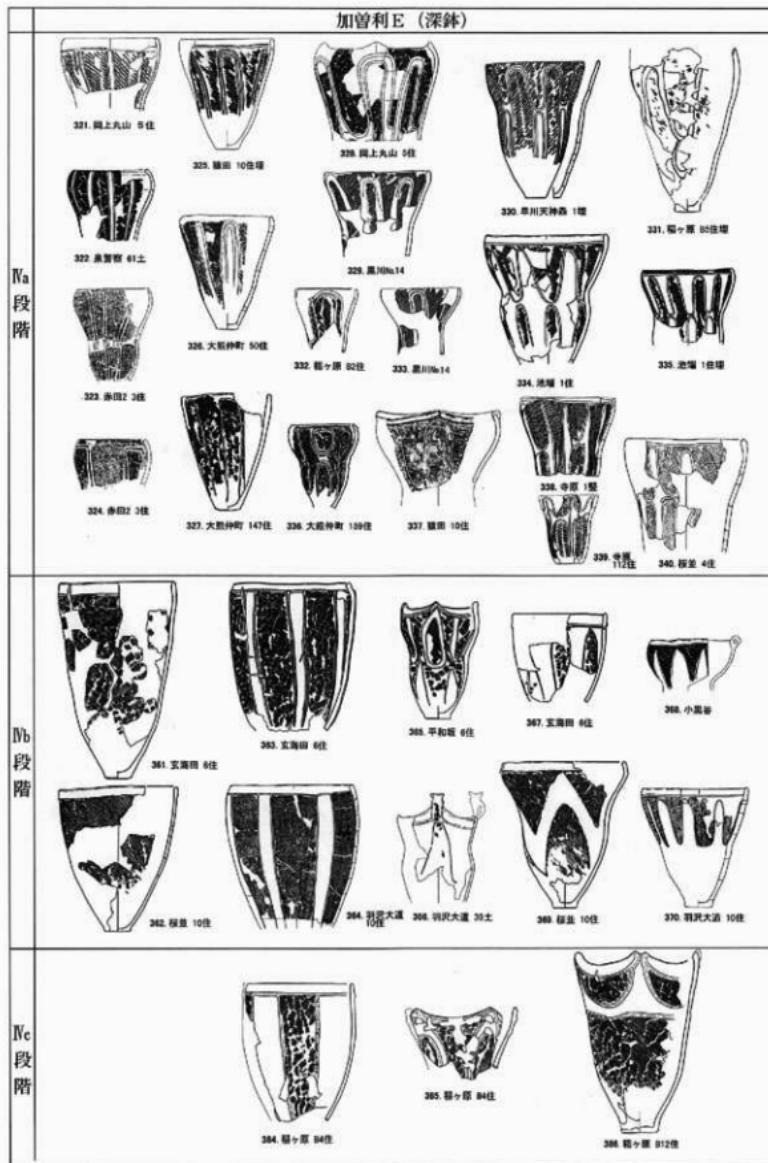


第6図 神奈川における加曾利E式土器編年案 III段階(2)

曾利（深鉢・鉢・浅鉢・吊手等）

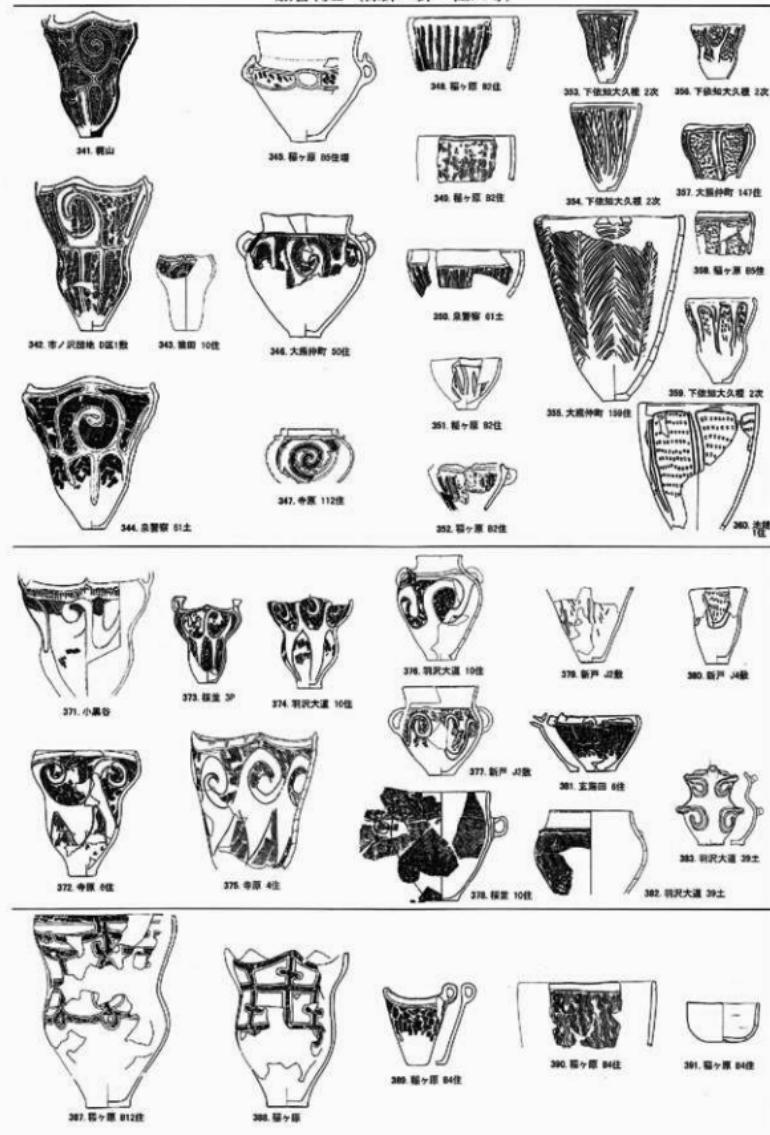


加曾利E(深鉢)



第7図 神奈川における加曾利E式土器編年案 IV段階

加曾利E（深鉢・鉢・注口等）



IV段階（第7図）

IV段階は、加曾利E式深鉢形土器の口縁部文様帯が喪失する段階である。器形は括れが継いだものや胴部が大きく膨らむ器形を呈する土器が多く認められ、キャリバー形が崩壊する。文様帯の幅は広くなり、微隆起線文による文様施文が多用される傾向が認められる。本段階の下限は称名寺式を共伴しない段階とした。

Ma段階（第7図321～360）

深鉢形土器の口縁部文様帯が喪失する段階である。器形はキャリバー形が崩れ、緩く屈曲する器形や直線的に立ち上がる器形が多く見られる。代表的資料として稻ヶ原遺跡B2号住居址、B5号住居址、猿田遺跡第10号住居址などがある。321～344は深鉢形土器、345・346は把手付鉢、348～352は鉢形土器など、353～360は曾利式土器の深鉢形土器である。321・325の口縁直下には横位の沈線が1条見られる。321～327は沈線による直線的な区画文が口縁下から底部付近にかけて施されるもので、321～323は短冊状の区画、324～327は「匁」又は「口」字状の区画が施される。328～333は波状などの曲線的な文様が横位に連続するものである。336・337は波状などの区画の一部が渦巻文または円形の文様を描くものである。330～340は波状文や「U」字状区画が上下に対向し、「H」状の文様を描くものである。341～344は「梶山タイプ」と呼称されている土器で、継いだ波状口縁を呈し、微隆起線文などにより胴上半部に大きな渦巻文が描かれる特徴を有する。

345は屈折鉢、346は把手付鉢、347は有孔飼付土器である。348～352は鉢形土器又はそれに近い器形の土器で、口縁下に横位の沈線を有する349～351と横位の沈線を有さない348が認められる。地文は櫛齒状工具による条線文が直線的に施される348・350、同工具による条線文が波状に施される349、棒状工具による沈線文がやや粗く縦位に施される351などが見られる。本段階に伴う土器は曾利V式土器で、基本的に口縁部文様帯を有さない。353～355は棒状の区画内に綾杉文が充填されるものであるが、比較的複雑な施文である。356～360は棒状区画などに刺突文や列点文が充填されるものである。

Mb段階（第7図361～383）

深鉢形土器は前段階に比して、無文帯の幅が広く、微隆起線文による施文が多い、沈線の幅が細くなるなどの傾向を有する。胴部が大きく膨らむ器形を呈する土器も多く見られる。代表的資料として玄海田遺跡第6号住居址、羽沢大道遺跡第10号住居址、羽沢大道遺跡第39号土坑などが挙げられる。

361～375は深鉢形土器、376～378は把手付鉢、381は鉢形を呈する注口土器、383は瓢形を呈する注口土器、379～380は曾利式土器の深鉢形土器である。

361・362は、口縁直下に幅狭の無文帯を有し、地文の縄文のみが施される土器で、後続する段階においても継続する。363・364は微隆起線文による短冊状の区画文が施されるもので、幅広の文様帯及び無文帯を有する。365～370は前段階で見られた波状文及び「匁」字状の文様などの端部が鋭く尖る傾向が伺えるもので鋸齒状に近い文様構成が認められる。365は文様の下端部が閉じて円形に近い文様が描かれるもので、前段階の336・337に類似する文様構成が認められる。371～375は胴上半部に渦巻文が施されるもので、前段階の「梶山タイプ」などとの関連が考えられる。本段階に伴出する曾利V式土器は、新戸遺跡J2号及びJ4号敷石住居跡などで認められるが、全体的には減少の傾向となる。

称名寺段階（第7図384～391）

加曾利E式土器の最終末で、称名寺式土器を伴う段階である。代表的資料として稻ヶ原B4号住居址・稻ヶ原B12号住居址などが挙げられる。加曾利E式土器の終焉や称名寺式土器との時間的関係など具体的な様相については、後期初頭の様相を踏まえてから機会をあらためて捉えていきたい。(天野)

宮ノ台式土器の研究（1）

弥生時代研究プロジェクトチーム

1. はじめに

これまでに弥生時代研究プロジェクトチームは、弥生時代の遺構、遺物について様々な集成と検討を行ってきたが、土器を対象とした検討は1995・1996年度に「弥生土器の容量」をテーマに取り上げたことがあるものの、土器そのものを型式学的に検討したものではなかった。

今回は、弥生時代中期後葉の土器として位置付けられている「宮ノ台式土器」を取り上げ、いくつかの検討を試みることとした。「宮ノ台式土器」を取り扱うには、広範な地域を対象としなければ解決しない課題が多いのであるが、神奈川県内の「宮ノ台式土器」を対象とするとしても、全体の研究動向に立脚した上で検討を加えるべきであることは言を得たない。

よって今年度の作業としては、個別検討の前提作業として宮ノ台式土器研究のこれまでの流れについて概要をまとめ、現状と課題を整理しておくことにした。

本号の内容構成は、1. はじめに、2. 宮ノ台式土器研究の流れ、3. 編年的研究の現状、4. 宮ノ台式土器の地域性、5. 宮ノ台式土器の器種組成、6. まとめ、の6節からなり、巻末に参考文献として研究史に関する文献一覧を掲載した。各章の文責はそれぞれの文末に記してある。なお、表1と研究史に関する文献一覧は伊丹が集成した。全体の編集は池田が行った。

（池田 治）

2. 宮ノ台式土器研究の流れ

緒言 当たり前のことだが、ある日突然宮ノ台式土器ができたのではない。それが一つの型式として設定され、共有されるにはそれなりの時間が必要であり、今でも時間と空間の両面で伸縮する可能性を残しているのである。その足取りを追う行為は研究史のはんの一部で、宮ノ台式土器は日本考古学の歩みの中でどのように位置付けられるか、今後どのように展開するかを視野に入れてはじめて研究史となるのである。

だが、宮ノ台式については大きな問題が横たわる。これは「型式名」というよりむしろ南関東中期の「後葉」を示す「相」とか「段階」とかに相当するものであるということだ。こう考えざるをえない遠因は、研究史で必ず触れられるように、型式命名者による幾たびかの内容に求めることができる。また必ずしも型式学的研究法によって提示された「型式」ではないことでもある。なお、様式論といわれるものも型式学的研究法の一種であり、宮ノ台式が様式論の中から提示されたものでもないことは大木努が指摘したとおりである。つまり宮ノ台式土器の全容について定義されたことがないことによる。時間的にも空間的にもどこからここまで分布範囲をもつか突き詰められてはいないと言っても過言でない状況を認識するべきである。紙幅の関係でここでは一歩引いた、遙くから眺めた研究の流れを報じたい。

研究史の研究史 宮ノ台式土器（須和田式・小田原式についても）を扱う論文ではこの土器の命名者・杉原莊介の設定内容の三転や、神奈川県については神澤勇一との齋藤について触れられてきた。敢えてここでそれを繰り返すことなく、その触れ方は執筆者と宮ノ台式土器との間合いによって異なるということの指摘に留めたい。宮ノ台遺跡の報告がされてから60年になろうとしている。つまりほとんどの研究者にとって何

らかの「宮ノ台式」ははじめから存在していたことは確かである。

宮ノ台式土器の研究史はとりもなおさず宮ノ台式土器の認識過程を追うことである。戦前の研究としては「弥生土器の枠組みはどのように形成されたのか」が問題となる。それを三つに分けてみたい。その1は認識の取っ掛かりについてである。石器時代の土器としての弥生土器1号が端緒となり、射程はここまで及ぼすべきである。なぜならこれが呼び水となり各地の「弥生土器」報告が相次ぐからである。ここには今日古式土器と認識されるものも多く含んでおり、弥生土器下限の一時的範囲拡大を招いた。ただし最古の弥生土器を探るという認識は未だ発生していないためその上限は不明確であり、今日弥生時代前期から中期中頃と認識されている土器（特に東日本）は縄紋土器と考えられ易かった。その2は大きな枠組みの形成である。山内清男による縄紋土器型式の設定に摺り合わせるかのように、森本六爾や小林行雄は「前・中・後期」を設定する。その3はこれを受け「中期」ということが着目されることである。信州栗林式の認識が宮ノ台式設定の重要な触媒になったのではなかろうか。この時期、宮ノ台式設定に直接関わる資料の蓄積がある程度進んでいたからもある。すなわち武藏大倉山太尾・三宅島ツル根岬（坪田ココマノコシ）・上総宮ノ台・相模小田原・駿河矢崎などの諸遺跡からもたらされた知見である。

戦後の研究は「中期・関東」という確かに思われた枠のもと、宮ノ台式へ収斂してゆく。括りとしては杉原莊介の伊勢湾玉突き論・縄目文土器論があり、佐原真による施紋による大別を掲げるべきであろう。また細分としては、関東最大の遺跡と目されたこともある折本西原の威力を遺憾なく發揮させた石井寛・松本完・安藤広道の仕事があり、宮ノ台式最古の環濠集落として相模に君臨する砂田台の成果を元にした宍戸信悟の作業があり、東京湾の周辺だけでなく駿河を巻き込んだ黒沢浩・小倉淳一・伊藤淳史等の論致が続出する昨今に至る（表1）。また前から後ろから、西から北から東から南からと連鎖反応的に諸課題が浮彫となってくる。すなわち有東・大里東・栗林・吉田・竜見町・受地だいやま・足洗式等との関係である。特に有東式・吉田式には注意が必要である。有東式とは終わり方が異なる。すなわち宮ノ台式の方が継続期間が長いことである。瀬名遺跡13a層を登呂式の魁けと捉えるか、有東式の残滓とするかで解釈も別れよう。また吉田式との親縁性と併行関係についてある。吉田遺跡という巨大集落の実像が明らかになると相俟つて早晚解明がはかられることがあるが、精製土器の紋様帯だけの比較ならば斜行沈線で充填された鏡面紋という要素は共通している。天竜川以東における中期（IV期）と後期（V期）の境界について、広域編年の視角から再検討の動きが活発になるのは疑いない。

前後左右の問題とは次元を異にする様々な問題もある。絵画土器という視点からも宮ノ台式はクローズアップされてきたことも忘れてはならない。土器の容量や焼成方法といった面からも一部選ばれてきた。また、宮ノ台式土器を語るにはヒトの移動と定着や金属製品・石器の流通も頭の片隅においておかねばならない。そして精製土器の紋様帯だけが有効な型式設定の目安になる土器なのかという検討もはかられるべきである。

21世紀の宮ノ台式 今後の動きとしては宮ノ台式の発展と解消という問題がある。安藤広道が自ら念を押しているようにタイムスケールは型式の連続ではない。「宮ノ台式土器」を土器型式として設定するのか、脱宮ノ台式として細分可能な幾つかの型式に分解した後「宮ノ台式土器様式」を設定するのかである。後者は宮ノ台式土器という様式・型式の再編成であり、集団分析に耐えられる土器の括り方が創出できるのか、様式論を具体的な分析方法に止揚できるのかという試練を経て宮ノ台式はどう分解されるかを問う作業となる。この「宮ノ台式土器様式」は「所謂須和田式」と呼ばれる代物とは異なったものになるであろう。すなわち

從來の記述（だけの）考古学から解釈（をする）考古学へと研究の比重を転換させてゆく中で、宮ノ台式土器という記述単位をどう昇華させるかが問われているのである。

（伊丹 優）

3. 編年的研究の現状と課題

神奈川県域における宮ノ台式土器の細分 80年代において編年的研究の先駆けとなったのが、石井寛による横浜市折本西原遺跡における宮ノ台式土器の分析である。石井は同遺跡Ⅱ次調査出土資料の分析にあたり、以下の方法で宮ノ台式土器における段階的な変遷案を提示した（石井1980）。

①土器の文様要素から見た施文具・施文法の分類・検討を行う。②壺形土器を中心とした、文様の種類の分類と文様帶構成の傾向を確認。③遺構の重複から想定される遺構群の変遷と、①・②において確認した土器様相との比較を行う。④土器様相の時間的な変遷と、その編年的な位置付けをおこなう。

これにより石井は折本西原遺跡の出土土器にⅠ～Ⅲ段階の時間的な変遷が見られることを提示し、宮ノ台式土器全体では5段階程度（折本西原はこのうち3段階目以降）に区分できる可能性を示唆した。

また松本完は同じく折本西原遺跡Ⅰ次調査の資料について、各文様要素や器面調整等の細部から全体の文様帶構成にまで至る微細な観察と分析を行い、同様の手法で宮ノ台式土器における段階的な変遷の試案を示し、更には土器の諸属性に様々なレベルで地域的な系譜が見られることにまで言及した（松本1988）。

こうした両氏による検討の成果を継承するかたちで、90年代以降の編年的研究の方向性を決定付けることとなったのが、安藤広道による一連の論考である（安藤1990・1991・1996）。安藤は遺跡群研究を主題に、下末吉台地や相模湾沿岸地域を一つの小地域圈と仮定した上で（以下、Si地域・Sa地域と呼称）、それぞれの地域で時間的な変遷の指標となりうる一括資料を抽出し、大別Ⅰ～Ⅴ期、細別7段階に分類した。また宮ノ台式土器の研究そのものの問題点として「型式論的に前後関係の想定が容易で、なおかつ多くの一括資料に普遍的に存在するようなモチーフが存在しない」ことを挙げている。

またこれに続き、宍戸信悟は秦野市砂田台遺跡の住居址出土資料を中心に、相模地域における宮ノ台式土器を5段階に分類した（宍戸1992）。宍戸の論考では、土器の分析は壺・壺の様相の変化を対象とし、他の形式（広口壺・高杯・碗・鉢類など）は基本的に検討から外している。安藤編年との明確な相違点は、次の二点である。①宮ノ台式土器の初現にあたる段階（宍戸Ⅰ期以前の段階）の土器群の位置付け。②壺の文様にみられる櫛描文主体の段階から縄文帯主体へと変化する時期の取り扱い。

ここでは安藤・宍戸両氏の分析を元に本県域における宮ノ台式土器の型式的変遷を略述し、現在迄の編年の研究の到達点として提示したい。なお、ここでは両氏の「期」と区別するために、便宜的に「段階」と表記することにする。

I段階：宮ノ台式土器の成立段階（安藤SiⅠ・SaⅠ期） 壺には東海西部「白岩式古段階」の影響により櫛描文が定着する。壺も中期中葉の手法が残り、横位羽状の条痕・櫛描文が主体となる。

II段階：壺は櫛描文を文様の主体とし、壺は横位羽状文が特徴的な段階（安藤SiⅡ・SaⅡ期、宍戸Ⅰ期）。

壺の文様では櫛描文が圧倒的に増えるが、縄文・沈線の併用例や複合鋸齒文と格子目文の組合せもみられる。

III段階：壺の文様構成が多様化し、壺は横走羽状文の省略と刷毛目の盛行する段階（安藤SiⅢ・SaⅢ期、宍戸Ⅱ期）。 在地的な様相が形成され、Sa地域とSi地域の間に明確な地域差が現れる。壺は文様帶の単純化が始まるがSa地域では2帶に分かれる傾向が認められる。壺の羽状文がSi地域では見

表1 神奈川県を中心とした宮ノ台式土器編年整合表

	石井		松本		安藤						宍戸		黒沢	
	1980		1988		1990		1991		1996		1992		1993	
1														
2	I	大里 子ノ神	I	大里 坊田 (雨崎)	S I I	大里 坊田 南加瀬 三殿台	S I I	S a I	子ノ神 12、68住	S I I	子ノ神 12、68住	雨崎	I	坊田 大里 小田原 山ノ神
3													砂田台	
4														
5	I	山ノ神	I-1	手広15住 山ノ神 青畠	S I I	手広15住 山ノ神 山神社北 包含層 上倉田1 6溝 三殿台	S I I	S a I I	手広15住 山ノ神 砂田台 15住 (3溝)	S I I	手広15住 山ノ神 砂田台 15住 (3溝)	+	2	砂田台 (3溝下層、 2溝) 手広15住
	折本西原 2・3次													
6			I-2											
				折本西原 I	持田 池・溝 十二天									
7	III	環濠	III-1a	環濠	S I I I 鶴半	折本西原 農業 山王山 大塚 環濠 上倉田1 1方		S a II	持田 池・溝 伊勢山 南御門 1住	S I I I 前半	持田 池・溝 伊勢山 南御門 1住	上ノ台	3	砂田台 (3溝)
								S I I I						
													4	砂田台 10、57、 155住 13溝 西方A

	8		7、23、42、49住 (30、33、36、41、43住)	III-1 b	24、34住	S I III 後半			S I III 後半			II	(2)-3、7-12- 13-30 14,26, 104,114, 167住	极丸島 I 上山神1方 大原里 S103 伊勢山 上倉田1方			
	9		2、5、15、17、18住	III-1 c	1方、 1溝、 3住	S I M	折本西原 2、18住 稚田原 S F 18 大船杉山 神社 折本西原 I 3住 山王山 2住床直	S I M	砂田台 10住 西方A 1住、 環濠	S I V	砂田台 10、22住 西方A 環濠	ひる畠 3方	III	1,10,17, 22,36, 46,57, 63,73, 107,108, 138,140, 155,166, 168住 6方、11溝	根丸島 II 西方A 1住、 環濠	5	砂田台 3、 140、 4・6方 羽根尾 20住
	10	M		III-2 前	1、3、 8、13、 17、19、 20、25住 (22 A、 23、28、 31住)	S I V	境田3住 折本西原 4、48住 鏡振寺北 21住 鏡振寺北 25住、 1方	S a V	砂田台 30住 羽根尾 20住 戸ヶ崎 2住	S I V 前半	砂田台 30住 羽根尾 20住 戸ヶ崎 2住	佐原泉 32 B住	M	3,4、 8,30、 35,46、 51,74、 125,135、 137,146、 158,160 住	羽根尾 20住 戸ヶ崎 2住		
	11		8瓦土 28、40住 (1,9、 10、22、 24、29、 37住、万)	III-2 後	4、 10 A、 14、15、 26 A、 29 A、 33住 (6 B、 7 B、 11 B、 21 B、 26 B、 29 B住)	S I V	境田3住 折本西原 4、48住 鏡振寺北 21住 新羽大竹 17住 三輪台 207、 306 C 靴ヶ谷 住	S a V	砂田台 3、7、 25住	S I V 後半	砂田台 3、7、 25住	佐原泉 33 B住	V	5,7,25、 31,33、 58,68、 89,139、 154住	砂田台 25、139 154住 (36住)	6	砂田台 25、139 154住 (36住)
	12	V	4、48 住 (34、 35、45 住、3方)	III-3	5、6 A、 7A、 21A、 36、37住 (11 A、 18住)	S I V 後半	折本西原 昌期 新羽大竹 16、17住	S a V	砂田台 3、7、 25住	S I V 後半	砂田台 3、7、 25住	佐原泉 33 B住					

られなくなるが、Sa地域ではまだ比較的多い。

IV段階：壺は縄文を多用し、壺は刷毛目が主体となる段階（安藤Si IV・Sa IV期、宍戸Ⅲ期）。壺の文様帶の縮小化が進行するが、Sa地域では2带構成が主体。この他の器種として広口壺・椀・鉢・高坏などが組成するようになる。

V段階：壺の文様帶の減少が進み、文様の単純化・文様帶の縮小化が更に進行した段階（安藤Si V・Sa V期、宍戸Ⅳ期）。壺は無区画の縄文帯が盛行し、無文部に赤彩を施すものが増加する。壺は刷毛目無文が主体。

VI段階：壺の文様が簡略化し、器形が定形化する段階（安藤Si V期後半・Sa VI期、宍戸V期）。壺は頸部・胴部上半に縄文帯を施すだけのものと無文のものが主体となる。壺は刷毛目中心。この他、台付壺・椀・鉢・無頭壺・広口壺・高坏などがみられるが、安定した比率で出土する訳ではない。

大枠で捉えた場合、壺の文様要素に東海地方西部の櫛描文が導入され、壺は横羽状文のものを主体とする前半期（第I～II段階）と、壺は羽状縄文帯が盛行して文様帶の縮小化が進行し、壺は主として刷毛目調整だけの無文のものが組成する後半期（第IV～VI段階）に分かれる。ただし前半と後半の様相の転換期となる第III段階については両氏の評価が若干異なる。またIII段階以降、各地に地域色が認められることが判明している。これは宮ノ台式土器の枠組みを考える上で、その初源と終末の問題に並ぶ重要な課題である。

研究上の課題 宮ノ台式土器は弥生時代中期後葉における南関東地方に分布する土器として広く知られている。隣接地域の土器型式である東関東の足洗式、北関東の御新田式（及び上山系列の後続型式群）、北西関東の竜見町式、そして東海地方東部に分布する有東式土器との並行関係（註1）については、これまで各地で検討を深め、それぞれの土器型式における空間的な分布と出件状況とが検討されている。

そうした中で周辺地域の状況と比較した場合、宮ノ台式土器の編年研究における問題点として、安藤・宍戸両氏の論考以降、その研究成果を検証し、研究上の議論を活発化しようとする試みが殆ど見られないという事が指摘できる。現状では遺跡の発掘調査において宮ノ台式土器が出土した場合、安藤編年におけるn期・又は砂田台編年におけるn期に相当する資料である、というように時間的な指標としての段階設定に対して、出土した資料を容易に当てはめて解決を図る例がまま見られる。両氏の編年作業については、先述の通り土器様相の時間的変遷を示すものとして定着しているのであるが、設定された個々の段階の資料同士に時間的な隔絶や重複が全くないのかどうかという点については、型式編年を構成する各形式の組列を、出土状況の検討を通して遺跡ごとに確認することが今後も必要であろう。

（渡辺 外）

4. 宮ノ台式土器の地域色

宮ノ台式土器の細分研究は編年に関する研究を中心に進められてきており、宮ノ台式土器の地域色を主題とした論考はこれまでにはほとんど取り扱われたことがない。1981年に泉谷憲後がそれまでの宮ノ台式土器の研究史を整理し（泉谷1981）、「宮ノ台式土器」とは一体何なのか、その範囲が明らかではないままであることを指摘した。これは「房総半島基部に標式を持つ宮ノ台式土器と相模湾西部に標式を持つ小田原式土器という南関東の東西両極地に標式を持つ土器型式名をもって南関東という広い地域を考えなければならない」といった無理があることから、「合理的な地域の設定を念頭において考えてゆくべき」と指摘しているのである。それまでの研究史上では、小田原式土器と宮ノ台式土器の齟齬が解消されないままであったことと、資料的制約があったことにより細分できなかったものと思われる。

1970年代以降の大規模開発に伴う発掘調査により、1980年代には南関東各地域でまとまった資料を扱うことができるようになり、遺跡ごと、地域ごとの細分研究が徐々に行われるようになる。細分研究は編年的研究が中心であるが、各論考の中で地域による様相の違いや特色について触れられているところがあるので、以下にその概要を列挙してみよう。

柿沼修平は千葉県佐倉市の大崎台遺跡の分析を通じ、房総では横位羽状縄文の壺が宮ノ台式土器の終末まで残ることを指摘した（柿沼1984）。

安藤広道は1990年に、遺跡群研究のためのタイムスケールの整理としての論考（安藤1990）で、「長年に亘り宮ノ台式土器細分案の中心となってきた、壺形土器の体部文様及び器面調整に関しても、その過程に大きな地域差が存在していることが指摘されるようになり」、「宮ノ台式土器には大きな地域差が認められ、それが宮ノ台式土器の細分作業上の障害になってきたわけであるが、それらの地域差は、遺跡数が多く、資料的な蓄積の進んだ『核地域』とも言うべき地域間の比較において」初めて地域設定がなされると指摘している。安藤は翌年に相模地域の編年案を示し（安藤1991）、さらに1996年の論文で宮ノ台式土器の地域差について触れ（安藤1996）、地域差は調査事例が多く資料の蓄積が進んでいる地域間のみで認められるもので、各地域間の境界は不鮮明とならざるを得ないが、下末吉台地地域に対応するような宮ノ台式土器の地域差の単位となる地域として、相模湾沿岸地域・大宮台地地域・市原台地地域・印旛沼周辺地域の4地域が抽出可能と考え、この他に三浦半島地域や九十九里浜地域も変遷過程に独自性が認められるようである、と述べている。これらの地域間では、個々の地域の編年観を他の地域の編年に安直に適用すると多くの誤解を生むことになる、と注意を促している。詳細は検討中ということであるが、そのエッセンスは示されている。

大木努は、壺形土器の文様施文帯の変遷を検討する中で宮ノ台式（新相）における地域色の顕在化について言及し（大木1992）、相模湾周辺地域や東京湾西岸地域では結紐文帯をもつことが希であること、縄文帯に代えて結節文帯を施文する土器は岡総地域に分布が濃厚で、東京湾西岸や相模湾周辺には希薄であること、特殊な羽状縄文や頸部突堤といった特徴を持つ壺形土器の分布はほぼ房総半島に限られ、東京湾西岸地域には分布が希薄であることを述べている。

安藤の1991年の論文（安藤1991）を受けて宍戸信悟は、砂田台遺跡の報告（宍戸1991）に統いて相模地域の宮ノ台式土器及び宮ノ台期集落の分析を行ない（宍戸1992）、東京湾岸地域と異なる点として、宮ノ台期の新しい段階にハケメ調整の壺に代わってナデ調整の壺が主流になることはないこと、壺の文様で波状もしくは山形に施された縄文帯が認められないこと、を挙げている。

小倉淳一は、東京湾東岸地域の宮ノ台式土器の細分を検討し（小倉1996）、その中で東京湾西岸地域は東岸地域に比べて櫛描文の文様率がかなり高そうであることと回転結節文を施文する壺形土器がほとんど見られないことを指摘した。また東京湾東岸地域では柿沼（柿沼1984）の指摘通り壺形土器における横走羽状文が宮ノ台式期の終末まで残ることを確認している。

黒沢浩は、房総の宮ノ台式土器を分析し（1997）、大崎台遺跡では宮ノ台式の新しい段階に縄文施文が発達するにも関わらず結紐文が極めて少なくなつて行くことを認め、対して小櫃川流域から村田川流域の範囲では結紐文が山形文化として「久ヶ原式」へ移行してゆくことを読みとっている。

上記のように1990年代には宮ノ台式土器の細分研究が活発に行われ、地域的様相が検討されるとともに地域差も明らかにされるようになってきた。安藤が述べるように（安藤1996）、地域差というものは各地域の様相が明らかにされて初めて認識できるものであるので、宮ノ台式土器の細分研究が遺跡ごと、地域ごとの

編年の研究中心で進められてきていることは、当然の成り行きと言えよう。しかしながら、編年の研究が主要器種である壺もしくは壺を対象として行われていることと相俟って、地域色が指摘されている点も壺の文様および壺の文様・調整についてのみである。宮ノ台式土器の地域色研究の課題としては、壺、壺以外の器種の消長や器種組成についての研究も、今後必要な視点であろう。

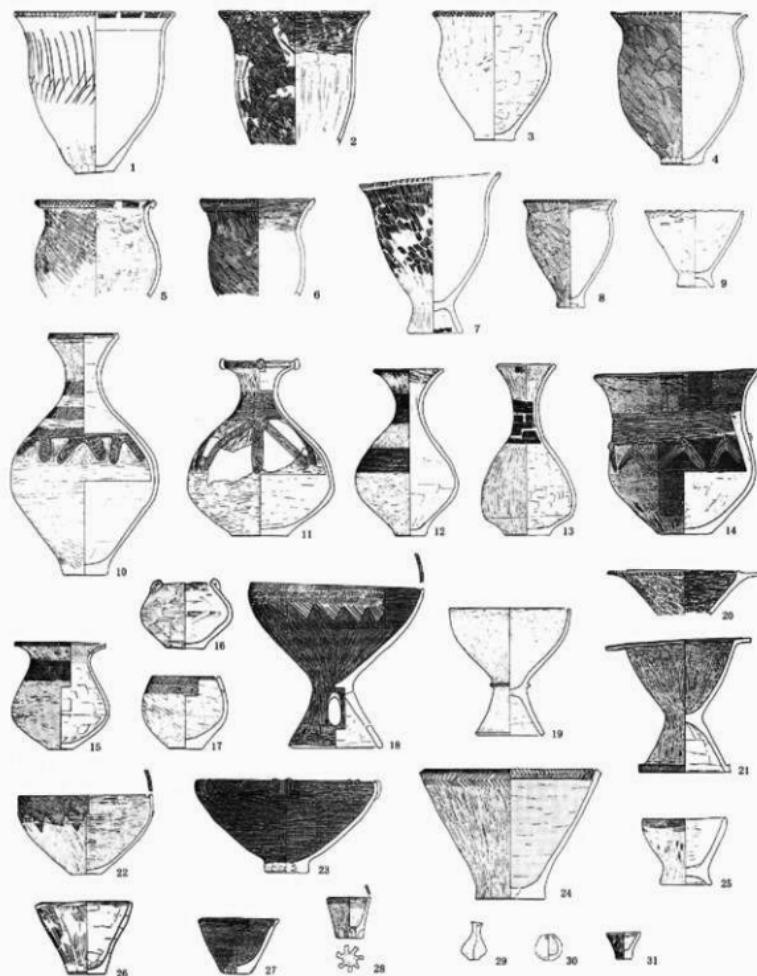
(池田 治)

5. 宮ノ台式土器の器種構成

1935年、杉原莊介は『上総宮ノ台遺跡調査概報』のなかで、出土土器を第一類～第三類に分類し、第一類を「器形は鉢形或いは壺形に近い鉢形である」とし、第二類を「器形は壺形、有頸壺形である」と分類した。第三類は古墳時代後期の土器であるが触れないが、後に宮ノ台式と呼ばれるこの形式を、第一類=鉢(壺)：煮沸形態、第二類=壺：貯蔵形態の二器種に大別した(杉原1935)。その翌年には『相模小田原出土の彌生式土器に就いて』の中で、出土土器を器種・施文により十一類に分類した。この中で椀形・高坏と、壺の細分としての細頸壺・広口壺・細口壺・細口有頸壺・広口有頸壺などの呼称を用いた(杉原1936)。

現在では、壺形土器(以下、壺)、いわゆる長頸壺形の形態を持つ壺形土器(同、壺)、高坏形土器(同、高坏)、鉢形土器(同、鉢)、椀形土器(同、椀)という用語をもって主要な構成器種として認識されており、壺形土器の細分として台付壺形土器、壺形土器の細分として、壺と壺の中間的形態を持つ広口壺形土器(以下、広口壺)、無頸壺形土器がある。また数量的に少ないと蓋と非実用器種としてのミニチュア(小形土器)が存在する(第1図)。壺や壺には、様々な法量のもののが存在するため、小型または大型のものを特に小(大)型壺・小(大)型壺などと称する場合があるが、どの程度の大きさをもって小(大)型とするのか、また器種として分化させるべき機能面での差異が存在するのかなど、研究者間で特に共通の基準が存在していない。遺跡単位での感覚的な大小で分類するのではなく、地域毎または宮ノ台式分布圏全体での法量の統計的な分析を行った上で検討することが必要であろう(註2)。器形が類似する器種である鉢・椀の区別もまた研究者間で認識の差が存在するところとなるが、この2器種について、松本完は、壺形土器、壺形土器の製作工程の一部を省略若しくは中断することで産み出されたものとし、「壺形土器の胴部中位以下を独立させたような形態」のものを椀、小形の壺型土器と形態的に未分化とした上で壺形土器と器面調整を同じくし、器形的に壺形土器とするに難があるものを鉢とした(松本1988)。このような製作工程からの分類も一つの方法として有効と思われるが、実際には形態的特徴や法量を含めて分類を検討することが必要である。

次に、これらの器種がどのような組成を示すのかについて、県内で報告されている例を見てみる。横浜市折本西原遺跡の第1次調査(松本1988)では、重複関係等から集落の時間的推移を検討し、各時期に所属する8軒の竪穴住居址出土土器の器種構成を、破片数を基にグラフ・表で示している。ここでは器種構成の時間的変遷についてあえて触れないが、示された8軒の竪穴住居址から出土した土器全体を、同定不能破片を除いた器種ごとの割合で見ると、壺69.6%、壺23%、高坏・鉢・椀7.1%、ミニチュア0.3%という結果が出ている。壺が群を抜いて多く、ついで壺が多い。高坏をはじめとする小型器種は組成の主要な位置を占めないことがわかる。また、逗子市池子遺跡群No1-A地点(谷口1999)では、自然流路である旧河道出土土器中の実測個体について器種構成を示している。破片資料を含めた1922個体の内訳は、壺721(37.5%)、壺930(48.4%)、広口壺77(4.0%)、鉢139(7.2%)、高坏47(2.4%)、壺2(0.1%)、ミニチュア6(0.3%)となっている。やはり壺・壺が主体となっており、壺は広口壺を含めると全体の50%以上を占める。壺と壺が全体に占める割合は、折本西原遺跡で約93%、池子遺跡群No1-A地点で約90%(広口壺含む)であり、ともに



1～6壺 7～9台付壺 10～13壺 14・15広口壺 16・17無頸壺 18～21高杯 22～28碗・鉢類
29～31ミニチュア

1手広八反目 2・4・6・8・10～12・14・18～21・23・27・29・31孢子遺跡群No.1～A地点 3・5・9・13・15・17・22・24・29砂田台
16折本西原I 25・30折本西原 26大塚

第1図 宮ノ台式土器にみられる器種・器形 (S = 1 / 8)

9割以上を占めている。この数値を見ると、杉原莊介が当初鉢形（壺）・壺形に分類したように、宮ノ台式土器は壺・壺により構成されると言っても過言ではない。このような組成のあり方は県内の他遺跡においてもおそらく大差ないものと推測される。

遺跡単位または住居単位での器種組成のあり方について情報を提示もしくは検討を加えている報告書は現在のところ皆無に等しい。これは前述のように宮ノ台式期の器種組成が壺・壺主体であることが明瞭であり、編年研究のため文様構成・調整技法等による分類に主眼が置かれてきたことが要因であろう。また、破片資料の場合、器種の同定が困難なものが多く存在することも一つの要因となっている。器種組成についての情報を提示する場合、重量で示すのか破片数で示すのかが問題となる。いずれの場合も実際の個体数を正確に反映するものではないが、最低限重量で示すか、破片数・重量両方を提示することが望ましい。これを完形資料をもとに統計的に割り出した各器種の標準的な重量で割り返せば、ある程度の個体数把握が可能かもしれない。器種組成は型式・様式を説明する上で基礎的な情報の一つであるが、現状では宮ノ台式土器の器種組成について言及している報告書は少ない。時期や地域毎に器種組成の差異を比較検討する作業も、今後必要であろう。また、器種分類にあたって、器種を示す用語の定義がけっして一様ではないという現状がある。同一用語でも研究者によってその定義が異なることもあり、特に壺・鉢類について顕著である。宮ノ台式土器の器種を検討するにあたっては器種の分類基準を明示することが重要であるが、同時に用語の整理も必要であろう。

(新開基史)

6.まとめ

宮ノ台式土器研究史について、研究の全体的な流れと個別テーマの現状に分けて述べてきた。ここでまとめとして、研究上の問題点・課題のいくつかを抽出しておくこととしたい。

「宮ノ台式土器」という用語が抱える最大の問題点は、宮ノ台式土器の定義が曖昧なまま定着してしまうことであろう。この点はこれまでに幾度も指摘されてきていることである。2節で述べているように「宮ノ台式土器」の内容を再定義するには、一旦分解したうえで再編成する、という作業を経る必要がある。

宮ノ台式の内容に関わる具体的な課題として、壺・壺以外の器種の消長と各器種の型式組列の検証を行っていないという点が挙げられる。器種組成は型式や様式を説明する上で重要な要素の一つであるので、器種の消長と型式変遷を明らかにする必要がある。さらに型式の組成については、出土状況の検討によって同時性を確認するという作業を積み重ねてゆくべきであろう。

「地域差」の具体的内容については、壺・壺を含めた各器種についてこのような作業を「核地域」ごとに行った上で明示できるものであろう。「地域差」が存在する段階の「宮ノ台式土器」が、地域ごとの別型式として分かれるものなのか、それとも一つの土器型式から逸脱しない範囲の「地域色」に収まる違いなのか、ということが明らかにできるのは、このような作業過程を経ての結果と考える。

上記のような「宮ノ台式土器」の抱える問題点を全て解消することは一朝一夕に出来ることではないが、少なくとも神奈川県内の「宮ノ台式土器」をベースとして、現状の研究動向に立脚して基礎的な検討を試みてみようと思う。次回から具体的な課題検討を行っていきたい。

なお、県内の宮ノ台式土器出土遺跡分布図および遺跡文献一覧表は、紙幅の関係で次号に掲載することとする。作成にあたってご教示いただいた方々にご寛恕をお願いする次第である。

(池田 治)

註

- 1 大井川以東の東海地方東部に分布する有東式土器については、その型式内容を宮ノ台式土器と同一のものとして捉える立場の研究がある（石川1992ほか・近藤2000）。
- 2 現状で宮ノ台式土器に地域色が存在すると指摘されているのであるから、統計的分析を行う単位は地域毎の方がより具体性を持つことになろう。

参考文献

文献1 論文（末尾の＊印は神奈川県内資料を主に扱ったものを表す）

- 相京邦彦 1982 「房総半島における弥生時代中期の一様相」『白山史学』20
- 赤星直忠 1930 「三浦半島に於ける弥生式遺跡の分布」『考古学』1-5・6*
- 赤星直忠 1955 「南関東」『日本考古学講座4 弥生文化』
- 秋本真澄 1972 「沼津市興国寺城出土の弥生式土器」『駿豆考古』1-2
- 秋本真澄 1976 「田方郡函南町仁田仲道遺跡発掘調査報告」『駿豆の遺跡研究』（2）
- 安藤広造 1990 「神奈川県下未吉台地における宮ノ台式土器の細分（上）・（下）」『古代文化』42-6・7*
- 安藤広造 1991 「相模湾沿岸地域における宮ノ台式土器の細分」『唐古』*
- 安藤広造 1991 「弥生時代集落群の動態」『横浜市埋蔵文化財センター調査研究集録』8
- 安藤広造 1992 「三殿台遺跡の再検討」『横浜市ふるさと歴史財团調査研究集録』9
- 安藤広造 1996 「南関東地方（中期後半・後期）」「YAY！」
- 安藤広造 1996 「南関東地方における「台付壺形土器」の展開」「鍋と壺 そのデザイン」
- 安藤広造 1998 「相模川流域における宮ノ台式期の集落」『考古論叢神奈川』7
- 安藤広造 1999 「弥生土器の「絵画」と文様」「古代」106
- 飯塚博和 1993 「小田原式土器再考」「異説」13
- 飯塚博和 1993 「小田原式土器再考（続）」「異説」14
- 飯塚美保 1996 「宮ノ台式土器における台付壺形土器の成立」『神奈川考古』32
- 飯塚美保 1999 「宮ノ台式土器における台付壺形土器の成立Ⅱ」「西相模考古」8
- 石川日出志 1986 「中部・関東の弥生時代中期をめぐる諸問題」「第7回 三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器」
- 石川日出志 1996 「関東地方の弥生土器」「小田原式土器」「宮ノ台式土器」「日本土器事典」雄山閣
- 石川日出志 1996 「東日本弥生時代中期広域編年の概略」「YAY！」
- 石川日出志 1997 「御新田式土器をめぐって」「弥生土器シンポジウム 南関東の弥生土器」
- 石川日出志 1998 「弥生時代中期関東の4地域の併存」「駿台史学」102
- 石川日出志 2001 「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」「駿台史学」113
- 石川日出志 2001 「弥生時代論」「銅鋒から描く弥生社会」一宮市博物館
- 石野 球 1930 「神奈川県内の頗る著なる弥生式遺跡と遺物」「考古学」1-5・6*
- 泉谷憲俊 1981 「研究史宮ノ台式土器」「法政考古学」6
- 泉谷憲俊 1982 「宮ノ台式土器の時間軸上の細分試案」「法政考古学」7
- 泉谷憲俊 1983 「宮ノ台式に見られる椿円文をめぐって」「法政考古学」8
- 伊丹 健 1993 「相模ホエールズの誕生」「西相模考古」2*
- 伊丹 健 1994 「宮ノ台式土器研究前史」「西相模考古」3
- 市川規平 1984 「絵が描かれた弥生式土器」「湘南考古学同好会々報」18*
- 市川規平 2001 「穂の様な本当の話」「湘南考古学同好会々報」85*
- 伊藤淳史 1996 「大平洋沿岸における弥生文化の展開」「YAY！」
- 伊藤淳史 1997 「太平洋沿岸における弥生文化の展開・補遺」「西相模考古」6
- 伊藤 郷・坂本 彰 1979 「墳塚遺跡の調査」「港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 調査研究集録」4*
- 大木 努 1992 「宮ノ台式土器基盤考」「東京大学文学部考古学研究室紀要」11
- 宇野信四郎 1967 「東京都北区飛鳥山遺跡の調査報告」「古代」49・50

- 江坂輝弥 1988 「南加瀬貝塚」「川崎市史 資料編 I 考古 文獻 美術工芸」*
- 江藤千萬樹 1935 「駿河国沼津を中心とする弥生式異形石器に就いて」『上代文化』13
- 江藤千萬樹 1936 「静岡県東部地方に於ける弥生式文化」『上代文化』14
- 江藤千萬樹 1937 「駿河矢崎の弥生遺跡調査略報」『考古学』8-6
- 江藤千萬樹 1937 「弥生式末期に於ける原始漁撈聚落」『上代文化』15
- 江藤千萬樹 1937 「沼津駿東部地方に於ける弥生式文化様相」『静岡縣郷土研究』9
- 江藤千萬樹 1938 「矢崎遺跡予察」『上代文化』16
- 江藤千萬樹 1938 「武藏大倉山太尾の弥生式土器の考察」『考古学』9-10*
- 大沢 孝 1989 「大崎台タイプの土器について」『千葉県立房総風土記の丘年報』12
- 大島慎一 1983 「南関東地方の弥生中期層年研究について」『東海史学』18
- 大島慎一 1986 「神奈川県における中期後半の弥生土器について」『第7回三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』*
- 大島慎一 1997 「小田原地方の弥生土器研究に関する覚書」『小田原市郷土文化館研究報告』33*
- 大塚初重 1958 「三宅島ボウタ遺跡の調査」『伊豆諸島文化財総合調査報告第1分冊』東京都文化財調査報告書6
- 大塚初重 1959 「利島ケッケイ山遺跡の調査」『伊豆諸島文化財総合調査報告第2分冊』東京都文化財調査報告書7
- 大塚初重 1965 「東京都三宅島ボウタ遺跡の調査」『考古学雑誌』3-1
- 大塚初重 1968 「東海地方 II」『弥生式土器集成 本編 2』東京堂
- 岡本 勇 1967 「三浦市赤坂遺跡の調査」『Mouseion ムゼイオン』13*
- 岡本孝之 1974 「東日本先史時代末期の評価」(1)~(5)『考古学ジャーナル』97-99・101・102
- 岡本孝之 1976 「宮ノ台期弥生文化の意義」『神奈川考古』1
- 岡本孝之 1990 「縄文土器の範囲」『古代文化』42-5
- 岡安雅彦 1999 「弥生の技術革新」安城市歴史博物館
- 小倉淳一 1993 「千葉県佐倉市大崎台遺跡の宮ノ台式土器について」『法政考古学』20
- 小倉淳一 1997 「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」『史館』27
- 小高泰雄・渡辺修一 1989 「房総考古学ライブラリー 4 弥生時代」千葉県文化財センター
- 小野真一 1958 「駿河湾地方の弥生文化」
- 小野真一 1962 「駿河・伊豆地域における弥生文化前半の様相」『弥生文化研究会研究発表要旨』
- 小野真一 1962 「駿河矢崎遺跡第一次調査概報」『弥生文化研究会研究発表要旨』
- 小野真一 1962 「北伊豆向原・館両遺跡出土の弥生土器」『弥生文化研究会研究発表要旨』
- 小野真一 1963 「駿河矢崎遺跡調査略報」『沼津女子高校考古館報』3
- 小野真一 1963 「静岡県の弥生文化」『静岡県の古代文化』静岡県文化財調査報告書2
- 小野真一 1964 「駿河矢崎遺跡第3次調査略報」『沼津女子高校考古館報』4
- 小野真一 1966 「駿河湾地方における中期弥生文化について」『上代文化』36
- 小野真一 1969 「東海地方東半の弥生文化」(1)・(2)『信濃』21-4・5
- 小野真一 1976 「弥生土器 - 東海東部」(1~3)『考古学ジャーナル』126・127・129
- 小野真一 1979 「静岡県における弥生土器とその終末について」(1)・(2)『静岡県考古学研究』6・7
- 小野真一 1979 「駿豆地方の弥生式土器集成」
- 小野真一・秋本真澄ほか 1972 「北伊豆函南町向原遺跡发掘調査報告」『駿豆考古』13
- 及川良彦 1987 「弥生土器の移動と地域性」『青山考古』5
- 柿沼幹夫 1992 「弥生土器と地域性」『平成4年度復元文化財担当者研修会資料』
- 柿沼修平 1974 「佐倉市畔田川崎遺跡の弥生式土器」『史館』3
- 柿沼修平 1983 「南関東弥生時代中期後半にみる土器紋様の観察」『史館』15
- 柿沼修平 1984 「大崎台遺跡出土の弥生式土器」『奈和』15周年記念論文集
- 柿沼修平 1991 「大崎台遺跡の研究」Ⅰ「奈和」29
- 柿沼修平 1992 「大崎台遺跡の研究」Ⅱ「奈和」30
- 柿沼修平 1993 「大崎台遺跡の研究」Ⅲ「奈和」31
- 柿沼修平 1994 「大崎台遺跡の研究」Ⅳ「奈和」32

- 柿沼修平 1995「大崎台遺跡の研究」V「奈和」33
- 柿沼修平 1996「大崎台遺跡の研究」VI「奈和」34
- 柿沼修平 1999「大崎台遺跡の研究」VII「奈和」37
- 柿沼修平・青木幸一 1984「房総弥生式土器の研究 資料編」『日本考古学研究所集報』VI
- 柿沼修平・青木幸一 1985「房総弥生式土器の研究 研究編」『日本考古学研究所集報』VII
- 柿沼修平・田川 良 1998「千葉県佐倉市大崎台遺跡出土の土器」「奈和」36
- 加藤明秀・芹沢長介 1938「静岡市東杉駆馬捨場遺跡」「考古学」9-9
- 神奈川県（赤星直臣・岡本 勇編） 1979『神奈川県史 資料編20 考古資料』*
- 神澤勇一 1959「横浜市谷津田原出土の弥生式土器について」「貝塚」87*
- 神澤勇一 1966「開闢」「日本の考古学』III 弥生時代】
- 神澤勇一 1968「相模湾沿岸地域における弥生式土器の様相について」「神奈川県立博物館研究報告』1-1*
- 神澤勇一 1969「神奈川県考古資料集成 1 弥生式土器】*
- 神澤勇一・川口惟治郎 1970「神奈川県考古資料集成 5 弥生式土器 (2)」*
- 熊野正也 1976「宮ノ台式土器に関する覚え書き」「房総の郷土史」4
- 熊野正也 1979「入門講座 弥生土器 南関東」1-3「考古学ジャーナル』135・138・139
- 熊野正也 1979「南関東における弥生文化の特徴」「どるめん」23
- 熊野正也 1989「宮ノ台遺跡」「探訪 弥生の遺跡 優内東日本編」有斐閣
- 黒沢 浩 1987「神奈川県伊勢山遺跡出土の弥生式土器」「明治大学考古学博物館館報』3
- 黒沢 浩 1993「宮ノ台式土器の成立」「駿台史学』89
- 黒沢 浩 1997「房総宮ノ台式土器考」「史龍」29
- 黒沢 浩 1997「大里東式土器」をめぐって「弥生土器シンポジウム 南関東の弥生土器」
- 黒沢 浩 1998「範・房総宮ノ台式土器考」「史龍」30
- 群馬県考古学談話会ほか編 1986「第7回 三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器」
- 飯持和夫 1986「武藏地方の概観」「第7回 三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器」
- 小林行雄 1932「弥生式土器聚落成層 武藏相模之部」「考古学」3-4*
- 小林行雄 1938「弥生式文化」「日本文化史大系 第1巻原始文化」誠文堂新光社
- 小林行雄 1939「弥生式土器聚落成層圖正編解説」「東京考古学会学報」1
- 近藤 舞 2000「駿豆地方の弥生時代中期後半の遺跡群」「静岡県考古学研究』32
- 斎木 勝 1978「東京湾東岸における弥生中期遺跡の集落構成と出土土器」「千葉県文化財センター研究紀要』3
- 斎木 勝 1986「千葉県における弥生時代中期後半の土器について」「第7回 三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器」
- 斎木 勝 1987「宮ノ台式土器」「弥生文化の研究 4 弥生土器 II」「雄山閣
- 坂詰秀一 1959「小田原市町畑出土の弥生式土器に就いて」「上代文化」29*
- 坂本 彰 1976「袖木台遺跡(リ2)の調査始まる」「港北のむかし」64*
- 佐藤山紀男 1986「遠江の弥生時代中期後葉の土器」「第7回 三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器」
- 佐原 真 1979「弥生土器編年表」「世界考古学事典』上 平凡社
- 宍戸信悟 1992「南関東における宮ノ台期弥生文化の発展」「神奈川考古』28*
- 静岡県 1990「静岡県史 資料編1 考古1』
- 設楽博己 1991「開闢地方の弥生土器」「邪馬台国時代の東日本」六興出版
- 篠原和大 2000「登呂式土器の再検討」「登呂式土器をみる会資料集」
- 杉原莊介 1932「下総東葛郡郡分村須和田宗生式遺跡研究摘要」(上・下)『武藏野』18-4・6
- 杉原莊介 1934「三宅島フル根岬に於ける火山噴出物下の弥生式遺跡」「人類学雑誌」49-6
- 杉原莊介 1934「三宅島紀行」「武藏野」21-3
- 杉原莊介 1934「三宅島フル根岬に於ける火山噴出物下の弥生式遺跡」「人類学雑誌」49-6
- 杉原莊介 1935「上総宮ノ台遺跡調査概報」「考古学」6-7
- 杉原莊介 1936「相模小田原出土の弥生式土器に就いて」「人類学雑誌」51-1*

- 杉原莊介 1936 「相模小田原出土の弥生式土器に就いての補遺」『人類学雑誌』51-4 *
- 杉原莊介 1936 「下野・野沢遺跡及び陸前・津輕形圓貝塚出土の弥生式土器の位置に就いて」『考古学』7-8
- 杉原莊介 1939 「南関東を中心とする土師部・祝部土器の諸問題」『考古学』10-4
- 杉原莊介 1940 「武藏・埼玉・千葉出土の弥生式土器に就いて」『考古学』11-7
- 杉原莊介 1942 「上総宮ノ台遺跡調査概報・補遺」『古代文化』13-7
- 杉原莊介 1951 「静岡市有東第一遺跡」「静岡県安倍郡原添遺跡」「日本考古学年報」1
- 杉原莊介 1955 「弥生文化」「日本考古学講座4 弥生文化」雄山閣
- 杉原莊介 1956 「弥生式土器」「國立日本文化史大系1 純文・弥生・古墳時代」小學館
- 杉原莊介 1961 「神奈川縣藤沢市引地伊勢山道路の土器」「弥生式土器集成 資料編2」*
- 杉原莊介 1964 「純目土土器」「日本原始美術3 弥生式土器」講談社
- 杉原莊介 1967 「下總須和田出土の弥生式土器について」『考古学集刊』3-3
- 杉原莊介 1968 「会報」「考古学集刊」4-1
- 杉原莊介 1968 「南関東地方」「弥生式土器集成 本編2」東京堂
- 杉原莊介・大塚初重 1971 「原始農耕文化」「市川市史1 原始・古代」
- 杉山博久 1969 「小田原式土器について」「小田原考古学研究会報」1 *
- 杉山博久 1970 「中里遺跡出土土器と二、三の問題」「小田原地方史研究」2 *
- 鈴木宏子 1971 「函南町向原出土の弥生式土器」「鐵豆考古」11
- 鈴木正博 1999 「十王台式」研究法から観た南関東弥生式(序説)」「茨城県考古学会誌」11
- 鈴木正博 1999 「斎木「先史土器」研究の課題3」「後良賀考古」21
- 鈴木正博 2000 「十王台式」成立基盤の再吟味」「日本考古学協会第66回総会 研究発表要旨」
- 鈴木正博 2001 「小田原式」研究序説」「茨城県考古学会誌」13
- 鈴木正博 2001 「王子台の頃、そして『王子ノ台』から」「日本考古学協会第67回総会 研究発表要旨」
- 鈴木正博 2001 「貝田町パクリ事件は迷宮入りか、それとも型式学の復権は可能か!」「関東弥生研究会第1回研究発表会資料」
- 岸沢長介 1958 「三宅島呼田ココマノコシ遺跡」「伊豆諸島文化財総合調査報告 第一分冊」
- 曾根博明・比田井克仁 1988 「根丸島遺跡」「西相模の土器」
- 曾野寿彦・中川成夫 1950 「東京都三宅島の道路概報」「考古学雑誌」36-3
- 蘭田芳雄 1969 「関東」「新版考古学講座4 原史文化(上)弥生文化」雄山閣
- 庵口 宏 1955 「市川市須和田奈良時代遺跡」「古代」14-15
- 竹内直文 1988 「東日本における弥生文化の発展」「史館」20
- 田中義昭 1976 「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」「考古学研究」22-3
- 寺田兼方 1959 「藤沢市縄背発見の弥生式土器」「湘南学園論叢」1 *
- 寺田兼方 1961 「若尾山出土の遺物」「藤沢市の大塚遺跡と遺物(二)」「湘南学園歴史部」
- 寺田兼方 1970 「考古叢書 伊勢山遺跡」「藤沢市史 第1巻 資料編」*
- 寺田兼方 1984 「羅集者付記」「湘南考古学同好会会報」18*
- 東京都教育庁社会教育部文化課 1974 「東京都遺跡地図」
- 中西道行 1982 「静岡県有東遺跡出土の弥生中期の土器」「クロッカスCROCUS」6
- 中野国雄 1982 「矢崎遺跡発掘調査報告」「静岡県考古学研究」13
- 中野 国 1984 「登呂遺跡第6次調査と周辺遺跡」「登呂 いま弥生文化を問い合わせなおす』登呂遺跡発見40周年シンポジウム資料
- 中山 豊 1990 「神奈川県相模川以西地域における流水紋について」「法政考古学」15*
- 西川修一 1982 「壺のような高杯」「考古論叢神奈河」1
- 嶋口尚武 1975 「三宅島の埋蔵文化財」
- 嶋口尚武 1988 「鳥の考古学」UP考古学選書3
- 橋本裕行 1988 「東日本弥生土器繪面・記号論」「横原考古学研究所論集」8
- 浜田勤太・神澤勇一 1961 「三浦市城ヶ島出土の弥生式土器」「横須賀市博物館研究報告(人文科学)」5 *
- 浜田勤太・神澤勇一 1963 「三浦市城ヶ島遺跡調査概報」「横須賀市博物館研究報告(人文科学)」7 *

- 久永春男 1955 「東海」「日本考古学講座4 弥生文化」
- 久永春男 1969 「東海地方」「新版考古学講座 4 原史文化(上)」
- 平野吾郎 1989 「有東遺跡」「探訪 弥生の遺跡 岐内東日本編」有斐閣
- 深澤克友 1979 「土器の伝播と接触交渉」「どるめん」23
- 福田敏一 1979 「中期弥生式土器小考」「法政考古学」3
- 福田敏一 1981 「南関東弥生土器にみられる二系統」「法政考古学」6
- 古内 茂 1977 「宮ノ台式土器の変遷について」「船橋考古」7
- 古谷 清 1990 「神奈川太尾大倉精神文化研究所収集地発見の石器土器」「史蹟名勝天然記念物」5-5*
- 星田享二 1976 「東日本弥生時代初頭の土器と墓制」「史館」7
- 星野達雄 1981 「原史学方法論と南関東弥生式土器編年式の成立過程」「法政史論」8
- 馬目順一・原 信之 1963 「神奈川県藤沢市発見の弥生式土器」「考古学雑誌」48-4*
- 三森後彦 1977 「市原市大堀遺跡の弥生文化」「MUSEUMちば」8
- 向坂剛二 1966 「新居町一里田遺跡調査概報」「静岡県埋蔵文化財要覧」I
- 向坂剛二 1967 「遠江地方を中心とした縄文と繩文の系譜」「信濃」19-1
- 向坂剛二 1984 「静岡県下の弥生文化」「登呂いま弥生文化を聞いてなおす」登呂遺跡発見40周年シンポジウム資料
- 向坂剛二 1985 「登呂の土器の特色と他地域との関連」「登呂遺跡と弥生文化」
- 向坂剛二 1987 「考古学的実験による静岡県の地域区分」「静岡県史研究」3
- 向坂剛二・水房 黒 1968 「有東式土器」「遠江考古学研究」2
- 望月幹夫 1975 「IV. 各地の調査結果 (1) A地区 №1 遺跡 2. 弥生時代から古墳時代初頭の遺物」「厚木バーカシティ開発地内埋蔵文化財分布調査報告書」厚木バーカシティ開発地内埋蔵文化財発掘予備調査印*
- 森本六郎 1934 「下総須和田の土器について」「人類学雑誌」49-10
- 森本六郎・小林行雄 1938 「弥生式土器聚成図録 正編」
- 山内清男 1940 「日本先史土器図譜 第V編 弥生式土器」「[1967再刊]」
- 弥生時代研究プロジェクトチーム 1996・97 「弥生土器の容量について」1・2『かながわの考古学 研究紀要1・2*
- 八幡一郎 1930 「武藏国太尾発見の遺物」「考古学」1-5・6*
- 八幡一郎 1931 「石器出土の弥生式遺跡調査録」「考古学」2-3*
- 八幡一郎 1934 「下総國須和田の弥生式土器」「人類学雑誌」49-9
- 吉田富夫 1938 「遠江国及び駿河国の弥生式文化」「考古学」9-1

文献2 神奈川県内の報告書掲載論文

- 石井克己 1974 「伊勢原市白根遺跡出土の弥生式土器と石器」「愛名鳥山」愛名鳥山遺跡発掘調査会
- 石井 実 1980 「溝柵の成果と課題 弥生時代」「折本西原遺跡」横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 岡本 勇 1975 「成果と問題点 弥生集落と土器」「持田遺跡発掘調査報告」
- 宍戸信悟 1991 「調査結果のまとめ 弥生時代中期後半の遺構と遺物」「砂田台遺跡Ⅱ」神奈川県立埋蔵文化財センター 調査報告20
- 杉山津久 1970 「山ノ神遺跡周辺の弥生中期の遺跡とその出土資料」「小田原市文化財調査報告書」3
- 谷口 肇 1999 「№1-A 地点の出土遺物について」「泡池遺跡群X」かながわ考古学財團調査報告46
- 松本 実 1988 「折本西原遺跡の弥生集落」「折本西原遺跡-1」折本西原遺跡調査团

文献3 神奈川県外の基準資料報告書および報告書掲載論文抄

〈千葉〉

- 新井和之ほか 1982 「相ノ谷遺跡」「北緯線」
- 福葉昭智 1994 「尾畠台遺跡」「大竹遺跡群発掘調査報告書」君津都市文化財センター発掘調査報告書91
- 大崎紀子 1992 「小谷遺跡発掘調査報告書」君津都市文化財センター発掘調査報告書72
- 大澤 孝 1991 「六崎貴舟台遺跡発掘調査報告書」「印旛郡文化財センター発掘調査報告書」28
- 大澤淳史・小川博和 1991 「安房坂塚塚」
- 大村 直 1990 「市原市市台古跡」市原市文化財センター調査報告書44

- 乙益重隆編 1980『上總菅生遺跡』中央公論美術出版
- 甲斐博幸ほか 1996『常代』君津都市文化財センター発掘調査報告書112
- 柿沼修平 1973「星久喜遺跡」「京葉」
- 菊池義太郎ほか 1979「千葉市城の堀遺跡」
- 倉田芳郎編 1978「千葉・南總中学遺跡」「先史」10
- 小高春雄ほか 1983「道庭遺跡」
- 小高春雄ほか 1993「滝ノ口向台遺跡・大作古墳群」千葉県文化財センター調査報告書232
- 斎木 勝ほか 1974「市原市菊間遺跡」
- 佐伯秀人 1992「前三舟台遺跡」君津都市文化財センター発掘調査報告書82
- 実川 理・浜崎雅仁 1992「美生I」君津都市文化財センター発掘調査報告書71
- 末武直則 1988「押子の神城跡発掘調査報告書」印旛郡市文化財センター発掘調査報告書24
- 田中清美・鈴木英啓 1981「唐崎台」
- 浜崎雅仁 1996「高砂遺跡」君津都市文化財センター発掘調査報告書113
- 三森俊彦ほか 1973「大森第2遺跡」「京葉」
- 三森俊彦ほか 1974「市原市大根遺跡」
- 矢戸三男ほか 1975「阿玉台北遺跡」
- 《東京》
- 菊池義次ほか 1955「道灌山遺跡」荒川区役所
- 小林青樹ほか 1995「大里東遺跡発掘調査報告書」
- 鈴木直人ほか 1996「飛鳥山遺跡」東京都北区教育委員会
- 高山 優・泉美香子 1981「土器 弥生時代」「伊祖子貝塚遺跡」
- 《埼玉》
- 齋藤利夫ほか 1984「明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書35
- 鈴木季之ほか 1991「代正寺・大西」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書110
- 瀧瀬芳之ほか 1993「上敷免遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書128
- 谷井 鹿ほか 1975「台の城山遺跡」朝霞市教育委員会
- 中島 宏ほか 1984「池守・池上」埼玉県教育委員会
- 増田遼朗ほか 1972「馬込・平林寺遺跡発掘調査報告」「加倉 西原 馬込 平林寺」埼玉県遺跡調査会報告14
- 柳田敏司ほか 1982「埼玉県史 資料編2」
- 吉川國男ほか 1976「埼玉県土器集成4 緩文晚期末葉～弥生中期」埼玉考古学会
- 吉田 稔ほか 1991「小敷田遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書95
- 《静岡》
- 芦川忠利ほか 1999「長伏六反田遺跡」
- 内藤 晃・市原寿文編 1972「浜名郡新居町一里田遺跡調査概報」新居町教育委員会
- 中野國雄 1986「矢崎遺跡第1次発掘調査出土土器図版集解説」清水町教育委員会
- 中野國男・秋本真澄 1998「清水町史 資料編II 考古」
- 中山正典・中金本賛治 1994「湘名遺跡III」静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 平野吾郎ほか 1983「有東遺跡」静岡県教育委員会
- 《その他》
- 細谷正策・尾花源司 1987「御新田遺跡・富士前遺跡・ヤツチヤ遺跡・下り遺跡」静岡県埋蔵文化財調査報告85

横穴墓の研究（8）

—形態・構造面からの検討を中心に—

古墳時代プロジェクトチーム

・金目川流域（平塚市西部）

（1）地理的位置と環境

平塚市は県央南端に位置し、北側には北金目台地と伊勢原台地を認め、南側には相模湾を臨む。また、東部には金目川を境として相模平野が広がり、西部には大磯丘陵が起伏する。平塚市の東端には相模川が流れる。今回は平塚市域における金目川流域に地域を限定して検討対象とした。

（2）分布の状況

平塚市域における横穴墓の分布は大きく二ヶ所に見られる。一つは北側の伊勢原台地南端に認められる山王台横穴墓群と城山横穴墓群であり、もう一つは西側の金目川中流域右岸、大磯丘陵に認められる多数の横穴墓群である。この大磯丘陵一帯は平塚市域に限らず、県内でも分布密度の高い地域である。これら横穴墓群の中でも長い期間築造され、また数多くの横穴墓が確認されている万田八重窪横穴墓群を例として地域の傾向をみていくこととする。

（3）万田八重窪横穴墓群

万田八重窪横穴墓群は大磯丘陵の東端に位置し、眼下には相模平野が広がる。丘陵の東向き斜面には万田熊ノ台横穴墓群や根坂間横穴墓群、北向き斜面には、源水谷横穴墓群や入ノ山横穴墓群など数多くの横穴墓群の分布が見受けられる（註1・2）。

本横穴墓群は進和学園を挟んで南北に2群に分かれている（第1図）。1898年に八木英三郎、水谷乙次郎による踏査（註3）、1975（註4）、1976年（註5）には平塚市教育委員会による現況調査、また、1981年には万田八重窪、宮の入横穴墓群発掘調査団（註6）、1994年には平塚市遺跡調査会によって調査（註7）が行われた。これまでの調査では約60基が確認されているが、未調査分も含めるとまだ増加すると思われる。

本横穴墓群は南北に2群となっており、現在確認されているだけで北側に9基（以下、北群）、南側に約50基（以下、南群）が認められる。6世紀後半から8世紀前半までの間に築造されており、南群は北群よりやや遅れての築造と推察される。標高は約40~60mと幅広く分布している。形態はやや偏りがあり、方形（II類）や不整形（IV類）は見受けられない。以下、その解説である。

①台形（I類） 万田八重窪横穴墓群では7基が確認されている。立断面はアーチ形（a）を呈し、前壁直角型（Ia1）は北群第4号と南群第42号の2基である。前壁傾斜形（Ia2）は南群第44号にみられ、南群第34号は前壁痕跡化（Ia3）している。また、長台形を呈する横穴墓は南群第46号、第48号、第50号の3基が確認されており、いずれも前壁痕跡化（Ib3）している。南群第46号と第50号については横断面に平天井が認められた（d）。平面長台形で前壁が頭著に残る例は認められなかった。

②方形（II類） 万田八重窪横穴墓群では確認されていない。しかし、平塚市域においては万田熊ノ台横穴墓群第19号（IIb1）と高根横穴墓群第19号（IIa1）、根坂間横穴墓群第1地点第4号墓（IIb1）、第7号墓（IIb1）などが確認されている。いずれも前壁が直角形を呈し、万田熊ノ台横穴墓群第19号と高根横穴墓群第19号は天井面がドーム形（A）を呈する。立断面は全てアーチ形（a）である。

③般形（Ⅲ類） 万田八重塗横穴墓群では16基が確認されている。北群第5号、第8号、南群第1号、第33号、第35号、第37号、第39号、第47号には付帯施設（棺座）が認められる。付帯施設を有さない横穴墓も多数確認されており、南群第18号、第36号、第38号、第40号、第41号、第43号、第45号、第49号などが挙げられる。本横穴墓群に限らず大磯丘陵全体で般形（Ⅲ類）は最も多い形態である。

④不整形（Ⅳ類） 当該地域では確認例がないが、西湘地域では見受けられる。

遺物は、南群第46号から7世紀前後と思われる須恵器坏、南群第39号からは7世紀前半と思われる須恵器坏、南群第1号墓からは7世紀中葉と思われる土師器鉢、南群第41号からは8世紀まで下るものと思われる須恵器長頸瓶などが出土している。しかし、南群第36号墓からは7世紀中葉から後葉と思われる須恵器平瓶や8世紀前葉と思われる高台付坏が出土しており、追葬の可能性が考えられる（註8）。

以上の結果をふまえて、本横穴墓群は以下①～④の変遷をたどる（第2図）。

①前壁が 110° 未満で顕著に残り、平面形態は方形を呈する。天井部はドーム形を初現とする。この特徴は同じ大磯丘陵に存在する万田熊ノ台横穴墓群第19号と高根横穴墓群第19号に認められるが、万田八重塗横穴墓群では平面方形及び天井部ドーム形は認められない。前壁を 110° 未満で残す例では平面形態は台形、縦断面では天井部無前壁となる（北群第4号、南群第42号）。

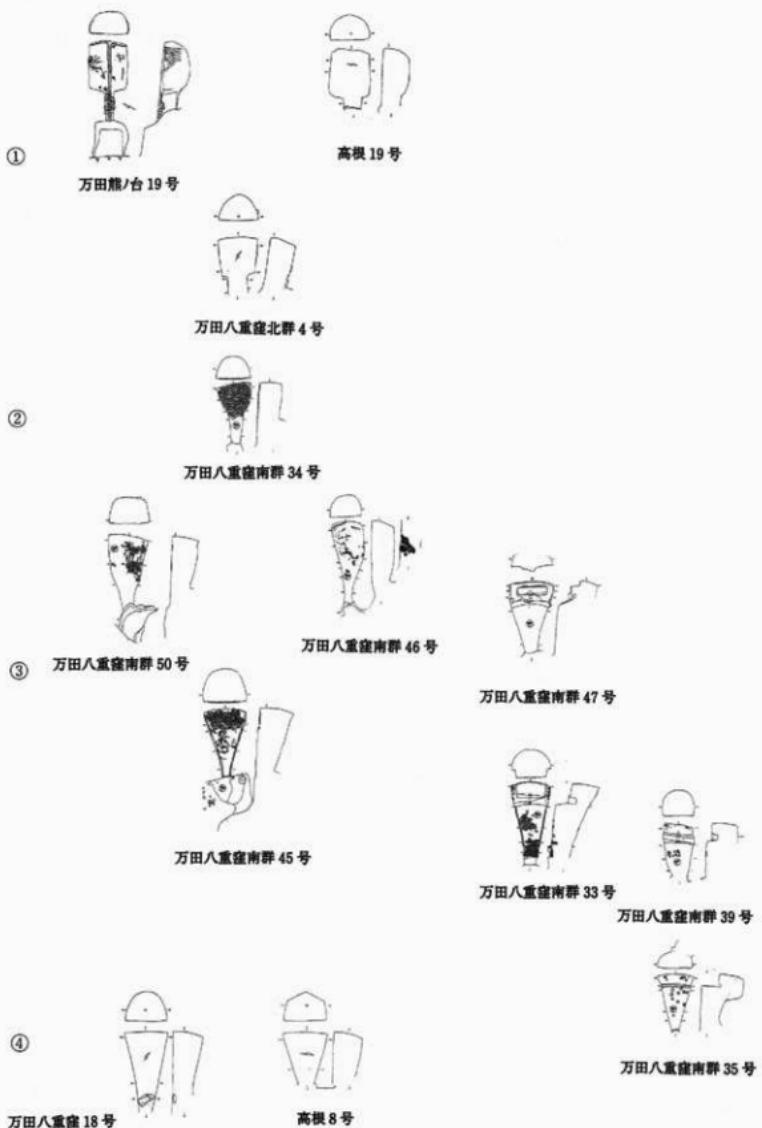
②平面形態は台形を呈する。縦断面はほとんどが天井部無前壁であり、前壁角は 110° 以上（南群第44号）と崩れ始め、時期をおかず前壁は痕跡化する（南群第34号・南群第46号・南群第48号・南群第50号）。

全時期を通して天井部はアーチ形が主流であるが、②段階にのみ平天井をもつ横穴墓が2基のみ存在する（南群第46号・南群第50号）。

③平面形態は般形へと変わる。前壁は痕跡が残る。万田八重塗横穴墓群ではこの段階で付帯施設である造付



第1図 万田八重塗横穴墓群造構配図



第2図 金目川流域の横穴墓の変遷 ($s = 1/2$)

石棺（北群第5号・南群第33号・南群第39号・南群第47号）や高棺座（北群第8号・南群第35号・南群第37号・南群第39号）が造られる始める。付帯施設を伴う横穴墓が数多く造られている一方で、付帯施設を伴わない横穴墓も併行して多く造られ続ける傾向が見られる。

④平面形態は③段階に統一する摺形であるが、棺座が造られなくなる。この段階から前壁が無くなり、玄室と羨道の区分も消失する。

全体的に天井部の遺存状態は悪く、縦断面の明確な形態を捉えられる状態の良い例が少なかった。そこで、平面形態の変遷を基準とした区分を試みた。大分類の流れでは、方形（Ⅱ類）→台形（Ⅰ類）→摺形（Ⅲ類）という変移が確認できる。不整形については当該地域では確認されていないのでここでは取り上げないが、大磯丘陵を含む西湘地域の傾向を参考とするならば、摺形（Ⅲ類）の次段階に現れるものと思われる。付帯施設については、床面敷磚や排水溝などを備えたものを10基確認したが、複式構造は認められなかった。時期が下るにつれて簡略化していく傾向が看取された。

横断面に家形（切妻形）天井形を呈する横穴墓を1基確認できたが、平面形態は摺形であり、縦断面も天井無前壁といった造りであった（高根第8号）。棺座等内部施設は確認されなかった。これまで横断面家形天井形は古相とされてきたが、高根第8号の例は8世紀頃まで下るものと思われる。

以上の見解からおおまかに年代観を捉えるなら、第1段階は6世紀後半から、第2段階は7世紀前後、第3段階の平面摺形への移行は7世紀中葉頃、無前壁となる第4段階は8世紀に入ってからの発造と思われる。

付帯施設は、万田八重窪横穴墓群では平面形態が方形や台形を呈する横穴墓では確認されていない。摺形へと移行してから造付石棺が認められ（南群第33号・南群第47号）、高棺座は高根第21号で確認されているものの、盛んに造られ始めるのは7世紀の終わり頃からである。

（4）横穴墓の地域的特徴

以上の分析から、万田八重窪横穴墓群を中心とした平塚市域の横穴墓の地域的特徴を挙げる。

①平面形態の台形及び方形を初現とし、前壁は徐々に痕跡化が進む。7世紀中葉頃には摺形が盛行し、終末期まで造られる続ける。

②玄室と羨道の区分は明確でない形態が多く、平面形態は摺形が主流である。

③横断面平天井形は天井部を残す事例が少ないとあり、確認できるのは万田八重窪横穴墓群における、平面摺形に移行する直前の2基（南群第46号・南群第50号）のみである。横断面はアーチ形が主流である。

④横断面ドーム形は平塚市域では2基のみ（万田熊ノ台第19号・高根第19号）確認されているが、万田八重窪横穴墓群では認められない。無前壁平天井形が主流である。

⑤金目川流域で家形（切妻形）天井形は1基のみ（高根第8号）認められる。西湘地域ではドーム形より家形天井形を古相としているが、万田八重窪横穴墓群では8世紀頃まで下るものと思われる。

⑥棺座が設けられている横穴墓が数多く見受けられる。平面形態が摺形に移行する時期の前後に造付石棺が造られ始め、やがて高棺座が盛行する。併行して、付帯施設を伴わない横穴墓も造られ続ける。

⑦平面形態不整形や、複室構造は見受けられない。

（川島信乃）

・湘南地域（茅ヶ崎市・寒川町・藤沢市・鎌倉市・逗子市・横浜市南西部）

（1）地理的位置と環境

湘南地域とは、広義には神奈川県南部の相模湾に面する一帯を指す地域称であるが、ここで対象としたのは現在の茅ヶ崎市・寒川町・藤沢市・鎌倉市・逗子市及び横浜市南西部で、古代における高座郡・鎌倉郡の南部に相当する。

茅ヶ崎市から藤沢市にかけては海岸から内陸に約5kmに及ぶ湘南砂丘帯が形成されており、その背後には相模野台地が展開している。一方鎌倉・逗子市域では、市中心部を除き砂丘が内陸部まで及んでおらず、丘陵が海岸まで迫る様相を呈している。主要な河川としては、藤沢市東部を南北に貫流する境川が挙げられる。

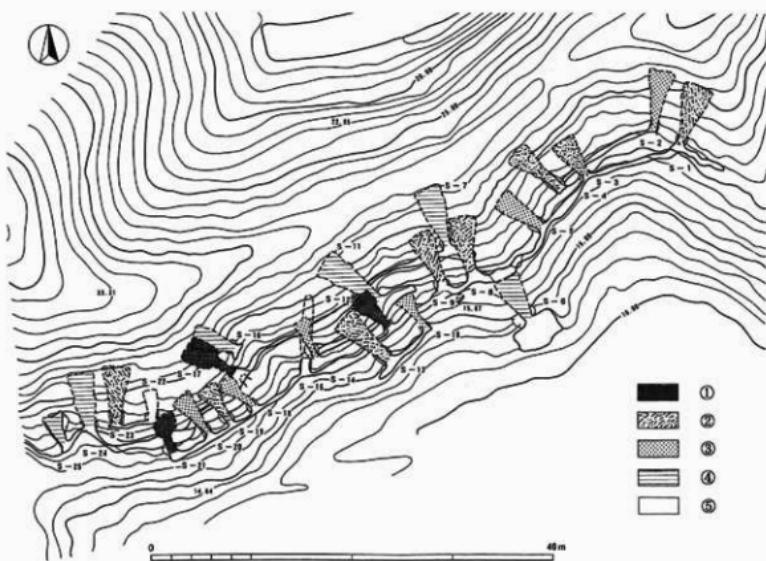
（2）分布の状況

この地域は神奈川県内でも横穴墓の分布が極めて濃密な地域の一つであり、主として藤沢市東部を南流して相模湾に注ぐ境川流域左岸以東の藤沢市・鎌倉市・逗子市の海岸沿いの丘陵に、より濃密に分布する傾向が顕著である。また内陸部においては、境川の支流である柏尾川流域の鎌倉市北部及び横浜市栄区を中心に、やや密な分布が伺える。なお、茅ヶ崎市北部及び寒川町の丘陵地帯における分布は比較的散漫である。

今回は当該地域内でも最も分布の濃密な、境川下流域の藤沢市東部の通称片瀬山丘陵に位置する川名森久地区横穴墓群（註9）を中心検討することとした。

（3）川名森久地区横穴墓群について

江ノ島の対岸から北約2.5kmにかけての境川左岸には、標高50~70mの起伏に富んだ通称片瀬山丘陵が連なっている。この丘陵、とりわけその北縁には数多くの横穴墓が存在することが知られており、古く昭和



第3図 川名森久地区南斜面横穴墓群遺構配図

9年(1934)にその一部が報告され(註10)、昭和40年代以降から開発に伴う発掘調査が度々実施されている。ここで検討を加える川名森久地区横穴墓群は、片瀬山丘陵では最大規模の調査で、昭和63年から平成5年にかけての長期の調査により59基の横穴墓が検出され、一部を残しその成果が報告されている、59基の横穴墓は、その立地からほぼ5つの群によって構成されていると考えられるが、限られた紙面でこれらのすべてを個別に検証するにはいささか無理があるので、ここでは最も大きなまとまりを持つ南斜面(S)横穴墓群を取り上げることとする。

南斜面横穴墓群は、24基のまとまりをもって同一斜面上に東西約75mの範囲に展開している。この群は、立地及び主軸方位の差異から、さらに2~5基の小単位の支群によって成り立っていることが指摘できそうである。すなわちS-1・2、S-3~5、S-6~9、S-10~14、S-16・17、S-18~21、S-22~25の7支群である。各支群はその発現から終末に至るまでの過程において、構築の時期差から必ずしも歩調を合わせた形態の変遷をたどっているわけではない。なお、S-15は第二次世界大戦中に構築された防空壕である。

群中の24基の横穴墓を総体的に検討すると、その形態は大きく5分類が可能である。その新旧の流れとしては、玄室と羨道の区分の明瞭な定形した個体から不明瞭な簡略した個体。内部施設としての造付石棺の導入とその簡略化、さらには高棺座の出現として把握することが可能である。以下に、発現から終末まで新旧順に①~⑤として形態区分の根拠を示した。

①玄室と羨道の区分が明瞭で、玄室床面の平面形態は・(方形ないしは長方形)。縦断面はB2(前壁の痕跡をとどめる)及びC(無前壁)。横断面はa(アーチ)。S-12・17・21の3基がこれに該当する。なお、本横穴墓群の丘陵を隔てた西約250mには、昭和53年(1978)に調査された川名新林右西斜面横穴墓群(註11)が存在し、第2号より環頭大刀が出土した事で知られるが、この横穴墓もこれと同様の形態を呈する。

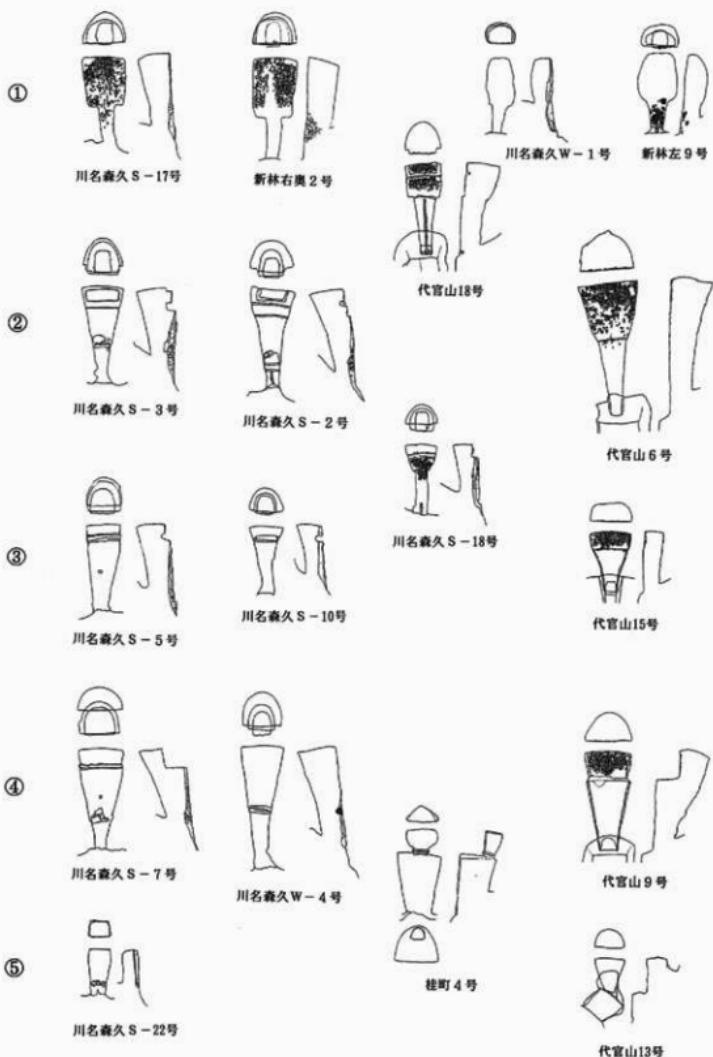
②玄室と羨道の区分が不明瞭で、床面の平面形態は・(撮形)。縦断面はC(無前壁)。横断面はa(アーチ)。①に比し規模がやや大型化する。付帯施設として奥壁に接して精緻な構造の造付石棺を有する。最も数が多くS-1・3・4・8・9・13・19・23の8基がこれに該当する。なお本横穴墓群では認められなかつたが、同じ藤沢市の代官山遺跡(註12)等においては、これに先行する造付石棺が認められ、玄室と羨道の区分が明瞭で、縦断面に前壁を有する個体が存在する。

③上述した②とはほぼ同様の形態であるが、造付石棺の構造に顕著な退化・省略化が窺える。S-2・5・10・18・20の5基がこれに該当するが、S-18については玄室と羨道の区分が顕著である。

④付帯施設として造付石棺が変化した高棺座が設けられる。奥壁に接した天井部の高さが増し、開口部に向かって急角度で高さを減する。それ以外は②③とはほぼ同様。6・7・11・16・24・25の6基が該当する。⑤玄室と羨道の区分が認められず、床面の平面形態は・(撮形)。縦断面はC(無前壁)であるが天井はほぼ水平に近い。横断面はd(平天井)。S-22わずか1例のみで極めて小規模。

なお、これら5分類の範疇外の異形の横穴墓が1基存在する(S-14)。小形ではあるが玄室と羨道の区分が明瞭で、造付石棺は認められないが平面形態はS-18に近似しており、ここでは③の範疇としてとらえた。

さて、横穴墓の構築時期であるが、当然ながら出土遺物は追跡時のものが多く含まれており、5分類したとおりに新旧が推移していることを立証することはできない。各時期の最古の遺物の概略は、①ではS-17より7世紀前半の土師器壺が、②ではS-3より7世紀中頃の須恵器フラスコ形瓶が、③ではS-5より第



4図 湘南地域の横穴墓の変遷

り7世紀中頃から後半にかけての土師器坏が、④からは時期比定可能な遺物は認められず、⑤からの出土は皆無であった。

以上のことから考慮した年代観は、①を7世紀前後、これは先に触れた環頭大刀の出土した川名新林右西斜面横穴墓群第2号を掲げ所としている。②については7世紀前半、③を7世紀中頃、④を7世紀後半、⑤を8世紀前後として想定している。

検討の対象とした、川名森久地区横穴墓群南斜面横穴墓群においては、このような変遷過程を示すようであるが、広く湘南地域を概観してみると、これらとは異なる様相の横穴墓が存在する事実がある。まず、玄室と羨道の区分が明瞭で、玄室床面の平面形態は、(不整形で胴張り)。縦断面はA(ドーム)。横断面はa(アーチ)を呈する類いで、川名森久地区横穴墓群西斜面横穴墓群で2基、川名新林横穴墓群で3基が確認されている。また逗子市久木5丁目横穴墓群(註13)においても同様の事例が認められる。川名新林横穴墓群における事例から考えて、この類いは①に並行して存在したようである。しかしながら、この床が胴張りでドーム天井を有する横穴墓の、後に続く明確な系譜をたどることはできない。次に、玄室と羨道の区分がなく、床面の平面形態は、(撮形)。縦断面はC(無前壁)。横断面はa(アーチ)を呈する横穴墓で、周辺の諸遺跡においてごく普遍的に認められる形態である。②~④から造付石棺及び高棺座を取り除いた形態で、②以降終末に至るまで続いた系譜と考えられる。最後に、棺室構造を有する横穴墓の存在である。この横穴墓は分布域が極めて限定され、横浜市南西部を中心、鎌倉・逗子市域にも認められる。分布の中心は、境川の支流である柏尾川のさらに支流の横浜市栄区の鶴川流域で、この地域では高棺座と併存するが、時期的にはやや遅れて出現する傾向が窺える(註14)。したがって、棺室構造を高棺座の変種としてとらえることも可能である。その他にも個別的には様々な形態を有する横穴墓が存在するが、湘南の地域性を論ずるにあたっては上述した形態が主流となる。

(4) 横穴墓形態の地域的特徴

- ・発現期及びそれ以降家形構造は全く認められない。
- ・長方形ないしは方形の玄室を有し、玄室と羨道の区分が明瞭な形態を発現とする。ただし天井の前壁はさほど明瞭ではない。
- ・これと並行して、床面の平面形態が胴張りでドーム天井を有する横穴墓が存在する。ただし、この形態は後に継承されることなく消滅する。
- ・発現期の次の段階で突然造付石棺が出現し、またこの段階で横穴墓の数が飛躍的に増大する。造付石棺はほとんどが奥壁に接して構築され、側壁に接する例は極めて稀である。造付石棺は次第に簡略化へと向かう。・造付石棺の簡略化の一つの帰結として、高棺座が構築されようになる。高棺座はこれ以降この地域での主流を成す。
- ・造付石棺及び高棺座を有することのない、別の流れが終末まで継続する。
- ・ごく限定された地域に棺室構造を有する横穴墓が存在し、これは高棺座を有する横穴墓と併存するが、後出する要素が窺える。
- ・終末期の様相は不明瞭であるが、小形化、簡略化の傾向が窺える。

(上田 篤)

・鶴見川流域（横浜市）

(1) 地理的位置と環境

検討対象とする鶴見川流域の範囲は、多摩丘陵を北西から南西に流れる鶴見川中、上流域およびその支流である早瀬川、谷本川、恩田川流域とし、横穴墓はそれら河川の標高20~30mの丘陵性台地の傾斜地に構築されている。旧国名の範囲では武藏国に属し、鶴見川流域付近は都筑郡に該当する。

(2) 分布の状況

上流の谷本川流域では検討対象とした21基の横穴墓から構成される市ヶ尾横穴墓群を始めとして、小黒谷横穴墓群など、恩田川流域では検討対象とした25基から構成される熊ヶ谷横穴墓群などが分布する。中流域でも21基から構成される東方横穴墓群、15基以上が確認されている折本横穴墓群、8基が調査された新吉田町四ッ谷横穴墓群などが所在し、横穴墓の構築密度が比較的濃い地域に該当する。

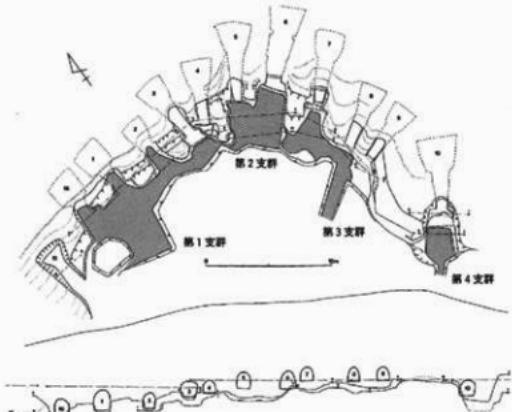
(3) 市ヶ尾横穴墓群と熊ヶ谷横穴墓群について

本地域で横穴墓の内部構造と群構成の形成過程の時期の相対的な変化を把握できる検討条件を満たす横穴墓群のうち、ここでは市ヶ尾横穴墓群と熊ヶ谷横穴墓群の2つ横穴墓群のあり方をみてみることにする。

市ヶ尾横穴墓群は12基からなるA群、7基から構成されるB群、単独で横穴墓が発見されたC群から構成される。この横穴墓の調査は、横浜市史編纂の予備調査として昭和31年に調査され、群構成全体を発掘したさきがけとなる学史に残る発掘調査であるとともに、漢道部のみならず前庭部の墓前坡までを明らかにした横穴墓調査の方法に多大な影響を与えた調査であった（註15）。

この横穴墓群の変遷を考える場合、出土遺物の型式的検討による相対的な変遷過程を検討する方法があるが、出土量が少なく、さらに追葬などにより出土遺物と構築年代が必ずしも一致しない例がみられ、方法的に限界がある。

こうした点から本横穴墓群の検討では、群を形成する横穴墓群が数基の単位で最終的に前庭部が一定の範囲に広がる現象に着目した。漢道部と前庭部の構築状態を仔細にみると、漢道部から前庭部までの位置の関係で前庭部が奥に造られるもの、隣接する前庭部の一部を破壊して造作されるものがあり、これらの状態を



第5図 市ヶ尾横穴墓A群

手懸かりとして、横穴墓の構築の先後関係はある程度追求できると考えられる。

前庭部の造作に関連して市ヶ尾横穴墓群A群では、4つの支群にとらえることができ（第5図）、第2支群の場合では前庭部がもっとも奥に造られたA 6号から西側にA 6号の前庭部の一部を破壊したA 5号それに続き、さらにその西側のA 4号はその西側に展開する第1支群のA 3号の前庭部との間に挟まれて、前庭部が明瞭に構築できない状態となっている。こうした点から前庭部の構築がもっとも明瞭なA 4号からその一部を破壊するA 5号、そしてA 4号への構築順が推測できる（第5図）。

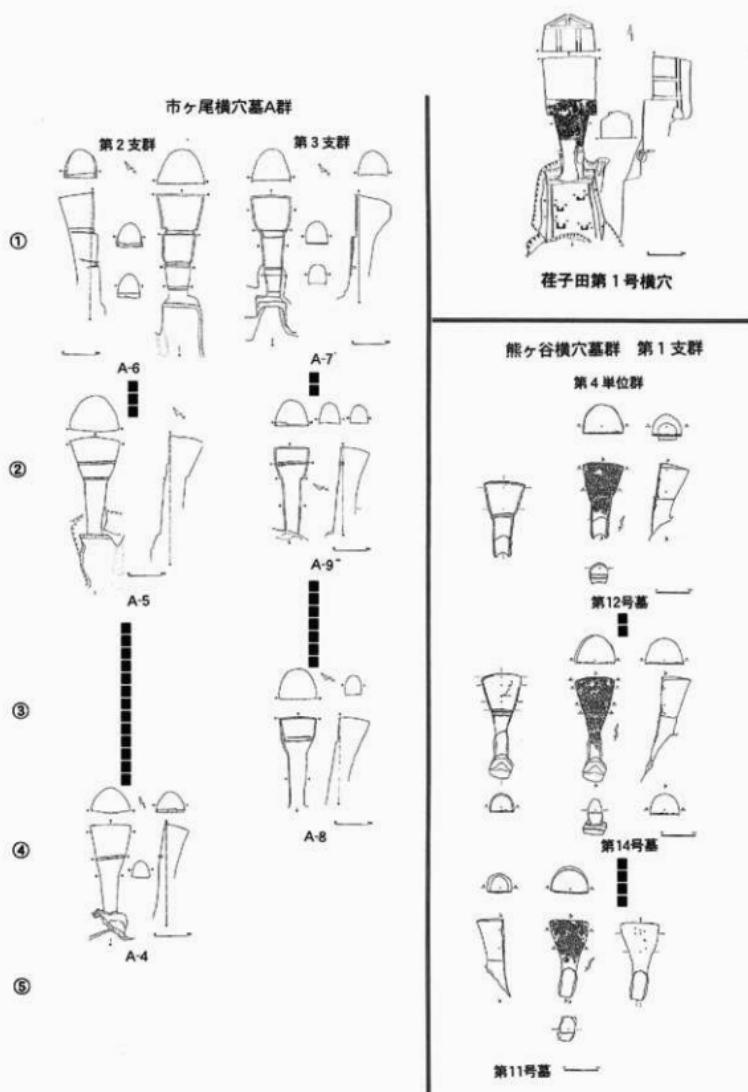
東側の3基から構成される第3支群でも、前庭部がもっとも奥に造されたA 7号からそれより全面に前庭部が広がる東側のA 9・8号へと展開されていることが理解される。A 9・8号の前後関係はA 9号が先行するA 7号との一定を保って構築されていること、東側の前庭部の範囲が比較的明瞭である点からA 8号よりも先行していることが考えられる（第5図）。

こうした前庭部の構築状態から考えられる前後関係と横穴墓の内部形態を比較すると、ここで検討した第2・3支群のもっとも古い形態は平面台形（I類）で、A 6号は複室構造をもち、A 7号は緩断面の玄室天井部が平天井となり、後道部との境は傾斜による前壁を有する形態となり、いずれも古相の様相がみられる。それらに続く横穴墓は平面台形で、前壁の屈曲する角度が直角に近い形態から 110° を境にしだいに形態化する形態の流れをその過程でみることができ、最終的にはA 4号にみるような平面撥形（III類）に至っている。

これら横穴墓の内部構造の変遷と年代の関係は、最古段階を①として、その初現を6世紀後葉とすると、平面台形形態が残存する段階が②となり7世紀前葉、平面撥形でわずかに玄室と後道部との境に屈曲を残す形態が出現するとともに台形形態が混在する段階を③として7世紀中葉、撥形主体となる段階を④として7



第6図 熊ヶ谷横穴墓群第1支群



第7図 菊見川流域の横穴墓の変遷

世紀後葉、それ以降の7世紀末段階を⑤とした。

熊ヶ谷横穴墓群は25基の横穴墓が調査され、南向きの斜面に2支群が構築されたと考えられている。この調査では明確な目的意識をもった調査をもとに出土遺物、立地などから横穴墓の内部構造の詳細な変遷過程の検討がなされている（註16）。

ここではその成果を参照にして、第1支群とした中で、群内で標高や位置関係から5単位に横穴墓がグループ化され、そのうちの第4単位群とされている4基の横穴墓群の変遷をみていくことにする。この単位群でもっとも古い段階の横穴墓は7世紀中葉の土器が出土した第12号で、つぎに間隔をおいてやや下位に構築された第14号、さらに第12・14号の間に第11号、第13号の順に構築されたと考えられている（第6図）。

これらの形態は第12号は平面方形（I類）で前壁痕跡化するもののわずかに屈曲が残り、つぎの第14号の段階では玄室部と羨道部に屈曲だけが残る平面摺形（III類）となり、第11号では小形化した摺形になっている。第11号と第13号は第13号の玄室がやや小形化しているが、平面形態などでは大きな差は見いだしがたく、構築された年代は一部の時期併行する状態であったことが考えられる。

こうした点から熊ヶ谷横穴墓群は先の市ヶ尾横穴墓群の段階に比較すると、市ヶ尾横穴墓群の①とした最古段階のものはみられず、②の台形形態の段階に出現する。しかし、この台形形態も羨道部との境でわずかに屈曲がみられる程度で、後出的な要素がみられる。これに続く、第14号はほぼ③に併行し、第11号と第13号は④から⑤にかけての構築時期であると推測される。

（4）横穴墓形態の地域的特徴

- ・最古段階以降の平面形態では台形基調のものが出現し、摺形へと羨道部との境の前壁の残存状況、屈曲化をもって変遷し、摺形は小形化する流れがみられる。
- ・平面台形形態が定着した以降の7世紀前葉以降の摺形への内部構造の変遷のあり方は、内部施設や規格の点などの細部違いはあるが、おおまか流れとしては他地域とほぼ同様である。
- ・本地域の特徴として、最古段階の6世紀後葉で平面台形形態で、複室構造の形態、断面平天井の形態などの6世紀後半段階から7世紀にかかる古墳の横穴式石室形態に類似する構造をもつものがみられる。
- ・最古段階の要素はいずれも共通の要素として横穴墓に取り入れられており、横穴墓の構築に際してそれぞれの要素として取り入れられており一様にみられるものではなく、この地域の初期の横穴墓の特徴といえる。
- ・また荏子田第1号横穴のようにわずか1例であるが、他地域でも少数例みられた古相と考えられている家形の構造をもつ横穴墓もみられる。
- ・家形構造も古墳の石室構造の要素とともに、玄室形態、縦断面形などの他地域の横穴墓の構造と比較して古相の要素を有するが、出土遺物などからの決定的な証左はない。

（長谷川 厚）

・横穴墓の地域的検討から

横穴墓の研究（6）において、出土土器から見た形態・構造面の変遷、各形態の数値的検討、数量的分析など、横穴墓様相のとりまとめを行った。そこで各分析をもとに地域間相互の把握に向け、（7）・（8）で県内を6つの地域に大別し各地域の導入から定着、特徴などを追及してきた。その地域的検討をベースとし、先の横穴墓の研究（1）で予察的に検討された所産時期、各横穴墓形式導入に伴う分布及び時期的な様相などを概観しておきたい。ここで使用する段階（i～vi）は、各地域的検討に基づく年代感から新たに新設したもので、およそi段階が6世紀後半、iiが600年を前後する時期、iiiが7世紀前半、ivが7世紀中頃、vが7世紀後半、viが7世紀末～8世紀としている。

神奈川における横穴墓の時間軸概観（第8図・第1表）

横穴墓の導入：相模において、その導入は単一ではなく、大きくはi段階、沿岸部に面した西湘地域と三浦半島地域に先鞭がつけられる。その後ii段階以降、沿岸部での継続をみながら、内陸部へと展開していく状況が看取される。優越性を持つ導入形態では、玄室の平面形で前壁が明瞭に存在する方形（II類）を志向するものが多い。その他追隨する内陸部の状況としても、玄室平面形、縱断面形共に前壁が存在するもの（I・II類、B類）が多い。南武線に属する鶴見川流域でもi段階での導入が指摘され、形態でも沿岸部同様、前壁を持つ玄室平面形が採用されるが、地域的な特徴ともなる複室を呈するもの（I・IIc類）が存在する。他、家形の存在も認められるが、出土遺物という時間軸からの確証は得られていない。

横穴墓の定着：およそiii段階の時期を中心としては、玄室平面形における前壁痕跡化（前壁形態3）の横穴墓が少量ながらも存在する。それ以降のiv段階を以て撮形（III類）が主体となり、總体として数量的増加もみせる。併行してドーム形（A類）を呈す横穴墓は稀少となり、各地域を通じてもその傾向の相違はなく、県内での均一化がみられだす（註17）。県央地域では玄室規模として、初現段階から継続する通有な奥壁幅を持つものと、この期以降や幅を減ずる横穴墓の併存が確認される。

横穴墓の終息：V段階においても數的な減少をふまえながら、なおも撮形（III類）の優勢に変化はない。鶴見川流域や湘南地域などでは撮形が主体となる以降、vi段階を中心に小型化の傾向が指摘される。いわゆる小型横穴墓（IV類）では家形と同様に土器の出土が稀少であり、その存在が終息に向けた流れであるのかは判別しがたい。湘南地域では付帯施設の状況などを勘案すると、この時期として首肯されるものも存在する。

神奈川における横穴墓の地域的特徴と相互の様相

付帯施設の状況：湘南地域でその流れを概観すると、iii段階からの撮形の存在と相俟って、精緻な造付石棺（4・5類）の築造が開始される。iv段階以降、造付石棺は退化し、省略化の進行が進む。その後、撮形の玄室天井は高さをひとくわ増し、玄室長の数値の変化は認められないことから、開口部へと急角度で高さを減ずることとなる。v段階を以て、造付石棺の簡略化から高棺座（註18）への変化が生じる。

隣接地域における付帯施設の状況では、西湘地域・金目川流域において数量的に減少するものの、造付石棺は存在する。しかし、明確な高棺座への変遷は窺えず、中心地域である湘南地域を離れてはその存在も希薄となる。県央地域では終始高棺座はほとんど存在せず、低位な棺座が主体となる。鶴見川流域でも導入段階から造付石棺は無く、三浦半島に至っては低位な棺座さえも存在しない。

横穴墓と石の利用：前庭部を中心とした石積みは、県央地域とした対象範囲を中心として分布しており、秦野・座間・海老名市にかけての比較的山間部寄りの地に偏りを持つ。その状況は多摩川中流域まで広範に捉えられ、反面、沿岸部を通過してもその存在は認められない。前庭部石積みの状況は施工箇所から3つの

段階	西湘地域	金目川流域地域	湘南地域	県央地域	三浦半島地域	鶴見側流域地域
I	攝谷寺谷 11号 	万田熊ノ台 19号 	川名森久 S-17号 		板本 1号 	市ヶ尾 A-6号
II	諏訪駒東 5号 	八重座 4号 	川名森久 S-3号 	下尾崎 5号 	高山 8号 	市ヶ尾 A-5号
III	諏訪駒東 6号 	八重座 34号 	川名森久 S-5号 	上栗原 3号 	高山 7号 	市ヶ尾 A-8号
IV	諏訪駒東 1号 	八重座 50号 	川名森久 S-7号 	下尾崎 19号 	高山 10号 	市ヶ尾 A-4号
V	諏訪駒西 13号 	八重座 45号 	川名森久 S-7号 	下尾崎 23号 	高山 17号 	市ヶ谷 11号
VI	↓ 	八重座 18号 	代官山 13号 	下尾崎 11号 	高抜 2号 	熊ヶ谷 1号

第8図 地域的検討に基づく相互間比較

第1表 地域的検討による特記事項一覧

段階	地域	特記事項	※カッコ内は付帯施設
i	西湘 金目 三浦 鶴見	<ul style="list-style-type: none"> 導入は6世紀後半以降。家形、ドーム形存在。以後も前庭部存在しないもの主体。 導入は6世紀後半頃。ドーム形は初現期のみ。 導入は7世紀後半。7世紀を前後する時期。初現期として家形存在。以後も前庭部は存在しない。(付帯施設すべての導入が7世紀後半頃で家形) 導入は7世紀後半頃で方形。地域的特徴となる複室、平天井や縱断面櫛鉤楕圓のものなど存在。玄室は横穴式石室に類似。(以後も造付石棺は存在しない) 	
	西湘 湘南 県央 三浦 鶴見	<ul style="list-style-type: none"> 家形、ドーム形とも圓滑化・形體化が始まる。 導入は7世紀前後、初期として方形、長方形存在。 導入は7世紀前半頃。家形、ドーム形存在せず。(以後も付帯施設は低位な棺座が主体的) 	
	西湘 湘南 県央 三浦 鶴見	<ul style="list-style-type: none"> (造付石棺の築造) 7世紀前半頃から玄室と廊道の区分不明瞭となり、縱形となる。縱斷面無前壁となり、大型化。(精緻な造付石棺出現) 7世紀前半で方形、ドーム形を志向するもの存在。 7世紀前半頃、台形の前壁変形化。 	
iv	西湘 金目 湘南 県央 三浦 鶴見	<ul style="list-style-type: none"> 7世紀中期以降縦形を中心とする。横穴墓の数量的増加。(造付石棺多いが、高棺座も存在) 7世紀中期頃となる。(造付石棺存在) 7世紀中期頃、(造付石棺退化、省略化進行) 後門部の石積みが特徴。黒羅帽の低いもの出現。 7世紀中期で方形志向の繋ぎり不整然なるかのら台形へ変化。 7世紀中期頃、縱形となる前壁を痕跡として残すもの出現。台形も混在。 	
	西湘 湘南 県央 三浦 鶴見	<ul style="list-style-type: none"> 7世紀後半頃からドーム形系構築穴墓が最終、縦形を主体とする横穴墓群の盛行。 縦形は奥壁での天井高さを出し、開口部へと急角度で高さを減らす。(造付石棺簡略化から高棺座へ変化) 7世紀後半で縦形の安置中心、數量的増加。 7世紀中期～後半、台形の前壁が既路的で残るタイプが存在。 7世紀後半頃、殿形主体。以降小型化の流れあり。 	
	西湘 湘南 県央 三浦 鶴見	<ul style="list-style-type: none"> 7世紀中期～8世紀に追出の痕跡はみられるが、数量的に減少。 8世紀前後、縱形平天井、小規模化。 8世紀の遺物出土もみられるが、数量的に減少。 8世紀前後で小型、縦形が存在。 	
vi	西湘 湘南 県央 三浦		

奉金目川流域：金目//三浦半島：三浦//鶴見川流域：鶴見

分類が可能で、a. 漢道側面、b. 前庭部廻門側のみ、c. 前庭部廻門側及び側面まで石積みがされるものと大別される。横穴墓の変遷に基づく検討からはii段階を初現として、およそa～cへの移行が看取されるが、段階以降は、近接した時期の所産として相前後する可能性も勘案される。その他、砾床を伴うものは山間部寄りのいわゆるローム層を基盤とする地域に多くみられ、人頭大の石を玄室内に配する（棺台）事例も比較的多い。閉塞が石による地域も同様であり、裸の入手が容易な地域が中心となる。

地域間の関係と類似性：古代の郡単位を主眼においていた6つの地域に大別して検討を行ったが、隣接する地域では相互に影響を与えており、西湘・県央地域が金目川流域を媒介とし、個性を持ちながらも共存する傾向が伺える。横穴式石室との形態的な類似性では、相模川流域における横穴墓は、伊勢原市域を中心に展開する盟主墳の石室（註19）に、やや時間的には後出するものの平面形態が類似するであろうか。付帯施設では、西湘地域や金目川流域、湘南地域など、造付石棺などの関連性から沿岸部での繁がりが把握される。玄室形態の推移が相互に類似する地域でも、山裾が緩やかに平地へ移行する県央地域などは、前庭部の長大なものが散見され、急峻な斜面の多い西湘地域の大磯丘陵や三浦半島では前庭部の存在する例はほとんどなく、前庭部に関しては地形的な制約が否めない。また、基盤層の堅固な大磯丘陵を中心とした地域のうち、玄室平面形が縱形（Ⅲ類）となるものに限っては、平面規模に対する高さが比較的低く構築される横穴墓が顕著に認められる。天井の崩落しやすいローム基盤の横穴墓などは、困難ながら縦断面という視点が必要となろう。三浦半島では、導入段階で西湘地域との関連性は想起されるものの独自の流れを持ち、相模においては三浦半島を除いて相互補完的な現象が把握される。また、南武藏に属する鶴見川流域では導入段階からその様相をえ、形態的には横穴式石室との類似性も指摘されている。

(柏木善治)

・おわりに

本プロジェクトでは8回に渡って横穴墓の検討を行ってきた。(1)～(6)で行ってきた県内の横穴墓の形態の検討では、大枠での形態・規模の変遷課程が明らかとなつたが、同時に一元的な流れでは理解し得ない横穴墓の多様性も浮きぼりとなった。この検討結果を踏まえ、前回と今回は地域別の変遷を見ていくことにより、改めて形態的検討の内容を検証するとともに、その地域の特性を掌握することに努めた。その結果については、上記にまとめたとおりである。地域的な横穴墓の検討は現在、よりマクロな方向で進められており(註20)、神奈川という広範な地域を6区分した検討では十分に解明出来ない点もあると思われ、また、横穴墓の導入の早かった地域では、新たな形態が登場しても前代の特徴を残した横穴墓が並行して造られるなど形態の細部については、同一の時間軸では比較し得ない変化のあり方も見受けられた。しかしながら、県内を見通すことによって、設定した地域間における類似性と相違、地域内での共通性と多様性が一層明確となり、また、横穴墓の多様性が、その導入期の問題と地域における発展、及び地域間での影響に起因するものとして把握されるのであれば、より細かい地域の設定やその地域の持つ重層性の現れとしての横穴墓の把握も可能となってくるであろう。

(植山英史)

註

1. 明石 新 1999 「大住郡域の横穴墓の様相」『湘南考古学同好会会報』77
2. 杉山博久 1988 「相模國金目川流域の横穴墓群」「斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会』
3. 八木獎三郎 1898 「相模國大磯在山背村字萬田八重塚の横穴」『東京人類學會雑誌』152
4. 日野一郎・杉山 博久 1976 「平塚市内の横穴墓群(Ⅰ)」「平塚市文化財調査報告書」第12集 平塚市教育委員会
5. 杉山博久 1978 「平塚市内の横穴墓群(Ⅱ)」「平塚市文化財調査報告書」第13集 平塚市教育委員会
6. 上原正人 1996 「平成6年度発掘調査 万田八重塚横穴墓群」「平塚市埋蔵文化財調査報告書」9 平塚市教育委員会
7. 杉山博之 1987 「万田八重塚・宮ノ入横穴墓群」万田八重塚・宮ノ入横穴墓群発掘調査団
8. 間根孝夫他 1999 「平塚の古墳時代」「平塚市史」11上 別編考古(1) 平塚市教育委員会
9. 寺田兼方・渡辺 清史 1996 「藤沢市川名森久地区埋蔵文化財発掘調査報告書」・
10. 矢島栄一 1934 「神奈川県鎌倉郡片瀬川左岸の遺跡及び遺物について」考古学雑誌第37卷4号
11. 寺田兼方他 1980 「藤沢市川名新林横穴群調査概報」藤沢市文化財調査報告書第十五集
12. 上田 薫他 1986 「代官山遺跡」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告11
13. 齋木雄雄他 1997 「久木横穴群の調査」
14. 清沢亮他 1979 「横浜市戸塚区桂町遺跡群発掘調査報告書」
15. 横浜市史編集委員会 1982 「第2編 市立古墳群の発掘」「横浜市史資料編」21考古資料編 横浜市
16. 池上悟他 1985 「武藏・熊谷横穴墓群」立正大学文学部考古学研究室
17. 横穴墓の研究(6)第1表において平面形・縱断面形の各時刻幅を提示している。それによると、後出的な見解が示される形態・無前壁天井でも初現期の遺物を内包しているものもあり、一元的な理解とはならない。
18. 横穴墓の研究(4)において、高棺座は、付帯施設Bの設置を一つの画期として捉えている。
19. 宍戸信悟他 2000 「三ノ宮・下谷戸遺跡(No14)Ⅱ」「かながわ考古学財团調査報告」76
立花実・手島真美 1999 「伊勢原市登尾山古墳再考」「東海史学」第33号
20. 明石新 2001 「V相武国から相模国へ」「相武国の古墳-相模川流域の古墳時代-」平塚市博物館

神奈川県における奈良・平安時代の考古学的研究（Ⅲ）

—その歩みと今後の視点—

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

6. 国分僧寺・国分尼寺の研究

はじめに

相模国分寺の所在については、古くから海老名市国分周辺に推定され、江戸時代末に編纂された『新編相模風土記稿』（1841）にも、東光院医王院国分寺の北方に「…伽藍の礎石相今去ること二町許にあり、礎石の大さ六七尺、田畝の間に散在す。又尼寺の廢跡は、礎石より七八町を隔つ…」と記録している。また、明治期から幾多の先人により、国分僧寺尼寺の伽藍配置について表面採集や観察・地形・地名考等からさまざまな研究がなされてきた。1965年には国分僧寺の予備調査が行われ、1966・67年の発掘調査で伽藍配置についてある程度明らかになった。

国分尼寺については、埋蔵文化財調査は行われないまま宅地化が進んだが、1988年に相模国分寺遺跡調査会が発足し、金堂跡周辺の発掘調査が実施された。

その後国分僧寺尼寺の史跡整備事業に伴う調査が行われ、新たな発見や多くの研究成果が発表されている。

ここでは、相模国分寺の遺構や出土遺物等の研究成果、また、初期国分寺に関する論点等を概略ではあるが見ていきたい。

研究の回顧

（1）遺構からみた伽藍配置の研究

海老名村（現海老名市）の小学校校長中山毎吉氏は、明治から大正期に精力的に出土瓦の収集に努め、残された礎石の配置などを詳細に調査した。その結果、国分僧寺について第一号～第五号の遺構を確認し、第一号を金堂、第二号を塔、第三号を講堂の跡と推定した。また、第四号や第五号の礎石や硬化面の存在からこれらを取り囲む回廊の存在を示した。さらに、回廊の東・西・北に硬化面があることから、僧坊・鐘楼を復元した。こうして、西に塔、東に南面する金堂、北に講堂、それらを取り囲む回廊の存在から、国分寺は法隆寺式伽藍配置と結論づけ、このことから天平以前に創建されたものと推定した（中山ほか1924）。



第1図 遺跡位置図

一方沼田頼輔氏は大住国府の所在を平塚に求めたことと、伽藍配置が法隆寺式であることから、相模國分寺の創建を國分寺建立の詔勅以前とし、豪族により建立されたものを國分寺に転用したと考えた（沼田1927）。

1927～30年にかけて現地の測量調査を実施した早稲田大学の建築史家田辺泰氏は、堂塔の礎石の配置とその間隔の寸法から、建築にあたっては天平尺が用いられたと考えられること、出土瓦も天平以前のものとは考えられないことなどから、創建は741（天平13）年以前とは考えられないとした（田辺1931）。

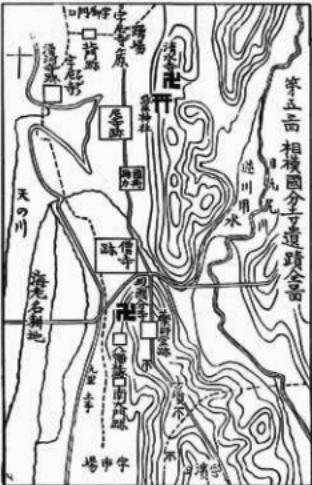
こうして、残存する礎石等による表面観察等により、國分僧寺の伽藍配置はある程度明らかになってきたが、本格的な埋蔵文化財調査は行われることのないまま、昭和30年代に入ると宅地開発が遺跡周辺にも迫ってきた。

1965年神奈川県と海老名町（現海老名市）により、予備調査が実施され、翌1966年・67年の2度にわたり、文化財保護委員会（現文化庁）が発掘調査を実施した。これらの発掘調査の成果により、國分僧寺は、中門から北面と南面には回廊、東面には築地塀が巡り、北側で講堂に取りつき、内部には東側に金堂、西側に塔が配置される、法隆寺式伽藍配置であることが確認された。また、講堂の北側に最初は礎石建物であったものが、掘立柱建物に建て替えられた遺構が確認され、僧房と推定した（大岡1967・坪井1985）。

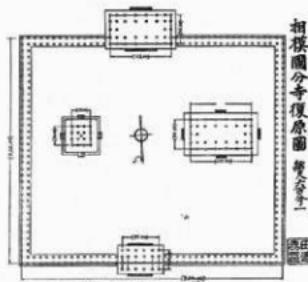
國平健三氏は法隆寺式伽藍配置であること、近年の発掘調査の成果で中門の東回廊に近接して奈良時代初頭の竪穴住居址が確認されたことから、寺院造営事業はそれより後であったとし、豪族の氏寺が國分寺に転用したとする説を否定し、相模國分僧寺が最初から金光明四天王護國之寺として建立されたと考えられるとした。また、國分僧寺の塔跡は切石積基壇外装から後に北辺のみ玉石積基壇外装に修理されていること、基壇周辺で3面の整地層が確認されていること、僧坊跡は2時期の掘立柱式建物から最終的に礎石建物へと3度の建替えがなされたとされること、検出された3条の溝状遺構は僧寺の伽藍地を区画した溝であると思われることから、補修・再建を指摘している（國平1998）。

また須田誠氏は、遺構から3時期あったことはほぼ確実であったとし、さらに塔跡周辺部の整地層中から出土した金銅製と遺構上から出土した銅製水煙とを検討し、水煙についても「鋳造→補修→再鋳造」の3段階を想定している（須田2000）。

國分尼寺については、前述した中山氏は礎石配置を、第一号～第六号の遺構とし、第一号を金堂、第二号



第2図 国分寺跡と周辺の状況
(相模國分寺志より)



第3図 相模國分寺復原図 (建茶雑誌より)

を講堂、第三号を中門、第四号を西塔、第五号を鼓（鐘）楼、第六号を回廊の跡と考え、大安寺式伽藍配置を推定した（中山ほか1924）。

発掘調査の成果から、伽藍中軸線上に中門・金堂・講堂が、金堂と講堂間の左右に經藏・鐘樓が配置され、迴廊が講堂にとりつく国分寺式伽藍配置が復原されているが、須田氏は伽藍地区区画溝の掘り直しや金堂兩落石敷の下層に基壇外装の切石破片が混入していること等から僧寺と同様3時期の区分を指摘している（須田2000）。また、國平氏は金堂は礎石建物が焼失した後、掘立柱建物が再建されその基壇は玉石積基壇であったとし、創建当初は切石積基壇と見られることから、その改修時期は僧寺の塔基壇の改修時期と同じころとしている（國平1998）。

（2）出土遺物からみた研究

—出土瓦を中心として創建年代を考える—

須田氏は僧寺の瓦をI・II類、尼寺の瓦をI～III類に分類しているが、造作との関係や年代についての詳細な検討は今後の課題としている（須田2000）。

國平氏は僧寺の軒瓦文様の変遷をI～III期に分類し、I期を創建期として、からさわ瓦窯系・公郷瓦窯系・乘越瓦窯系のものが使用され、II期は不明、III期を再建期として瓦尾根瓦窯や南多摩窯系の瓦が使用されたとした。I期の造瓦技法は「桶巻き作り」と「一枚作り」の両技法のものが用いられていることや、軒瓦の文様は8世紀中葉のものと考えられること等から國平氏は僧寺については750年代にはある程度完成していたとの見解を示している。また、尼寺の軒丸・軒平瓦の文様瓦は瓦尾根窯系のもので占められているとし変遷をI～III期に分類した。それぞれの時期については土器の年代などから、創建期については瓦尾根窯との検討から8世紀第4四半期とし、II期を9世紀第2四半期、III期を9世紀第3四半期としている（國平1990-91・98）。

河野一也氏は、僧寺の創建段階の瓦は公郷瓦窯系のものが主体であるが、からさわ瓦窯・乘越瓦窯系のものが含まれていることから、創建期を天平末年から8世紀第3四半期に求めた。また、再建期を弘仁10（819）年から9世紀第2四半期として瓦尾根瓦窯の瓦が使用され、補修期を貞觀15（873）年以降として南多摩窯群から供給されたとの見解を示している。尼寺については創建瓦窯は不明であるが、からさわ瓦窯系・乘越瓦窯系の瓦が出土していることから、僧寺にそれほど遅れることなく造営が開始されたとしている（河野1994・2000）。



第4図 調査地点と伽藍復原（海老名市史より）

(3) 初期国分寺についての研究—千代寺院跡（千代庵寺）を中心として—

一方、初期国分寺を海老名ではなく、小田原市千代に所在する千代寺院跡（千代庵寺）とする見解がある。木下良氏は歴史地理学の視点から相模国府所在地の検討を進め、東大寺式伽藍配置をもつとされていた千代庵寺を当初の国分寺であるとした（木下1974）。

また、前場幸治氏は、千代庵寺の出土瓦が天平期のものであること、千代庵寺が所在する一帯に上府中・下府中の村名が存在したこと、周辺に国府津の地名がみられることから、初期相模国分寺を海老名ではなく小田原市の千代庵寺とした（前場1980・84）。

しかし、千代寺院跡の伽藍配置が、過去の発掘調査の成果等から法隆寺式であると推定（岡本1998・1999）されることや、出土瓦の検証から創建期が鎧龜年間から天平初年とする見解（河野1993）などから、千代庵寺は在地豪族の氏寺として始まり、郡の寺として展開された（國平1991）と理解されており、国分寺としての認識は薄くなっている。

今後の課題と展望

相模国分僧寺尼寺については、すべてが調査されその全貌が明らかになった訳ではない。調査自体が開発行為に伴うものや、史跡整備事業に伴うもので小規模な発掘調査の積み重ねでここまで成果が得られたものである。

その中で伽藍についてはある程度明らかになっており、その復原も提示されている。また、国分寺周辺に広がる遺跡の調査も進められ、国分尼寺北方遺跡第7次調査地点の1号掘立柱建物跡からは瓦尾根瓦窓系の丸瓦や「法華寺」「寺」の墨書き器が出土し、馬首埋納土坑が検出され、第2次調査地点からも墨書き器や海老鉢が出土した。このことからこの遺跡が尼寺の寺域内と推定される。今後は、国分僧寺尼寺の寺域についての検討、出土遺物のさらなる検証等が求められることになろう。

また、「類聚国史」には弘仁10（819）年2月と8月の2度にわたる国分寺罹災の記載、「日本三代実録」には元慶2（878）年9月の地震被害と、元慶5（881）年に再建を願い出て勅許されているという記載がある。さらに、「日本三代実録」に貞觀15（873）年に国分尼寺を漢河寺に移し、元慶5（881）年に元の国分尼寺に戻すことが許可されている記載がある。この漢河寺については不明なことが多く、その所在もはっきりとはしていない。この問題も含め文献史料と発掘調査で得られた資料を検討すること、さらには歴史地理学や民俗学など周辺分野からの視点も必要であろう。

国分寺を考える上で他の古代寺院や相模国府、郡衙に対する研究も切り離しては考えられないはずである。今後こうしたさまざまな研究の成果から新たなアプローチが試みられることを期待したい。

(葉山後章)

追記

本号で論述する寺院関係は富永が担当していたが2000年4月より葉山が当研究プロジェクトに加わったため、国分寺関係を葉山が、豪族の寺と山寺、堂を富永が担当した。

引用・参考文献

中山毎吉ほか 1924.12『相模国分寺志』 海老名村

- 沼田頼輔 1927.5 「相模国分寺に就いての一考察」『史蹟名勝天然記念物』2-5 (1975「日本考古学選集5」) 筑地書館より)
- 田辺 泰 1931.7 「相模国分寺建築論」『建築雑誌』 早稲田大学建築学会
- 大岡 実 1967.5 「史跡相模国分寺跡の発掘」『月刊文化財』44 文化庁文化財保護部
- 木下 良 1974.5 「相模國府の所在について」『人文研究』59 神奈川大学人文学会
- 前場幸治 1980.10 「古瓦を追って」 私家版
- 前場幸治 1984.3 「国分寺古瓦拓本集 卷1 相模編」 国分寺古瓦拓本集刊行会
- 坪井清足 1985.10 「相模国分寺を探る」『飛鳥の寺と国分寺』 岩波書店
- 浅澤 亮ほか 1990.3 「相模国分寺開運遺跡」1・2 海老名市教育委員会
- 浅澤 亮ほか 1990.3 「相模国分寺開運遺跡詳細分布調査」I 海老名市教育委員会
- 國平健三 1990.3 「初期相模國府の所在について（上）」「えびなの歴史」1
- 國平健三 1991.3 「初期相模國府の所在について（下）」「えびなの歴史」2
- 浅澤 亮ほか 1992.3 「相模国分寺開運遺跡詳細分布調査」II 海老名市教育委員会
- 長谷川厚 1993.3 「相模國府と国分寺の所在について」「かながわの考古学」3
- 河野一也 1993.5 「奈良時代寺院成立の一端について 4-相模足下郡千代磨寺の古瓦を中心として」『神奈川考古』29号
- 河野一也 1994.11 「相模国分寺」「シンポジウム関東の国分寺」 関東古瓦研究会
- 伊東秀吉ほか 1996.3 「神奈川県海老名市 国分尼寺北方遺跡-第7次・第8次調査-」 住宅・都市整備公団 国分尼寺北方遺跡調査団
- 海老名市 1998.3 「海老名市史 1 資料編 原始・古代」
- 岡本孝之 1998.5 「千代磨寺跡の研究史的復元」「神奈川考古」第34号
- 岡本孝之 1999.3 「千代磨寺跡の再検討」「小田原市郷土文化館研究报告」35
- 須田 誠 2000.3 「相模国分寺・国分尼寺跡」「神奈川県考古学会 考古学講座 かながわの古代寺院」
- 河野一也 2000.3 「相模の古代寺院と瓦」「神奈川県考古学会 考古学講座 かながわの古代寺院」
- 河野一也 2001.3 「「かながわの古代寺院」研究成果と課題」「神奈川県考古学会 考古学講座 成果集 かながわの古代寺院 研究の成果と課題」

7. 豪族の寺院と山寺、堂

白鳳期～奈良時代前期における地方豪族の寺院

白鳳期から奈良時代前期に地方豪族が建立した寺院が神奈川県においても確認されている。それについては不確定なものも含めると相模においては小田原市千代庵寺、大磯町吹切遺跡、茅ヶ崎市下寺尾庵寺、鎌倉市千葉地庵寺、横須賀市宗元寺、横須賀市深田庵寺があり、武藏国城では横浜市弘明寺、川崎市影向寺、川崎市岡上庵堂などがある。平塚市下ノ郷庵寺については寺院の可能性が考えられているが異論もあり、時期も未確定である。寺院ごとにその研究史と課題を概観してみたい。

小田原市千代庵寺については大正年間から採集・踏査が始まっている。近年では前場幸治氏（前場1980）、清水信行氏（清水ほか1989）、國平健三氏（國平1990）、河野一也氏（河野1993）、岡本孝之氏（岡本1998）らが考察している。礎石の点在や基壇状の土盛りの存在から寺院の存在は間違いないが、伽藍配置については東大寺式と法隆寺式の二見解に分かれている。発掘調査については1958年に県教育委員会と小田原市教育委員会が、1960年には赤星直忠氏と県教育委員会の発掘が推定伽藍中心部を調査したがその内容は未だに報告されていない。瓦、灯明皿、瓦塔、磚仏、螺旋、蓮弁状土製品などが出土しているが、瓦について創建期と補修期のものがあると指摘されている。創建期の瓦については松田町のからさわ瓦窯で生産されたものであるが、補修期の瓦は生産窯は断定されていない。創建期についてはかつては赤星らにより奈良時代後半と推定されていたが、瓦研究の進展により近年では河野や清水らが奈良時代前期の年代観を提示している。初期国分寺にあてる考え方については前章で触れられているとおりである。



第5図 神奈川県寺院遺跡位置図

大磯町の吹切遺跡については千代庵寺の供給元であるからさわ瓦窯の瓦が出土することから寺院の可能性があるが（赤星1979、河野1997、清水1997等）礎石は確認されておらず、発掘調査も実施されていない。寺院かどうかは今後の課題である。

茅ヶ崎市下寺尾庵寺については1940～1950年代に鶴田榮太郎氏や石野瑛氏の採集・踏査がなされ、先駆的な調査となつたが、発掘調査が行われたのは1978年に市史編纂事業として岡本勇氏らによってである（岡本1978）。岡本勇氏や赤星直忠氏は出土瓦などから平安時代の寺院としたが河野一也氏は白鳳時代の可能性を考えた（河野ほか1991）。1989年以降は推定寺域周辺で茅ヶ崎市教育委員会による部分的な発掘調査が行われ、2001年には大型の瓦溜まりを検出している。また1997年には市史編纂事業の発掘調査などで出土した瓦等を整理し、報告書作成が岡本孝之氏を代表とする下寺尾庵寺跡研究会と茅ヶ崎市教育委員会によってなされた（岡本ほか1997）。それによると下寺尾庵寺は7世紀後半の寺院とするもので法起寺式とする伽藍配置の復元も行っている。簡単に研究史をさらったが下寺尾庵寺に関しては発掘調査によっても明確な建物の基壇が未確認なこと軒丸瓦・軒平瓦がほとんどないこと（創建時より新しい軒丸瓦は採集されている）は大きな問題点である。平瓦の調整から神奈川県最古の寺院とする河野の考え方もあるがまだ確定的とは言い難い。礎石などは元位置のものは少ないが、多く確認されており、本格的寺院であると推定されるが、年代・規模・性格・伽藍配置等はいまだ検討段階であるといえよう。

平塚市の四之宮庵寺（下ノ郷庵寺）については1960年代の日野一郎氏の調査と研究（日野1967）があるが、試掘調査などから平安時代の講堂を推定したものであった。これについては近年、明石新氏・若林勝司氏が再検討し（明石ほか2000）、日野の調査によって検出された根石が古代のものとは言い難い点と仏教の遺物の少なさからむしろ寺院ではなく、国司館の可能性を考えている。四之宮庵寺は大きな問題を含んでおり、推定平塚国府域に近接し、国府との関わりが予想される。もし古代寺院とすれば「郡寺」か地方氏族の寺院なのかまたは「国分寺」「国府付属寺院」なのかという問題にも発展する。四之宮庵寺の調査地点は別にしても推定国府域内の調査では多くの仏教関連遺物や奈良時代の瓦が出土しているがこれが郡衙・国衙関連の遺物なのか検討が必要だろう。なお近隣にある高林寺についても別の古代寺院という考え方がある。

鎌倉市千葉地庵寺は鎌倉郡衙（今小路西遺跡）の北に存在が推定されるもので、その存在の確認は1980年代からとなり新しい。千葉地遺跡・千葉地東遺跡・今小路西遺跡などで多量の古代瓦が出土し、寺院の推定がされたものである。これについては國平健三氏・河野一也氏の研究（國平ほか1988）があるが、瓦から7世紀末～8世紀初頭の創建が推定されている。寺院の遺構は発見されておらず、中世の造成で消滅した可能性がある。位置的には郡衙のすぐ近くでいわゆる「郡寺」「郡名寺院」の可能性がある。

横須賀市宗元寺は現在かなりの部分が宅地の中にあり、礎石は一つも遺存していないが、かつては礎石も十以上散在していたという。宗元寺の本格的な研究を始めたのは赤星直忠氏であり（赤星1935）、大正年間、宗元寺に隣接する横須賀中学校在学中から礎石の位置図を作成していた。それから研究は生涯を通じて行われたが、赤星は瓦の分布や礎石の位置から伽藍を法隆寺式または法起寺式とし、主要な瓦当文様である忍冬蓮華文軒丸瓦から時期は奈良時代前期または後期とした。河野一也氏は1990年（河野1990）および1997年（河野1997）宗元寺と周辺瓦窯の瓦の研究からその供給関係を明らかにし、創建時期を7世紀第4四半期から8世紀第1四半期までとした。さらに伽藍配置についても赤星作成の図面から違う結論を出し、四天王寺式とした。宗元寺の忍冬蓮華文軒丸瓦については上原真人氏（上原1998）や岡本東三氏（岡本1997）の7世紀中頃までさかのほらせる説もあり、時期的に微妙である。発掘調査に関しては皆無であり、宅地化の関係で

今後の調査もかなり困難である。伽藍配置や規模については今後も決着はつきそうもない。

横須賀市深田庵寺については、宗元寺より約2.5キロメートル北方に位置するが、遺跡自体は完全に過去の開発により消滅している。出土品である瓦から赤星直忠氏と河野一也氏が研究をしている。特に河野は瓦の分析から供給元が法塔瓦窯と乗越瓦窯と推定し、複数の系統があることから瓦窯ではなく、寺院跡とした。創建時は8世紀前半と推定している。このように数キロ離れたところに二寺院が建立される理由についてはあまり議論されていない。

横浜市弘明寺は石野瑛氏や赤星直忠氏、岡本勇氏らが古代瓦が出土することを報告しており、時期的には奈良時代後半から平安時代初期の瓦と考えていた。岡本孝之氏らは改めて瓦の資料紹介をするとともに平瓦に桶巻きづくり格子叩き目のものが含まれることから創建を7世紀末～8世紀初頭とした（岡本ほか2001）。また付近に久良岐郡の郡衙もあると推論し、「郡寺」「郡名寺院」を伺わせる想定をしている。興味深い類例だがまだ検討段階の資料であり、規模、性格、創建年代も今後の資料増加で確立していくことだろう。

川崎市影向寺は近年発掘調査が進んでいる橘樹郡衙に隣接し、現在も法灯を今に伝える影向寺境内を中心として寺域が推定されている。大正年間から影向石（塔心礎）や瓦の考察があり、戦後では古江亮仁氏が瓦の中に奈良時代前半にさかのぼる資料があると指摘している。昭和50年代からは川崎市教育委員会主体の影向寺文化財総合調査に伴って試掘調査が行われ、影向石近くに塔基壇を、現薬師堂下には金堂基壇を検出した。また伽藍建立以前に大型掘立柱建物群が存在することが明らかになり、影向寺の前史・創建の事情を考えさせる資料となった（竹石健二ほか1981）。近年改めて影向寺について再検討した河合英夫氏（河合2000）は金堂基壇を講堂と推定し、塔の西に金堂が存在したと考察した。伽藍配置は河合の推定では法起寺式となる。また創建年代についても河合は瓦当文様が山田寺系の素文縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦であることから7世紀第4四半期とし、創建の背景も評制段階にさかのぼり、天武朝以降の仏教振興政策を契機に都司層である地方首長が建立したと考えた。また2000年に公表された「无射志国花原原記」文字瓦でも国評併記の形式から7世紀第4四半期の時期が想定されている。

川崎市岡上庵堂は内藤政恒氏と古江亮仁氏により古瓦が採集されることが報告され（内藤ほか1954）、平安時代初期の寺院と推定した。赤星直忠氏は礎石がないことや焼土塊が出土したことから瓦窯説を唱えたが、結論には至らなかった。河合英夫氏が再検討し（河合1992）、数百メートル離れた三輪瓦窯址を近年発掘調査した結果、岡上庵堂の瓦を生産していたことが判明し、寺院であることを明確にした。その上で三輪瓦窯址と岡上庵堂から桶巻きづくりの瓦があることを指摘し、単弁八葉蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦と合わせて8世紀前半の創建期を予想し、8世紀の中頃～後半に一枚づくりの瓦と刻文軒丸瓦が導入されたと考えた。

白鳳期から奈良時代前期に創建された地方豪族の寺院について全体的な課題を考えてみたい。

今まで概観した神奈川県内の寺院では郡衙と近接し、「郡寺」「郡名寺院」に近いものがいくつかある。千代庵寺、千葉地庵寺、影向寺はほぼそのような性格だろう。宗元寺の属する御浦郡と弘明寺の属する久良岐郡については郡衙の位置が不明確なためなんとも言えないが同様になる可能性は残されている。このようにしてみるとおそらく前記の三寺院は造立者・庇護者は郡司であり、神奈川の初期寺院の半数近くが郡司層と深く関わった寺院と推定できる。これは他県の傾向と一致し、例えば「出雲風土記」に記載された出雲国の十一寺のうち、建立者の5人は郡司であり、その他の建立者も郡司の一族が多くを占めている可能性が高い（倉住1999）。また「日本書紀」でも百濟戦役の頃に郡司が郡の名を冠した寺院を建立する話がいくつか見られる。他県でも郡衙の近くに寺院が存在する例は少なくなく、郡の名を冠した「郡名寺院」である可能性

がある。しかしそれはあくまで郡司が本拠地に追善供養と国家政策への追随、勢力誇示などの点から寺院を造立したと考えられ、国分寺のように制度的に郡ごとに一寺が設けられていたという説は古代史では有力とは言い難い。それは寺院の無い郡が他県でも多く存在することからも伺え、神奈川でも初期寺院が愛甲郡、足柄上郡には今のところ確認できていない。寺院を建立できるような有力豪族が郡司であることが多かったためであり、郡に課せられた義務ということではないだろう。

白鳳期から奈良時代初頭に地方豪族の古代寺院建立が集中することは近年の古代寺院研究ではごく常識になっており、神奈川も同様の傾向を示している。創建時期についてかつては下寺尾廃寺が平安時代、元宗寺が奈良時代後期、弘明寺が奈良時代後半から平安時代前期、影向寺が奈良時代とされていたのに近年ではそれぞれ白鳳期から奈良時代初頭に変更されている。また岡上廃寺の創建期も平安時代初期だったものが奈良時代前半に見直された。これは瓦の研究が進展し、桶巻きづくりの瓦の時期が古いことが判明したことによる。また過去の研究では地方における古代寺院建立が国分寺を契機としたという考え方が重視されていたが、それが変化したことにもよるだろう。

瓦については従来の瓦当文様中心の研究から平瓦・丸瓦の調整・胎土・生産窯推定から時期を考える手法へ発展しつつあり、神奈川では特に河野一也氏の功績が著しい。これは下寺尾廃寺のように大量の瓦が出土しつつも軒丸・軒平瓦が全くない寺院では特に有効であり、発掘例のない寺院においても採集した平瓦・丸瓦から創建時期や生産窯系統が推定できることは重要な視点をもつことになる。河野は2000年の特別講演にて相模の古代寺院の瓦から見た創建年代を総括している。それによると相模の古代寺院は下寺尾廃寺を初現とし、千葉地廃寺、元宗寺の順であり、その後、深田廃寺、吹切遺跡、千代廃寺がほぼ同時期に建立されたという（講座成果集では千代廃寺がやや引き上げられている）。この推論の当否は議論の分かれどころであり、造瓦方法や系統の組合せでどこまで細かく年代をしほりこめるのかは大きな課題である。いずれにせよ古瓦研究のさらなる進展と共に現地の発掘調査が進むことにより新たな検討がなされていくことだろう。

奈良時代中葉から平安時代の寺院と山寺について

国分寺建立以後は地方豪族による新たな大規模寺院建立は減少し、これまでとは違った形態の寺院が建立されるようになる。しかしながらこの時期における神奈川県の古代寺院の研究はやや低調で、初期古代寺院研究に重点がおかれていることと対照的である。しかしながら2000年の神奈川考古学会考古学講座における岡本孝之氏の古代瓦の集成からみてもこの時期の寺院が相当数まだ隠されていることが伺える。可能性のある遺跡として川崎市の寺尾台廃寺、海老名市薬師堂、厚木市の片岸遺跡（一乘尼寺）、飯山廃寺、松田町の弥勒寺、大磯町国府本郷中丸遺跡、横須賀市の子安寺、藤沢市圓鏡館遺跡などがあるが、寺院とも確定していないものも多い。

川崎市の寺尾台廃寺については1951年に発掘調査が行われており、基壇を伴った単堂形式の仏堂が発見されている。報告では（内藤ほか1954）基壇の「葦石」から八角堂を復元しているが、建築史学の専門家などと協議した結果だという。瓦も多量に出土しているが剣菱軒丸瓦が武藏国分寺の瓦と同一系統と考えられることから調査者は平安時代初頭としたが、のちに有吉重蔵氏らはこの系統が奈良時代後半のものと判断している。このような単堂形式で基壇を持つ寺院は今のところ県内では例がないが県外では千葉県小食土廃寺や大坂前遺跡、群馬県戸神源訪遺跡などが知られており、ひとつの寺院または堂の形式だろう。舌状に飛び出した丘陵上に位置し、三方は50m近い比高差がある崖で「一種の山堂乃至は小山寺」と報告されている。

海老名市薬師堂は国分寺の南東数百メートルに存在していた仏堂跡で1963年末調査のまま開発により消滅した。飯田孝氏がかつての礎石の状況や瓦を紹介しているが（飯田1998）、心礎を中心に庇を含め三間×三間の礎石建物が存在し、付近に瓦溜まりも存在していた。時期的には奈良時代後半と推定されるが国分寺とは別に仏堂が存在していたと考えられ、国分寺の別院だろうか。位置的には見晴らしの良い高地である。

厚木市片岸遺跡（一乘尼寺）は尼寺原と呼ばれる台地上に数点の礎石が点在したもので凸面に縄目がある布目瓦が多く採集されている（飯田ほか1998）。現在は工場敷地となって完全に消滅したが、付近の横穴墓を調査した近年の発掘調査でも斜面から多量の布目瓦と凹花蓮弁文軒丸瓦が出土しており、寺と考えられる。瓦は一枚づくりで、軒丸瓦も退化した形式のものなので、奈良時代後半から平安時代初期の寺だろう。

厚木市飯山廃寺は弘徳寺という淨土真宗の寺院の境内で布目瓦が採集されるもので、桶巻きづくりの瓦も含まれる（飯田孝ほか1998）。弘徳寺の寺伝によれば弘徳寺の前身として推古朝の頃に建立された寺があったという。寺伝の真偽はともかく、未確認の古代寺院の可能性がある。

松田町寄の弥勒寺は大形自然石の礎石の残る土壇が存在するが、瓦は出土していない（赤星1979）。菩妻鏡によると元暦元年（1184）の源頼朝の書状に「弥勒寺庄々」という記載があり、弥勒寺の莊園があったことが伺える。建久三年（1192）北条政子が蜜氣づくと頼朝は国内の社寺に誦経を修めさせたが、その十五の寺院に「弥勒寺」も含まれる。四方を山に囲まれた山里であり、瓦を用いない寺が存在していたのだろうか。

大磯町国府中丸遺跡は意外と知られていないが、石野瑛氏が国府に関連した寺院跡として礎石の配置を戦前に記録している（石野1936）。瓦は採集されておらず、吹切遺跡とは数百メートル離れている。

横須賀市子安寺は子安山山頂の畠地に布目瓦が採集されたもので、瓦窯の説もあるが、かなり高地にあるため寺院と考えた方がよいだろう（赤星1979等）。見晴らしの良い場所に建立された山寺に近い例だろうか。

藤沢市の圓館遺跡は蓮華文軒丸瓦と布目瓦が採集されており、寺の可能性がある（赤星1979）。

以上概要を記したが、発掘調査例が少ないので明確には言い難いが奈良時代後半～平安時代前期になると寺院の規模が小さいものが多くなっているようである。推定で単堂形式のものも多く、寺尾白廃寺や薬師堂、子安寺のように高台に仏堂を1ないし2棟建てるものがある。後述する「村落内寺院」と区別がつきにくくいものも多く、「村落内寺院」の大規模なものと性格的には大差がないのだろう。

山寺については平安時代前期になると密教や修驗道の関係から建立が盛んになることが推定され、現在も活動を維持している伊勢原市日向薬師や大山寺などもこの部類であろう。神奈川県の山寺が考古学的に調査された例は無いが近年厚木市鐘ヶ岳からの多量の出土瓦が紹介されており（富永ほか2000）、南多摩古窯址群の瓦と推定される。平安時代前期の山寺だろう。子安寺なども山寺としてとらえた方がよいのかもしれない。また秦野市草山遺跡に「神崖山寺」の平安時代の墨書き器があるが近隣に山寺があった可能性がある。

村の仏堂

奈良・平安時代の集落内に明らかに仏器、仏具、瓦塔などを伴った掘立柱建物や簡単な礎石建物が存在することが指摘されたのは1980年代千葉県の事例からであった。これらは須田勉氏の命名した「村落内寺院」として認識されたが（須田1985）、より民衆に近い寺として注目された。神奈川県の調査例については東日本の類例を集めた拙稿（富永1994）によても集成されたが、清川村馬場遺跡、川崎市宮添遺跡などまだ少數であった。さらにそれに多くの例を追加し、神奈川県独自の集成したのは大坪宣雄氏（大坪2000）であったが、厚木市愛名宮地遺跡や横浜市蘇我不動原遺跡などの近年調査の事例が含まれている。大坪の集成の全

てが仏堂かどうか今後検討の余地はあるが、神奈川県にもこのような形式の仏堂が存在したことがわかる。その性格については規模・立地により差があり、郡司クラス、郷長や村落の有力者、富農が自己の氏寺や持仏堂として作った例、有力者が集落の構成員と共に集落のために作った例、集落の構成員が下級僧など共に作った例、集落に近いが僧侶の修行場である例など様々なパターンが想定される。むしろ「堂」では無く「寺院」として扱った方が良いものも含まれており、瓦を部分的に使用する堂もありうる。

(富永樹之)

参考文献

- 赤星直忠 1935 「相模宗元寺」「神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告書」3
 石野瑛 1936.1 「鎌倉の相模國府跡」「考古学叢録」第三 武相考古会
 内藤政恒ほか 1954.3 「川崎市菅寺尾台瓦塚廬堂址調査報告」川崎市教育委員会
 日野一郎 1967.3 「平塚市下ノ郷廬堂跡」「日本考古学年報」15
 岡本 勇 1978.10 「七堂伽藍を掘る」「茅ヶ崎市史研究」第3号
 赤星直忠 1979.6 「古墳時代・古代」「神奈川県史 考古資料」
 前場幸治 1980.10 「古瓦を追って」
 竹石健二ほか 1981 「影向寺文化財総合調査報告書」川崎市教育委員会
 関東古瓦研究会 1984.9 「関東古瓦研究会資料その壱 相模編」
 稲田 勲 1985 「平安初期における村落内寺院の存在形態」「古代探査」II
 清水信行ほか 1989.10 「唐沢・河南沢」東海自動車道改築松田町内遺跡調査会
 國平健三ほか 1988.4 「奈良時代寺院成立の一端について（I）」「神奈川考古」第24号
 河野一也 1990.5 「奈良時代寺院成立の一端について（II）」「神奈川考古」第26号
 國平健三 1990.3 「初期相模國府の所在地について（上）」「えびなの歴史」創刊号
 河野一也ほか 1991.5 「奈良時代寺院成立の一端について（III）」「神奈川考古」第27号
 河合英夫 1992.4 「岡上廬堂址の年代観について」「多摩考古」第22号
 河野一也 1993.5 「奈良時代寺院成立の一端について（IV）」「神奈川考古」第29号
 富永樹之 1994.5 「村落内寺院」の展開（上）」「神奈川考古」第30号
 岡本東三 1996.10 「東国の古代寺院と瓦」吉川弘文館
 河野一也 1997.2 「相模国の初期寺院」「関東の初期寺院」関東古瓦研究会
 清水信行 1997.8 「神奈川県」「古代寺院の出現とその背景」埋蔵文化財研究会
 岡本孝之ほか 1997.11 「下寺尾寺跡の研究」茅ヶ崎市教育委員会
 上原真人 1997.5 「瓦を読む 歴史発掘11」講談社
 飯田 孝 1998.10 「国分寺薬師堂跡およびその付近の遺跡旧觀と出土遺物」「えびなの歴史」第10号
 飯田 孝ほか 1998.3 「厚木市史 古代資料編2」
 岡本孝之 1998.3 「千代寺院跡の研究史的復元」「神奈川考古」第34号
 會住靖彦 1999.9 「地方の古代寺院」「古代を考える 古代寺院」
 河合英夫 2000.3 「川崎市影向寺址」「かながわの古代寺院」
 竹沢嘉範 2000.3 「横須賀市宗元寺跡」「かながわの古代寺院」
 鎌沢 充ほか 2000.3 「小田原市千代寺院跡」「かながわの古代寺院」
 岡本孝之 2000.3 「茅ヶ崎市下寺尾寺跡」「かながわの古代寺院」
 河野一也 2000.3 「相模の古代寺院と瓦」「かながわの古代寺院」
 大坪宣雄 2000.3 「民間における仏教の受容」「かながわの古代寺院」
 平塚市博物館市史編さん担当 2000.3 「平塚市内出土の古瓦」
 富永樹之ほか 2000.5 「厚木市七沢の鐘ヶ嶽採集の瓦について」「神奈川考古」第36号
 明石 新ほか 2000.10 「平塚市四之宮所在の「下之郷廬堂跡」の再検討」「考古論叢かながわ」第8号
 神奈川県考古学会 2001.3 「かながわの古代寺院 研究の成果と課題」
 岡本孝之ほか 2001.5 「弘明寺の古瓦」「神奈川考古」第37号

8. 在地土器の研究

はじめに

神奈川県とその周辺では奈良・平安時代の土器研究は、開発に伴う大規模な発掘調査が行なわれるようになつた1970年代以後大きく進展してきた。近年その研究は全県的な編年研究から地域的な編年研究や在地産の土器が示す地域性とその歴史的な意義の解明に目が向けられるようになっている。

ここでは、奈良・平安時代に旧相模国で製作された土師器の研究を（1）編年、（2）地域編年、（3）土器様相とその意味、（4）個別土器、という視点から主要論考を概観し、展望にも触れてみたい。なお、八王子市中田遺跡の報告書以前の土師器研究史はすでに詳細に検討されているが（岩崎1967ほか、大屋1990）、ここでは大規模調査の報告書が刊行され始めた1975年以後の旧相模国域内に関する論考を対象とする。

編 年

神奈川県内における奈良・平安時代の在地産土器の研究は個別の大規模遺跡の出土品を対象とした編年研究から始まった。筆者は厚木市鳶尾遺跡出土の土器を遺構内出土の土器の同時性、土師器壺と須恵器杯の型式的な変遷、器形や製作技法の変化、遺構の重複などからの前後関係の確認などの視点から編年を試みた。年代観は共伴した須恵器・灰釉陶器・古銭等から推定したが、灰釉陶器のそれが大きく変わったため、平安時代の年代ずれが大きい（河野1976）。星野達雄氏は神奈川県だけでなく南関東の相模、武藏、下総を総合的に検討している。相模では海老名市本郷遺跡の出土品を対象として器種ごとの型式分類、遺構内出土土器の組合せと構成器種の違い、遺構の重複等で編年を行なった（星野1977）。本郷遺跡は正式報告書が刊行される以前の論考であり、大勢は誤りがないと思われるが正式な研究成果の公表が待たれる。この後も大規模遺跡の報告書の中で各遺跡出土の編年がなされ、國平健三氏は上浜田遺跡の報告書で遺構内出土の全ての土器を同一時期という前提で編年研究を行なったが、器種ごとの型式学的な検討は鳶尾遺跡と同様なされなかつた（國平1979）。なお、上浜田遺跡では鳶尾遺跡に汚落していた7世紀末から8世紀前半の資料が充足された。明石新氏は平塚市中原上宿遺跡の報告書で、平塚市の砂丘地帯の編年を初めて行い、8世紀初頭の土器様相が上浜田遺跡と違う部分があることが明らかになった（明石1981）。小島弘義氏は同じく平塚市の砂丘地帯の調査成果から出土土器を15期に分けた。国府の推定地に該当する遺跡なので7世紀後半から11世紀前半まで土器が確認されている（小島1984-85・90）。長谷川厚氏は宮久保遺跡と草山遺跡の報告書の考察で、土器を器種ごとに型式学的に細かく分類し、各器種の型式からなる組成の変化を捉えて編年を組み11期に分けた（長谷川1990・c）。各期の様相を組成・型式構成・搬出する須恵器・年代観で説明している。上記以外にも幾つかの大規模な遺跡で出土土器の個別編年が行なわれた（市川1983、田尾1999）が、土器群の変遷の流れに大きな違いはみられない。

國平氏は個別遺跡編年を越えた相模全体を対象とした奈良・平安時代の土器の広域編年の構築を上浜田遺跡・当麻遺跡・鳶尾遺跡から出土した土器を用いて試みた（國平ほか1983）。また、平安時代後半～末を対象として鳶尾遺跡・上浜田遺跡・中原上宿遺跡・四之宮下郷遺跡・四之宮高林寺遺跡・相模原市相原田ノ上遺跡・相原二本松遺跡の出土土器を用いて試みている（國平ほか1986）。いづれも各器種ごとの型式学的な検討を十分に踏まえないで、共伴した土器群の変化を追って編年を作成する方法を採用している。今や蓄積された膨大な資料を用いて、型式学的な検討を踏まえた広域編年を検討する時期に入ったといえる。

奈良・平安時代の土器研究でも実年代の推定は不可欠であるが、県内で土器と共に記年銘資料は宮久保遺跡の木簡だけである。この他、相模国分尼寺の被災記録と発掘調査所見との整合性からも年代が推定されてきた（滝澤ほか1988）。これらの資料を除くと神奈川県内で在地産の土器の年代を直接推定できる資料は見つかっていない。従来、実年代の推定は他地域で生産された灰釉陶器や須恵器に多くを頼ってきた。しかし、他地域産の土器や陶器の年代が動いた場合、在地産の土器の年代もそれにつられて無理やり移動せざるを得なくなる。自前の年代の定点を持たない弱さであるが、単に記年銘資料の増加を期待するだけでなく、例えば降下火山灰といった新たな視点で研究を深化させる努力が求められている。

地域編年

土器の編年研究の対象地域は旧国単位ぐらいの広い地域が研究視野に入っていたが、各地で調査が数多く実施されるようになると地理的にまとまる範囲や数郡の範囲の広さでの土器群の様相の違いが、例えば高倉郡の北部と南部、あるいは三浦半島域とそれを除いた旧相模国域といった地域で明らかになってきた。

三浦半島における奈良・平安時代の土器研究は個別遺跡ごとの出土土器の研究を基に、まず、三浦半島産のロクロ土師器の研究が行なわれた。長谷川氏ほかは横須賀市小矢部窯址出土の土器と似たロクロ土師器に注目し、年代的な位置付けや小矢部窯出土土器と共に胎土分析を実施した。胎土・焼成・形態・製作技法から小矢部窯の製品と考えられた土器は胎土分析の結果、ほとんどが小矢部窯址産のものと胎土が違っていた。これらの結果から搬入された可能性も否定できないが、三浦半島には小規模な生産地が小矢部窯以外にも存在しその供給範囲も極限に近づいていたと想定している（長谷川ほか1983・87・90c）。

中三川昇氏は三浦半島東岸の律令制成立期の土器様相を明らかにする中で、東京湾に面した東岸には北武藏系の土器群が一定期間存続しているのは、北武藏の土器組成がそのまま持ち込まれた可能性があることを指摘している（中三川1995）。これらの先行する研究を踏まえて、横須賀考古学会古代研究部会は三浦半島の古代土器の編年研究を発表した（古代研究部会1997、中三川1999）。これによって7世紀中葉から11世紀前葉までの土器編年の見通しと三浦半島の土器群の特色が明らかにされた。律令制から奈良時代前半までの北武藏とのあり方、また、その後の相模との関係、さらに平安時代の三浦型窯（「頬製塙土器」）やロクロ土師器といった特色のある土器群の存在が明らかにされた。器種ごとの型式学的検討が不十分なことや三浦型窯の機能は検討の余地があるとしても、現時点での研究成果が出されたものとして評価できる。

土器の様相とその意味

相模の土器様相の特色について星野氏は奈良・平安時代の土師器は相模国内でほぼ同一の様相であることを指摘している（星野1977）。それらの土師器について筆者は器形、調整技法、胎土、色調の違いから「相模型」という名前を提唱した（河野1976）。この時代の土器群のうち明瞭に分けられるものは系統の違いでしかも生産地の差であり、その分布は律令制との関連があるのではないかと考えて指摘したものであったが、始まりの時期や概念規定さらに律令制との関係が追求が不十分なままの提示であった。

「相模型」土器の出現については、古墳時代の土器との関連や製作技術から検討されてきた（長谷川1983a・91、國平1986・92、大屋1989）。個別遺跡の出土土器だけで考證するのではなく複数遺跡の土器のあり方を踏まえて系統的に把握するのが理解しやすいと思われる。

「相模型」の土師器は相模国に主導的に分布しているが、一部は周辺の諸国から客観的に出土している。

これを検討した田尾氏は時期的には8世紀後半から9世紀始めに土器の移動が目立ち、その分布は当時の交通路との関係が深いとしている（田尾1994）。

田尾氏は土器の分布から相模国域に対する律令的な支配体制の成立とその地域性を探っている（田尾1999b）。相模型の壺が成立する前の7世紀第3四半期までの整形技法の違う土師器壺（ハケ調整とケズリ調整）の分布範囲の境は奈良・平安時代の余綾郡と大住郡の郡界にはば重なり、それが師長・相武両国造の支配領域を反映すると推定している。また、7世紀末から8世紀初頭の土師器壺の分布は行政区画としての相模国域とは合致しないが、相模型の壺が成立する8世紀第2四半期以後には三浦半島を除いた相模国域全域に広がり、一部は武藏国の国府城でも出土するようになる。三浦半島で相模型の壺が主体になるのは8世紀第4四半期から9世紀前後であるが、このような土器分布からみた相模国の統一とそれを支えた土器の生産体制の整備は相模国府の体制が整備された結果であるとしている。律令体制下の相模国における整備の具体的な姿をどのように捉えるか、その詳細が検討課題として残されている。

長谷川氏は関東地方の煮炊具を述べる中で相模国について壺の製作技法の特色、器形の種類にふれた後、相模一国に分布し国内の東部と西部では製作技法が微妙に違っているとしている（長谷川1996）。土師器壺も同一時期で東西で大きさが微妙に違うといわれているので、残された課題の一つといえる。

また、長谷川氏は「まず編年ありきの立場で分析を進め、その後で編年に歴史性を付与しようとした方法」を排し、土器様式の変遷とその意味を明らかにしようとした（長谷川1991）。相模国の土師器壺は古墳時代の伝統を受けつつ須恵器をモデルとして変遷し、土師器壺が大きく変化した730年頃に律令機構の中で相模国独自の対応があったとして「律令的土器様式」が成立し、さらに平安時代に土師器壺が前代の様式から逸脱したのは律令制の動搖が反映しているとしてそれを「在地的土器様式」として把握した。

個別土器

羽釜については田尾氏が研究動向を踏まえて相模での状況を述べている（田尾1990）。相模での羽釜の出現は10世紀中葉ころで、整形技法は「相模型壺」と同じで在地産がほとんどである。鈎の付け方や形態からは甲斐や駿東地域との共通性がみられ、口縁形態は幾つかのに分けられるが、それらが同じ時期に混在し使用されている。分布は周辺の地域と交流が多い官衙やその周辺の遺跡、地域での拠点的な集落などに多くみられるとしている。羽釜は在地の土器生産に取り込まれた新しい器種として生産された土器といえる。

この他の在地産の土器には平塚市内で多出する土師器壺の底部周辺を利用した木葉底壺、同じく平塚市内から多く出土する内面に放射状の暗文が施される場合のあるロクロ高台付土師器碗などがあり、今後の検討が期待される。

まとめ

奈良・平安時代の相模国の在地産の土器編年は大筋の流れはすでにほぼ確定し、最近の資料の蓄積によって細部を検討する段階に入っている。しかし、既存の編年体系を検討することなくそれに安易に依存するだけでなく、新しい資料で編年全体を基本的な方法で検証してゆくことも忘れてはならない。また、三浦半島で行なわれたような地域的な編年を構築し、地域間さらには遺跡間の差異を検討してゆく必要もある。

なお、編年研究は考古学研究の一ステップであるが最終的な目的ではない。編年至上主義に陥ることなく長谷川氏が実践しているように大きな観点から解釈していくことも今後の課題である。 （河野喜映）

引用・参考文献

- 岩崎卓也 1967.4 「真間式土器小考」『大塚考古』8
- 河野喜映 1976.5 「鳩尾遺跡出土の土器編年試論—歴史時代を中心として—」『神奈川考古』第1号
- 星野達雄 1977.2 「いわゆる「国分式土器」について」『原始古代社会研究』3 校倉書房
- 國平健三 1979.3 「I～VI期の土器編年について」『上浜田遺跡』神奈川県立埋蔵文化財調査報告15
- 明石 新ほか 1981.3 「中原上宿」中原上宿道路調査団
- 國平健三ほか 1983.1 「奈良・平安時代の諸問題—相模国と周辺地域の様相—」『神奈川考古』第14号
- 市川正史 1983.3 「第1節 出土土器について」『向原遺跡 第6分冊』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1
- 長谷川厚ほか 1983.3 a 「4 相模型の土器器形について」『杉田大谷遺跡』杉田大谷道路調査団
- 長谷川厚ほか 1983.3 b 「クロロ使用の酸化焰焼成の土器について」『神奈川考古』第15号
- 小島弘義ほか 1984.3 「四之宮下郷」神田・大野道路発掘調査団
- 小島弘義 1985.3 「土師質土器の実態とその編年」『四之宮高林寺II』平塚市埋蔵文化財調査報告書第2集
- 國平健三ほか 1986.2 「古代末期～中世における在地系土器の諸問題」『神奈川考古』第21号
- 國平健三 1986.4 「相模型杯の成立過程をめぐる土器様相」『神奈川考古』第22号
- 長谷川厚ほか 1987.12 「三浦半島の古代遺跡における小矢部窯址産土器の同定（1）」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第31号
- 浅澤 亮ほか 1988.3 「相模国分寺関連遺跡詳細分布調査報告書 1」海老名市教育委員会
- 大屋道則 1989.5 「相模型杯の成立過程」『土曜考古』第14号
- 小島弘義 1990.3 「II 濱防前A遺跡第3地区」『桜谷原・高林寺遺跡他』平塚市埋蔵文化財シリーズ16
- 大屋道則 1990.3 「中田以前の土器器形一編年研究の原則と分類方法の変遷」『研究紀要』第7号 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 長谷川厚 1990.3 a 「第IV章 調査成果のまとめ（1）住居址出土土器の様相の整理、（2）出土土器の編年と組成の特質」『宮久保遺跡III』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15
- 長谷川厚ほか 1990.3 b 「三浦半島の古代遺跡における小矢部窯址産土器の同定（2）」『神奈川考古』第26号
- 田尾誠敏 1990.9 「相模の羽釜」『東海大学校地内遺跡調査団報告1』
- 長谷川厚 1990.12 c 「土器について」『草山遺跡III』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告18
- 長谷川厚 1991.5 「東国における「律令の土器様式」の成立と展開について—相模国の様相からみた東国での適用と方法論について—」『古代探査Ⅱ』
- 國平健三 1992.3 「「相模型杯」出現期の意義」『神奈川県立博物館研究報告－人文科学－』第18号
- 田尾誠敏 1994.3 「越境する相模型土器」『東海大学校地内遺跡調査団報告4』
- 中三川昇 1995.11 「三浦半島東岸地域における律令制成立期前後の土器様相について」『横須賀考古学会年報』30
- 長谷川厚 1996.9 「古代前半期における關東地方の煮炊具の様相」『古代の土器研究－律令の土器様式 西・東4 煮炊具－』古代の土器研究会
- 古代研究会 1997.6 「三浦半島における歴史時代土器の研究（1）」『研究紀要』第1号 横須賀考古学会
- 中三川昇 1999.2 「地域研究の成果—古代— 土器様相の特色とその背景」『考古学ジャーナル』No441
- 田尾誠敏 1999.3 a 「第IV章 考察 第1節 古代（2）土器・陶器の変遷と王子ノ台集落」「王子ノ台遺跡 第II巻 歴史時代編」東海大学校地内遺跡調査団
- 田尾誠敏 1999.3 b 「土器からみた「相模」の成立過程」『大磯町史研究』第6号

9. 搬入土器の研究

はじめに

奈良・平安時代に、神奈川県内へ持たらされた他地域産の土器。すなわち搬入土器に関する研究足跡を振り返ってみる。ここで扱う搬入土器とは、土師器(甲斐型土器、畿内産土師器、その他)、須恵器、施釉陶器(奈良三彩、灰釉・綠釉陶器)などを指すものとする。ところで、搬入品の性格には流通物資として大きく威信材と生活必需材があり、その入手主体層はそれぞれ貴賤と民衆に二大別されるというが(宇野1997など)、県下における総体的な出土量から鑑みると、前者には畿内産土師器・奈良三彩・綠釉陶器が、後者には甲斐型土器・須恵器・灰釉陶器などを充てて考えることが出来るであろうか。もっとも、須恵器や灰釉陶器の製品のなかには仏器的器種もあり、また特に古相の灰釉陶器には威信材的性格をも付与することが可能と思われる所以、厳密に区分することは困難である。そのため、以下ではさしあたり土師器・須恵器・施釉陶器に区分して、各々の研究状況を見ていくことにしたい。ただし、これらの製品の各生産地における研究蓄積は既に膨大な域に達しており、その一つ一つを解説するには与えられた紙数では到底扱えるものではない。したがって、ここでは県下出土資料を扱った論考を中心として、研究の現状と問題点を指摘するに留めたいと思う(生産地の研究状況については、『研究紀要5』に掲げた文献目録を参照願いたい)。

また、神奈川県は古代行政区画の相模国と武藏国南部を包括しているため、南武藏地域在地の土器についてはここでは除外しておくこととする。

まず、各種搬入土器の出土様相を概観する前提として、昨年『研究紀要6』で報告した「国府・郡衙の研究」とも一部重複するが、搬入経路となる古代交通網の復原的研究の現況に目を通しておく必要があろう。1997年1月に、藤沢市教育委員会より『神奈川の古代道』が刊行された。そこでは、文献史学・歴史地理学・考古学等の学際的研究成果によって、限られた史資料を駆使して古代道路網の復原図が呈示されている。報告者も述べているように、その一部は大胆な推測を加味しており、今後特に資料の増加が見込まれる考古学的情報如何によっては、ここで示された復原図は常に見直しを計っていく必要はあるが、今日における研究の一つの到達点を示しているといってよい。一方、中村太一氏は律令法に規定された交通制度が陸上交通編成を基調としたなかで、国府・郡衙が水上交通路をも視野に含めて立地するという全国的な動向から、地方官衙が関与した地域的な水上交通が法の枠組みの外で編成・運用されたことを強調する。その中で、相模川の河口部を国府の外港と位置づけ、同水系の河川交通に積極的評価を与えていたことは興味深い(中村1994)。このように、物資の搬入経路は水陸を問わず存在していたことが想像される。

土師器

土師器のうち、まず甲斐型土器に関する研究としては、田尾誠敏氏による下記の一連の論考が挙げられる。

1991.9 「甲斐型壺の初相」『東海大学校地内遺跡調査団報告』2

1992.5 「相模地方の甲斐型土器覚書」『山梨懇考古学協会誌』第5号

1992.11 「関東地方出土の甲斐型土器—その分布と年代」『甲斐型土器—その編年と年代—』

1995.2 「相模地方の甲斐型土器覚書Ⅱ」『東海大学校地内遺跡調査団報告』5

1997.3 「相模湾沿岸部出土の甲斐型土器素描」『上ノ町・広町遺跡』

田尾氏によると、神奈川県内における甲斐型土器の分布は、相模湾沿いとそこから遡る相模川・花水川など

の河川流域に集中する。その状況から、搬入ルートは東海道経由の陸路というよりはむしろ、甲斐・富士川・駿河東部・駿河湾・相模湾・相模国内各河川河口という海上・河川交通を指向し、背景には商品としての流通が考えられるという。またその時期的動向は、後述するように東海地方産の須恵器の供給が減少する8世紀後半に搬入が開始され、その後は武藏国諸窯の須恵器製品の普及とともに増加するが、灰釉陶器が普及し始める9世紀半ば以降を境として出土量は著しく減少する。このことから甲斐型製品の流通は、須恵器・灰釉陶器といった他の商品の搬入動向と連動した動きの中で展開したことと示唆した。

畿内產土師器に関しては、全国的な動向をまとめた林部 均氏による下記の研究があり、神奈川県内の出土事例にも若干触れている箇所がある。

1986.9 「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内產土師器」『考古学雑誌』第72巻第1号

1992.3 「律令国家と畿内產土師器」『考古学雑誌』第77巻第4号

これによれば、県内では横穴墓・集落址・国府・郡衙等を中心として7地点で22個体分の出土例が報告されている。分布域は主として相模湾沿岸部に集中し、年代幅は飛鳥II～平城III期におよぶ。壺・皿・蓋・高壺など多様であるが、とりわけ平城I期の段階には器種・量ともに増大するようである。これは、神奈川県のみならず東日本全般的にみられる傾向といえ、国府や郡衙の設置に際して、律令国家による地域支配再編成の具現化の一端であるとしている。

土師器の他製品としては、駿河東部・北武藏・房総地域産の土器や内黒土器などがある。駿東型土器は県西部・北武藏・房総地域産の土師器は三浦半島を中心とした地域に分布が偏在する傾向が認められ、隣接地域間での交流を示すものと思われる。また、内黒土器については房総地域や東山道沿線の信濃・上野・下野国が生産地の候補として想定されるが、厳密には同定出来ていないのが現状である。甲斐型土器・畿内產土師器・内黒土器は胎土・色調・硬度等の点で、在地産の土師器とは明確に区別出来る特徴を備えているのに対して、破片では分別・抽出が困難な他地域産の土師器が、実は意外に見落とされている可能性はあるようにも思われる。例えば海老名市上浜田遺跡や桑野市草山遺跡では、在地には認められない丸底を呈した小型甕が単発で発見され、それぞれ畿内地方・遠江から尾張・近江地方産の製品である可能性が示唆されているが(國平1979・長谷川1990)、これらは個体自体が比較的良好に遺存していたからに他ならない。またこうした他地域產土師器がごく少量搬入される背景は、資料上の制約もあって不明な点が多い。

須恵器

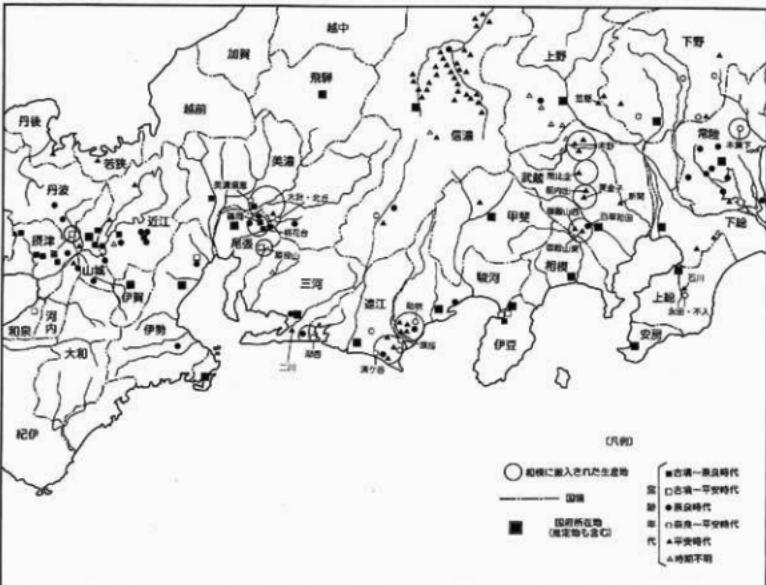
次に、須恵器の研究状況について記す。これまで相模国内には須恵器を生産した窯跡は存在しないとされてきたなかで、近年、武藏・相模の国境の位置づけ如何によっては、南多摩窯跡群の一部が相模国に帰属するという見解が出されている(河野1996)。しかし、相模国内における須恵器の出土地や分布などからは、流通体制を完備した相模国府主導による須恵器生産を否定する意見もあり(田尾1999など)、また県下で出土する須恵器には南多摩窯跡群以外の製品も含まれているので、ここでは搬入土器として扱うこととする。

県下に搬入された須恵器の生産地の推移としては、8世紀前半以前は湖西古窯址群を代表する遠江国産の製品、8世紀後半になると駿河国助宗古窯や武藏国北部比企地方の諸窯製品、さらに9世紀前半(御殿山37号窯式期)以降には南多摩窯製品が広く流通するという理解が一般的である(田尾前掲1995)。しかし、必需材として大量に搬入されるためであろうか、土器全体に占める須恵器の構成比率が、県内各地域間で異なることが指摘されている程度で、その具体的な供給元の同定は未だ果たされていないのが現状といえる。

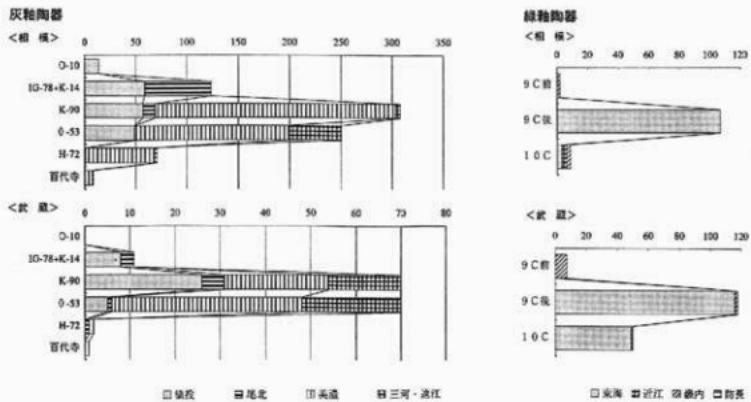
また、土師器と同様に、上に記した産地以外の製品がごく少量搬入されるケースもある。須恵器の諸製品のなかには、平城V期以降に出現し長岡京期の9世紀初頭に盛行する、いわゆる「壺G」と呼称される長頸壺がある。調庸物の堅魚煎汁・甘葛煎汁用容器、軍需用品(水筒)、仏教用具(花瓶)等、用途をめぐっての議論は百花繚乱を呈するもので(山中1997、佐野1998など)、伊豆・駿河地方や北武藏地方の限られた地域で生産されている器種である。県内でも幾つかの出土事例があり、仏教系関連遺物として仏鉢形土器、水瓶・淨瓶、手付瓶他など(灰釉陶器を含む)の器種とともに、富永樹之氏によって昨年集成された(富永2000)。だが、須恵器はそのような特殊な器種に限っての集成作業が始まった段階であって、県下に広く普及している日常食器としての流通実体は未だ不明確といえる。

施釉陶器

最後に、施釉陶器の研究状況について触れておく。発掘調査報告書等において個々の遺跡から出土した資料を中心に分析を加えた考察を除くと、体系的な研究は齊藤孝正・高橋照彦両氏の仕事が挙げられる程度で数少ない。齊藤氏は平塚市四之宮地区を中心とした、県内の主要な遺跡から出土した灰釉・綠釉陶器を概観するなかで、特に10世紀前半(折戸53号窯式期)以降の灰釉陶器には、猿投産の他に遠江産の製品が一定量含まれていることを明言した。また、神奈川県全域における施釉陶器の搬入量の多さは、東海道諸国の中では生産地諸国を除く最大の消費地になる可能性を指摘する(齊藤1993)。一方、高橋氏は東国全域における施釉陶器の流通実体を調べ、施釉陶器が搬入される時期や量、供給元が東海道諸国と東山道諸国との間で異なる様相を明らかにした。施釉陶器の流通量は産地からの距離に伴い遞減する傾向にあるが、灰釉陶器について



第6図 相模に搬入された須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器の生産地分布(田尾1998より)



第7図 県下出土の灰軸・緑軸陶器の時期別変化（高橋1994より・一部改変）

は相模國は東国では信濃國に次ぐ量が搬入されている集計結果も示した(高橋1994)。その他、筆者は緑軸陶器について県下全城における出土様相をまとめたことがある。そこでは、緑軸陶器は官衙や交通上の拠点を中心に分布し、特に四之宮地区には県内全城の7割を超える量が集中する傾向を明らかにした(依田1998)。

まとめ

以上述べてきたように、搬入土器をめぐる研究状況としては产地の特定が可能な製品、もしくは威信材的性格が強く、その分布に何らかの傾向を見出しえやすい製品に限っては、幾つかの論考が発表されている。その一方で、日常雑器として大量に流通していた須恵器・灰軸陶器については、产地分析や統計的研究などは進んでおらず、搬入の実態は不明確という現状であろう。各製品の生産地側での調査・研究が進展してきており、これまでに蓄積された資料を今一度再検討するなど、今後に残された課題が多い。(依田亮一)

引用・参考文献（本文中に明記した文献を除く）

- 國平健三 1979.3『上浜田遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告15
 長谷川厚 1990.12『草山遺跡Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告18
 齋藤孝正 1993.12『神奈川県下の灰軸陶器・緑軸陶器－平塚市を中心として－』『三浦古文化』第35号 三浦古文化研究会
 中村太一 1994.3『古代東国水上交通』『古代東国の人々と社会』名著出版
 高橋照彦 1994.9『東国の大施釉陶器』『古代の土器研究3 施釉陶器』古代の土器研究会
 河野喜映 1996.5『多摩丘陵南側の武藏と相模の国境について』『多摩考古』26 多摩考古学会
 宇野隆夫 1997.2『律令制下の交易』『考古学による日本歴史9 交易と交通』雄山閣出版
 山中 章 1997.11『桓武朝の新流通構造－壹Gの生産と流通－』『古代文化』vol.49 財團法人古代學協会
 依田亮一 1998.5『神奈川県出土緑釉陶器の諸様相－器種・産地別分類と年代的位置付けの再検討－』『神奈川考古』第34号
 田尾誠敏 1998.7『土器から見た相模國』『相模國とその世界』平塚市博物館
 佐野五十三 1998.12『須恵器花瓶の成立－仏の手から婆娑の世界へ－』『静岡県考古学研究』30
 田尾誠敏 1999.3『土器・陶器の変遷と王子ノ台集落』『王子ノ台遺跡II 歴史時代編』東海大学
 富永樹之 2000.5『神奈川県』『古代佛教系遺物集成・関東』考古学から古代を考える会
 佐野五十三 1998.12『須恵器花瓶の成立－仏の手から婆娑の世界へ－』『静岡県考古学研究』30
 田尾誠敏 1999.3『土器・陶器の変遷と王子ノ台集落』『王子ノ台遺跡II 歴史時代編』東海大学
 富永樹之 2000.5『神奈川県』『古代佛教系遺物集成・関東』考古学から古代を考える会

おわりに

奈良・平安時代研究プロジェクトは、考古学の視点から県内における古代史研究に関する成果並びに今後の課題を「神奈川県における奈良・平安時代の考古学的研究—その歩みと今後の視点—」と題して3年計画でまとめた。まず、「研究紀要5」で研究史年表を提示した。年表は官衙跡・寺院跡・集落遺跡とそれから発見された出土遺物とに四分類し、論文及び著作を年代順に編輯した。さらに、主要遺跡の発掘調査やシンポジウムも併せて掲載した。続いて「研究紀要6」から各論に入り、国府の研究、郡衙の研究、集落構造の研究、集落立地の研究、集落変遷の研究を、「研究紀要7」で国分僧寺・国分尼寺の研究、豪族の寺院と山寺、堂、在地土器の研究、撒入土器の研究をそれぞれまとめた。各論は恣意的に選択して、研究の進捗や展開の軌跡を整理し、今後の課題について論じた。

1970年代前半から大規模な開発事業に伴って集落遺跡の面的な発掘が開始され、70年代後半からは市街地化の進む平塚市内、国府域の発掘が頻繁に行われるようになった。そしてそれらの遺跡から出土した膨大な資料によって土器研究や集落研究が進んだ。80年代後半から国分僧寺跡・国分尼寺跡とその周辺の調査が本格的に進められ、90年代後半からは郡衙跡や寺院跡の確認調査も手がけられている。調査量の急増からみて当然とはいって、20世紀第四四半紀ほど県内ほぼ全域で考古学的研究が目覚しく進んだ時代はないであろう。しかし、各論で述べたとおり21世紀に向けて課題も数多く残されている。

具体的には、大住国府の存在は明らかになったが、国府域の範囲確定にとどまり国府部分は確認されていない。大住国府以前の国府の存在やその有力な候補地である高座国府の有無についても議論は分かれる。国分僧寺・国分尼寺については寺域すべてが国指定史跡とされていないこともあって調査方法の確立が望まれる。開発に伴う都筑郡衙跡・鎌倉郡衙跡の発掘調査を皮切りに最近活発に確認調査が進められている郡衙や寺院に関しては資料の増加が待たれるところである。集落研究も集落内の時期変遷は呈示したが各遺構の機能については未だ明確にされておらず、従って集落の性格もおぼろげな評価にとどまっている。他地域であれば当然論じられるべき生産関係や交通関係の遺跡について今回言及していないが、それは該当する遺構・遺物が極めて少ないと神奈川県の特性に起因している。出土遺物についても土器以外は扱っていない。相模川によって東西に二分された東岸域と西相模、さらには三浦半島に関してそれぞれ地域性が認められる。東岸域に関しても武藏国と相模国との差違が明確ではない。生産地である南多摩窯址群に近い相模原市周辺は須恵器が土師器を圧倒して出土しており、土師器が出土量の大半を占める他の地域との比較が必要であろう。そもそも相模型の土師器がどこで生産されたのかさえ判っていない。また、威信材と生活必需材という視点から土器以外の出土品を見直すことも課題の一つであろう。土器のように遺存率が高く現在まで残された遺物に対して、廃棄後大半が失われたと思われる希少な遺物と元来希少だった遺物との比較検討も必要であろう。木製品の出土する低湿地の遺跡の今後の調査にも期待したい。

新世紀に入り、経済不況が深刻化し社会構造の変革が叫ばれている。前世紀末から環境保全にとりわけ注意が払われる傾向が顕著になった。大規模開発とともに進んだ大幅な地形変更を伴う大規模調査時代は終焉を告げようとしている。今後はたとえ開発に伴う発掘調査であってもこれまでの調査例を生かして、その遺跡の特性を予見しながら調査を進めるべき段階に入っていると考えられる。

最後に、本プロジェクトのかなりのメンバーが参加している「相模の古代を考える会」の会員諸氏、特に明石新・荒井秀規・田尾誠敏・中三川昇の各氏からは研究史年表に関連した資料収集をはじめ一方ならぬ多くのご教示・ご指導を得た。記して感謝したい。

神奈川県内の「かわらけ」集成（6）

中世研究プロジェクトチーム

過去5年間に亘り神奈川県内出土の中世かわらけの集成を行ってきたが、これまでに中世の都市域（鎌倉・小田原）を除いて現在報告されている遺跡をほぼ網羅することが出来た。未報告の遺跡の中には注目すべき遺跡がまだ数多くあるが、今回の補遺を一応の区切りとして、県内の様相を概観して現状でのまとめをしておきたい。

1. 中世初頭から前期の様相

ここでは12世紀代から13世紀の様相を概観するが、この時期に該当する遺跡数はあまり多いとは言えない。横浜市金沢文庫遺跡（17）、同称名寺境内（18）、綾瀬市宮久保遺跡（61）、海老名市上浜田遺跡（71）、逗子市池子遺跡群No1-E地点（198）、同No6地点（187）、相模原市新戸遺跡（75）、横浜市西ノ谷遺跡（117）の他、秦野市東田原遺跡、茅ヶ崎市本社A遺跡などが挙げられる。都市鎌倉の一部としてとらえうる金沢文庫遺跡・称名寺境内を除くと、かわらけの出土量は決して多くはない。このため、一般集落遺跡出土のかわらけのみで年代を検討をすることは難しく、共伴する陶器類、および鎌倉での編年を援用して大まかな傾向をつかむこととする。

そこでまず、鎌倉で出土するかわらけの変遷を通してみる。12世紀後半～末葉はロクロ成形のもののみで構成され、内底面は無調整、器壁内外面に強いロクロ痕を残す。大型品は体部が直線的に開くものと丸みを持って内湾するものがあり、前者がより古い様相を持つ。小型品は高台が厚く、底部盛から体部下半が屈曲する。12世紀末～13世紀前半になると外底部に指頭圧痕を残す手づくね成形のかわらけが出現する。器壁は全体的に薄く、平底状底部を持つものが古く、厚手で丸底状のものへと変化していく。ロクロ成形のものは内面調整がなされるようになり、ロクロ痕が前代ほど明瞭ではなくなる。13世紀後半～14世紀前半はロクロ成形のものが、薄く丸い器形へと変化する。手づくね成形のものはさらに厚手で丸い器形に変化するが、次第に出土量が減少し始め、13世紀中にはほぼ消滅する。

上記のようにこの時期のかわらけでは、初期の器壁内外面に強いロクロ痕を残すものからいわゆる鎌倉的な薄手のかわらけへの変遷と、12世紀末葉から13世紀にかけて見られる手づくね成形のかわらけの存在が大きな特徴と言える。これらに共伴する中世前半の特徴的な遺物には、白磁玉縁碗・端反碗・皿、同安窯系青磁碗、龍泉窯系割花文碗などの中国製陶器、猿投・常滑・渥美といった東海系諸窯産の山茶碗・山皿・片口鉢・壺・壺などがある。また、13世紀中葉以降には白磁口禿碗、龍泉窯系青磁蓮弁文碗の出土量が多くなる。

出土量は異なるが、遺物の共伴関係とかわらけの様相は鎌倉以外も大きくは変わらない。まず、最も古い様相を持つかわらけが出土したのは宮久保遺跡である。かわらけは計61点出土しており、手づくね成形のものも含まれ、おおむね13世紀代が主体となる。西ノ谷遺跡では白磁碗・皿、龍泉窯系青磁割花文碗などと共に14点のかわらけが出土している。みな小型品で器高は低く底部が厚い形態で、手づくね成形のものは含まれない。12世紀中葉～13世紀前半のものと考えられる。池子遺跡群では、12世紀後半～13世紀前半の集落と考えられるNo6地点で少量ながら手づくね成形のかわらけが出土している。また、13世紀から集落が現れ

るNo 1-E地点でも手づくね1点を含む数点が出土している。新戸遺跡も13世紀後半~14世紀中葉の一般集落と考えられるが、遺物の量は少なく、かわらけも2点出土したに過ぎない。上浜田遺跡ではロクロ成形のかわらけが29点出土しているが、薄手のかわらけも含まれており、全体では13世紀中葉から14世紀中葉のものと考えられる。東田原遺跡では、多数の掘立柱建物址や鍛冶遺構と共に13世紀代のかわらけが出土しており、手づくね成形のかわらけが伴っている。本社A遺跡では複数の溝から13世紀中頃のかわらけが出土している。

この他、伊勢原市石田源太夫II遺跡(172)、平塚市四之宮下郷遺跡(92)、秦野市小南遺跡(150)、二宮町天神谷戸遺跡(179)等で13世紀代のものと考えられるかわらけが出土している。一方においては、小田原市三ツ保遺跡のように多数の掘立柱建物址によって構成される遺構と共に12世紀末~13世紀代の遺物が出土しながらも、当該期のかわらけが出土していない例もある。

先にあげた遺跡のうち、宮久保遺跡・上浜田遺跡は在地領主の居館ととらえられる。西ノ谷遺跡は古代から続く鍛冶工房址で、12世紀代には区画溝とともに掘立柱建物なども現れる。工房では小札、鎌といった武具・武器類を生産しており、共伴する中国陶磁器の内容などから、居館に準ずる性格を与えられよう。石田源太夫II遺跡・東田原遺跡も居館址の可能性が高い。これに対して、池子遺跡群は周囲を耕地に囲まれた農村の一単位と考えられる。新戸遺跡では区画溝が検出されており、一農村と断定するには判断に迷う部分もあるが、出土遺物も居館にはおよばないため、一農村としておきたい。その他の遺跡は資料が限られており、現段階では遺跡の性格までは判断しがたい。

金沢文庫遺跡・称名寺境内では13世紀後半~14世紀代のかわらけが多量に出土しているが、大半はかわらけ溜まりからの出土であり、おびただしい量のかわらけが一括廻棄されるあり方は鎌倉市中と共に通じており、その立地からも都市鎌倉の一部としてとらえるものである。先にあげた県下の遺跡は、この2遺跡に比して出土量・出土状態が大きく異なる。おそらく鎌倉市中に見られる大量使用・一括廻棄とは、その使用状況も異なったものであったろう。このように都市部以外での出土量は限られているが、居館は居館、村落は村落としてそれぞれかわらけの出土状況が近似している。具体的には手づくね成形のものを伴うかどうか、かわらけの出土量、或いは共伴する陶磁器の組成などによってある程度の階層性を伺うことが出来る。しかし、上に挙げた遺跡の中では、西ノ谷遺跡・池子遺跡群No 1-E地点、新戸遺跡・上浜田遺跡で手づくね成形のかわらけを伴っておらず、現状では単純に手づくねの有無を以って居館と村落の差としてとらえることはできない。この違いは階層差を示すのではなく、中世初頭一手づくね出現以前の遺跡(西ノ谷・池子)と、14世紀以降一手づくね消滅以後の遺跡(上浜田・新戸)という、時期差としてとらえるのが妥当と考えられる。

宮久保遺跡・上浜田遺跡など、鎌倉幕府を支えた武士の本貫地では、出土遺物の種類はある程度そろっていても、その数量は鎌倉とは比較にならない差がある。一般農村となるとさらに量が減るが、しかし、量は減っても中国製陶磁器とかわらけというものが存在する。この出土量の差こそが階層差を現すのだろうが、同時に、遺物の種類に明確な差が見いだせないということは、それぞれの集落間にある程度のつながりが存在したことを見示すものと考えられる。

また、中世前半においては鎌倉周辺への流通機構は未だ整っていなかったと考えられ、14世紀以降に比べてかわらけも含めて、全体的に陶磁器の出土量は少ない。服部実喜が指摘するように鎌倉は物資の集積地であっても、そこから周辺集落へ物資を中継する場としてはそれほど機能はしていなかったと推測される。この時期に鎌倉以外で出土するかわらけも、鎌倉からもたらされたものか、在地産かは未だ明らかにはなっていない。とはいえ、一般農村よりも居館址と考えられる遺跡でのかわらけの出土量が多いこと、および周

辺部で出土するかわらけも鎌倉と同じような時間的な変遷がみとめられることから、これらが鎌倉の影響でもたらされ、変化していったものであることは間違いかろう。しかしながら、その出現期の様相については、11世紀から12世紀前半にかけての土師器の出土例が乏しいこともあり不明である。鎌倉でもその周辺部においても、古代の土器からかわらけへの系譜は、中世陶磁器研究の大きな課題として依然残っている。

さらに中世前期の特徴として、13世紀代までは墓地、やぐら等でのかわらけの出土例が乏しいことが挙げられる。14世紀以降、これらの出土例は急速に増えるため、13世紀末から14世紀にかけてかわらけの使用形態に大きな変化があったことが伺える。

なお、後述するように鎌倉の編年は共伴する陶磁器との関係から見直しが成される可能性があり、ここで述べた遺跡の年代的位置づけも若干修正される可能性があることを指摘しておきたい。

（鈴木庸一郎）

2. 中世前期後半の様相

ここでは13世紀後半から15世紀前半までを視野に入れながら、14世紀代の様相を概観する。

県東部においてはこの時期の出土例は少なく、鎌倉周辺においても中心部を外れると出土量は激減する。横浜市港北区山王山遺跡（14）では明確な遺構を伴わないが、小形のかわらけが出土している。三浦半島では、逗子市池子遺跡群1-B地点や1-C地点でこの時期のかわらけが出土しているが、量的にはそれ程多くはない。横須賀市八幡神社遺跡（43）は12世紀末から15世紀にかけての遺跡であるがこの時期のかわらけが多く出土していて、15世紀代を中心とする横須賀市蓼原東遺跡（45）と共に三浦半島海岸部の様相を窺い知ることが出来る。三浦市間口洞穴（50）は墓地に関わるものと考えられるが、14世紀後半から15世紀前半と推定されるかわらけが60点も出土していて、周辺で対比できる資料が出土することが期待される。

県中央部では、海老名市上浜田遺跡（71）は13世紀後葉から14世紀中葉の代表的な居館址と推定される遺跡であり、まとまった量のかわらけが出土している。伊勢原市ノ引地区遺跡群（145・146）も居館址と推定され、この時期のかわらけを出土している。このほか内陸部では、綾瀬市吉岡遺跡群や相模原市当麻遺跡（74）、同新戸遺跡（75）、平塚市御所ヶ谷遺跡（91）、伊勢原市三ノ宮・下谷戸遺跡（178）、同東富岡・北三間遺跡（145）、同神戸・上宿遺跡（148）、秦野市小南遺跡（150）、同鉢ノ木遺跡（152）遺跡などで出土している。海岸部に近い沖積低地や砂丘部では、茅ヶ崎市上ノ町遺跡（60）、平塚市四ノ宮下郷遺跡（92）・同豊田本郷遺跡（93）、同中里E遺跡（94）があり、県西部でも二宮町天神谷戸遺跡（179）、小田原市三ツ俣遺跡（180）等で出土している。これらの遺跡では、一部では13世紀代からの遺物も見られるが、ほとんどがこの段階になって青磁、白磁などの船載陶磁器や瀬戸、常滑などの国産陶磁器、土器類など多様な遺物を出土するようになる。しかし、いずれも総体的な遺物の出土量は少なく、かわらけ自体も1、2点から数点に過ぎない。かわらけの希少性は前段階からの継続する傾向もある。この時期の遺跡では、その後半段階か次の15世紀段階まで継続すると思われる遺跡は数少なく、次の段階の集落とは断続している。

この時期に特徴的な遺物としては、龍泉窯系青磁碗・折縁皿・盤、白磁口禿碗・皿、青白磁梅瓶、瀬戸窯灰釉折縁深皿・卸皿・鉢・摺鉢・四耳壺・瓶子、常滑窯摺鉢・壺・甕、瀬戸窯壺・甕、山茶碗窯片口鉢、東播系窯片口鉢、備前窯摺鉢・亀山窯壺、伊勢系鍋、石鍋などがあり、この段階が生産地や器種構成の多様さにおいて最も充実する時期もある。しかし14世紀後半になると中国製陶磁器は減少し、瀬戸窯灰釉平碗・灰釉小皿・折縁深皿などが出土する比率が高まる。一方、鎌倉を中心とするかわらけの編年においては、13

世紀末前後における手づくねかわらけの消滅と、それとは同時に深い器形で側面觀が丸味を有するいわゆる薄手丸深系のかわらけが出現し、これが14世紀代を特徴付ける典型的な器形であるとされている。この薄手丸深系のかわらけについては、鎌倉では13世紀末に出現するが、始めは坏形のみに見られるものが、14世紀前半には坏形土器の主体となると共に皿形の中にも顯著に見られるようになり、14世紀後半になると坏形、皿形いずれにもその主体を占めるという。漆器とかわらけの器形変化に注目した大河内魁は、両者の器形には相間性があり、かわらけが漆器の影響を受けていると指摘し、13世紀末から14世紀前半にその大きな変革期があるとしている。県内においても、この薄手丸深系のかわらけの存在が中世遺跡の展開を考える上で重要な視点となっている。それは前段階における遺跡の希少性とは異なり、この段階での広範囲わたる遺跡での出土に示されるように、かわらけを含めた舶載・国産陶磁器類がより広い階層にも保有されるようになつたと考えられること、またこれらを供給する生産・流通基盤がさらに整備されたことを示している。

既に服部実喜が指摘するように鎌倉と周辺地域との間には遺物の質量に格差があり、多様な器を大量に消費する都市鎌倉と比較的単純な組成の食器を少量使用する周辺農村地域という二つの様相に明確に分けることができる。さらに周辺の農村地域では需用者の階層や遺跡の性格によって、食膳具と貯蔵具の構成に格差が見られるという。確かに、13世紀後半から14世紀前半にかけては鎌倉の発展と流通網が拡大した時期と考えられ、先にあげた各遺跡において多様な出土遺物が認められ、その構成が最も充実した段階と考えられる。服部によれば、この時期にみられる舶載陶磁器や西国産土器、陶器の多くは都市鎌倉の需要に応えたもので、鎌倉は東国における流通の窓口ではなかったという。ただ近年各地の遺跡で東播磨系や常滑窯の捏鉢、伊勢系鍋などの出土例が増加しており、少なくとも相模では一般的な様相となりつつある。またこの時期の特徴とされる薄手丸深系のかわらけでも直接鎌倉からもたらされたと考えられる良質な胎土で整った器形を持つものと、模倣品と見られるやや不良な胎土で器形の崩れたものが認められることから、単純に鎌倉からの一元的な供給と考えるよりも在地周辺でのかわらけの生産を考慮しておく必要があろう。

さて鎌倉におけるかわらけの編年については既に多くの研究がなされ、その変遷については研究者の間で大筋では共通した流れとして認められてきている。しかし、13世紀後半から14世紀前半のかわらけの位置付けについては、近年在地のかわらけと搬入される陶磁器との年代観の開きが目立つようになってきている。馬淵和雄は鎌倉市内で主体的に出土する青磁・白磁が、その年代観の根拠とされてきた韓国新安沖沈没船出土の陶磁器よりも古いことを指摘している。また、年代的な定点の一つと目される今小路西遺跡（御成小学校内）では、北谷3面焼土層の年代について報告者の河野真知郎は1333年（元弘三年）の鎌倉幕府滅亡のものと推定する。これに対して馬淵はこの火災層より出土する青磁類が新安出土のものより一段古いものであり、白磁では無文口禿碗皿が非常に多く出土し、中でも口縁部が外反するものが目立っているがこれは新安遺物中には見られないものであるとする。さらに常滑の捏鉢、壺が赤羽一郎・中野晴久編年の5・6a期に相当し13世紀第2～3四半期に位置づけられ、瀬戸が古瀬戸前期III・IV形式に属するものが多くこれも13世紀中葉～後半の年代が与えられることなどから、この火災層の年代を13世紀第3四半期頃とするのが妥当であると主張している。この馬淵の年代観に従うと、これまで14世紀中葉から後半に位置づけられてきた薄手丸深系のかわらけは大半が13世紀末から14世紀前半に収まってしまうことになる。

一方、14世紀代のかわらけについて器形変化を検討した宗臺秀明は、その系統的な変化を4小期に細分した変遷を示した。また、嘉慶二年（1327）に立柱された建長寺境内法堂出土かわらけとの対比から、御成小学校北谷3A面を1327年頃に比定している。しかし、薄手丸深系の終末時期については明確にされていない

い。服部実喜は建長寺境内庫裡改築に伴う調査で、応永三十三年（1426）の火災に比定された第Ⅳ期B造構面上の炭層から出土したかわらけよりも、薄手で体部の丸みがより強いものを主体としているとして同じ第Ⅳ期南側斜面出土のかわらけを15世紀初頭に位置づけている。

現在このような年代的な齟齬については、鎌倉の研究者の間でも共通の認識となっていて再検討が進められているということである。ここでは、今後その検討結果が発表されることを待つことにして、これまでの年代的位置付けに沿って進めてきた。しかし、13世紀代を中心見られるいわゆる「手づくねかわらけ」の消滅と「薄手丸深」系統のかわらけの消長に関しては、該期における遺跡の展開を考える上で今後重要なポイントになると考えられる。これらの位置付けがどう変わっていくのか、大きな関心を持って注目したい。

（宍戸信悟）

3. 中世後期15世紀～16世紀代の「かわらけ」の様相

ここでは、15世紀～16世紀代を中心に概観してみたい。この時期のかわらけを出土する遺跡としては、集落跡と居館または屋敷としてとらえられる遺跡、城館址、やぐらなどの墓地、その他特殊な場所等に分けることができる。この時期県内では、前代の後半から引き継ぐ様相ではあるが、15世紀前半にあたるかわらけの出土量が非常に少ない。これに対して15世紀中頃から16世紀代になると県内各地でかわらけの出土量が急増する傾向が受けられ、特に集落では溝・井戸・土壙墓などに集中する傾向が認められる。15世紀以降の戦国期を中心とした時代には、武家儀礼として行われた、「式三獻」においてかわらけが使用されたことが明らかにされている。「式三獻」では、儀礼とともに大規模な酒宴を伴い、大小法量の違うかわらけが大量に使用されたことが明らかにされている。儀式に使用されたかわらけが、後に廃棄されたり、儀礼に出席した人物により各地にもたらされたと考えられる。このこともかわらけの出土量の増加の一因とも考えられる。

この時期に該当する遺跡としては、県東部では川崎市植之台遺跡（4）・大和市神明若宮地区内遺跡（136）・座間市米軍キャンプ座間地内遺跡（169）・逗子市池子遺跡群（185・188・189）・横浜市茅ヶ崎城址（7）・三浦市新井城址（201）・鎌倉市玉繩城址（21）・横須賀市藤原東遺跡（45）などがあげられる。植之台遺跡・神明若宮地区内遺跡・座間市米軍キャンプ座間地内遺跡・池子遺跡群などは、居館または屋敷としてとらえられる遺跡で、ある程度まとまった量のかわらけが出土している。しかし、前述したように15世紀前半にあたるかわらけの出土している遺跡はない。共伴遺物としては、明染付・青磁碗皿・瀬戸窯碗・皿・常滑窯鉢・甕などの製品が数多く出土していて、大体15世紀中頃～16世紀代に位置づけられる。茅ヶ崎城址・新井城址・玉繩城址などは中世後半期の城館址である。このうち茅ヶ崎・新井の両城址は後北条氏の支配が相模国に広まる以前の城郭であり、15世紀後半～16世紀代のかわらけが出土している。一方玉繩城址は後北条氏の支城の一つであり、16世紀後葉～末葉のかわらけが出土している。三浦半島の海岸部に位置する藤原東遺跡は、「浜小屋」的な施設を中心とした漁労・採貝活動の場ととらえられていて、15世紀後半を中心としている。

茅ヶ崎城では、内底面に満巻文がみとめられる特徴的なかわらけが出土している。このかわらけは、静岡県蘿山町の蘿山城や、伊勢原市の上町並遺跡から同様のものが出土している。蘿山城は北条早雲が構築し、伊豆における北条市の拠点であった城である。上町並遺跡は太田道灌の最期の地「糟屋館」の有力候補地とされる丸山城の町家部分の遺跡であるとされる。特徴的なかわらけの出土は、武藏国、相模国、伊豆国という三国を越えて流通したことが指摘できる。

県西部では、茅ヶ崎市上ノ町遺跡（60）、松田町松田城址（115）、津久井町津久井城址（155・204）等の遺跡が

あげられる。上ノ町遺跡は居館または屋敷を中心とした集落遺跡で、200点以上のかわらけを出土している。松田城と津久井城は、共に後北条氏の支城であり、15世紀後半～16世紀代のかわらけを出土している。特に津久井城では、16世紀代になる小田原城下で見られる京都系土器が出土する遺跡である。

以上の15世紀～16世紀代のかわらけの形態的な特徴については、既に服部実喜が詳細な分類を行っている（服部1995・1996・1998）。前代にあたる14世紀代のかわらけは、全体的に体部の丸みが強い薄手の大型のかわらけが主流であったが、15世紀代になると体部が全体的に厚手となり、なおかつ直線的に開く傾向が見られるようになる。さらに時期が下がるにしたがって、体部の厚手化が進み、口径に比べて器高が高くなり、側面形が逆台形状を呈する器形のものが出現する。また、小型の製品では体部が直立するものも現れる。15世紀後半になると、外周の強いナデにより、見込の中央部が盛り上がる製品が現れる。16世紀のかわらけは、中型の製品の器高が全体的に低くなり、底部がやや厚くなる。また、内面の調整が全体的に粗雑化し、底部と体部の境が凹線状に窪んで中央部がさらに盛り上がる傾向が見られるようになる。このように15世紀～16世紀代の様相の中で、2点の大きな変化が認められる。第1点目は、14世紀代から15世紀代への過程で器壁の厚手化が進み、以後厚手の製品が主流となる点である。第2点目は、15世紀から16世紀にかけて見られる見込の盛り上がりである。これが、15世紀～16世紀の大きな特徴である。

共伴遺物では、15世紀代に入ても14世紀後半代と同様に中国製陶磁器の割合が低く、瀬戸窯・常滑窯製品を主体とした構成をなしている。15世紀末～16世紀代になると、中国陶磁器では明染付が出現し、瀬戸美濃大窯製品の流通が始まる。中国製陶磁器である明染付や青磁碗皿・食器具や調理具として瀬戸美濃窯碗・皿・擂鉢・貯藏具として常滑窯など東海諸窯の製品を主体とした食器具・調理具・貯藏具の使用が一般的となり、上記に遺跡においてもこの傾向が見られる。

県内ではこの時期に後北条氏の支配を受けているため、その中心となる小田原市内で出土するかわらけが重要な指標となってくる。小田原は、北条早雲を初代とする後北条氏の居城として、5代100年にわたって政治の中心となっていた場所であり、中世後半においては関東の中心ともなっていた。小田原市内では、城下を中心とした各遺跡でかわらけが出土しているが、15世紀～19世紀までの各時代の遺物により、陶磁器を中心としてⅠ期からⅦ期の7期の『小田原編年』が組まれ、城下の変遷をとらえる方法として利用されてきた（塚田・諫訪間・大島・山口1988・1995）。

かわらけについても服部実喜・山口剛志により編年が示されている。小田原の中でも16世紀第2四半期以降に出現する体部下半や底部外面に指頭圧痕を残すかわらけは、在地に見られる從来のロクロ成形のかわらけとは異なるものである。これらのかわらけは、粘土板の折り曲げや粘土糰の巻上げにより成形されたものであり、京都系土器の模倣ととらえられている。特に大型のものや中型の製品は、器高が比較的低く、平底状を呈する。大型・中型の製品は、時期が下ると底部内面のナデが棒状の工具を用いた沈線に変化し、体部の傾きも次第に立ち上がって傾向が見られる。これに対して小型の製品は、器高が比較的高く、丸底状を呈する。一方、在地の伝統的なロクロ成形のかわらけは、厚手の製品が中心であったが、この成形技法の異なるかわらけの出現とともに薄手で器高の高いものが主体となっていくとされている。

この小田原で見られたかわらけは、県内の津久井城からも出土している。これは、津久井城周辺で作られたものではなく、本城である小田原城から領国内の各支城に対して搬入されていったものであるとされている（服部1998）。同じような状況が武藏の忍城・岩槻城・河越氏館・八王子城、下総の葛西城等で確認されていて、この状況を裏付けることとなった（服部前掲）。

以上15世紀～16世紀におけるかわらけの様相を概観してきた。この時期においては、前代からにおいて大型で薄い器形の製品から、中型と小型を中心とする厚手の製品へと変化していく。一方、16世紀代に小田原や特定の城址で認められた京都系土器は、城館址以外で出土するかわらけとは形態的に大きな違いを示しており、後北条氏の本城と支城との関係、家臣の往来による移動などと大いに関係するものだと言える。しかし、これらの製品の出現は小田原城と後北条氏の支城のみに見られることであり、その他の遺跡では依然としてロクロ成形の厚手のかわらけが使用されていくことになる。

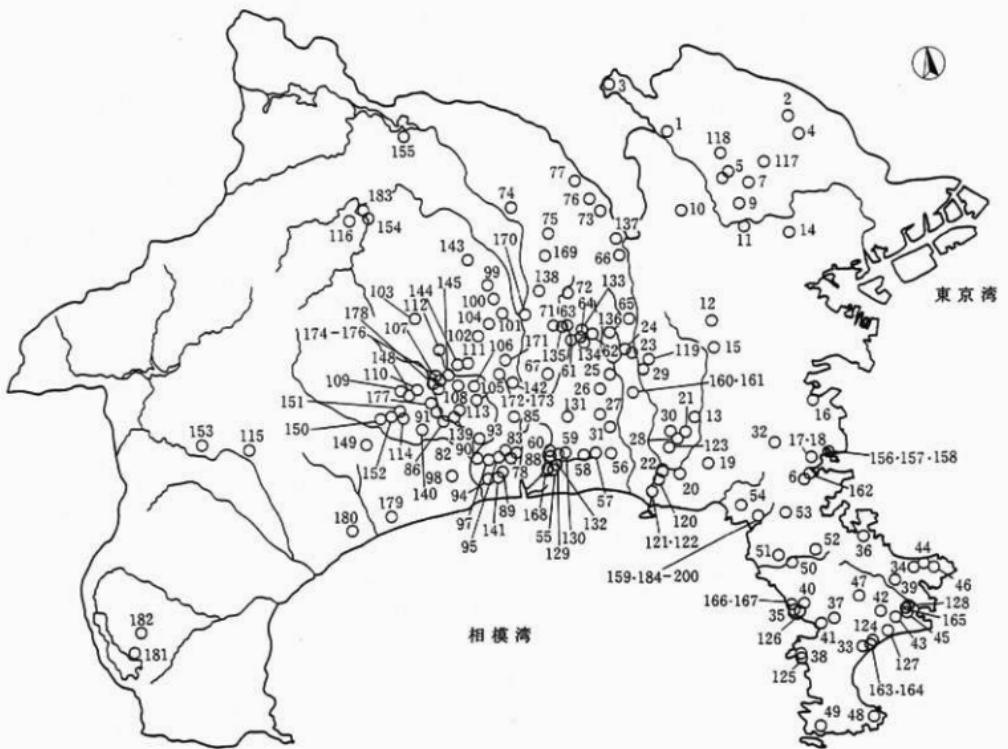
中世後半におけるかわらけの大きな変化は、形態的な変化のみならず、流通経済の変化や小田原北条氏の支配体制に起因して、直接の支配地である城館址とそれ以外の集落址などの場所で出土するかわらけの相違を生み出すこととなった。

この後近世以降になるとかわらけは、16世紀のかわらけと同様に全体的に粗雑化し、在地で製作されたものが流通する。一方東京を中心とした江戸遺跡では、江戸系かわらけと呼ばれる全体的に薄手の皿状のかわらけが流通するようになり、神奈川県内の近世遺跡でも出土するようになってくる。（宮坂淳一）

引用・参考文献

- 赤羽一郎・中野晴久 1994 「生産地における編年について」『中世常滑焼をオホテ』資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所（のり「常滑焼と中世社会」小冊子No.2所蔵）
- 大河内勉 1993 「漆器とかわらけの器形比較と相関性について」『鎌倉考古』No.26
- 大河内勉 1991 「祇園道跡発掘調査報告書—鎌倉市祇園町330番—1地点—」祇園道跡発掘調査団
- 河野真知郎 1986 「鎌倉における中世土器相」『神奈川考古』第21号
- 河野真知郎 1986 「常滑焼と中世土器の基礎的研究」XIII 日本中世土器研究会
- 斎木秀雄 1983 「出土かわらけの編年について」『研修造場用地発掘調査報告書』研修造場用地発掘調査団
- 斎木秀雄 1987 「かわらけの変遷と伴出遺物」『鶴岡八幡宮境内遺跡発掘調査報告書』II 鎌倉市鶴岡八幡宮
- 斎木秀雄 2000 「遺構、遺物から見る南北朝期の鎌倉」『第19回中世土器研究会資料集』日本中世土器研究会
- 清水泰徳 1993 「かわらけ」考（二）今一小路西道跡出土資料に見る中世前期の土器様相とその画期的検討－『中世都市研究』第2号 中世都市研究会
- 清水泰徳 1993 「鎌倉市今一小路西道跡出土の戦国土壌－括資料」『考古論叢神奈川』第2集 神奈川県考古学会
- 京臺秀明 1992 「中世、14世紀かわらけの変遷」『考古論叢神奈川』第1集 神奈川県考古学会
- 京臺秀明 1996 「遺物の編年」『横小路周辺遺跡二階堂字横小路110番3地點一水福寺周辺遺跡の調査－』横小路周辺遺跡発掘調査団
- 京臺富貴子 1991 「統計処理による鎌倉出土のかわらけ」『中世都市研究』第1号 中世都市研究会
- 京臺富貴子 1996 「鎌倉・今一小路西道跡（御成小学校内）の瀬戸窯製品について－古瀬戸前期から後期までの出土様相－」『財团法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第4編
- 瀬戸市埋蔵文化財センター 1997 「瀬戸・美濃系大窯とその周辺 大生窯の成立と展開」展示図録
- 田代郁夫 1990 「第5章まとめ－中世かわらけについて－」『昭和63年度瀬戸市内急傾斜地崩壊対策事業にともなう発掘調査報告書』並目遺跡内やぐら・公園敷地内やぐら・十二所福袋路遺跡内やぐら』同発掘調査団
- 田代郁夫 1995 「中世都市鎌倉における道路の画期と出土陶磁器」『青山考古』第12号 青山考古学会
- 田代郁夫・田畠和子 1996 「かわらけ編年基礎資料（1）一天王寺やぐら出土の「かわらけ」と瀬戸仏華瓶－」『東国歴史考古学研究所通報』No.1
- 服部敬史 1997 「問東・甲信」「國立歴史民俗博物館研究報告」第71集
- 服部敬史 1999 「東国における15・16世紀の土師器皿様相」『八王子市の歴史と文化』第1号
- 服部実喜 1984 「中世鎌倉における出土かわらけの編年の位置付けについて」『神奈川考古』第19号 神奈川考古同人会
- 服部実喜 1985 「開東地方出土の輸入陶磁器について」『神奈川考古』第20号 神奈川考古同人会
- 服部実喜 1985 「中世鎌倉における陶器構成の時代的変遷」『貿易陶磁研究』No.5 日本貿易陶磁研究会
- 服部実喜 1992 「南武藏・相模における中世の食器様相（1）－中世初頭の様相－」『神奈川考古』第28号 神奈川考古同人会
- 服部実喜 1994 「南武藏・相模における中世の食器様相（2）－中世前期の様相－」『神奈川考古』第30号 神奈川考古同人会
- 服部実喜 1995 「南武藏・相模における中世の食器様相（3）－中世後期の様相－」『神奈川考古』第31号 神奈川考古同人会
- 服部実喜 1995 「南武藏・相模における中世の食器様相（4）－中世後期の様相－」『神奈川考古』第32号 神奈川考古同人会
- 服部実喜 1997 「中世都市鎌倉と周辺地域出土の瀬戸窯製品」『財团法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯
- 服部実喜 1998 「南武藏・相模における中世の食器様相－中世後期の様相－」『神奈川考古』第34号 神奈川考古同人会
- 服部実喜 1999 「土器・陶磁器の流通と消費」『小田原市史通史編原稿・古代・中世』 小田原市
- 藤沢良祐 1993 「瀬戸古窯址群III・古瀬戸前期様式の編年－」『財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第3輯
- 堀田季博 1997 「神明若宮地区内遺跡C 地点出土のかわらけについて」『神奈川県大和市神明若宮地区内遺跡』神明若宮地区内遺跡発掘調査団
- 井澤透彰 1992 「近世かわらけについて」『駒澤院大學考古資料館紀要』第8輯
- 馬潤和雄 1985 「かわらけ」『向井柄遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 馬潤和雄 1997 「鎌倉」『國立歴史民俗博物館研究報告』第71集
- 馬潤和雄 2001 「鎌倉・今一小路（御成小学校内）・北谷3面焼土層下－青磁」『季刊考古学』75 雄山閣
- 山口剛志 1991 「小田原城とその城下出土のかわらけについて」『小田原市郷土史館研究報告書』No.27
- 山口剛志 1994 「小田原城出土のかわらけについて」『江戸在地土器の研究』II 江戸在地土器研究会

第1図 江戸川流域のがわらけ出土遺跡分布図



第1表 県内かわらけ出土遺跡名一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	東柿生小学校内遺跡	67	本郡中谷津遺跡	134	びわみ堂遺跡
2	新作小高台遺跡	68	本郡遺跡KSE地区	135	長泉寺遺跡
3	黒川地区No.11遺跡	69	本郡遺跡SKS地区	136	神明若宮地区内遺跡
4	植之台遺跡	70	本郡遺跡KOE II地区	137	下鶴間城山遺跡
5	綾瀬寺北遺跡	71	上浦田遺跡	138	国分尼寺北方遺跡
6	六浦北都遺跡	72	かしわ町駅前遺跡	139	山王久保遺跡第8地点
7	茅ヶ崎城跡	73	中中遺跡	140	夷田・北金日遺跡
8	虚空藏山遺跡	74	当麻遺跡	141	高林寺遺跡第12地点
9	上の山遺跡	75	新井遺跡	142	愛甲宿遺跡第2地点
10	長光砲今遺跡	76	相模原市201遺跡	143	中萩野成井田遺跡
11	筑前地遺跡	77	古瀬B遺跡	144	東富岡・北三間遺跡(No.4)
12	中村宮・谷遺跡	78	高幡寺遺跡	145	上柏原・ノリノ道跡(No.11)
13	民尾台古跡	79	高橋A遺跡第11地点	146	上柏原・ノリ西道跡(No.12東)
14	山王山遺跡	80	高橋寺遺跡K4地区	147	三ノ宮・下横領原遺跡(No.12西)
15	舞岡リサイクルパーク内遺跡	81	高橋寺遺跡K5地区	148	神戸・上宿遺跡(No.15)
16	長昌寺御塚穴群	82	岡崎城A・城山横穴墓群	149	中里遺跡(No.31)
17	金沢文庫遺跡	83	林D遺跡第3地点	150	小南遺跡(No.28)
18	称名寺焼内	84	林D遺跡第4地点	151	北矢名蛇久保遺跡(No.25下)
19	白山藤原の道跡	85	丹羽城跡	152	跡ノ木道跡(No.27)
20	手広八反畠遺跡	86	上ノ八反畠遺跡第4地点	153	河村城跡第4地点
21	玉輪城跡	87	大矢原遺跡第2地点	154	馬場遺跡(No.6)
22	川名49番地横穴墓群	88	大矢原遺跡第3地点	155	津久井城跡
23	高倉南上遺跡	89	桶川前A遺跡第2地点	156	瀬戸町やぐら群
24	高倉遺跡	90	御器所D遺跡第1地点	157	六浦三段地区やぐら群
25	藤沢市No.296遺跡	91	御器所・谷遺跡	158	金沢区No.52(上行寺裏)遺跡
26	藤原熊野佐尻沢地内遺跡	92	四之宮下町遺跡	159	松本谷戸遺跡
27	大庭城跡	93	豊田小郡遺跡	160	藤沢市No.419遺跡第1地点
28	二云寺晝跡	94	中里E遺跡	161	藤沢市No.419遺跡第3地点
29	今田遺跡	95	御器所A遺跡第3地点	162	和田山やぐら群
30	渡内清跡	96	御器所A遺跡第9地点	163	熊野神社下遺跡
31	西部No.9地点遺跡	97	新町遺跡	164	長岡南道跡
32	釜利谷やぐら遺跡	98	阿蘇谷遺跡	165	八幡神社遺跡
33	大町谷地跡B地点	99	及川河ノ下遺跡	166	十二所神社遺跡
34	宮の谷貝塚	100	及川河底流遺跡	167	浜(产品満)遺跡
35	佐島・芝中世墓地	101	妻田中村遺跡	168	本所A遺跡
36	竜本寺前	102	菅野今1遺跡	169	木草ヤマツツノ間内地内遺跡
37	太田和田跡	103	七沢沖出遺跡	170	四大頭道跡
38	長井台地跡群	104	深水高坪遺跡群	171	恩名原遺跡
39	上吉井遺跡B地点	105	沼口地区遺跡群	172	石田・源太夫I遺跡
40	長坂やぐら群	106	下横谷地区遺跡	173	石田・源太夫IV遺跡
41	芝下遺跡	107	郡家大石台倉庫内遺跡第2地点	174	船上原遺跡
42	岩戸御廟寺	108	殿内遺跡	175	東大竹下原遺跡
43	八幡神社遺跡群・八幡神社前地点・八幡神社遺跡	109	三ノ宮・上栗原遺跡	176	池端地区遺跡群
44	中馬船跡	110	三ノ宮・下尾崎遺跡	177	笠置・谷ノ口遺跡(No.18・19・43)
45	蓼原東遺跡	111	成瀬第二地区道路群	178	三ノ宮・下谷口遺跡(No.14)
46	小坂第1遺跡	112	日向新田遺跡	179	天神谷戸遺跡
47	往吉遺跡	113	岡崎城跡	180	三ツ俣道跡(G地区)
48	岡口遺跡	114	砂田台遺跡	181	大芝道跡
49	晴海横穴群	115	松原城址	182	駒ヶ岳山頂遺跡
50	閻門遺跡	116	長根寺址	183	宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷遺跡(No.8)
51	下山1世帯墓地	117	西ノ谷遺跡	184	池子遺跡群No.1-B地点
52	後山遺跡	118	開削地区遺跡	185	池子遺跡群No.1-D地点
53	神武寺境内	119	中ノ宮北遺跡	186	池子遺跡群No.1-C地点
54	名越遺跡	120	川名森久地区遺跡群	187	池子遺跡群No.6地点
55	宮ノ瀬遺跡	121	大瀬太遺跡	188	池子遺跡群No.7 墓塚東地区
56	折戸遺跡	122	片瀬大源太遺跡	189	池子遺跡群No.7 地点西地区
57	大蔵C遺跡	123	本在寺遺跡	190	池子遺跡群No.7 墓塚北側調査区
58	六間D遺跡	124	大町谷東遺跡	191	池子遺跡群No.15地点
59	四辻E遺跡	125	長浜ノ上遺跡	192	池子遺跡群No.17地点
60	上ノ町遺跡	126	十二所神社遺跡	193	池子遺跡群No.18地点
61	宮久保遺跡	127	良因南遺跡	194	池子遺跡群No.8 地点
62	早川城址	128	八幡神社遺跡	195	池子遺跡群No.9 地点
63	五社神社遺跡	129	矢張金山遺跡	196	池子遺跡群No.5 地点
64	早川天保箱遺跡	130	西久保坂戸遺跡	197	池子遺跡群No.19地点
65	深見帝社前遺跡	131	白木保遺跡	198	池子遺跡群No.1-E地点
66	深見城跡	132	上ノ町・広町遺跡	199	池子遺跡群No.12地点
		133	平川城跡	200	池子遺跡群No.4 地点

例言

1. 本集成は、2001年10月までに刊行された遺跡発掘調査報告書に基づき、神奈川県内出土の「かわらけ」を集成したものである。

2. 集成表の項目は次の通り。

(1) 番号：表は遺跡ごとの集成である。遺跡番号は昨年度分から引き続いており、図版の番号に対応している。

(2) 遺跡名：引用文献記載の遺跡名を示す。

(3) 所在地：引用文献記載の所在地を示す。

(4) 出土遺物：「かわらけ」が出土した遺物名を示す。

(5) 出土点数：引用文献の図版に掲載されているもの、および文中に数量の記載があるものを合計した。

(6) 伴出遺物：引用文献記載の伴出遺物を示す。収録にあたって名称を統一した。

(7) 文献番号：文献一覧の番号に対応する。番号は昨年度から引き続いている。

3. 図版については次の通り。

(1) 縮尺 1/6

(2) 実測図右側の数字は上から、口径・底径・器高を示す。なお、文献中図版のみで、法量記載のないものについては省略した。

(3) 図版は当該文献からの引用であるが、収録にあたり再トレースを行っている。

第2表 神奈川県内のかわらけ出土遺跡一覧表（補遺）

番号	遺跡名	所在地	出土遺物	出土点数	伴出遺物	文獻番号
201	茅ヶ崎城	横浜市都筑区茅ヶ崎町東2丁目25	北郭 北郭 30T 中郭 建物 1 中郭 建物 3 中郭 建物 5壁穴 中郭 建物 7 中郭 土坑 1 中郭 土坑 2 中郭 土坑 3 中郭 土坑 4 中郭 土坑 5 中郭 土坑 8 中郭 土坑 9 中郭 土坑 13	5 1 1 3 3 1 3 1 1 1 4 2 2	常滑窯 同安窯系青磁組 常滑窯 常滑窯 常滑窯 常滑窯 常滑窯 常滑窯 常滑窯 常滑窯 常滑窯 常滑窯 常滑窯 常滑窯	186
202	和田山やぐら群	横須賀市逗子本町1丁目10番地	第1号やぐら	5		187
203	新井城	三浦市小網代	土壤 ビット群 遺物包含層	1 2 4	龍泉窯系青磁後花口・高台付皿 白磁皿、明治付皿、瀬戸美濃窯灰釉丸皿	188
204	西久保・広河遺跡	茅ヶ崎市西久保996番地外	79号土坑 83号土坑 22号溝 145号溝 187号溝 401号溝 47号落ち込み 1地点遺構外 2地点遺構外 7地点遺構外	1 1 1 1 2 1 1 2 1 4	山茶碗片口跡 常滑窯 山茶碗跡	189
205	浜之郷・本社A遺跡	茅ヶ崎市浜之郷934番地外	1号溝 2号溝 3号溝 5号溝 6号溝	1 1 2 4 12		190

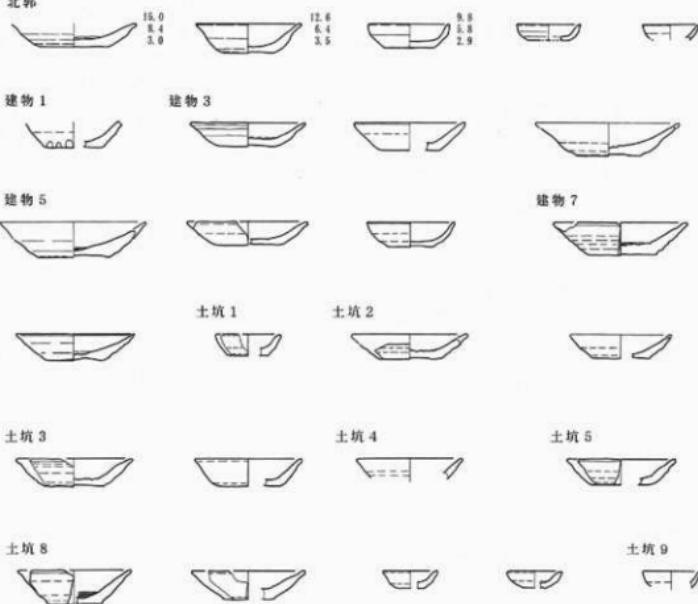
番号	遺跡名	所在地	出土遺構	出土点数	伴出遺物	文献番号
206 川田前遺跡	厚木市旭町2丁目 1261番外		第1期	1	龍泉窯系青磁蓮弁文碗・刻花文碗・折線鉢・瀬戸窯鉢輪様鉢・瀬戸美濃窑長石釉皿・跳ね天目茶碗・常滑窯片口鉢・堺白磁碗・龍泉窯系青磁蓮弁文碗・瀬戸窯灰釉平碗・灰釉怪形小皿・人子・常滑窯山茶碗・片口鉢・堺・瀬美窯甕	191
			第2期	3		
			第3期	2		
			井戸	1	龍泉窯系青磁蓮弁文碗・常滑窯山茶碗・片口鉢・堺・瀬美窯甕	
207 東町2番	厚木市東町2番		第9～11遺構断面	19	明染付	192
208 原之宿遺跡	伊勢原市板台3丁目 2000番地外		1号段切状遺構	1		193
209 東田原中丸遺跡	秦野市東田原		建物跡	21	白磁、青磁、国産陶器	194
210 津久井城	津久井郡津久井町 根小屋字城坂223		F-5区焼土面	5	瀬戸美濃窯碗	195
			F-4区Ⅱ層下面	2		
			A-4区	1	陶器壺	
			1号壺	16	明染付瓶	
			2号壺	1		
			G-4区	2	瀬戸美濃大窓溜鉢	
			8号壺	1		
			1号方形敷石	1		
			H-5区	1		
			6号石組	1		
			G-6区	3	明染付瓶、	196
			F-4区西側トレンチ	16	瀬戸美濃大窓溜鉢	
			20号窯	6		
			F-5区	3	瀬戸美濃大窓灰釉皿	
			E-5区	1		
			8号甕	2		
			表探	2		
			G-5区	3		
			1号塗罐		瀬戸美濃大窓天目茶碗、	
			F-3区東側トレンチ	1	白磁甕	
			1号帆状遺構	1		
			2号壺	1		
			22号窯	1		
			H-4区	1		

文献一覧

- 186 財団法人横浜市ふるさと歴史財団 2000 「茅ヶ崎城Ⅲ」
- 187 財団法人かながわ考古学財団 2001 「和田山やぐら群遺跡Ⅱ」
- 188 武藤康弘 1994 「神奈川県三浦市新井町出土の在地系土器」「江戸在地系土器の研究Ⅱ」 江戸在地系土器研究会
- 189 財団法人茅ヶ崎市文化振興財団 2000 「西久保・広町遺跡」「茅ヶ崎市文化振興財団調査報告2」
- 190 藤井秀男 1999 「浜之郷・本社A道路第7次調査」「第10回茅ヶ崎市道路調査発表会発表要旨」 茅ヶ崎市文化振興財団
- 191 厚木市旭町川田前遺跡発掘調査団 1998 「川田前遺跡」
- 192 厚木市教育委員会 1996 「東町2番 市街地再開発事業に伴う旧厚木宿の埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅱ)」
- 193 沼目原之宿遺跡発掘調査団 2000 「原之宿遺跡発掘調査報告書」
- 194 秦野市教育委員会 2001 「東田原中丸遺跡現場見学会資料」
- 195 津久井城遺跡調査会・津久井町教育委員会 1999 「津久井城Ⅲ」
- 196 津久井城遺跡調査会・津久井町教育委員会 2000 「津久井城Ⅳ」

201 茅ヶ崎城

北郭



202 和田山やぐら

第1号やぐら



203 新井城

土塙

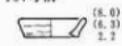


204 西久保・広町遺跡

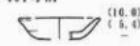
22号溝



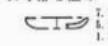
187号溝



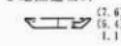
401号溝



47号落ち込み



1地点遺構外



2m

神奈川県内の「かわらけ」集成 (6)

2 地点遺構外



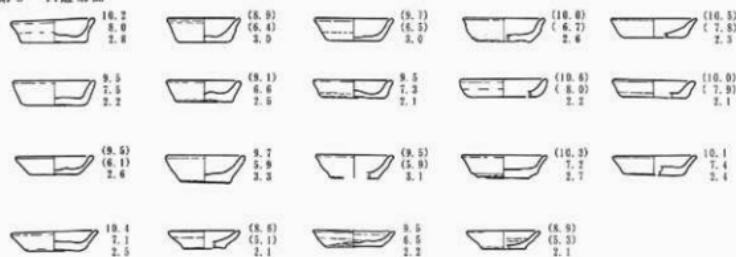
206 川田前遺跡

第1期



207 東町2番

第9~11遺構面



208 原之宿遺跡

1号段切状遺構



210 津久井城

F-5区焼土面



F-4区II層下面



1号方形敷石

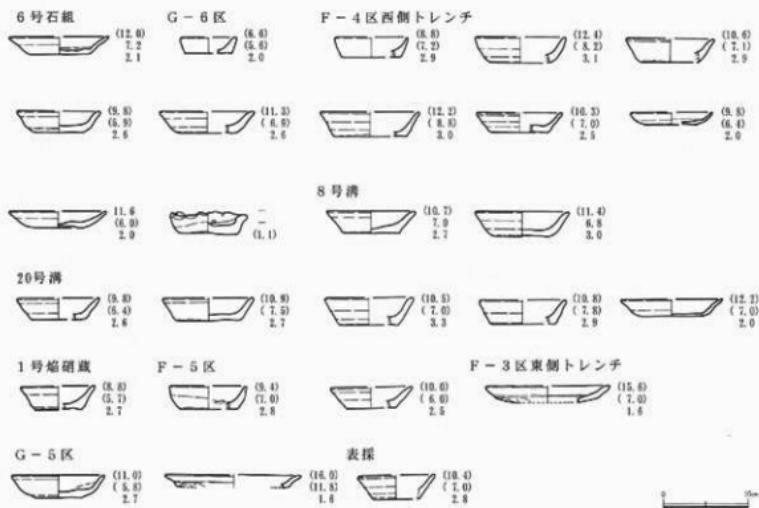


G-4区

H-5区

10cm

中世Pj



第2図 かわらけ出土遺跡分布図

神奈川県内の近世遺跡の集成（2）

近世研究プロジェクトチーム

1995(平成7)年3月に刊行された『かながわの考古学』第5集において、当プロジェクトチームでは近世遺跡の集成を行った。その後6年が経過しているが、この間、平成11年3月には県内の埋蔵文化財の取扱基準が定められ、近世に属する遺跡は、地域において必要なもの以外、遺跡の範囲から除外されることとなった。それにも関わらず、当該期の遺跡の調査・報告例は着実に増加しているのが実情である。これは、東京をはじめとする名古屋や大阪などの大都市圏での近世考古学の進展に負うところが大といえるが、他の地域においても、近世遺跡に対する調査者の意識の高揚があげられる。すなわち、記録保存という調査の性格上、一つの遺跡において、主たる時代だけの調査に止まらず、その遺跡に刻まれた過去から現在までの歴史を明らかにするといった調査手法をとるのが今日の趨勢となっており、そこで発見される近世遺跡もその地域において必要なものであるという認識に立つ調査者が大勢を占めるようになったからといえよう。

このような状況にあるため、この間の近世遺跡の集成を行うことは、当プロジェクトチームにとって、新たなる研究の指針・方向性を見出す上で、きわめて意義のあることと考え、再度集成を行うこととした。なお、集成にあたっては、前回の編集方針に則って行うこととし、前回集成した遺跡で、その後本報告が刊行された遺跡については、内容の追加・変更を加えて再録し、第5集の集成番号を旧番号として表に示した。

集成表の内容は以下のとおりである。

1. 本集成は1995年4月から2001年3月までの間に調査報告書及び概報・年報等で公表された神奈川県内の近世遺跡を対象とした。
2. 同一遺跡群で地区・地点が異なる遺跡について、1冊の報告書にまとめて掲載されていても、1遺跡として別々に取り扱った。
3. 所在地は、市区町村名及び町名を記し、以下の番地・小字等は省略する。
4. 遺跡の種類については、当プロジェクトチームで検討の結果分類したもので、空欄は遺物のみの出土、あるいは分類不可能な遺構のみの検出遺跡を示す。
5. 検出遺構及び出土遺物観欄の（ ）内の時期は、近世に特定されず、その時期を含むことを示す。
6. 文献に関する記載は以下のとおり。
 - ① 著者・編者が複数名にわたる場合は、「代表者名」他とした。
 - ② 発行年は、西暦の1900・2000年代の頭2桁を省略した。
 - ③ 文献名は主たる名称のみを表示し、所在地・「発掘調査報告書」・副書名・その他は省略した。
 - ④ シリーズ名は、行政機関については「県・市・町」と省略した名称にシリーズ番号を付した。その他は名称を省略して番号を付した。
 - ⑤ 発行者については、行政機関でシリーズの記載の有るものは省略した。所在地教育委員会の場合は「市・町教委」、当該遺跡の調査団及び調査会等は、「調査団・調査会」、その他は以下のとおり省略名称で示した。
 - (財) かながわ考古学財团………(財) かながわ
 - (財) 横浜市ふるさと歴史財团埋蔵文化財センター………(財) 横浜センター

神奈川の近世遺跡一覧（追補）

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出構造	出土遺物	文献	旧番号
1	市ノ沢田地	横浜市旭区市沢町	集落跡	掘立柱建物址・土坑・溝状遺構・井戸・ピット	陶磁器・瓦質製品・砥石・鏡・椎管・寛永通宝・釘・火打石・サイコロ	日野一郎他97『市ノ沢田地遺跡』調査団	
2	三保天神前	横浜市旭区川井宿町		ピット	陶磁器	池澤亮他00『三保天神前』調査団	
3	笠間中央公園	横浜市栄区笠間町		(中・近世) 溝・道路遺構	(中・近世) 陶磁器	跡木重信00『年報』17市政委 跡木重信00『県境開拓報告』43	
4	鎌利谷東6丁目西地区やぐら群	横浜市金沢区鎌利谷町		階段状遺構・水路状遺構	陶磁器・砥石・寛永通宝	長谷川忠雄99『鎌利谷東6丁目西地区やぐら群・谷津町北地区櫛穴塚』(財)かながわ63	
5	谷津町北地区櫛穴墓	横浜市金沢区谷津町北			陶磁器・寛永通宝	同上	
6	鎌利谷やぐら群	横浜市金沢区鎌利谷町			陶磁器・人骨・寛永通宝	田代郁夫『鎌利谷やぐら群概要』調査団	
7	上行寺東やぐら群	横浜市金沢区六浦		防空壕		田代郁夫98『年報』15市政委	
8	金沢区No.52(上行寺遺)	横浜市金沢区六浦		(近・現代) 崩切り遺構・石切り遺構・海軍閾遺施設等	(中・近世) 陶磁器	鹿島徹宏98『平成9年度金沢区No.52(上行寺遺)道路規制確認調査概要』(財)横浜センター	
9	小机露王山	横浜市港北区小机町		(近世以前) 道路状遺構・土坑	陶磁器	宮田義98『小机露王山遺跡』市政委	
10	疊壁の上	横浜市港北区新吉田町		(現代) ゴミ穴地	陶磁器・ガラス製品・楽器・コンロ	跡木重信他00『豈屋の上遺跡、西谷戸の上遺跡、北川貝塚南遺跡』(財)横浜センター	
11	西谷戸の上	横浜市港北区新吉田町		(近世以前) 道路遺構他	陶磁器・砥石	同上	
12	開耕地	横浜市青葉区荏田町		(中・近世) 地下式坑・堅坑		田村良照他97『根岸寺北遺跡・荏田耕地遺跡』調査団	
13	泉警察	横浜市泉区和泉町		(近世以前) 溝	陶磁器等	跡木重信他99『泉警察遺跡』(財)横浜センター	
14	草木	横浜市泉区和泉町	集落跡	(中・近世) 道路状遺構・溝状遺構	陶磁器	平子穂一他97『下飯田林・中ノ宮・草木遺跡』(財)横浜センター	
15	中ノ宮	横浜市泉区和泉町		(中・近世) 道路状遺構・溝状遺構・井戸址・土坑	(中・近世) 陶磁器・砥石	平子穂一他97『下飯田林・中ノ宮・草木遺跡』(財)横浜センター	
16	能見堂	横浜市都筑区加賀原			陶器	小宮恒雄97『能見堂遺跡』港北N-T2(財)横浜センター	
17	古梅谷	横浜市都筑区牛久保東		溝状遺構・杭群		小宮恒雄98『古梅谷遺跡』港北NT17(財)横浜センター・市政委	
18	北川貝塚南	横浜市都筑区牛久保		(中・近世) 土壙・ピット群		跡木重信他97『北川の上遺跡、西谷戸の上遺跡、北川貝塚南遺跡』(財)横浜センター	
19	西ノ谷	横浜市都筑区南山田	炭焼窯	カマド・井戸・横戸・埋蔵・池・地下式坑・塚・平場・道路・小溝列・小穴・ピット・墓地	陶磁器・かわらけ・泥人形・泥面子・貝殻製磬石・寛永通宝	坂本彰他97『西ノ谷遺跡』港北NT23(財)横浜センター	34
20	多子谷	横浜市保土ヶ谷区今井町	炭焼窯		かわらけ・煙管・鉄片	横本昌寺99『年報』16市政委	
21	赤井地区遺跡群No.6	横浜市緑区花山町		(近代) 炭焼窯		大川治他98『赤井地区遺跡群集落編』(財)日本歴史研究所	
22	西八幡	横浜市緑区西八幡町		土坑状遺構・溝状遺構		日野一郎98『年報』15市政委	
23	藤林	横浜市緑区西八幡町		土坑	鉄製錠	渡辺裕99『藤林遺跡・日本農業史研究所』	
24	宮之前	横浜市緑区長津田町		土坑		伊丹徹他99『長津田遺跡群V』(財)かながわ58	14
25	宮之前南	横浜市緑区長津田町	集落跡	段切・掘立柱址・井戸址・溝・遺構遺構・土坑・ピット・火坑・炭窯	陶磁器・木桶・砥石・鏡・火打ち石・石臼	伊丹徹他98『長津田遺跡群IV』(財)かながわ37	17
26	玄海田南	横浜市緑区長津田町	炭焼窯	炭焼窯	陶磁器	伊丹徹他97『長津田遺跡群III』(財)かながわ14	
27	住掛	横浜市緑区長津田町	炭焼窯	炭焼窯・溝状遺構・道状遺構・井戸址	砥石・火打ち石	伊丹徹他96『長津田遺跡群II』(財)かながわ12	22

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
28	宿根西	横浜市緑区東本郷	(中・近世)柱穴群・土坑・溝状遺構・道状遺構	北末段	中山登他99「宿根西遺跡」調査団		
29	宿根南	横浜市緑区東本郷	(中・近世)堅穴状遺構・土坑・土坑墓・溝状遺構・柱穴群	陶磁器・泥瓦子・瓦石・鉄製品	北平朗久他99「宿根南遺跡」調査団		
30	茅ヶ崎城址	横浜市港北区茅ヶ崎町		陶磁器・獸骨	坂本彰他94「茅ヶ崎城址」(財) 横浜センター・市教委		
31	茅ヶ崎城址	横浜市都筑区茅ヶ崎東	(近世)半円形平場・建物址・地下式灰・井戸(近代)戦車塹	(近世)陶磁器・土器・寛永通宝(近代)陶器・ガラス器	坂本彰他01「茅ヶ崎城址」(財) 横浜センター		
32	六浦大道やぐら群	横浜市金沢区大道	石切り・防空壕		鶴島保宏他07「六浦大道やぐら群発掘調査報告」(財) 横浜センター		
33	真門戸谷	横浜市港北区新羽町	(中・近世)塚・墓坑		滝澤亮00「年報」17市教委		
34	宿根北	横浜市緑区東本郷	堅穴状遺構・溝状遺構	陶磁器・土製品	河合英夫他97「宿根北道路」調査団		
35	子母口橋之台	川崎市高津区子母口	土坑		小山裕之98「子母口橋之台遺跡概要」調査団		
36	幸区No7	川崎市幸区南加瀬	土坑・ピット群	陶磁器・寛永通宝・石製品	小山裕之98「幸区No.7遺跡」調査団		
37	加賀原	川崎市幸区北加瀬	溝	陶磁器・木製品・石製品(砥石・鏡・火打ち石・石臼)	浜田晋介他97「加賀台古墳群の研究Ⅱ」市民ミュージアム考古学委員会3		
38	南谷一	川崎市高津区下作延		(中・近世)陶磁器・瓦石	伊東秀吉他05「南谷一遺跡」調査団		
39	縁ヶ丘堂内遺跡群II層2地点	川崎市高津区下作延	(近世以降?)耕跡・溝状遺構	(中・近世)陶磁器・鐵貸	滝澤亮他05「縁ヶ丘堂内第2地点・第3地点」調査団		
40	溝口西耕地横穴墓群	川崎市高津区溝口		鐵器	野中和夫00「溝口西耕地横穴墓群略報」調査団		
41	新作二丁目	川崎市高津区新作	(近世以降)溝・土坑		伊東秀吉他95「新作二丁目遺跡」調査団		
42	薬師寺裏	川崎市高津区新作	(近世以降)溝・土坑	(中・近世)火葬人骨粉・かぶらけ	伊東秀吉他96「薬師院裏遺跡」調査団		
43	千年伊勢山台子千年	川崎市高津区千年	(近世～近現代)ローム探査坑・堅穴状遺構・溝状遺構		河合英夫他00「千年伊勢山台子千年」調査団		
44	末長久保台	川崎市高津区末長	(中・近世)溝状遺構・土坑	(中・近世)古鉄	林原利明00「末長久保台遺跡概要」調査団		
45	尾尾台北	川崎市多摩区尾尾	(中・近世以降)佛	土器・陶磁器・瓦・石製品・木製品・鐵製品・金属製品・ガラス製品	伊東秀吉他97「尾尾台北遺跡」調査団		
46	東柿生小学校内	川崎市麻生区王神寺	土坑・溝	陶磁器・磁石・錠管・火箸・釘	竹石健二他95「東柿生小学校内遺跡」調査団		
47	岡上一4	川崎市麻生区岡上	(中世以降)堅穴状遺構・溝状遺構	(近・現代)陶磁器・鐵製品・瓦等	丹地英夫他00「岡上一4遺跡」調査団		
48	岡上一4	川崎市麻生区岡上	(中～近世)溝状遺構		都司真由美00「岡上4遺跡報告書」42		
49	高石古墳	川崎市麻生区高石	塚	陶磁器・瓦	後藤喜八郎96「高石古墳遺跡」調査団		
50	黒川地区No10	川崎市麻生区黒川	集落跡	(近世以降)建物址・井戸址・土坑・溝	陶磁器・土器・瓦質製品・石製品・サイロ・金沢製品(鍔・錐・錠管等)	玉口時雄他97「黒川地区遺跡群」調査団	
51	黒川地区宮添	川崎市麻生区黒川	集落跡	(近世以降)廻理面・建物址・堅穴坑・土坑・井戸址・溝・被土遺構・土坑・室・炭焼窯・粘土遺構・陣跡跡	陶磁器	玉口時雄他97「黒川地区遺跡群」調査団	56
52	高山横穴群	横須賀市田戸台			陶磁器・寛永通宝・文久永宝	柳瀬規範99「高山横穴群」(財) かながわ62	
53	小百合	横須賀市鶴居			陶器・一字・石註繩	野内秀明98「概報集刊」市報告33	95
54	横須賀東横穴群	横須賀市若戸	墓地	土坑墓・排水溝	火葬骨・(近世以降)陶磁器	横須賀市第8「概報集刊」市報告32	
55	おはやし	横須賀市吉井			(中・近世)陶磁器	野内秀明98「概報集刊」市報告32	
56	吉井横穴群	横須賀市吉井			寛永通宝・鉄釘	野内秀明98「概報集刊」市報告32	
57	上吉井南	横須賀市吉井	(中・近世)墓塚・土坑・溝			横山太郎他97「横須賀市吉井・池田地区遺跡群」(財) 調査団	92
58	上吉井北	横須賀市吉井	(中・近世)土坑・溝・ピット	(中・近世)陶磁器等		北爪一也他97「吉井・池田地区遺跡群」(財) 調査団	92
59	八幡町内会館地・八幡神社社務所地点	横須賀市久里浜	墓地	井戸掘り方・貝殻ブロック	陶磁器	佐藤明生他97「概報集刊V 八幡神社遺跡」市報告31	

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
60	石田谷	横須賀市森崎		(戦時中) 溝	(近世以降) 煙管	中三川昇99『概報集Ⅸ』市報告33	
61	間答ヶ原	横須賀市走水			土鋪・基石・サイコロ・瓦	佐藤明生97『間答ヶ原遺跡市報告第6集』市教委	
62	三足谷	横須賀市池田町		(中・近世) 溝	陶磁器	横山太郎他97『吉井・池田地区遺跡群Ⅰ』調査会	92
63	西谷	横須賀市池田町		(中・近世) 石組道構・溝・石塁・土塁・ピット		石村貴造他97『吉井・池田地区遺跡群Ⅱ』調査会	92
64	大塚台	横須賀市池田町		(中・近世) 土坑・戦跡(近代)軍事施設	陶磁器	北爪一行他97『横須賀市吉井・池田地区遺跡群Ⅲ』調査会	
65	長井台地遺跡 群長浜ノ上	横須賀市長井		道路状遺構		佐藤明生他97『長井台地遺跡群・長浜ノ上遺跡』市報告7	
66	長井台地遺跡 群長浜ノ上	横須賀市長井		道状遺構	(中近世) 陶磁器	佐藤明生他97『長井台地遺跡群・長浜ノ上遺跡(補遺)』市報告第7集市教委	
67	コウロ	横須賀市長沢		(中世以降) 溝		横山太郎他97『横須賀R P地内埋蔵文化財発掘調査』調査会	
68	コウロ北	横須賀市長沢		(中世以降) 土坑・溝	陶磁器・管状土錐	石村貴造他97『横須賀R P地内埋蔵文化財発掘調査』調査会	
69	大塚西	横須賀市長沢		溝・墓塁・土坑・ピット	陶磁器	石村貴造他97『横須賀R P地内埋蔵文化財発掘調査』調査会	90
70	大塚東	横須賀市長沢		(近世以降) 溝	陶磁器・瓦・砾石	横山太郎他97『横須賀R P地内埋蔵文化財発掘調査』調査会	91
71	大町谷東	横須賀市津久井			(中世以降) 陶磁器・瓦・角釘	中三川昇98『概報集Ⅹ』市報告32	
72	田戸	横須賀市田戸台		(近・現代) 建物址・防空壕	陶磁器	野内秀明96『概報集Ⅸ』市報告30	
73	御殿C第2地点	平塚市御殿		(中近世) 井戸・溝状・ピット	(中近世) 陶磁器	明石新96『林B遺跡他』市シリーズ28	
74	中原E	平塚市中原2丁目		(中・近世) 道路状・溝状・方形容土坑・円形容土坑	(中・近世) 陶磁器・古銭	唐木秀雄98『中原E遺跡』市シリーズ23	
75	十ノ城第1地点	平塚市横内・真土		溝状・硬化面	陶磁器	上原正人98『南原B遺跡他』市シリーズ29	
76	宮東・岡崎城 跡B	平塚市岡崎		(中・近世) 地下式壙・堅穴・獨立柱・井戸・道路状・溝状・土塁・ピット	(中・近世) 陶磁器・かわらけ・五輪塔・宝鏡印塔・板碑・茶臼・直刀・鉄製品・木材・人骨	安藤文一郎『県調査報告』41	
77	山王久保	平塚市岡崎		(近世以降) 造状・井戸・土塁・溝状		川端清倫96『県調査報告』38	
78	広川・公所遺跡群 内沢	平塚市公所		切土整地・道路・土壤	陶磁器	宮重俊一99『県調査報告』41	
79	広川・公所遺跡群 宮ノ上	平塚市公所	聚落	道路状	陶磁器	宮重俊一98『県調査報告』40	
80	広川・公所遺跡群 正林塚	平塚市公所	城館跡	(中・近世) 土塁・溝	(中・近世) 陶磁器・古銭・鉄製品	渡辺聰98『県調査報告』40	
81	内沢	平塚市公所		切土・土坑・溝・道路状	(中・近世) 陶磁器・鐵製品・石製品	渡辺聰98『県調査報告』42	
82	広川・公所遺跡群 西之谷戸B	平塚市広川		土壤・溝・道路状	(中・近世) 陶磁器・鐵製品・木製品	宮重俊一99『県調査報告』41	
83	広川・公所遺跡群 神口	平塚市広川		(中・近世以降) 溝	(中・近世) 古銭・木器	渡辺聰98『県調査報告』40	
84	西之谷戸A	平塚市広川		道路状	(中・近世) 陶磁器・鐵製品・石製品	渡辺聰98『県調査報告』42	
85	北久保	平塚市根坂岡		(中・近世) 肪穴状・土壤・ピット・溝状・井戸	陶磁器・石製品・鐵製品	川端清倫96『県調査報告』38	
86	福寿前B	平塚市四之宮		(近世以降) 土壤・溝状	陶器	川端清倫96『県調査報告』38	
87	山王B	平塚市四之宮		溝状・土壤・井戸		川端清倫96『県調査報告』38	
88	山王B	平塚市四之宮		(中・近世) 溝状・硬化面		栗山龍理98『県調査報告』42	
89	坪ノ内	平塚市四之宮		(中・近世) 井戸・溝状		林原利季97『県調査報告』39	
90	坪ノ内	平塚市四之宮		井戸・耕状・土壤・ピット		林原利季98『県調査報告』40	

神奈川県内の近世道路の集成(2)

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
91	原口	平塚市上吉沢	集落跡・墓地	(近世以降) 溝状・道状・段切状・建物・井戸・土坑墓・土坑・溝状・地下式坑	(近世以降) 陶磁器・土製品・鉄製品・銅製品・石製品・木製品・漆製品	長谷川厚97「原口遺跡I」(財)かながわ22	222
92	上吉沢向田	平塚市上吉沢	集落跡	(中近世) 溝状・掘立柱建物・土坑・墓石・溝状・ピット		河合美夫96「上吉沢向田遺跡発掘調査報告書」調査団	
93	上吉沢市場地	平塚市上吉沢	魚跡	土壘・溝状・堀	(中・近世) 陶磁器	小山裕之98「県調査報告」40	
94	上吉沢市場地	平塚市上吉沢	魚跡		陶磁器	青地俊郎98「県調査報告」41	
95	新町	平塚市新町	土壘・ピット		陶磁器	林原利明98「県調査報告」41	
96	新町	平塚市新町	溝状			川俣典史98「県調査報告」41	
97	カマエ	平塚市西八幡四丁目			(中・近世) 陶磁器	大河内勉00「県調査報告」42	
98	厚木遺	平塚市中原			(中・近世) 陶磁器	青地俊郎98「県調査報告」40	
99	備ノ内	平塚市中原上宿		(近世以降) 土壘・溝状		川端清60「県調査報告」38	
100	中原E	平塚市中原二丁目		道路・戦跡・溝状・土壘	(中・近世) 陶磁器・古鏡	押水弘之98「県調査報告」40	
101	田村越跡	平塚市田村		(中・近世) 土坂・溝状・井戸・ピット		林原利明98「神奈川県平塚市田村越跡」調査団	
102	十六町	平塚市南金日	杭跡			香川達也98「県調査報告」39	
103	沢狹	平塚市南金日	耕耙跡	杭跡		戸田哲也98「沢狹跡発掘調査報告書」調査団	
104	高間原	平塚市北金日	塚	(近世以降) 墓状遺構		宮原俊一96「東海大学校地内遺跡調査報告書 6」	
105	真田・北金日1区	平塚市北金日	集落跡	(中世以降) 掘立柱建物址・土坑・築石・土坑墓・井戸・溝状・杭跡・瓦砾	(中世以降) かわらけ・陶磁器・石製品・鉄製品・木製品・銅製品・漆製品・古鏡	若林勝司99「平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書 1」調査会	
106	真田・北金日2区	平塚市北金日	集落跡	(中世以降) 土坂・土壘・築石・配石・道路状・溝状・塚状	(中世以降) かわらけ・陶磁器・石製品・鉄製品・木製品・銅製品・漆製品・古鏡	同上	
107	真田・北金日3区	平塚市北金日	集落跡	(中世以降) 土坂・土壘・築石・道路状・溝状・塚状	(中世以降) かわらけ・陶磁器・石製品・鉄製品・木製品・銅製品・漆製品・古鏡	同上	
108	真田・北金日遺跡群	平塚市北金日		(中・近世) 道路状・地下式坑・井戸・繋穴状・溝状・戻状・塚状・段切状・土壘・築石・轍列・堆土跡・築石	(中世以降) 陶磁器・かわらけ・土製品・鉄製品・木製品・銅製品・漆製品・古鏡・武井・成化木・槿子・人骨・動物焼骨	若林勝司00「県調査報告」42	
109	水尻	平塚市北金日		(中・近世) 溝状・戻状・道状・井戸・ピット・土坑	(中・近世) 陶磁器・金綴製品・ガラス製品	田尾誠敏97「水尻遺跡」調査団	
110	御殿G第1地点	平塚市御殿1丁目		溝状・ピット・土坑墓	陶磁器	大野信60「南原B遺跡他」市シリーズ29	
111	十ノ城跡2地點	平塚市横内	集落跡	溝状	陶磁器	同上	
112	大倉幕府御殿遺跡群	鎌倉市		堅穴建物址・井戸・土壘	陶磁器・土坑墓・並轡ある陶磁器	馬渕和雄他99「大倉幕府周辺遺跡調査」調査団	
113	西念寺境内	鎌倉市岩瀬	寺跡	土手地盤面	埴輪片・陶磁器・寛永通宝・かわらけ	田代部大輔95「西念寺境内埴輪群」(昭和50年) 調査会・東京歴史考査	
114	極楽寺やぐら群	鎌倉市極楽寺	やぐら		陶磁器	長谷川厚他99「極楽寺やぐら群」(昭和28年) (財)かながわ72	
115	極楽寺やぐら群	鎌倉市極楽寺	やぐら	糞	陶磁器	鈴木重一郎他00「極楽寺やぐら群」(財)かながわ報告90	
116	極楽寺中心伽藍跡遺跡群	鎌倉市極楽寺		井戸	(中世～近世) 井戸枠・かわらけ・土壘・灯明里・陶磁器・石製品	研究会98「極楽寺中心伽藍跡遺跡群」調査団・東京歴史考査	
117	極楽寺中心伽藍跡遺跡群	鎌倉市極楽寺		建物址		藤木秀道98「県調査報告」38	
118	若宮大路堀切道跡群御成町123番5外地点	鎌倉市御成町			近世以降の遺物ありと報告されている	沙見一夫他99「市緊急調査報告書15(1分冊)」市教委	
119	若宮大路堀切道跡群御成町788番3外地点	鎌倉市御成町	水田跡	水田跡	かわらけ塗	菊川英政他97「市緊急調査報告書13(1分冊)」市教委	

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
120	福泉やぐら群	鎌倉市今泉	やぐら		鉄貨	鈴木康一郎「福泉やぐら群」(財)かながわ91	
121	佐助ヶ谷佐助	鎌倉市佐助			陶磁器	高野昌巳98『市緊急調査報告書14(2分冊)』市教委	
122	佐助ヶ谷花助 —丁目45番2 5・27地点	鎌倉市佐助	水田跡 田園址		陶磁器・かわらけ	滝澤晶子98『市緊急調査報告書14(2分冊)』市教委	
123	佐助ヶ谷	鎌倉市佐助	水田跡	水田		宮田義典「周辺調査報告」40	
124	難倉城所在やぐら群	鎌倉市材木座	やぐら		陶磁器	長谷川厚徳99『鎌倉城(No.87)所在やぐら群』(財)かながわ74	
125	材木座町塙材 木座—丁目8 90番7地点	鎌倉市材木座		建物址・柱穴	礎石(雄倉石)	沙見一夫他00『市緊急調査報告書16(1分冊)』市教委	
126	材木座町塙材 木座三丁目3 64番1外地点	鎌倉市材木座		井戸	木製品(針刺し入れ)・陶磁器・土器・土製品	馬渕和雄97『市緊急調査報告書13(1分冊)』市教委	
127	能藏寺跡	鎌倉市材木座	寺跡		陶磁器・植木鉢	馬渕和雄他95『能藏寺跡・材木座所神社境内所在道路の発掘調査』調査団	
128	被目被目町2 86番1外地点	鎌倉市被目町			近世遺物を包含する層ありと報告	松田理枝他01『市緊急調査報告書17(2分冊)』市教委	
129	円覚寺旧境内 山ノ内字瑠璃 山509番1地点	鎌倉市山ノ内	寺跡		陶磁器	菊川英雄他98『市緊急調査報告書14(1分冊)』市教委	
130	円覚寺門前鎌 倉市山ノ内字 藤源治95番2 地点	鎌倉市山ノ内	寺跡		陶磁器	黒川実他98『市緊急調査報告書14(2分冊)』市教委	
131	円覺寺門前山 ノ内字東瓜ヶ谷 122番1-5	鎌倉市山ノ内	寺跡		陶磁器	伊丹まとか00『市緊急調査報告書16(2分冊)』市教委	
132	雄長寺旧境内 山ノ内字白黒 小路148番1 外地点	鎌倉市山ノ内	寺跡		陶磁器	野本賢二97『市緊急調査報告書13(2分冊)』市教委	
133	史跡建長寺境内	鎌倉市山ノ内	寺跡		陶磁器	沙見一夫他98『神奈川県鎌倉市史跡建長寺境内発掘調査報告書』	
134	台山藤源治	鎌倉市山ノ内			陶磁器	大河内勉他96『台山藤源治遺跡跡の次第を示す』調査団	
135	尾鹿谷やぐら群	鎌倉市山ノ内	やぐら	造或遺構	かわらけ・陶磁器・石製品(砥石・五輪塔)・羽釜・寛永通宝	長谷川厚徳99『尾鹿谷やぐら群』(財)かながわ64	
136	曾久保鎌倉市 山崎150番1外	鎌倉市山崎		溝	陶磁器	黒川実96『市緊急調査報告書12(2分冊)』市教委	
137	天神山城山崎 山崎760番地外	鎌倉市山崎		溝状遺構・水田跡・炭焼き窯・ピット	松山敬一郎他97『市緊急調査報告書13(1分冊)』市教委		
138	寺分藤原	鎌倉市寺分	墓地	土墳墓		土屋浩美98『周辺調査報告』40	
139	大慶寺旧境内 寺分—丁目81 9番1地点	鎌倉市寺分	社寺跡	溝・井戸・柱穴	陶磁器	押木弘江00『周辺調査報告』42	
140	无触寺横やぐら	鎌倉市十二所		溝・ピット	陶磁器・かわらけ	押木弘江他00『市緊急調査報告書16(2分冊)』市教委	
141	十二所横荷小路	鎌倉市十二所		家畜小屋		池田治他01『年報8』(財)かながわ	
142	宇津宮辻子墓 病跡	鎌倉市小町			陶磁器	大河内勉97『県調査報告』39	
143	宇津宮辻子墓 病跡	鎌倉市小町		水田畦土留め遺構・井戸		96『宇津宮辻子墓病跡発掘調査報告書』調査団	
144	宇津宮辻子墓 病跡小町二丁目 361番1地点	鎌倉市小町		井戸・水田畦土留め遺構	土留め杭構造・木製品・陶磁器	須佐直子他97『市緊急調査報告書13(2分冊)』市教委	
145	若狭大路周辺 道路群	鎌倉市小町		河川	陶磁器・木製品(舟札)	原廣志97『県調査報告』39	

神奈川県内の近世遺跡の集成（2）

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
146	若宮大路周辺 通路跡小町2 丁目28番3-5 地点	鎌倉市小町			陶器器・丸柱石材（扇谷川瀬岸施設に関係か）	須佐直子他98『市緊急調査報告書14（2分冊）』市教委	
147	東勝寺跡	鎌倉市小町	寺院跡		皇宋通宝・景定元宝	浦澤晶子他90『奥勝寺跡発掘調査報告書』調査団	
148	東勝寺跡	鎌倉市小町	寺跡		近世遺物ありと報告	小林重子他98『神奈川県鎌倉市東勝寺跡第3・4次大規模調査報告書』	
149	北条高時邸跡 小町三丁目42 6番3地点	鎌倉市小町		土塁・等基礎状遺構・堀柱穴	陶器器・瓦・石製品（純石製品、瓦）、瓦質ヘツツイ、刀身 跡・わくけ、合せ口かわらけ（磁衣鉢）、鉄製品（釘）、 銀製品（灯明具）、土製品（人形）、土師質手縫り	原廣志他96『市緊急調査報告書12（1分冊）』市教委	
150	玉岡城跡	鎌倉市城廻	城跡		陶器器・瀬戸すり鉢	宮田賛他90『玉岡城跡発掘調査報告書』調査団	
151	玉岡城跡	鎌倉市城廻		城跡・貯藏穴		斎木秀96『県調査報告』39	
152	玉岡城跡 字中町478番3 地点	鎌倉市城廻	城跡	講・井戸・土壤・ピット	陶器器・土器・石製品（瓦石）、 木製品（桶）、鐵貨（寛永）	大河内勉93『市緊急調査報告書17（2分冊）』市教委	
153	上杉氏憲邸跡 神明町一丁目 6番外地点	鎌倉市神明寺		切石列		馬渕和雄他95『市緊急調査報告書11（2分冊）』市教委	
154	政所跡 雪ノ下 三丁目970番1 7地点	鎌倉市雪ノ下			白かわらけ	野本賢二99『市緊急調査報告書15（2分冊）』市教委	
155	政所跡 雪ノ下 三丁目989番4 地点	鎌倉市雪ノ下		ピット（スピ丸なを抜えた）、土塁	陶器器	宗藤秀明91『市緊急調査報告書17（1分冊）』市教委	
156	大曾根宿周辺 大曾根新雪ノ下 四丁目580番1 0地点	鎌倉市雪ノ下	幕府御用道 跡群	河川跡	陶器器・土製品（焼粘・石製品（臼・瓶）	須佐直子他91『市緊急調査報告書17（2分冊）』市教委	
157	大曾根宿周辺 通路跡 雪ノ下 四丁目620番5 地点	鎌倉市雪ノ下		井戸・堅穴造築・土壤・溝 (六浦道築)	陶器器・土器	馬渕和雄95『市緊急調査報告書14（2分冊）』市教委	
158	大曾根宿周辺 雪ノ下三丁目95 1番8等地点	鎌倉市雪ノ下			近世以降の遺物ありと報告されている	沙見一夫99『市緊急調査報告書15（2分冊）』市教委	
159	鶴岡八幡宮旧 境内雪ノ下二 丁目2番16地 点	鎌倉市雪ノ下	神社跡	土塁・柱穴	柱瓦・陶器器・寛永通宝・土師質鉢	菊川英玲96『市緊急調査報告書12（2分冊）』市教委	
160	北条時房 跡跡 跡跡	鎌倉市雪ノ下		土丹版塗・溝・土壤・建物跡	瓦・陶器器・魚骨	斎木秀雄他99『北条時房 跡跡』調査団	
161	北条時房 跡跡 跡跡	鎌倉市雪ノ下		便溝（若宮大路側溝）、溝・溝 または池・井戸・土壤		宗藤秀明99『北条時房 跡跡』調査団・東国歴史研究会	
162	北条時房・源 時跡跡	鎌倉市雪ノ下		便所跡・土壤・溝・井戸	陶器器・植物種子・魚骨・瓦	宗藤富貴子他97『北条時房・源時跡跡雪ノ下一丁目272番地点』調査団	
163	北条時房・源 時跡跡 雪ノ下 一丁目271番4 地点	鎌倉市雪ノ下		若宮大路側溝・井戸・柱穴 列・土壤	陶器器・木製品（曲物）	馬渕和雄他99『市緊急調査報告書16（2分冊）』市教委	
164	北条時房・源 時跡跡 雪ノ下 一丁目272番 地点	鎌倉市雪ノ下		便所跡・土壤・溝	陶器器・植物種子・魚骨	宗藤富貴子他98『市緊急調査報告書14（1分冊）』市教委	
165	北条時房・源 時跡跡 雪ノ下 一丁目273番 4地点	鎌倉市雪ノ下			陶器器・瓦	浦田哲夫他99『市緊急調査報告書15（1分冊）』市教委	
166	北条小町邸跡 (泰時頼) 雪ノ下一丁目 36番7地点	鎌倉市雪ノ下		木本列(建物上台?)・溝・井 戸	陶器器・木製品(曲物)・漆 器・瓦石・下駄	原廣志他98『市緊急調査報告書14（2分冊）』市教委	
167	北条小町邸跡 (泰時頼) 雪ノ下一丁目 37番7地点	鎌倉市雪ノ下		方形土壤・溝(若宮大路側溝)	木製品(曲物底板)・土製品 (壺、火鉢)・塔塔・陶器器・ 漆器(鏡)	馬渕和雄他96『市緊急調査報告書12（2分冊）』市教委	

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
168	北条小町跡跡 (泰時・時頼 邸)	鎌倉市雪ノ下		井戸・土壤・側溝護岸用土丹 列・木樁又は便橋	陶磁器・木製品・石製品・漆 製品・手あぶり・瓦質製品・ 鉄・かわらけ・竹笊	00『北条小町跡跡〔泰時・ 時頼邸〕発掘調査報告書』調 査団	
169	北条小町跡跡 (泰時・時頼 邸) 雪ノ下一 丁目370番1地 点	鎌倉市雪ノ下		杭列・土壤・若宮大路・側溝	陶磁器	土屋浩美他06『市緊急調査報 告書14(1分冊)』市教委	
170	多宝寺跡	鎌倉市扇ガ谷	寺跡	帆状遺構	陶磁器	菊川英政他08『神奈川県鎌倉 市多宝寺跡跡ノ谷2丁目250番 1・4地点』	
171	武藏大路周辺 扇ガ谷三丁目 387番地点	鎌倉市扇ガ谷			かわらけ・陶磁器・石製品(紙 石・火打石)	宗臺宣貢子他01『市緊急調査 報告書17(2分冊)』市教委	
172	白山白字西 / 1627番地点	鎌倉市台			陶磁器	野本賢二等97『市緊急調査報 告書17(1分冊)』市教委	
173	米町	鎌倉市大町	井戸			00『米町道路第7地点発掘調 査報告書』調査団	
174	米町	鎌倉市大町	建物跡		陶磁器	森孝子99『[調査報告]』41	
175	米町大町二丁 目2308番1	鎌倉市大町			かわらけ・陶磁器・石製品 (武石)・寛永通宝	斎田哲太郎01『市緊急調査報 告書17(2分冊)』市教委	
176	米町大町二丁 目2313番15地 点	鎌倉市大町	ピット		陶磁器	斎田哲太郎01『市緊急調査報 告書17(1分冊)』市教委	
177	米町大町二丁 目931番1	鎌倉市大町		土壤・建物基礎跡・石列(鎌 倉石)・柱穴列(解説)	陶磁器	宗臺富士子他98『市緊急調査 報告書14(1分冊)』市教委	
178	妙本寺	鎌倉市大町	社寺跡	井戸	陶磁器	高野和弘90『県調査報告』41	
179	甘利神社跡遺 跡	鎌倉市長谷		礎石・柱穴・土壤	かわらけ・陶磁器・羽がま・ 滑石鍋	本村美代治他95『甘利神社遺 跡群発掘調査報告書』調査 団・市教委	
180	高應院周辺	鎌倉市長谷	寺跡	大木板棧木根固め	寛永通宝	福田誠00『鎌倉大仏周辺発掘 調査報告書』調査団	
181	長谷觀音堂周 辺 長谷三丁目 1530番4外地 点	鎌倉市長谷	寺跡・水田 跡	水田跡・水路・杭列・礎石建 物址	かわらけ・縫管・木製品 (輪・曲物底板)・礎・木材・ 土製品・寛永通宝	宗臺秀明他05『市緊急調査報 告書11(2分冊)』市教委	
182	長谷小路周辺 長谷一丁目33 番39外地点	鎌倉市長谷		河岸造成・土壤・配石土 壁・埴地	寛永通宝	伊丹まと99『市緊急調査 報告書15(2分冊)』市教委	
183	横小路周辺道 路	鎌倉市二階堂			かわらけ・瓦・陶磁器・石・ 木材・露下駄・木製品	宗臺秀明他95『横小路周辺道 路・二階堂横小路110番3地 点永福寺周辺道路の歴史』調 査団	
184	宜興寺総門跡 東やぐら群	鎌倉市二階堂			陶磁器	宍戸信悟他01『年報8(財) かながわ』	
185	鎌倉城(二附 近紅葉ヶ谷所 在やぐら群)	鎌倉市二階堂	やぐら		陶磁器・繩管	鎌本博一郎他00『鎌倉城(二 附近紅葉ヶ谷所 在やぐら群) (財)かながわ』	
186	瑞泉寺周辺二 附金子紅葉ヶ 谷633等地点	鎌倉市二階堂	寺跡		陶磁器・寛永通宝	福田誠他09『市緊急調査報 告書15(2分冊)』市教委	
187	下馬周辺	鎌倉市由比ガ 浜		(近世以前) 建物基礎跡・井 戸・柱穴		熊谷謙08『下馬周辺跡発 掘調査報告書』41	
188	下馬周辺由比 ガ浜二丁目10 番1地点	鎌倉市由比ガ 浜		土壤・ピット	銅製品・馬骨製品・銅製品 (笄)	沙見一夫等97『市緊急調査報 告書13(2分冊)』市教委	
189	下馬周辺由比 ガ浜二丁目11 番7地點	鎌倉市由比ガ 浜	水田跡	溝・水田	染付小片・蘿芋端跡	菊川英政他01『市緊急調査報 告書17(1分冊)』市教委	
190	若宮大路周辺 道路群	鎌倉市由比ガ 浜	墓地	墓塚(埋葬人骨群)	人骨・大形龜物(棺桶?)・埋 管・銅鏡・宝鏡印塔・陶磁器	清水栄徳他05『若宮大路周辺 道路群発掘調査報告書』	
191	若宮大路周辺 道路群由比ガ 浜二丁目11番 7地點	鎌倉市由比ガ 浜	井戸		陶磁器	浪藤雅一『市緊急調査報 告書13(2分冊)』市教委	
192	長谷小路周辺 浜	鎌倉市由比ガ 浜			陶磁器	01『長谷小路周辺道路発掘 調査報告書』調査団・市教委	
193	由比ガ浜南 (No.315)	鎌倉市由比ガ 浜	墓地	墓塚		宮田真也97・99『県調査報告』 39・41	
194	由比ガ浜南 (No.315・372)	鎌倉市由比ガ 浜		土壤・溝状遺構		京木秀雄08『県調査報告』38	

神奈川県内の近世遺跡の集成（2）

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
195	藤沢市No.61	藤沢市福岡		土坑状遺構		十井浩美他97『市文化財調査報告書』32	
196	福岡台地遺跡群E・F・S地点	藤沢市福岡台	集落跡	溝状遺構・段切状遺構・土坑		秋山重美他00『福岡台地遺跡群E・F・S地点発掘調査報告書』調査団	
197	藤沢市No.462	藤沢市羽鳥	集落跡	(中近世) 溝状遺構・土塁・ピット		根本志保99『県調査報告』41	
198	島唄沢土地区画整理事業区域内	藤沢市池島		(中近世) 段切遺構・土坑		秋山重美96・99『県調査報告』38・41	
199	藤沢市No.357	藤沢市下土棚	集落跡	溝・柱穴列	陶器・鉄製品	鈴治敏勝・99『県調査報告』41	
200	藤沢市No.455	藤沢市下土棚		(中近世) 構	(中近世) かわらけ・尾呂屋利・瓦器・鉄製品・鉄貨	寺田兼力96『県調査報告』38	
201	藤沢市北部第二(三地区)土地区画整理事業区域内(No.118・224・356・359・360)	藤沢市下土棚		中近世:溝・土坑・地面上・堅穴状遺構・ピット	(中～近世) 陶磁器	小林晴生他97・00『県調査報告』39・42・43	
202	用田バイパス開通遺跡群第N・V地区(藤沢市No.347)	藤沢市葛原		(古代～近世以降) 溝状遺構・道状遺構・土坑		栗原伸好96『年報3』(財) かながわ	
203	藤沢市No.347	藤沢市葛原		ピット	陶器	寺田兼力他97『市文化財調査報告書』32	
204	藤沢市北部第二(三地区)土地区画整理事業区域内	藤沢市葛原		構・墓 (中近世) 構		小林晴生他97・99・00『県調査報告書』39・41・43	
205	藤沢市No.102(藤沢市龟井野306-2)	藤沢市龟井野		ピット・李穴・溝状遺構		根本志保00『市文化財調査報告書』35	
206	藤沢市No.104(日大構内)	藤沢市龟井野		溝状遺構		同上	
207	藤沢市No.362(藤沢市高倉字海上2494-1)	藤沢市高倉		土塁		土井浩美00『市文化財調査報告書』35	
208	藤沢市No.106	藤沢市今田		(中近世) 溝・窓状遺構		松山敬一郎98『県調査報告』41	
209	藤沢市No.266	藤沢市湘南台		自然流路・盛土造成	陶器	田代部火66『藤沢市No.266遺跡発掘調査報告書』調査団	
210	藤沢市No.419第1地点	藤沢市湘南台		(中～近世) 構・墓塚・土坑・段切状遺構	(中～近世) 陶磁器・かわらけ・鉄貨・鉄製品	桜井隼也97『藤沢市No.419遺跡発掘調査概要報告書第1地点』調査団	
211	藤沢市No.419第2地点	藤沢市湘南台		土坑・井戸・堆土址・溝状遺構	陶器・石臼・鉄滓・銅鏡・かわらけ	桜井隼也99『藤沢市No.419遺跡第2地点発掘調査報告書』(藤沢市湘南台7丁目9-9他所在) 調査団	
212	藤沢市No.419第3地点	藤沢市湘南台	集落跡	(中近世) 柱立柱建物址・道路状遺構・溝状遺構・土坑	(中近世) 陶器	桜井隼也97『藤沢市No.419遺跡第3地点発掘調査概要報告書』調査団	
213	藤沢市No.419第4・5地点	藤沢市湘南台		堅穴状遺構・溝状遺構・ゴミ穴	陶磁器(焼締あり)・土製品(浅人形、羽口)・鉄製品(燈籠)・鉄製品・鉄滓・土器(焼塙)・熔炉・石製品(瓦石)	桜井隼也99『藤沢市No.419遺跡第4・5地点発掘調査報告書』(藤沢市湘南台7丁目9-7・7丁他所在) 調査団	
214	藤沢市No.451	藤沢市芦瀬沢		溝状遺構	陶器	秋山重美98『県調査報告』40	
215	藤沢市北永新第二(三地区)土地区画整理事業区域内	藤沢市葛原		(中近世) 溝状遺構・土坑状遺構		相原俊之96・00『県調査報告』38・43	
216	西富貝塚	藤沢市西宮		(中近世) 溝状遺構		寺田兼力99『県調査報告』41	
217	藤沢市No.424	藤沢市西側野		(中近世) 溝・土塁・塚		土居重美96『県調査報告』38	
218	石川	藤沢市石川		溝(中近世)・土坑・ピット群		若松美智子他99・00『県調査報告書』41・43	
219	藤沢市No.110(中藤北)	藤沢市石川		溝状遺構		寺田兼力96『市文化財調査報告書』30	
220	藤沢市No.259	藤沢市石川	墓地	墓穴・溝・ピット	陶器	田村正照他98・00『県調査報告書』40・42	
221	藤沢市No.265	藤沢市石川			陶器	鈴木啓介00『県調査報告書』43	

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
222	藤沢市No.309	藤沢市石川		中~近世:溝		小林博士97『県調査報告』39	
223	藤沢市No.467	藤沢市石川		土壙		田代部夫98『県調査報告』40	
224	南霞泊山	藤沢市石川	集落跡	(中近世)溝状遺構・ピット		寺田兼方90『県調査報告』42	
225	藤沢市川名清水	藤沢市川名		建物址		津田大曾根他00『藤沢川名清水道路発掘調査報告書(東レ基礎研究会内)』調査団	
226	本入こざつ原	藤沢市善行		畝状遺構・溝状遺構	銭貨・かわらけ・石製品(砥石)・土製品・陶器	高村公之助96「本入こざつ原遺跡」(財)かながわ13	
227	藤沢市No.162	藤沢市大庭		溝状遺構	陶器	土井浩美97・00『市文化財調査報告書』32・35	
228	藤沢市No.211 (大庭城)	藤沢市大庭		溝		寺田兼方97『市文化財調査報告書』32	
229	藤沢市No.36 (若尾山)	藤沢市朝日町	集落跡	(中近世)溝		松山歎一郎99『県調査報告』41	
230	上ノ原・島宮藤沢谷田地内	藤沢市長後			陶器	秋山重美他97『上ノ原道路・島宮藤沢谷田地内遺跡・堀塁調査報告書』調査団	
231	藤沢市No.244 -456	藤沢市長後		畝状遺構		松山歎一郎90『県調査報告』43	
232	藤沢市No.362	藤沢市長後		(中近世)ピット		寺田兼方90『県調査報告』43	
233	藤沢市No.382	藤沢市長後	集落跡	ピット	陶器	根本志保99『県調査報告』41	
234	藤沢市No.390	藤沢市長後		(中近世)井戸		新美77『県調査報告』39	
235	藤沢市長後上ノ原	藤沢市長後		土坑・溝状遺構	陶器	寺田兼方99『藤沢市長後上ノ原』(No.322)『跡跡』調査団	
236	藤沢市No.185	藤沢市渡内		(中近世)道路状遺構		土屋浩美96『県調査報告』38	
237	二伝寺(藤沢市No.215)脇	藤沢市渡内		土壙・道路状遺構	陶器	土屋浩美他99『二伝寺(藤沢市No.215)脇跡跡・藤沢市渡内三丁目335・336地点』調査団	
238	藤沢宿	藤沢市藤沢	宿場跡	石組基礎建物・掘立柱建物址柱建物・かまど・井戸・土壙・溝		若松美智子99『県調査報告』41	
239	南葛野	藤沢市南葛野・鶴谷		土坑・溝状遺構・ピット	陶器・かわらけ・石製品(火打石、砥石)・瓦器(七輪)・土製品(模造一分鑄)・寛永通宝・土器(灯明皿)	松井津也96『南葛野遺跡・馬道遺構・伊勢原駅藤沢駅原地に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』	
240	藤沢市No.97 (八幡台)	藤沢市白旗		溝・ピット	陶器	林原利明84『県調査報告』40	
241	白旗3丁目	藤沢市白旗		溝状遺構・土坑		寺田兼方97『藤沢市No.97遺跡発掘調査報告書』調査団	
242	藤沢市No.438 (麻原北)	藤沢市本舗沼		溝・土坑	陶器・煙管	土井浩美他99『市文化財調査報告書』32	
243	藤沢市No.75	藤沢市本舗沼		(中近世)溝・土坑・井戸		若松美智子99『県調査報告』43	
244	藤沢市本舗沼65	藤沢市本舗沼	集落跡	溝状遺構		秋山重美96『県調査報告』41	
245	藤沢市本舗沼67	藤沢市本舗沼	集落跡	溝状遺構		秋山重美99『県調査報告』41	
246	藤沢市本舗沼71	藤沢市本舗沼		溝・柱穴	陶器	土屋浩美98『県調査報告』40	
247	吉岡道跡群	藤沢市用田		溝・土坑・ピット		関根唯C96『吉岡道跡群』調査会議	
248	用田バイパス 開通跡群(藤沢市No.185)	藤沢市用田		土坑・溝状遺構		栗原伸好他98『年報』(財)かながわ	
249	用田バイパス 開通跡群(藤沢市No.166)	藤沢市用田		堅穴状遺構・溝状遺構	瓦質丸火跡	同上	
250	用田バイパス 開通跡群(藤沢市No.328)	藤沢市用田		ピット群・溝状遺構・堅穴状遺構・井戸址・土坑・建物址	陶器・銭貨	同上	
251	用田バイパス 開通跡群(藤沢市No.347)	藤沢市用田		土坑・溝状遺構・ピット		栗山後卓史00『年報』8(財)かながわ	
252	用田バイパス 開通跡群(藤沢市No.322)	藤沢市用田		段切状遺構・堅穴状遺構・板築状遺構・船状遺構・溝状遺構・土壙・ピット	陶器・銭貨・土製品・(泥面) 子)	栗原伸好他96『年報』(財)かながわ	

神奈川県内の近世道路の集成（2）

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出構造	出土遺物	文献	旧番号
253	六会駅西口通り線	藤沢市六会		溝状遺構	陶磁器	寺田兼子他97「六会駅西口通り線〔No.105-416遺跡〕発掘調査報告書」	
254	三ツ俣（G地区）	小田原市国府津		(中・近世) 濃状・ピット列・土坑・水溜状	(中・近世) 陶磁器・古鉢・鉢製品・調製品(燈籠)・木製品	富永耕之00「三ツ俣遺跡Ⅲ〔G地区〕」財「かながわ81」	
255	小田原城下幸田跡第Ⅱ地点	小田原市幸町	城郭	(中・近世) 土坑・溝・柱穴	(中・近世) 瓦・陶磁器・かわらけ	山口順志97「平成6年度小田原市緊急発掘調査報告書」市報告64	
256	小田原市No35	小田原市幸町	城跡跡	(近世以降) 土坑・溝・かわらけ	(近世以降) 陶磁器・瓦・かわらけ	山口順志96『京調査報告』38	
257	小田原城三の丸東端第Ⅲ地点	小田原市幸町	城郭	堀	陶磁器	小林義典96『京調査報告』40	
258	小田原城三の丸北端第Ⅰ地点	小田原市幸町	城郭	堀・溝	陶磁器	小林義典96『小田原城三の丸北端第Ⅰ・Ⅱ地点発掘調査報告書』玉川文化財研究所	
259	小田原城三の丸北端第Ⅱ地点	小田原市幸町	城郭	堀		同上	
260	小田原城三の丸弁財天跡	小田原市幸町1丁目	城跡跡	地表・溝	かわらけ・陶磁器	諫訪間朝98『京調査報告』40	
261	小田原城越橋城下塗留	小田原市幸町	城郭	(中・近世) 堀		諫訪間朝98「平成7年度小田原市緊急発掘調査報告書」市報告66	
262	久野多古塗跡跡第Ⅴ地点	小田原市久野		(中・近世) 段切	(中・近世) 陶磁器	小池聰99『京調査報告』41	
263	久野第2号古墳	小田原市久野			磁器・軸用砥石・砥石・金属製品	山内祐一96『久野第2号古墳』小田原市28	
264	久野北側下第Ⅲ地点	小田原市久野		溝・土坑		小林義典96『久野北側下道路跡第Ⅲ地点発掘調査報告書』玉川文化財研究所	
265	小田原市No9	小田原市久野		溝状・道路状		久地義文99『京調査報告』41	
266	国府津舞台	小田原市国府津			陶磁器	小池聰97『京調査報告』39	
267	酒井陣場	小田原市海町4丁目	陣所	(中・近世) 堀・溝状・鉢状・	陶磁器	高橋勝山99『京調査報告』41	
268	小田原市No221	小田原市海町4丁目	城跡跡	鉢状	陶磁器	小林義典98『京調査報告』40	
269	小堀御籠ノ台大堀切西端第Ⅰ地点	小田原市十字4丁目	城郭	(中・近世) 堀		諫訪間朝96『小田原城小堀御籠ノ台大堀切』市教委	
270	小堀御籠ノ台大堀切中端第Ⅰ地点	小田原市十字4丁目	城郭	(中・近世) 堀	(中・近世) 陶磁器	諫訪間朝96『小田原城小堀御籠ノ台大堀切』市教委	
271	小田原市No153・187	小田原市小船	墓地	土壤層	陶磁器	小池聰97『京調査報告』39	
272	小田原市小船轟地区内	小田原市小船			陶磁器	小池聰99『京調査報告』41	
273	小田原市No45	小田原市小八幡		(中・近世) 上坑		小林義典98『京調査報告』40	
274	小八幡東塙	小田原市小八幡			陶磁器	秋山重美99『平成10年度小田原市調査発表要旨』	
275	香沼屋敷第Ⅳ地点	小田原市城山	城郭	土坑・ピット・溝		諫訪間朝97『京調査報告』39	
276	小田原市No34・35	小田原市城山	城跡跡	堀・土坑	陶磁器・瓦・汽車土瓶	山口順志96『京調査報告』38	
277	小田原城下香沼屋敷跡第V地点	小田原市城山	城郭	(中・近世) 土坑・溝	(中・近世) 瓦・陶磁器・かわらけ・鉢製品	山口順志97「平成6年度小田原市緊急発掘調査報告書」市報告64	
278	小田原城三の丸元藏庫第Ⅲ地点	小田原市城山	城郭	(中・近世) 堀・土坑	(中・近世) 瓦・陶磁器	同上	
279	小堀御籠ノ台大堀切東端第Ⅰ地点	小田原市城山	城郭	(中・近世) 堀・土堀	(中・近世) 陶磁器・砥石	諫訪間朝96『小田原城小堀御籠ノ台大堀切』市教委	
280	御治曲輪北壁第Ⅲ地点	小田原市城山	城郭	(中・近世) 堀・溝・土坑・ピット	陶磁器・かわらけ・瓦	諫訪間朝97『京調査報告』39	
281	伊豫座	小田原市城山1丁目		道状・土坑・溝状・段切り	陶磁器・かわらけ	高橋勝山98『伊豫座道路発掘調査報告書』調査团	

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
282	伊羅窯	小田原市城山1丁目		(中・近世) 堀・硬化面・土坑・柱穴	(中・近世) 陶磁器・かわらけ・土器・石製品	調訪間昭09『平成8年度小田原市緊急発掘調査報告書5』市報告24	
283	三の丸元戦場第Ⅱ地点	小田原市城山1丁目	城郭	堀	陶磁器	小林義典97『三の丸元戦場第Ⅲ・V地点、加藤直衛屯跡第I地点発掘調査報告書』調査団	
284	三の丸元戦場第Ⅲ地点	小田原市城山1丁目	城郭	(中・近世) 堀	(中・近世) 陶磁器	同上	
285	小田原城・八幡山付近	小田原市城山3丁目	城郭跡	堀	陶磁器	調訪間昭09『平成8年度小田原市緊急発掘調査報告書5』市報告24	
286	小田原城下香留根戦跡第Ⅰ地点	小田原市城山3丁目	城郭	(中・近世) 土坑・ビット・溝	(中・近世) 陶磁器・砾石	調訪間昭08『平成7年度小田原市緊急発掘調査報告書』市報告66	
287	小田原城下香留根戦跡第Ⅱ地点	小田原市城山3丁目	城郭	(中・近世) 堀・土坑	(中・近世) 陶磁器	同上	
288	小田原城八幡山古本曲輪本塁道付近	小田原市城山3丁目	城郭	堀・掘立柱建物址	(中・近世) 陶磁器	小林義典95『小田原城八幡山古本曲輪本塁道付近発掘調査報告書』玉川文化財研究所	
289	奥規第I地点	小田原市城山3丁目	城郭		(中・近世) 陶磁器・かわらけ	調訪間昭06『小田原城小堀御體ノ台大廻切』市教委	
290	史跡小田原城跡	小田原市城内	城郭跡	溝・盛土	陶磁器・瓦	大島信一・97『県調査報告』41	
291	史跡小田原城の二の丸御跡	小田原市城内	城郭跡	建物壇石・石組水路・石垣・溝	両面器・瓦・鉄製品(釘)・銅製品(砂)・古鏡	大島信一・99『県調査報告』41	
292	二の丸御跡	小田原市城内	城郭	堀・石垣・建物跡・石垣・石列・溝	(中・近世) 陶磁器・かわらけ・瓦・鉄製品(釘)・銅製品(釘)・古鏡	大島信一・99『史跡小田原城跡二の丸御跡試掘調査の概要』市報告76	
293	小田原市南古	小田原市千代	寺院・居館	窑状造構・溝状		牧野賛一・99『県調査報告』41	
294	千代作ノ町第IV地点	小田原市千代		溝・土坑	陶磁器	調訪間昭06『県調査報告』40	
295	千代作ノ町第V地点	小田原市千代		糞状・土坑・溝		調訪間昭09『千代作ノ町道路第IV地点』市報告69	
296	千代東町第I地点	小田原市千代		(中・近世) 土坑・溝状		長地英夫99『神奈川県小田原市千代東町道路第I地点発掘調査報告書』調査団	
297	千代南原第II地点	小田原市千代		溝状	陶磁器	小池照06『県調査報告』38	
298	千代南原第III地点	小田原市千代			陶磁器	小池照08『県調査報告』40 「千代南原道路第II地点試掘調査報告書」	
299	千代南原第IV地点	小田原市千代			陶磁器	小池照07『千代南原道路第IV地点』調査団	
300	千代北町第II地点	小田原市千代			陶磁器	小池照06『県調査報告』38	
301	矢代	小田原市前川	溝	陶磁器		柏木善治00『矢代遺跡』(財)かながわ101	
302	谷山山上第II地点	小田原市谷津	城郭跡	堀・土坑	(中・近世) 陶磁器・かわらけ・つぶて石	調訪間昭06『県調査報告』38	
303	小田原市No.151第Ⅱ地点	小田原市中村原			(中・近世) 陶磁器	小池照08『県調査報告』40	
304	小田原市No.151第Ⅲ地点	小田原市中村原			(中・近世) 陶磁器	小池照06『県調査報告』40	
305	小田原市No.151第Ⅳ地点	小田原市南町	町屋	石垣・石組水路・糞便・溝状	陶磁器・かわらけ・石塔・石臼	小林義典98『県調査報告』41	
306	小田原城下瓦長根跡第I地点	小田原市南町	城郭跡	土塙・井戸・石列・掘立・溝状・ビット	陶磁器・かわらけ・瓦	調訪間昭00『小田原城下瓦長根跡第I地点』市報告78	
307	小田原城下山角町	小田原市南町	城郭跡	(中・近世) 溝・水路・井戸・瓦石横水路・土塙	(中・近世) 陶磁器・かわらけ・石塔・石臼	小林義典98『県調査報告』38	
308	御長垣跡第II地点	小田原市南町1丁目	都市	建物址		小林義典98『平成10年小田原市道路調査発表会発表資料』市教委	

神奈川県内の近世遺跡の集成（2）

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
309	小田原城下・天神下跡第Ⅰ地点	小田原市南町1丁目	溝			山口剛志00『小田原城下・天神下跡第Ⅰ地点』「平成12年 小田原市遺跡調査発表会発表要旨」市教委	
310	小田原城下山角町第Ⅰ地点	小田原市南町1丁目	都市	(中・近世) 土坑・石列・柱穴・溝	(中・近世) かわらけ・陶磁器	渕谷周郎06『小田原城下山角町遺跡第Ⅰ地点』市教委	
311	三の丸小学校内	小田原市本町	城館跡	壁・方形石積・土坑・方形堅穴・柱土坑・溝・井戸・玉石積木水路・石垣積木水路	(中・近世) 陶磁器・かわらけ・瓦	小林義典96『原調査報告』38	
312	小田原城三の丸・大久保雅楽介跡第Ⅱ地点	小田原市本町	城館跡	井戸・石垣・礎石列・道路状・土塁・溝・柱穴	陶磁器・かわらけ・古銭	山口剛志00『小田原城三の丸・大久保雅楽介跡第Ⅱ・第Ⅲ地点』市報告80	
313	小田原城三の丸・藩校集或跡第Ⅳ地点	小田原市本町	城館跡	門巻台・土坑・溝・石組造築・柱穴・集石・瓦面・道路状廻面化面	陶磁器・瓦・かわらけ	山口剛志97『原調査報告』39	
314	小田原城三の丸・東堀第Ⅳ地点	小田原市本町	城館跡	堀・石垣・水路	かわらけ・木製品・陶磁器・瓦・柳樹	渕谷周郎00『小田原城三の丸・東堀第Ⅳ・第Ⅴ地点』市報告77	
315	小田原城第V地点	小田原市本町	城館跡	石垣・堀	陶磁器・かわらけ・漆器	同上	
316	小田原城三の丸・藤松校堂成組跡第Ⅳ地点	小田原市本町	城館跡	(中・近世) 堀・石垣・柱穴・水路・道路状	(中・近世) 瓦・陶磁器・かわらけ	渕谷周郎07『平成6年度小田原市緊急発掘調査報告書』小田原市064	
317	小田原城下中宿町第Ⅲ地点	小田原市本町1丁目	城館跡	建物跡・石列・土坑	(中・近世) 陶磁器・土製品・金屬製品・石製品・木製品・古銭・ガラス製品・瓦	上石城子99『小田原城下中宿町遺跡第Ⅲ地点』市報告70	
318	小田原城下櫛千崎町第V地点	小田原市本町1丁目	城館跡	建物跡・石列・石敷・土坑	(中・近世) 陶磁器・焼鉢・陶器・土製品・金屬製品・石製品・木製品・古銭・ガラス製品・瓦	渕谷周郎99『小田原城下櫛千崎町遺跡第V地点』市報告71	
319	小田原城下櫛千崎町第IV地点	小田原市本町1丁目	城館跡	(中・近世) 井戸・方形堅穴・石組・溝・碇石列・土塁・柱穴	(中・近世) 陶磁器・瓦・かわらけ・土製品・金屬製品・古銭・石製品・木製品	山口剛志98『小田原城下櫛千崎町遺跡第IV地点』市報告67	
320	小田原城三の丸・大久保雅楽介跡第V地点	小田原市本町1丁目	城館跡	(中・近世) 石垣・井戸・石垣・石組水路・溝・土坑	(中・近世) 陶磁器・瓦・かわらけ・土製品・金屬製品・古銭・石製品・木製品	山口剛志99『小田原城三の丸・大久保雅楽介跡第V地点』市報告72	
321	小田原城第V地点	小田原市本町1丁目	城郭	堀・石垣・土坑・井戸・水路	かわらけ・陶磁器・木製品(漆器・木簡・下駄)	渕谷周郎98『平成10年 小田原市遺跡調査発表会発表要旨』	
322	小田原部孝太郎邸跡第I地点	小田原市本町1丁目	城館跡	(中・近世) 柱穴群・土坑・溝・石垣	(中・近世) 陶磁器・瓦・かわらけ・土製品・金屬製品・古銭・石製品・木製品	塙田正章99『小田原城三の丸・部孝太郎邸跡第I地点』市報告75	
323	小田原城三の丸・南堀第V地点	小田原市本町1丁目	城館跡	土堀・堀		佐々木健司00『小田原城三の丸・南堀第V地点』「平成12年 小田原市遺跡調査発表会発表要旨」市教委	
324	小田原城三の丸・南堀第VI地点	小田原市本町1丁目	城館跡	土塁・堀・石垣		佐々木健司00『小田原城三の丸・南堀第VI地点』「平成12年 小田原市遺跡調査発表会発表要旨」市教委	
325	円蔵・下ヶ町	茅ヶ崎市円蔵		土坑・土塁・溝状造築	金属製品(釘?)・陶磁器	宮下秀之助00『円蔵・下ヶ町 道終・民間住宅建設にともなう第10次発掘調査報告書』市文化振興財团	
326	円蔵御屋敷A	茅ヶ崎市円蔵		溝状造築・ピット	陶磁器・寛永通宝	石野清子00『円蔵御屋敷A 道終・光寺本堂建設工事にともなう発掘調査報告書』市教委	

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
327	円蔵跡屋敷B	茅ヶ崎市円蔵		ピット・溝状遺構・落ち込み (中近世)堅穴状遺構・井戸址・土壌・溝状遺構・ピット	煙管・泥面子	大村浩司他95・98・00「県調査報告」38・40・43	
328	下ヶ町	茅ヶ崎市円蔵	集落跡	(中近世)溝状遺構・土壌・ピット・井戸址・溝状遺構・土壌・堅穴状遺構・落ち込み	煙管・泥面子・七輪	大村浩司他98・99・00「県調査報告」40・41・43	
329	小井戸	茅ヶ崎市円蔵	集落跡	(中近世)土壌・溝状遺構(耕作跡?)・ピット		富永富士雄98・00「県調査報告」40・43	
330	小井戸-2次	茅ヶ崎市円蔵	集落跡			渡辺清史97「県調査報告」39	
331	鶴ヶ町	茅ヶ崎市円蔵	集落跡	溝状遺構・ピット	陶磁器	富永富士雄98・00「県調査報告」38・43	
332	芦沢排水水間遺跡群(椎ノ木坂)	茅ヶ崎市下寺尾		遺状遺構・溝状遺構	陶磁器・煙管・灰器	阿部友寿他97「芦沢排水水間遺跡群・行谷道路・大鳥仲ノ谷道路・諏訪谷西道路・椎ノ木坂遺跡」(財)かながわ28	
333	七宝伽藍跡	茅ヶ崎市下寺尾	集落跡	陶磁器		渡辺清史97「県調査報告」41	
334	西方B	茅ヶ崎市下寺尾	集落跡	陶磁器		同上	
335	東方C	茅ヶ崎市下寺尾		遺状遺構・溝状遺構		阿部友寿97「県調査報告」39	
336	石原A・石原B	茅ヶ崎市下町屋		(中近世)堅穴状遺構・土坑・ピット・溝状遺構		富永富士雄96・98「県調査報告」38・40	
337	居村A	茅ヶ崎市茅ヶ崎	集落跡	井戸址・溝状遺構	陶磁器	富永富士雄96・99・00「県調査報告」38・41・43	
338	臼久保	茅ヶ崎市芹沢		堅穴状遺構・段切状遺構・道状遺構・溝状遺構・缺状遺構・土壌・石塊・ピット	陶磁器・土錐・鉄製品(鍔・煙管)・土器・銭貨・灰器・土錐	井辺一徳他「臼久保遺跡第一番古近以降~弥生時代」(財)かながわ40	
339	臼久保A	茅ヶ崎市芹沢	集落跡	(中近世)道路状遺構		富永富士雄98「県調査報告」40	
340	下馬A	茅ヶ崎市芹沢	集落跡	溝状遺構・ピット		富永富士雄99「県調査報告」41	
341	芹沢	茅ヶ崎市芹沢		(中近世)道路状遺構・溝状遺構		渡辺清史97「県調査報告」39	
342	大久保A	茅ヶ崎市芹沢		(中近世)溝状遺構・道路状遺構		富永富士雄98「県調査報告」40	
343	行谷	茅ヶ崎市行谷				同上	
344	岡門	茅ヶ崎市香川	集落跡	溝状遺構	陶磁器	渡辺清史98「県調査報告」41	
345	岡門B	茅ヶ崎市香川	集落跡	溝状遺構	陶磁器	富永富士雄98「県調査報告」41	
346	香川・下寺尾遺跡群谷地地区	茅ヶ崎市香川	集落跡	(中近世)掘立柱建物址・堅穴状遺構・溝状遺構・井戸址・土坑・道状遺構・墓塚・ピット群	陶磁器・井手・煙管	中村哲也99「県調査報告」41	
347	篠谷	茅ヶ崎市香川		ピット・墓	土器・陶磁器	相原義夫98「県調査報告」39	
348	中通A	茅ヶ崎市香川				富永富士雄98「県調査報告」38	
349	中通C	茅ヶ崎市香川	集落跡			富永富士雄98「県調査報告」42	
350	東	茅ヶ崎市香川		(中近世)土坑・溝状遺構・ピット・落ち込み	陶磁器	富永富士雄96・98「県調査報告」38・41	
351	北D	茅ヶ崎市香川	集落跡	溝状遺構・土坑		富永富士雄98・00「県調査報告」40・42	
352	東ノ町	茅ヶ崎市室田				大村浩司98「県調査報告」40	
353	小板町	茅ヶ崎市小板町				同上	
354	稻	茅ヶ崎市小稻田	集落跡		陶磁器	同上	
355	吹切	茅ヶ崎市小稻田	集落跡			高橋和00「県調査報告」43	
356	池袋A	茅ヶ崎市小稻田	集落跡		陶磁器	富永富士雄98・99「県調査報告」40・41	
357	池袋B	茅ヶ崎市小稻田	集落跡		陶磁器	同上	
358	巴待田B	茅ヶ崎市小稻田	集落跡			富永富士雄98「県調査報告」40	
359	木ノ下A	茅ヶ崎市小稻田	集落跡	(中近世)溝状遺構	陶磁器	渡辺清史97「県調査報告」41	
360	季城塚A	茅ヶ崎市松林				富永富士雄97「県調査報告」39	
361	手城塚B	茅ヶ崎市松林		(中近世)溝状遺構・ピット・性格不明落ち込み		富永富士雄97・98・00「県調査報告」39・40・43	
362	大堀下	茅ヶ崎市松林				宮下秀之97「県調査報告」39	
363	網久保A	茅ヶ崎市松林	集落跡	井戸址・(中近世)堅穴状遺構・土壌・溝状遺構・ピット	陶磁器	富永富士雄98・00「県調査報告」41・43	

神奈川県内の近世遺跡の集成（2）

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
364	綾久保B	茅ヶ崎市松林	集落跡	溝状遺構	陶磁器	林原利明98『県調査報告』40	
365	広町	茅ヶ崎市西久保	集落跡	溝状遺構・ピット	(中近世)陶磁器・かわらけ・鉄製品	富永富士雄96・98『県調査報告』38・40	
366	広町 第4次調査	茅ヶ崎市西久保				宮下秀之97『県調査報告』39	
367	上ノ町・広町	茅ヶ崎市西久保		溝状遺構・井戸址・土坑・遺構・範状遺構・ピット・構築状遺構	陶磁器(施釉あり)・ガラス製品・ペルギー製皿・土器(始塔)	大村浩司他97『上ノ町・広町遺跡』市文化振興財団	
368	西久保広町	茅ヶ崎市西久保		畝状遺構・ピット	陶磁器・泥面子	大村浩司他98『西久保広町道路民間開発事業にともなう第1・2次発掘調査報告書』市教委	
369	西久保上ノ町	茅ヶ崎市西久保		溝状遺構・範状遺構・土坑・ピット・遺構・井戸址・性格不明遺構	陶磁器・鐵貨・土器・木製品(漆椀)・石製品(石臼・五輪塔)・金屬製品(釘・鍵等)・動植物遺体・かわらけ	大村浩司他97・98・00『県調査報告』39・40・43 頭部実喜松「手稿」6・7・8(財)かながわ	
370	西久保大塚段B	茅ヶ崎市西久保		(古代～中近世)土坑・溝状遺構・ピット		藤井秀男97『県調査報告』40	
371	大塚敷A	茅ヶ崎市西久保	集落跡	(中近世)ピット・溝状遺構		富永富士雄00『県調査報告』43	
372	大塚敷B	茅ヶ崎市西久保	集落跡	(中近世)豊穴状遺構・土坑・溝状遺構・ピット・性格不明落ち込み・集石・土坑・井戸址・範状遺構・孤立性柱址・土壌基		富永富士雄96・00『県調査報告』40・42・43	
373	大町A・大町B	茅ヶ崎市西久保	集落跡	(中近世)井戸址・土堆墓・土墳・ピット・豊穴状遺構・溝状遺構・落ち込み		大村浩司他98『県調査報告』40	
374	六四C	茅ヶ崎市赤羽根				同上	
375	八国B	茅ヶ崎市赤羽根		(中近世)溝状遺構・土堆・井戸状遺構・地形		高橋和98『県調査報告』40	
376	六四D(№68)	茅ヶ崎市赤羽根				富永富士雄97『県調査報告』39	
377	序沢排水池周辺遺跡群(源流谷西)	茅ヶ崎市堤		溝状遺構・土坑・豊穴状遺構・ピット	炻器・陶磁器・石製品(砾石)・煙管	阿部友寿男97『序沢排水池周辺遺構群行谷遺跡・大高仲ノ谷遺跡・源流谷西遺跡・椎ノ木坂遺跡』(財)かながわ28	
378	序沢排水池周辺遺跡群(大高仲ノ谷)	茅ヶ崎市堤		溝状遺構・道状遺構	陶磁器・かわらけ	同上	
379	諏訪谷A	茅ヶ崎市堤		道状遺構・豊穴状遺構・土坑		阿部友寿男97『県調査報告』39	
380	後田A	茅ヶ崎市堀沼	集落跡	(中近世)溝状遺構		源邊清史99・00『県調査報告』41・43	
381	後田B	茅ヶ崎市堀沼	集落跡			同上	
382	身侍田	茅ヶ崎市堀沼	集落跡	豊穴状遺構・土堆・溝状遺構・ピット・性格不明落ち込み		富永富士雄96・98『県調査報告』38・40	
383	前田A	茅ヶ崎市堀沼	陶磁器			富永富士雄97・98『県調査報告』39・40	
384	前田B	茅ヶ崎市堀沼	陶磁器			富永富士雄97『県調査報告』39	
385	長町A	茅ヶ崎市堀沼				富永富士雄98『県調査報告』40	
386	長町B	茅ヶ崎市堀沼	集落跡			同上	
387	津川田C	茅ヶ崎市堀沼				集落跡富永富士雄98・00『県調査報告』40・43	
388	巳待田A	茅ヶ崎市堀沼	集落跡	土礫・落ち込み	陶磁器	富永富士雄98・99『県調査報告』40・41	
389	西ノ谷上	茅ヶ崎市浜之郷	集落跡	(中近世)溝状遺構・範状遺構・落ち込み	陶磁器	大村浩司他98・99『県調査報告』40・41	
390	中谷	茅ヶ崎市浜之郷	集落跡			富永富士雄00『県調査報告』43	
391	鶴嶽八幡宮参道石原A・石原B	茅ヶ崎市浜之郷	社寺跡・集落跡	古参道・溝状遺構・ピット		大村浩司96『県調査報告』38	
392	鶴嶽八幡宮参道	茅ヶ崎市浜之郷	社寺跡	古参道	陶磁器	大村浩司99『県調査報告』41	
393	浜之郷宮ノ腰	茅ヶ崎市浜之郷	集落跡	(中近世)土坑・溝状遺構・ピット・豊穴状遺構	陶磁器	大村浩司96・99『県調査報告』38・41	

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	田番号
394	浜之郷社A	茅ヶ崎市浜之郷		池状遺構・溝状遺構・井戸址・土坑・ピット・斂穴状遺構	中近世) 鋼製品(鍔・釘)・碁石・木箆・木製品・人骨・骨・瓦	石倉澄子他97・99・00『県調査報告書』39・41・43	
395	浜之郷社B	茅ヶ崎市浜之郷		(中近世) 溝状遺構		大村浩司97『県調査報告書』39	
396	居付B	茅ヶ崎市本村	集落跡		陶磁器	渡辺清史99『県調査報告書』41	
397	前ノ田	茅ヶ崎市本村	集落跡	土塙・ピット		大村浩司98『県調査報告書』40	
398	明王ヶ谷	茅ヶ崎市矢吹	集落跡	(中近世) 溝状遺構・ピット		高橋和00『県調査報告書』42	
399	矢吹山II	茅ヶ崎市矢吹		ピット		大村浩司99『矢吹山遺跡II 民間開発事業にともなう第2次発掘調査報告書』市教委	
400	池子曳戸跡(足子市No.100)	逗子市池子		建物址・墓塚(木棺)・井戸・溝・土坑・不明遺構	陶磁器・陶器人形・浮玩具	99『池子曳戸跡(足子市No.100) 通路発掘調査概要報告書』企画課	
401	池子遺跡群No.12地点	逗子市池子		墓塚・小・横穴状遺構・坑・階段状遺構	骨片・陶磁器・石製品	横浜規範館99『池子遺跡群』(財) かながわ43	
402	池子遺跡群No.1-C地点	逗子市池子	集落跡	建物址・井戸・溝状遺構・水施設・段階状遺構・土坑・ピット群・糞状遺構・糞状遺構	ガラス玉・木製品(虫歯・横錐・下駄)・瓦質土器・石製品(臼・残骨・鉄製品(鎧・筒箭・十能・土製品(移石)・陶磁器・陶製品(和鏡)・拓器・散骨)	同上	
403	池子遺跡群No.1-C地点	逗子市池子		溝状遺構・井戸・池状遺構・堅穴状遺構・建物址・木桶埋設遺構・木箱埋設遺構・土坑・石机みどり遺構	下駄・瓦質土器・根製耳環・石製品(火打石・石砧)・鍛製品(釘)・鐵燒土・砂拂土・頭貫土器・土製品(小玉・はと笛)・陶製品・木製品(下駄・襷・漆器・釣竿・墨盒)・拓器・瓦	横浜規範館99『池子遺跡群No.1-C地点』(財) かながわ11	
404	池子遺跡群No.1-D地点	逗子市池子	集落跡	溝状遺構・井戸址・土坑・屋外窓	瓦・瓦質土器・有柄鏡(白・残骨)・土製品(泥瓶子)・兩眼・兩眼(二また)・腰帯・垢器・かわらけ	高村公之助95『池子遺跡群No.1-D地点』(財) かながわ3	
405	池子遺跡群No.19地点	逗子市池子	集落跡	建物址・井戸址・木桶埋設遺構・木箱埋設遺構・土坑・溝状遺構・糞状遺構・石列・貝塚		横浜規範館99『池子遺跡群VI No.5地点・No.19地点』(財) かながわ23	
406	池子遺跡群No.6地点	逗子市池子		溝状遺構・井戸址・土坑	錢貨・陶磁器	山本輝久他97『池子遺跡群IV No.6地点・No.7地点東地区・No.7地点西地区・No.15地点・No.16地点・No.17地点・No.18地点』(財) かながわ26	
407	池子遺跡群No.7地点東地区	逗子市池子		井戸・河道・土塙・掘立柱建物址・ピット群・塗・焼土塙	埴・瓦質土器(火打石・横錐)・鍛製・石製品(空筒白堺)・錢貨・鐵製品(釘・刀子)・土製品(土器・人形)・陶製品(泥瓶子・土器)・兩眼器・陶製品(天秤計)・木製品(虫歯・下駄・玩具・漆器・唐袋)・拓器	同上	
408	池子遺跡群No.10地点	逗子市池子	集落跡	溝状遺構	石製品(石盤)・土製品(人形)・陶磁器	横山英史他97『池子遺跡群V No.8地点・No.9地点・No.10地点・No.13地点・No.14地点』(財) かながわ27	
409	池子遺跡群No.8地点東地区	逗子市池子		河道・ピット・井戸・土坑・溝状遺構・段切遺構・道路状遺構	石製品(五輪等・砾石・鏡)・陶磁器・陶製品(盞)・漆甲製品(鏡)	同上	
410	池子遺跡群No.9地点東地区	逗子市池子		河道・井戸址・溝状遺構・段切遺構・道路状遺構・糞状遺構	骨角製品・錢貨・陶磁器	同上	
411	舞原	逗子市池子		(中近世)	陶磁器	佐藤仁彦96『県調査報告書』39	
412	地蔵山(萬野神社)	逗子市板山		(中近世) 掘立柱建物址・段切遺構・土坑・ピット・溝上位・小・地下式坑	陶磁器	土屋浩美00『県調査報告書』43	
413	逗子市No.118	逗子市板山	集落跡	(近世以前) 溝状遺構・掘立柱建物址		同上	
414	波瀬山西側台地	逗子市新宿		(中近世) ピット列	陶磁器	田村良照99『県調査報告書』41	
415	まんだら堂・お祭りやぐら群・名越(No.32)	逗子市久木	城跡跡	井戸状遺構・斜状遺構・石切引場跡(近世・近代) 溝状遺構・石垣状遺構	陶磁器	佐藤仁彦他97『名越遺跡範囲調査報告書』市教委	

神奈川県内の近世遺跡の集成（2）

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
416	横山5丁目	相模原市横山		溝状	陶磁器	長澤邦夫96「県調査報告」38	
417	横山5丁目	相模原市横山5丁目			陶磁器	大坪宜雄97「相模原市横山5丁目遺跡発掘調査報告書」調査団	
418	下溝上谷開口A地区	相模原市下溝		(中・近世)溝状・土坑・柱穴	(中・近世)陶磁器・古銭	鴻沢亮96「下溝上谷開口遺跡」調査団	
419	下溝上谷開口B地区	相模原市下溝		(中・近世)溝状・土坑・柱穴	(中・近世)陶磁器	同上	
420	下溝上谷開口C地区	相模原市下溝		(中・近世)道路状・溝状・土坑・柱穴		同上	
421	下溝上谷開口土地区画整理事業地内	相模原市下溝		溝状・道路状	(中・近世)陶磁器	小池聰96「県調査報告」38	
422	下溝上谷開口土地区画整理事業地内	相模原市下溝		溝状・土坑・柱穴・道路状	(中・近世)陶磁器	小池聰97「県調査報告」39	
423	相模原市No15	相模原市下溝			陶磁器	奥山和久96「県調査報告」40	
424	下森農鳥	相模原市下森間	集落跡	(中・近世)掘立柱建物址・板穴状・井戸・墓土坑・土坑・溝状・道路状	(中・近世)陶磁器	道和幸98「県調査報告」40	
425	橋本	相模原市元橋本		ピット	陶磁器	奥山和久96「県調査報告」38	
426	相模原市No137	相模原市上溝			陶磁器	木村衡97「県調査報告」39	
427	相模原市No156	相模原市上溝		土坑	陶磁器	同上	
428	相模原市No152	相模原市上溝乙5号		(中・近世)溝状・円形土坑		三ツ橋和正96「県調査報告」38	
429	相模原市No155	相模原市上鶴間		(江戸時代以前)整穴状	陶磁器	境雅仁96「県調査報告」38	
430	相模原市No155	相模原市上鶴間			陶磁器	三ツ橋和正97「相模原市No19号遺跡発掘調査報告書」	
431	相模原市No155	相模原市上鶴間			陶磁器・鉄製品・貝製品(鉄案)	三ツ橋和正96「相模原市No19号遺跡発掘調査報告書」調査団	
432	相模原市No206	相模原市上鶴間			陶磁器	境雅仁96「県調査報告」38	
433	中村D地点	相模原市上鶴間		(中・近世)溝・ピット	(中・近世)石板	大坪宜雄96「中村遺跡D地点発掘調査報告書」調査団	
434	上矢部の土堀	相模原市上矢部	城跡跡	土壘・溝状(堀)	陶器	梅川雅史97「県調査報告」39	
435	相模原市No141	相模原市相原		(中・近世)土坑・ピット	(中・近世)陶磁器	三ツ橋和正96「県調査報告」38	
436	相模原市No70	相模原市大島		溝状	陶磁器	木村衡97「県調査報告」39	
437	相模原市No64	相模原市田名		(近世?)溝状		高杉博幸96「県調査報告」40	
438	田名塙田C地区	相模原市田名		溝状		麻生頼司96「県調査報告」38	
439	田名塙田遺跡群A地区	相模原市田名		(中世?)円形土坑・溝状・柱穴		相原俊郎96「県調査報告」41	
440	田名塙田遺跡群B地区	相模原市田名		段切状		道和幸00「県調査報告」42	
441	矢掛久保	相模原市東篠本		(中・近世)方形状造構・溝状・土坑・ピット	陶磁器	三ツ橋和正96「県調査報告」38	
442	相模原市No189	相模原市当麻			陶器	木村衡98「県調査報告」40	
443	がんだ塚	三浦吉初町陶磁器				香川達也96「三戸・小網代地区開発計画地内埋蔵文化財試掘調査概要」調査団	
444	上の原	三浦吉初町		土坑		同上	
445	不入斗	三浦吉初町		造状造構・溝	陶磁器	同上	
446	海防障壁開通土堀	三浦吉南下浦町		土堀		須田英一00「県調査報告」43	

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
447	岡口東洞穴	三浦市南下蒲町			陶磁器	川上久夫他97「岡口東洞穴遺跡」調査報告	
448	大芝原	三浦市南下蒲町		土坑・柱穴		中村惣也90「大芝原遺跡第一第5地点」調査報告	
449	歌舞島B洞穴遺跡	三浦市白石町		火葬施設	(中世以降) 穴	川上久夫他98「歌舞島B洞穴遺跡」調査報告	
450	下大根峯	秦野市下大根	集落跡	(中近世) 穴状・掘立柱建物・土坑・集石・溝	(中近世) 陶磁器・古鏡・人骨・獸骨	大上原一30「下大根峯遺跡」(No.30) I (財) かながわ24 後藤喜八郎97「県調査報告」39	
451	寺山竹ノ内	秦野市寺山		窓穴状・土壙・溝状・ビット	古鏡・瓦器・陶器		
452	中里	秦野市上大根	集落跡	(中~近世) 構・土坑・配石・土坑窓	(中~近世) 陶磁器・鐵製品・古鏡	(中~近世) 陶磁器・鐵製品・古鏡	
453	西田原九沢	秦野市西田原	墓地	(中~近世) 室・中世墓		石原家90「県調査報告」42	
454	鶴巻大字	秦野市鶴巻		溝状・ビット	陶磁器	木村吉行98「不弓引遺跡」(No.21-22)、鶴巻大根遺跡(No.23)、鶴巻上ノ原遺跡(No.25)、北矢名南蛇久保遺跡(No.25下)、北矢名大根遺跡(No.26) (財) かながわ32	
455	北矢名南蛇久保	秦野市鶴巻		造状・溝状・土坑	陶磁器・銅製品	同上	
456	鶴巻上ノ原	秦野市鶴巻		造状・土坑	陶磁器・土製品・石製品	同上	
457	不弓引	秦野市鶴巻	生産跡	造状・鍋状・溝状・土坑・段切	陶磁器・時・土製品・鐵製品・銅製品・石製品	同上	
458	小南	秦野市南矢名		(中~近世) 構・地下式坑・土坑・造状・段切	(中~近世) 陶磁器・鐵製品(鍬・鋤・鏟・鍋・火箸)・石製品(瓦石)	村上吉正97「小南遺跡」(No.28)、東北久保・鳥居松遺跡(No.29) (財) かながわ23	
459	鳥居松	秦野市南矢名		(近世以降) 道路跡	(近世以降) 陶磁器・瓦・かわらけ	林原利明95「神奈川県秦野市鳥居松遺跡」	
460	鉢ノ木	秦野市北矢名	集落跡	(中世以降) 磚石建物・土坑・井戸・溝状・溝状・集積・ビット・甕列	(中世以降) 陶磁器・木製品・鐵製品(鉢)・石製品(瓦石)	大塚健一90「鉢ノ木遺跡」(No.27) (財) かながわ54	
461	北矢名欠跡	秦野市北矢名		焼土坑	陶磁器	木村吉行98「不弓引遺跡」(No.21-22)、鶴巻大根遺跡(No.23)、鶴巻上ノ原遺跡(No.25上)、北矢名南蛇久保遺跡(No.25下)、北矢名欠跡(No.26) (財) かながわ32	
462	愛甲御屋敷添第1地点	厚木市愛甲		(中近世) 円形土坑・方形土坑	(中近世) 古鏡・鐵製品(刀子)	相原俊夫96「県調査報告」38 鈴木英夫96「御屋敷添跡第1地点発掘調査報告書」調査团	
463	愛甲御屋敷添第2地点	厚木市愛甲		土坑・柱穴	陶磁器	小池徹97「県調査報告」39	
464	愛甲宿	厚木市愛甲		(中~近世) 窓穴状・地下式坑・溝状・集積・土坑・ビット	(中~近世) 陶磁器・鐵製品	林原利明95「県調査報告」38	
465	御屋敷添第3地点	厚木市愛甲		(中世以降) 窓穴状・地下式坑・礫集中・溝・土坑・ビット	土器・鐵製品(鍬)・古鏡・銅製品(管状)	西川修一98「御屋敷添跡第3地点」(No.1)、第4地点(No.2)、第5地点(No.44)、高森・一峰遺跡(No.37)、高森・鶴谷遺跡(No.3) (財) かながわ33	
466	御屋敷添第4地点	厚木市愛甲		(中世以降) 土坑・道		同上	
467	御屋敷添第5地点	厚木市愛甲		(中世以降) 琉球集中・土坑・ビット		同上	
468	愛名宮地	厚木市愛名	集落跡	窓穴状・掘立柱建物・井戸・溝状	陶磁器・鐵製品(鍬・火打金・古鏡・火打石・鏡)	猪飼仁95・97「県調査報告」38・39	
469	愛名北ヶ谷	厚木市愛名		(中世以降) 道状・溝状・窓穴状	古鏡	香村敏一99「県調査報告」41	
470	川田前	厚木市旭町		ビット・土壙・構	(中~近世) 陶磁器・かわらけ	藤田智夫97「県調査報告」39	
471	恩名仲町第2地点	厚木市恩名		(近世・近代) 構状		中村喜代重98「県調査報告」40	
472	恩名仲町第3地点	厚木市恩名		(近世・近代) 井戸		同上	
473	佐野山中瀬陣屋跡	厚木市下荻野	陣屋	溝状・ビット・土坑	陶磁器	平本元一98「県調査報告」40	

神奈川県内の近世道路の集成（2）

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
474	荻原中原	厚木市下荻野	集落跡	道状・溝状・円形土坑	かわらけ・陶磁器	平元一〇『県調査報告』42	
475	下荻野山中	厚木市下荻野	(近世以降)	(近世以降)水田・溝状・掘立柱建物址・土坑・集石土坑	(近世以降)陶磁器・銅製品(鐘管)・斧・古鏡・石製品(砾石)・銅製品(鍵・釘)	香村敏一〇六『下荻野山中道路』調査団	
476	下荻野宿頭	厚木市下荻野	陣屋跡	段切・配石・溝状・道状・土塁	陶磁器・古鏡・鉄	林原利明〇七『県調査報告』39	
477	下荻野中山	厚木市下荻野	陣屋跡	段切・配石・溝状・道状・土塁	陶磁器・古鏡・鉄	大庭澤美〇七『県調査報告』39	
478	下川入・一の城	厚木市下川入		溝状・土壤		中村喜代重九『県調査報告』38	
479	及川宮ノ西	厚木市及川	墓地	(近世以降)土坑墓	(近世以降)陶磁器・石製品(石塔・古鏡)	香村敏一〇六『及川宮ノ西道路』調査団	
480	厚木市金田南海道	厚木市金田	(近世以降)	溝・貯藏穴		熊谷謙〇七『県調査報告』39	
481	厚木横町	厚木市元町	石場造遺跡	土坑・溝	陶磁器・木製品	小山裕之〇八『県調査報告』40	
482	戸室幸林第1地点	厚木市戸室		土坑・鉄状・道状		中山豊〇六『戸室幸林遺跡第1・2地点発掘調査報告書』調査会	
483	戸室幸林第1地点、第2地点	厚木市戸室		溝状・土坑	陶磁器・鐵製品・銅製品(鐘管)	同上	
484	戸室幸林第2地点	厚木市戸室		溝状	陶磁器	中山豊〇七『県調査報告』39	
485	戸室幸林	厚木市戸室		道状		中村喜代重九『県調査報告』41	
486	厚木市妻田中村	厚木市妻田西		豊穴状・溝状・畦状・集石・焼土址	陶磁器・煙管・古鏡	香村敏一〇六『県調査報告』38	
487	妻田中村第4地点	厚木市妻田西		ピット・溝状・溜池	陶磁器	香村敏一〇八『県調査報告』40	
488	妻田中村第5地点	厚木市妻田西		井戸・溝状・土坑・ピット	陶磁器	林原利明〇八『県調査報告』40	
489	妻田白根V	厚木市妻田西	(中近世)	掘立柱建物址		中村喜代重九『県調査報告』39	
490	妻田中村道路第1地点	厚木市妻田西2丁目		大型円形土坑		中村喜代重〇〇『県調査報告』42	
491	小野公所	厚木市小野		道状		平元一〇八『県調査報告』40	
492	小野公所	厚木市小野		道状	陶器	追和摩一郎『県調査報告』40	
493	小野公所	厚木市小野	(中～近世)	土坑・溝状		追和摩一郎『小野公所道路』調査団	
494	小野並木	厚木市小野	(中～近世)	地下式坑	銅製酒注ぎ(調鋼)・鉄製品(鍵)	平元一〇八『県調査報告』40	
495	小野並木	厚木市小野		掘立柱建物址・溝状・土坑	(中～近世)陶磁器・古鏡	押木弘巳〇八『県調査報告』40	
496	船子宮の前	厚木市船子		井戸・土壌・溝状	陶磁器	中村喜代重九『県調査報告』39	
497	荻野公所	厚木市下荻野		溝状	陶磁器	平元一〇〇『県調査報告』42	
498	国道412号線第19～5区	厚木市下荻野	(近世以降)	土坑溝状・ピット・豊穴	陶磁器	香村敏一〇七『県調査報告』39	
499	国道412号線第19区	厚木市下荻野		土壌墓	陶磁器	香村敏一〇六『県調査報告』38	
500	中萩野公所	厚木市中萩野	(中～近世)	溝状・ピット	陶磁器	平元一〇九『県調査報告』41	
501	中萩野成井田	厚木市中萩野		ピット群・土壌・豊穴状	陶磁器	大庭澤美〇六『県調査報告』38	
502	中萩野成井田	厚木市中萩野	(中近世)	土壌墓・溝状・土塙(五輪等)	陶磁器	日野一郎他〇八『中萩野成井田』調査団	
503	曾野野1	厚木市長谷	(中近世)	段切状・掘立柱建物址・地下式溝・溝・土坑	陶磁器・かわらけ・陶器・古鏡	厚木市長谷曾野道路埋蔵文化財発掘調査概要	
504	東町道路第2地点	厚木市東町	館跡・宿	町屋建築・土坑	陶磁器	平元一〇〇『県調査報告』42	
505	東町道路第2地点	厚木市東町	宿場	遺物跡	陶磁器	平元一〇九『県調査報告』41	
506	厚木市做山西登山	厚木市做山		貯藏穴	(中～近世)陶磁器	熊谷謙〇〇『県調査報告』42	
507	東江工芸大学キャンパス内	厚木市做山		柱穴		小池聰九〇六『県調査報告』38	
508	廻山西台	厚木市做山			陶磁器	香村敏一〇六『県調査報告』40	
509	大和市つきみ野	大和市つきみ野			陶磁器	小池聰九〇九『県調査報告』41	
510	大和市つきみ野	大和市つきみ野			陶磁器・かわらけ	小池聰九〇九『大和市No.210道路』市報告71	

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
511	下鶴間城山	大和市下鶴間		(中・近世) 捨立柱建物・地下式坑・井戸・土坑・溝状・土壟・郭・積状	(中・近世) 陶磁器・鉄製品(瓶管)・石製品(茶臼)・古鏡	浅沢亮96「下鶴間城山」市報告66	
512	大和市N6	大和市下鶴間		(近世以前) 清・柱穴		村澤正弘97「県調査報告」39	
513	伝手中修理跡	大和市下鶴間	城館跡	(中近世) 捨立柱建物址・地下式坑・土坑・柱穴・溝状・塙・郭	(中近世) 茶臼・煙管・古鏡・陶磁器	小池聰98「県調査報告」40	
514	下和田ノ原	大和市下和田		溝状	陶磁器	小池聰00「県調査報告」42	
515	酒谷(南都地内)上原(酒谷整理事業地内)	大和市下和田		溝状・土坑	陶磁器	小池聰00「県調査報告」42	
516	神明若宮地区内A地区	大和市福田		溝状・土坑・柱穴	古鏡	浅沢亮97「神明若宮地区内遺跡」調査団	
517	神明若宮地区内A地区	大和市福田		(中近世) 清・土坑・柱穴	(中近世) 古鏡・鉄製品	有馬多忠子96「県調査報告」38	
518	神明若宮地区内B・C地区	大和市福田		竖穴状	石製鉢・石臼・古鏡・鉄製品・銅製品・鍛錬跡	有馬多忠子97「県調査報告」39	
519	神明若宮地区内C地区	大和市福田	居館	(中・近世) 捨立柱建物・溝状・井戸・地下式坑道路状・縦穴状・土坑・柱穴・梵鐘跡	(中・近世) 陶磁器・かわらけ・瓦器・鉄製品・漆器品・古鏡・木製品・諈型。	浅沢亮97「新明若宮地区内道路」調査団	
520	大和市N6	大和市福田		溝		村澤正弘96「県調査報告」38	
521	根田札の辻	大和市福田		溝		小池聰00「県調査報告」38	
522	三ノ宮下谷河(道跡)	伊勢原市		造状遺構・溝状遺構・土坑水田	陶磁器・金属製品・古鏡	宍戸信悟00「下谷河道路(No.14)」(財)がなかむ76	
523	伊勢原・南側(Ⅱ)	伊勢原市伊勢原		地下式土塙・溝状・土塙跡	陶磁器・鏡・砥石・碁石	井上淳96「県調査報告」38	
524	伊勢原・北側(Ⅳ)	伊勢原市伊勢原三丁目		土坑・墓塚	陶磁器	諸訪潤伸00「県調査報告」42	
525	伊勢原・北側(Ⅴ)	伊勢原市伊勢原三丁目	集落	地下式坑・溝状・道路・土塙・柱穴	陶磁器・石製品	三ツ瀬勝00「県調査報告」42	
526	伊勢原・南側(Ⅵ)	伊勢原市伊勢原二丁目		地下式坑・道状	陶磁器	井上淳96「文化財ノート第4集」市教委	
527	成瀬第二地区道路群下槽屋C地区第3地点	伊勢原市下槽屋		(中・近世) 捨立柱建物址・溝状・井戸・地下式坑・土坑墓・土坑	かわらけ・陶磁器・古鏡・木製品・石製品・鉄製品	河合英夫99「県調査報告」41	
528	成瀬第二地区道路群下槽屋D地区第2地点	伊勢原市下槽屋		(中・近世) 土塙・地下式坑・道路状	かわらけ・陶磁器	同上	
529	成瀬第二地区下槽屋C地区第2地点	伊勢原市下槽屋		(中～近世) 竪穴状・地下式坑・井戸	(中～近世) かわらけ・陶磁器・鉄製品・古鏡・木製品・石製品・人骨	河合英夫98「県調査報告」40	
530	成瀬第二地区下槽屋D地区	伊勢原市下槽屋		ピット・礎・溝・土塙	陶磁器	河合英夫97「県調査報告」39	
531	成瀬第二地区下槽屋D地区	伊勢原市下槽屋	城館跡	(中～近世) 堀・土塙・井戸	(中近世) かわらけ・鉄製品・古鏡・石製品・人骨	河合英夫98「県調査報告」40	
532	成瀬第二地区丸山E地区	伊勢原市下槽屋		(中～近世) 溝状・竪穴状	(中～近世) 陶磁器・かわらけ	同上	
533	御粥・上ノ台	伊勢原市下槽屋		テラス状遺構・道状・ピット・土坑	陶磁器・円盤状陶器・さいこち・鉄製品・銅製品・鉄漆器・人骨	田尾誠敏95「佐移・上ノ台道路」調査会	
534	下平岡・水草園	伊勢原市下平岡		(中・近世) 道状・土坑	(中・近世) 陶磁器・鉄製品(釘)	高島英太93「下平岡・水草遺跡」発掘調査報告書調査団	
535	中備・浅原	伊勢原市中備		(中～近世) 竪穴状・旧河道・土坑・ピット	陶磁器・古鏡	立花英99「県調査報告」41	
536	成瀬第二地区道路群丸山E地区	伊勢原市栗庭	城館跡	(中・近世) 捨立柱建物址・竪穴状・道路状・溝状・地下式坑・土坑・段切り	陶磁器・鉄製品	河合英夫99「県調査報告」41	
537	高森・一ノ崎	伊勢原市高森		(中世以降) 球集中・土坑・ピット		西川修一郎「朝臣敷添道路第3地点(No.1)・第4地点(No.2)・第5地点(No.44)・高森・一ノ崎道路(No.37)・高森・芦谷道路(No.3)」(財)かなかむ33	
538	池端・久保(Ⅲ)	伊勢原市桜台2丁目			陶磁器	諸訪潤伸99「県調査報告」41	
539	板台・丁目	伊勢原市桜台1丁目		造状・ピット	陶器	井上淳96「文化財ノート第4集」市教委	

神奈川県内の近世遺跡の集成（2）

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
540	桜台一丁目 (Ⅳ)	伊勢原市桜台一丁目			陶器	調訪間伸00「県調査報告」42	
541	東大音下原 (Ⅲ)	伊勢原市桜台一丁目	集落跡	(中世) 穴状・埴立柱建物址・土坑・道状・溝状・ビット・礫列	(中世) 陶磁器・かわらけ	高橋勝広「東大音下原遺跡発掘調査報告書」調査団	
542	池田・寺久保 (Ⅲ)	伊勢原市桜台二丁目		昭	青磁・陶器	調訪間伸98「県調査報告」40	
543	桜第一丁目 (Ⅴ)	伊勢原市桜第一丁目		道状	陶磁器	調訪間伸97「県調査報告」39	
544	東大音・下原 (一丁目)	伊勢原市桜第一丁目		溝状	陶磁器・かわらけ	小山哲之「県調査報告」41	
545	沼目・原之宿 四丁目	伊勢原市桜第4丁目		(中・近世) 段切状・井戸・堅穴状・溝状・地下式坑・艇状・土坑・道状	陶磁器	高橋勝広「県調査報告」42	
546	三ノ宮・下源 頭原	伊勢原市三ノ宮		(中世以降) 溝・礫集中	土製品(泥面子)・かわらけ・磁気・石製品(砥石)	天野賢一他99「上柏原小山遺跡」(No.39)三ノ宮・下源頭原遺跡(No.12西)上柏原・ゾリ引道跡(No.40)上柏原・ゾリ引道跡(No.41)〔財〕かながわ32	
547	沼目・清水谷 (Ⅱ)	伊勢原市沼目			(陶器・磁器)	調訪間伸98「県調査報告」40	
548	上柏原・川上西	伊勢原市上柏原		溝状・旧河道	陶磁器	宍戸信悟他98「東富岡・杉戸遺跡」(No.39)東富岡・北三川遺跡(No.4)上柏原・川上遺跡(No.5-6)上柏原・三本松遺跡(No.7)上柏原・川上西遺跡(No.8)〔財〕かながわ34	
549	伊勢原市No. 128	伊勢原市上柏原		溝状・道路状・		高杉博章96「県調査報告」38	
550	伊勢原市上柏原 田畠内	伊勢原市上柏原		歎状・溝状		高杉博章97「県調査報告」39	
551	伊勢原上柏原 田畠内	伊勢原市上柏原		歎状・溝状	陶磁器	高杉博章95「伊勢原上柏原田畠内遺跡」調査団	
552	坂戸垂	伊勢原市上柏原		築	陶磁器・芥子面・織製品(燈籠)・古銭(寛永通宝)	高杉博章98「坂戸垂遺跡」調査団	
553	上柏原・引西	伊勢原市上柏原		(中世から近世) 溝状・ビット群	陶磁器・かわらけ・鉄製品(钉)・石製品(火打石)・古銭	宍戸信悟99「上柏原・尾崎遺跡」(No.10)上柏原・ゾリ引道跡(No.11)上柏原・ゾリ引道跡(No.40)上柏原・ゾリ引道跡(No.41)〔財〕かながわ35	
554	上柏原・引東	伊勢原市上柏原	集落跡	(中世以降) 地下式坑・堅穴状遺構・井戸・溝・土坑・ビット・礫集中	陶磁器・土製品(人形前)・石製品(砥石・石臼・石鉢・五輪塔等)・鐵(火打石)・古銭(寛永通宝・北宋宋銭)	天野賢一他99「上柏原小山遺跡」(No.39)三ノ宮・下源頭原遺跡(No.12西)上柏原・ゾリ引道跡(No.40)上柏原・ゾリ引道跡(No.41)〔財〕かながわ32	
555	上柏原・引南	伊勢原市上柏原	集落跡	(中世以降) 地下式坑・堅穴状遺構・溝状・土坑・ビット	陶磁器・石製品(砥石・石臼・五輪塔・礫石)・古銭(寛永通宝・北宋・明鏡)・銅製品(燈籠)	同上	
556	上柏原・引北	伊勢原市上柏原	遺跡?	圓立柱建物址・井戸・土坑・道状・溝状・礫状	陶磁器・石製品(砥石)・銅製品(舟釘・釘・環状金具・鉗・路盤)・銅製品(燈籠・懸仏)・古銭(寛永通宝)	宍戸信悟他99「上柏原・尾崎遺跡」(No.10)上柏原・ゾリ引道跡(No.11)上柏原・ゾリ引道跡(No.12東)〔財〕かながわ36	
557	上柏原・三本松	伊勢原市上柏原			陶器	調訪間伸99「県調査報告」41	
558	上柏原・三本松	伊勢原市上柏原		(中世) 道状・溝状・土坑墓		宍戸信悟他98「東富岡・杉戸遺跡」(No.38)東富岡・北三川遺跡(No.4)上柏原・川上遺跡(No.5-6)上柏原・三本松遺跡(No.7)上柏原・川上西遺跡(No.8)〔財〕かながわ34	
559	上柏原・小山	伊勢原市上柏原	城跡	(中世以降) 溝	銅製品(懸仏)・古銭(寛永通宝)	天野賢一他99「上柏原・尾崎遺跡」(No.39)三ノ宮・下源頭原遺跡(No.12西)上柏原・ゾリ引道跡(No.40)上柏原・ゾリ引道跡(No.41)〔財〕かながわ32	
560	上柏原・上地崎	伊勢原市上柏原		(中世から近世) 道状・溝状・土坑・土坑墓・歎状	陶磁器	宍戸信悟99「上柏原・尾崎遺跡」(No.10)上柏原・ゾリ引道跡(No.11)上柏原・ゾリ引道跡(No.12東)〔財〕かながわ36	
561	上柏原・川上	伊勢原市上柏原		(中世) 溝状・斬石	陶磁器	宍戸信悟98「東富岡・杉戸遺跡」(No.38)東富岡・北三川遺跡(No.4)上柏原・川上遺跡(No.5-6)上柏原・三本松遺跡(No.7)上柏原・川上西遺跡(No.8)〔財〕かながわ34	

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
562	上崩屋・川上	伊勢原市上崩屋		(中近世) 振立柱建物址		穴戸宿泊地98「東富岡・移戸遺跡」(No.38) 東富岡・北三瀬遺跡(No.4) 上崩屋・川上遺跡(No.5・6) 上崩屋・三本松道路(No.7) 上崩屋・川上西遺跡(No.8)」財令かながわ34	
563	神戸・上宿	伊勢原市神戸	集落跡	鉢状・溝状・段切り・土坑・ビット群	陶磁器・鉄製品・石製品(砥石・粗塑石製品)・土製品(模造貨幣)・銅製品(鎌管)	木村吉洋『神戸・上宿』(財) かながわ57	
564 (Ⅱ)	神戸・木下	伊勢原市神戸			陶磁器	井上洋97『點調査報告』39	
565	神戸・木下Ⅱ	伊勢原市神戸	造状・土坑		陶磁器	井上洋96『文化財ノート第4集』市教委	
566 No.160	伊勢原市西富岡		地下式横穴施		陶磁器	後藤喜八郎96『點調査報告』38	
567 No.160	伊勢原市西富岡		溝状・道路跡・井戸・土壤		陶磁器・古鉄(寛永通宝)	後藤喜八郎97『點調査報告』39	
568 No.160	伊勢原市西富岡		(江戸時代) 溝状		陶磁器	後藤喜八郎99『點調査報告』41	
569	西富岡・外堀	伊勢原市西富岡	溝状・井戸		陶磁器	中村泰代・重96『點調査報告』38	
570	石田・羽黒	伊勢原市石田		地下式坑(ムロ)・いも穴		降矢順子95「石田・羽黒道路II」建設道路調査会測量報告書8 調査用	
571	石田・羽黒	伊勢原市石田	道・溝		陶磁器・石製品(砥石・泥人形)	降矢順子99「石田・羽黒道路II」建設道路調査会測量報告書9 調査用	
572 (Ⅲ)	石田・羽黒	伊勢原市石田			陶磁器	降矢順子99「點調査報告」41	
573 (Ⅲ)	石田・羽黒	伊勢原市石田	溝・土坑・ビット		陶磁器・鉄滓	同上	
574	石田・源太夫	伊勢原市石田	集落跡	地下式ムロ・土塹・柱穴	陶磁器・かわらけ・鉄製品・石製品・古鉄		
575 (Ⅲ)	石田・源谷	伊勢原市石田	(中~近世) 道状	(中~近世) 陶器・磁器		立花実98『點調査報告』40	
576	池塘・久保Ⅲ	伊勢原市池塘		道状・溝状		井上洋96『文化財ノート第4集』市教委	
577	西富岡・別渡	伊勢原市池塘				諏訪間伸97『點調査報告』41	
578	池塘・久保V	伊勢原市池塘	(中~近世) 道路状			井上洋97『點調査報告』39	
579	池塘・久保V	伊勢原市池塘	道状			井上洋96『文化財ノート第4集』市教委	
580	池塘土地事務所跡内	伊勢原市池塘	(中~近世) 壑穴状・溝状			吉田浩明98『點調査報告』40	
581	坪ノ内渡辺	伊勢原市坪ノ内				高橋勝広96『點調査報告』38	
582	坪ノ内・宮ノ前	伊勢原市坪ノ内	振立柱建物址・溝・井戸址・水田址・柱列・埋れ木	陶磁器・金属製品・木製品	穴戸宿泊地90「坪ノ内・宮ノ前遺跡」(No.16・17) (財) かながわ77		
583	坪ノ内・貝ヶ塚	伊勢原市坪ノ内	戸状構造・道状遺構・溝状遺構・柱列	陶磁器	木村吉行他90「坪ノ内・貝ヶ塚遺跡」(No.18・19・43) 立花・谷戸跡(No.20・24) (財) かながわ67		
584	笠庭・谷戸	伊勢原市笠庭	戸状遺構・溝状遺構	陶磁器・古鉄・土製品	同上		
585 No.128	伊勢原市笠庭		溝状・道路状			高杉博章97『點調査報告』39	
586 (Ⅳ)	田中・酒井	伊勢原市田中				諏訪間伸99『點調査報告』41	
587 (Ⅴ)	田中・聖原	伊勢原市田中				諏訪間伸98『點調査報告』40	
588	田中・万代遺跡	伊勢原市田中	溝状・築状・土坑・ビット列	陶磁器・鉄製品(不明)	井辺一晃90「田中・万代遺跡」(財) かながわ103		
589	稻荷久保	伊勢原市東大竹	(中~近世) 道状・溝状・土坑・井戸			高橋勝広95「稻荷久保遺跡 先耕開拓報告書」測量用	
590	東大竹・垂面	伊勢原市東大竹	溝・土塙	陶磁器・鉄製品・古鉄	立花実96『點調査報告』38		
591 (Ⅲ)	東大竹・垂面	伊勢原市東大竹	(近世以降) 井戸・土塙	陶磁器・鉄製品・銅製品・古鉄	立花実97『點調査報告』39		
592	柏上原土地区 整理事業区 域内道路	伊勢原市東大竹	(中~近世) 土塙・溝状・道路状	陶磁器	吉田浩明99『點調査報告』41		
593	東大竹・市場 前	伊勢原市東大竹	ビット(中近世)			井上洋96『文化財ノート第4集』市教委	

神奈川県内の近世遺跡の集成（2）

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
594	東大竹・堂面Ⅲ	伊勢原市東大竹二丁目		溝・土坑	陶器・鉄製品(包丁様・火箸)	井上淳96「文化財ノート第4集」市教委	
595	東富岡・桜戸	伊勢原市東富岡		(中近世) ピット群		大戸信吉他98「東富岡・桜戸遺跡(No.38)東富岡・北三間遺跡(No.4)上前庭・川上遺跡(No.5-6)上柏庭・三本松遺跡(No.7)上船庭・川上西遺跡(No.8)(財)かながわ34」	
596	東富岡・北三間	伊勢原市東富岡	(中近世) 穴状・掘立柱建物址・柱穴列・井戸・焼土址・土坑・地下式坑・造状・溝状・戻状・ピット群・柱列		陶器・銅製品(鐘管)・古鏡(大鏡造)・石製品(砾石)	同上	
597	白根・軋柄戸	伊勢原市白根		ピット・溝状	陶器	井上淳96「文化財ノート第4集」市教委	
598	板戸・轍進場(Ⅱ)	伊勢原市板戸			陶器	源詮間伸99「照査報告」41	
599	板戸・八雲塚	伊勢原市板戸	水田跡	土壙・ピット	(中~近世) 陶器・磁器	立花実98「照査報告」40	
600	四大通	海老名市河原口		水田・畦畔・溝	磁器・木製品・土製品・石製品・金属製品・錢貨	齊木秀雄97「神奈川県海老名市四大通跡」第1分冊	
601	下の谷戸	海老名市国分南	(中世~近世) 溝状遺構・土坑			施澤亮00「下の谷戸遺跡・宮台遺跡」同調査用	
602	国分南原	海老名市国分南	溝?		瓦	押方みはる98「照査報告」40	
603	瓢箪塚古墳	海老名市国分南	(近世~近代) 溝状遺構		陶器・鉄製品・撲貨	97「瓢箪塚古墳・上浜田古墳群第7号発掘調査報告書」同市遺跡調査会	
604	国分尼寺北方	海老名市国分北		遺構?・道状硬化面		押方みはる98「照査報告」40	
605	国分尼寺北方第15次	海老名市国分北				林原利明98「照査報告」40	
606	国分尼寺北方・第22次	海老名市上今泉	柱穴		陶器	齊木秀雄00「照査報告」43	
607	国分尼寺北方第18次	海老名市上今泉		焼状遺構		河野高典等98「国分尼寺北方遺跡第17-18次調査(財)かながわ61」	
608	国分尼寺北方第9次	海老名市上今泉	集落跡	(中~近世) 石造建物址・道状遺構・溝状遺構・地下式坑・井戸址・窓穴状・柱穴	(中~近世) 陶磁器・かわらけ・錢貨	細井佳浩95「照査報告」38	
609	秋葉山古墳群	海老名市上今泉		溝	陶器	押方みはる96「照査報告」38	
610	上今泉横穴墓群	海老名市上今泉		掘立柱建物址	寛永通宝	福田貞98「海老名市上今泉横穴墓群発掘調査報告書」	
611	上今泉中原第6次	海老名市上今泉		溝状遺構		中村喜代重99「照査報告」41	
612	中原第3地丘	海老名市上今泉	(中~近世)	溝状遺構・柱穴		小池聰97「照査報告」39	
613	海老名市No.28	海老名市杉久保			磁器	後藤喜一郎97「照査報告」39	
614	杉久保越谷	海老名市杉久保		(中世~近世以降) 井戸址・追跡遺構・段切状遺構・戻状・窓穴・集石・堆土・土坑・柱穴	陶器・石製品・鉄製品・古銭	井辺一能雄01「杉久保越谷跡(財)かながわ110」	
615	上浜田・上浜田4号縄	海老名市大谷	(近世以降)	溝	陶器	押方みはる97「照査報告」39	
616	大谷下浜田第6次	海老名市大谷		窓状遺構・溝	陶器・銅鏡	押木弘己99「照査報告」41	
617	大谷真綿	海老名市大谷	(中~近世)	溝・柱穴・土坑	(中~近世) 陶器・近畿豪作・土器類・金製品	福谷清99「照査報告」41	
618	大谷下浜田第5次	海老名市大谷字下浜田		溝状遺構		押方みはる98「照査報告」40	
619	大谷下浜田第9次	海老名市大谷字下浜田	集落跡	(中~近世) 段切状遺構・窓状遺構・掘立柱建物址・井戸址・窓穴状遺構・溝状遺構・土坑・柱穴・柱列		北平朗久00「海老名市No.69遺跡発掘調査報告書」	
620	大谷下浜田	海老名市大谷字市場		溝状遺構		押方みはる98「照査報告」40	
621	望地第6次	海老名市望地	(近世~近代)	溝状遺構・土坑	陶器	伊豆秀吉98「望地遺跡第4次調査(国分尼寺北方遺跡第12次調査発掘調査報告書)」	
622	本郷中谷津池端	海老名市本郷	(近世以降)	道路状遺構・溝・貯藏穴		鶴谷謙97「照査報告」39	

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
623	平和坂	座間市キャンプ座間		(近世以降) 土坑		鈴田佳弘00「平和坂遺跡」(財)かながわ28	
624	米軍キャンプ座間地内	座間市キャンプ座間			陶磁器・泥人形	小山裕之他00『米軍キャンプ座間地内道路発掘調査報告書』同調査組	
625	皆原西	座間市入谷		溝状遺構・ピット群	磁器	金子皓彦07『皆原西Ⅱ道路発掘調査概要』	
626	黄金塚古墳群	南足柄市岩原字宮下		用水路	陶磁器	安藤文一00『八幡神社裏古墳試掘調査報告書』	
627	上の山遺跡群	南足柄市岩原字五反畠		(中世～近世) 道路状遺構	(中・近世) 陶磁器	安藤文一98『県調査報告』40	
628	吹揚	南足柄市岩原字吹揚		城館跡	陶磁器	安藤文一00『吹揚跡試掘調査概要報告書』	
629	沼田城跡	南足柄市沼田		道路状遺構		安藤文一97『県調査報告』39	
630	吉岡遺跡群A区	綾瀬市吉岡	耕作地	(近世～近・現代) 溝・道状遺構・戦状遺構・墓坑・土坑	土器・陶磁器・鉄製品・石製品・土製品・錢貨	依田亮一他99『吉岡遺跡群Ⅰ』(財)かながわ47	345
631	吉岡遺跡群B区	被瀬市吉岡	耕作地	(近世～近・現代) 溝・道状遺構・焼土址・土坑・壕道構	土器・陶磁器・鉄製品・石製品・土製品・錢貨	同上	346
632	吉岡遺跡群B区	綾瀬市吉岡		(近世以降) 溝状遺構・土坑・道状遺構・戦状遺構	陶磁器・鉄製品・歌晉	吉田政行99『年報』7 (財)かながわ	
633	吉岡遺跡群C区	被瀬市吉岡		(近世～近・現代) 土坑	陶磁器・鉄製品・錢貨	同上	347
634	吉岡遺跡群D区	被瀬市吉岡		(近世～近・現代) 溝・土坑・窯	陶磁器・錢貨	同上	348
635	吉岡遺跡群E区	被瀬市吉岡	耕作地	(近世～近代) 溝・土坑・杭剥	土器・陶磁器・鉄製品・石製品	同上	349
636	吉岡遺跡群F区	被瀬市吉岡	耕作地	溝・土坑	錢貨	同上	
637	造場跡	被瀬市吉岡		(中世以降) 溝・道状遺構		小池勉00『県調査報告』42	
638	吉岡遺跡群	被瀬市吉岡 藤沢市用田		構造・土坑・ピット		関根唯二96『吉岡遺跡群』同調査組	
639	上土棚桜山	被瀬市上土棚		(中世以降) 溝		矢島国雄他00『鎌倉市上土棚桜山遺跡の調査』(被瀬市史研究) 第4回	
640	上土棚南第4次	被瀬市上土棚南		(中世以降) 横ムロ		市川正史00『上土棚南遺跡4次』(財)かながわ109	
641	大塚堂	被瀬市深谷落合	墓地	墓坑	鉄錆・陶磁器	井関文明00『大塚堂遺跡』(財)かながわ96	
642	伊勢山	被瀬市早川字伊勢山		溝・土坑	陶磁器	貝地英夫00『県調査報告』43	
643	庚申塚	被瀬市早川字縁ヶ久保	塚地	塚	寛永通宝	同上	
644	早川城山	被瀬市早川字清水・縁ヶ久保	城跡	溝	陶磁器	小池勉00『県調査報告』43	
645	宮山	寒川町宮山		(中世～近世) 溝		秋山重美他98『宮山遺跡発掘調査報告書』同調査組	
646	見見才戸第3次	寒川町倉見		(中・近世) ピット・焼土混入遺構		小林秀満99『見見才戸遺跡発掘調査報告書』同調査組	
647	見見才戸第4次	寒川町倉見		(中～近世) 溝	陶磁器	中村哲也01『見見才戸遺跡4次調査発掘調査報告書』	
648	紙園塚G地点	大磯町国府本郷			陶磁器	國見徹96『県調査報告』38	
649	十三塚	大磯町国府本郷字ノ後下	塚	塚	常滑窯小片	「十三塚遺跡～總合運動公園予定地に於ける埋蔵文化財発掘調査の記録」	
650	大磯町No.136隣接地	大磯町西小磯字古畠敷			(近世～近現代) 陶磁器	「北ノ端遺跡試掘調査概要～D地点における確認調査～」	
651	北ノ端D地点	大磯町大磯字北ノ端			(近世～近現代) 陶磁器	「大磯小学校遺跡 大磯小学校改築に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録」	
652	大磯小学校	大磯町東小磯(中世)			陶磁器	中田英他00『天神谷戸遺跡』(財)かながわ75	
653	天神谷戸	二宮町二宮	(中・近世) 集石・集石土坑・溝	陶磁器・繩文・鏡・青銅製鉢		佐々木伸吾01『神奈川県第2次調査出土物報告』昭和研究会 大学文化史研究第5号	
654	中星敷第2次	大井町山田			陶磁器・砥石・火打石・土人形	西川修一00『京浜遺跡』(No.34) 矢頭遺跡(No.35) 大井保遺跡(No.36) (財)かながわ25	366
655	矢頭	大井町柳		溝			

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
656	河村館跡	山北町岸	城館跡	堅穴状造構・土坑・土坑墓	寛永通宝・銀管	安藤文一『県調査報告』39	
657	河村城岡跡	山北町岸	城館跡	天井廻し造構		安藤文一『河村城岡跡』 町教委	
658	河村新城跡	山北町川西子峰	城館跡	鉄状造構・雨水疏流	陶磁器	安藤文一『県調査報告』38	365
659	東光庵照野庵現跡	箱根町芦之湯	社寺跡	建物跡・庭園・祠基壇	(近世) 陶磁器	伊藤潤09『県調査報告』41	
660	史跡箱根圓閣	箱根町箱根	官衙跡	堅石・土坑・溝・堅穴状造構・ビット・石垣・方形石瓶	陶磁器・鉄製品・銅製品・古銭	谷口篤00『県調査報告』42	
661	箱根旧街道宿 宿一里塚	箱根町箱宿	一里塚			伊藤潤09『第23回発表要旨』	
662	志田南	愛川町三崎字上志田			陶器	宍戸信和00『愛川町志田南遺跡の発掘調査』町教委	
663	宮ヶ瀬遺跡群 平原向原	愛川町平原		(中世～近世) 土坑・長方形土坑	陶磁器・釘・砥石・錢貨	市川正史他99『宮ヶ瀬遺跡群X』(財) かながわ60	
664	平原屋中原	愛川町平原		(中・近世以降) 土坑・鉄状造構	陶磁器・金属製品・錢貨	三族裕他00『平原屋中原遺跡』(財) かながわ46	
665	宮ヶ瀬遺跡群 大樹沢金糸路	清川村官ヶ瀬	城山跡	金糸路		市川正史他99『宮ヶ瀬遺跡群X』(財) かながわ51	
666	宮ヶ瀬遺跡群 大野原(No.13)	清川村官ヶ瀬	炭焼窯	炭窯址・溝状造構・窓穴状造構	陶磁器	鈴木本次郎68『宮ヶ瀬遺跡群X』(財) かながわ40	385
667	宮ヶ瀬遺跡群 久保ノ坂(No.4)	清川村官ヶ瀬		(中世～近世) 土坑		恩田勇88他『宮ヶ瀬遺跡群X』(財) かながわ42	382
668	宮ヶ瀬遺跡群 上原(No.13)	清川村官ヶ瀬	炭焼窯	炭窯址	陶器	鈴木本次郎97『宮ヶ瀬遺跡群X』(財) かながわ18	380
669	宮ヶ瀬遺跡群 中原(No.13c)	清川村官ヶ瀬	炭焼窯	(近世～近代) 炭窯址・造状蒸槽・土坑	陶磁器・鍍管	鈴木本次郎97『宮ヶ瀬遺跡群X』(財) かながわ16	381
670	宮ヶ瀬遺跡群 南(No.2)	清川村官ヶ瀬	集落跡	(中・近世～近代) 振立柱建物・土坑	陶磁器・土製品・鉄製品・銅製品・石製品	近野正幸他86『宮ヶ瀬遺跡群』(財) かながわ10	378
671	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.3)	清川村官ヶ瀬	集落跡	(中・近世～近代) 振立柱建物・土坑・土坑墓・長方形土坑群・造状造構・横室	陶磁器・鉄製品・銅製品・石製品・錢貨	富永聖之助99『宮ヶ瀬遺跡群』(財) かながわ9	376
672	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.5)	清川村官ヶ瀬	造状造構			近野正幸他99『宮ヶ瀬遺跡群』(財) かながわ10	375
673	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.6)	清川村官ヶ瀬	集落跡	(中・近世～近代) 振立柱建物・土坑・堅穴状造構・土坑・溝状造構・長方形土坑群	陶磁器・土製品・金屬製品・石製品・天保二年刊金	近野正幸他99『宮ヶ瀬遺跡群X』(財) かながわ51	374
674	宮ヶ瀬遺跡群 馬場(No.7)	清川村官ヶ瀬	集落跡	(中・近世) 振立柱建物址・藏	陶磁器・石製品・鐵製品・銅製品・鍍管	市川正史他97『宮ヶ瀬遺跡群X』(財) かながわ17	373
675	宮ヶ瀬遺跡群 表の植数	清川村官ヶ瀬	集落跡・墓地	(中・近世～近代) 振立柱建物・土坑・堅穴状造構・土坑・堅穴状造構・窓・造状造構・横室・堅穴状造構・豎坑群・井戸・横室	陶磁器・石製品・鐵製品・銅製品・錢貨・ガラス製品・鉄鉢玉・骨脣	近野正幸他97『宮ヶ瀬遺跡群X』(財) かながわ19	372
676	宮ヶ瀬遺跡群 北原(No.9)	清川村官ヶ瀬	土原	(中・近世～近代) 長方形土坑群・造状造構・U字型造構	陶磁器・金綿製品・土製品・石製品	市川正史他99『宮ヶ瀬遺跡群X』(財) かながわ51	
677	宮ヶ瀬遺跡群 北原(No.10)	清川村官ヶ瀬	集落跡・墓地	(中・近世) 振立柱建物址・土坑・堅穴状造構・造状造構・窓・造状造構・柱穴列・地下M口・集石	陶磁器・石製品・鐵製品・銅製品・鍍管	市川正史他97『宮ヶ瀬遺跡群X』(財) かながわ15	370
678	宮ヶ瀬遺跡群 北原(No.1 1-11北)	清川村官ヶ瀬	集落跡	(中・近世) 振立柱建物址・土坑	陶磁器・鉄製品・鍍管・錢貨	市川正史他98『宮ヶ瀬遺跡群X』(財) かながわ41	
679	原東	城山町小倉字原	炭焼窯	(中世以降) 炭窯	陶磁器・錢貨・鍍管	大野賢一郎00『原東遺跡』(財) かながわ79	
680	川尻向原土地 上園整理事業 地内	城山町川尻向原			陶磁器	小池昭97・98『熱調査報告』39・40	
681	川尻	城山町谷々原		(近世以降) 溝状造様・土坑		かながわ考古学財団調査報告	
682	横小堀本	津久井町横小堀	陣屋跡	(中世以降) 廊柱造構・堅穴状造構・土坑・土坑・堅石・石敷石・石垣・ビット	(中世) 土器・陶磁器・金屬製品・石製品・木製品・ガラス製品	池田治00『年報』7 (財) かながわ	
683	代官守籠左太 夫陣屋跡	津久井町横小堀	塙敷跡・城 前跡	土坑・溝状造構	陶磁器・石臼・銅鏡	河野喜英99『年報』6 (財) かながわ	
684	津久井城跡	城山町横小堀	城館跡	(中世) 石組・土坑群・礎面 裏・礎石・石敷き・壁土・溝・たたき面	かわらけ・陶磁器・金屬製品	近藤英夫他98『津久井城の溝査』津久井城遺跡調査会	

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	検出遺構	出土遺物	文献	旧番号
656	津久井城跡	津久井町根小屋	城跡路	(中・近世) 土坑・土塁・炭窯・土坑群	かわらけ・陶磁器	同上	
657	津久井城跡	津久井町根小屋	城跡路	(中・近世) 茄籠・柱穴群・土器・石列・溝	かわらけ・陶磁器・鉄製品	近藤英夫他09『津久井城の調査Ⅲ』津久井城遺跡調査会	
658	津久井城跡	津久井町根小屋	城跡路	(中・近世) 畦状遺構・石組・柱穴群	かわらけ・陶磁器・鉄製品	同上	
659	津久井城跡	津久井町根小屋	城跡路	(中・近世) 石垣・石組・柱穴・方形石散き・指標	かわらけ・陶磁器・鉄製品・石製品・古鉄	近藤英夫他00『津久井城の調査Ⅳ』津久井城遺跡調査会	
660	津久井城跡	津久井町根小屋	城跡路	(中・近世) 柱穴・溝・大削土坑・(近世以降) 畦状遺構	かわらけ・陶磁器・鉄製品・古鉄	同上	
661	津久井城跡	津久井町根小屋	城跡路	堀・土坑・石組	陶磁器	近藤英夫他08『津久井城の調査Ⅱ』津久井城遺跡調査会	
662	青根引山	津久井町青根字上野	集落址	(中・近世～近代) 掘立柱建物址・土坑・溝状遺構・段切・旧河道	陶磁器・古鉄	池田治他09『道志導水路開達道路』(財)かながわ59	
663	青根馬渡No1	津久井町青根字馬渡	墓地	(中・近世～近代) 墓坑・土坑・段切	陶磁器・古鉄	同上	
664	青根馬渡No2	津久井町青根字馬渡	墓地	(中・近世～近代) 墓坑・土坑・鐵状遺構・道状遺構・炉	陶磁器・金屬製品・石製品・古鉄	同上	
665	青根馬渡No3	津久井町青根字馬渡	(中・近世～近代) 焼土址		金属製品	同上	
666	青根馬渡No4	津久井町青根字馬渡	(中・近世～近代) 掘立柱建物・配石土坑・墓坑・道状遺構・土坑	陶磁器・金屬製品・馬骨・古鉄	同上		
667	青根馬渡No5	津久井町青根字馬渡		(中・近世～近代) 土坑	陶磁器・石製品	同上	
668	青山開戸	津久井町青山	集落跡	掘立柱建物址	陶磁器・金屬製品	服部寅吉他07『青山開戸遺跡』(財)かながわ29	
669	大地	津久井町青野原	墓地	土壤基	銅銭・鐵管・鐵金具・鉄釘	同上	394
670	大地開戸	津久井町青野原	集落跡	掘立柱建物址・土坑		河野吉秋他05『青野原バイバス開通道路』(財)かながわ5	391
671	長谷原	津久井町青野原		溝状遺構・円形土坑	陶磁器	同上	393

やぐらの埋葬と供養

—山王堂東谷やぐら群で発見された切石組基壇と経石をめぐって—

宍戸信悟・池田治・船場昌子*

はじめに

「やぐら」は中世鎌倉を特色付ける墳墓の一つであり、赤星直忠を始めてとする多くの先駆的研究が積み重ねられてきている⁽¹⁾。しかし、やぐらそのものは鎌倉特有のものではなく、房総半島にも多くのやぐらが分布していることが知られ、その他にも東北から九州までの各地で確認されている（田代1990・1997）。最近では、やぐらを中世の石窟遺構の一つとして認識し直す考え方（田代1993他）⁽²⁾や、墓を基にした（あるいは墓にもなる）供養空間として位置づける考え方も示されている（河野1995）。一方、近年の調査ではやぐら内部の改変が早い段階から行われていることが明らかとなっていて、見かけ上やぐらとして認識されるもの続々を、単純にやぐらとして括ることは出来ないこともわかってきて（田畠1992）。一般的にやぐらの景観と言えば多数の石塔類が林立する状況を思い浮かべるが、実際には石塔類が並んだ状態で検出されることは極めて希なことであり、後世の改変によってはやぐらが中世の遺構であるとの認識すら薄らいでしまうというのが実状である。そのような中で、多宝寺跡やぐら群（同調査団1976・1977）や新善光寺跡やぐら群（原1983）などのようにやぐら群としての構成や内部での葬送儀礼を推定することが出来るような事例の発見が期待されていた。

筆者ら（宍戸・池田）は、今年（2001年）1月に鎌倉市大町3丁目に所在する山王堂東谷やぐら群の発掘調査を行った。そこでは、上下2段にわたってやぐら群が構築されていたが、確認された5基のうち下段の4基について調査することができた。やぐら内部には石塔類が残されていなかったが、玄室内や前庭部に切石を用いた施設が確認され、さらには写経石を伴った供養や追葬の状況が確認されるなど、やぐらの構造と葬送儀礼を知る上で重要な情報を得ることが出来た。詳細については既に報告書が刊行されている（池田・井辺2001）が、ここで確認された葬送や供養の様相は実に豊富な内容を持つものであり、短い整理期間と限られた頁数の中では意を尽くせたとは言えない部分がある。本論では、山王堂東谷やぐら群での様相を中心として、具体的にやぐらで何が行われていたのかを明らかにすると共に、やぐらの構造と供養について検討してみたいと考えている。

1. 山王堂東谷やぐら群の様相と年代

本やぐら群は鎌倉市大町3丁目に所在し、名越ヶ谷の奥、小さな支谷の丘陵裾に掘られている。急傾斜地崩壊対策工事に先立って発見され、平成11（1999）年と平成13（2001）年の2回発掘調査が実施された。平成11年の調査では玄室平面長方形の大形やぐら1基を調査した（鈴木2000）が、その後平成13年にはこれから約60m離れた地点で2段に構築されたやぐら5基と、その前面には岩盤を削平した造成面2ヶ所を発見した。両者は同じ小さな谷戸内にありながらも、別な支群として認識されるもので、今回取り上げるのは後者のやぐら群である。5基のうち全体を調査できたのは下段に並ぶ4基で、いずれも石塔類は残されていなかったが、火葬骨を主体とした埋葬が確認された。中でも注目されるのは1号及び3号やぐらである。やや長くなるが

先にその内容を紹介しておこう。

(1) 1号やぐらの様相

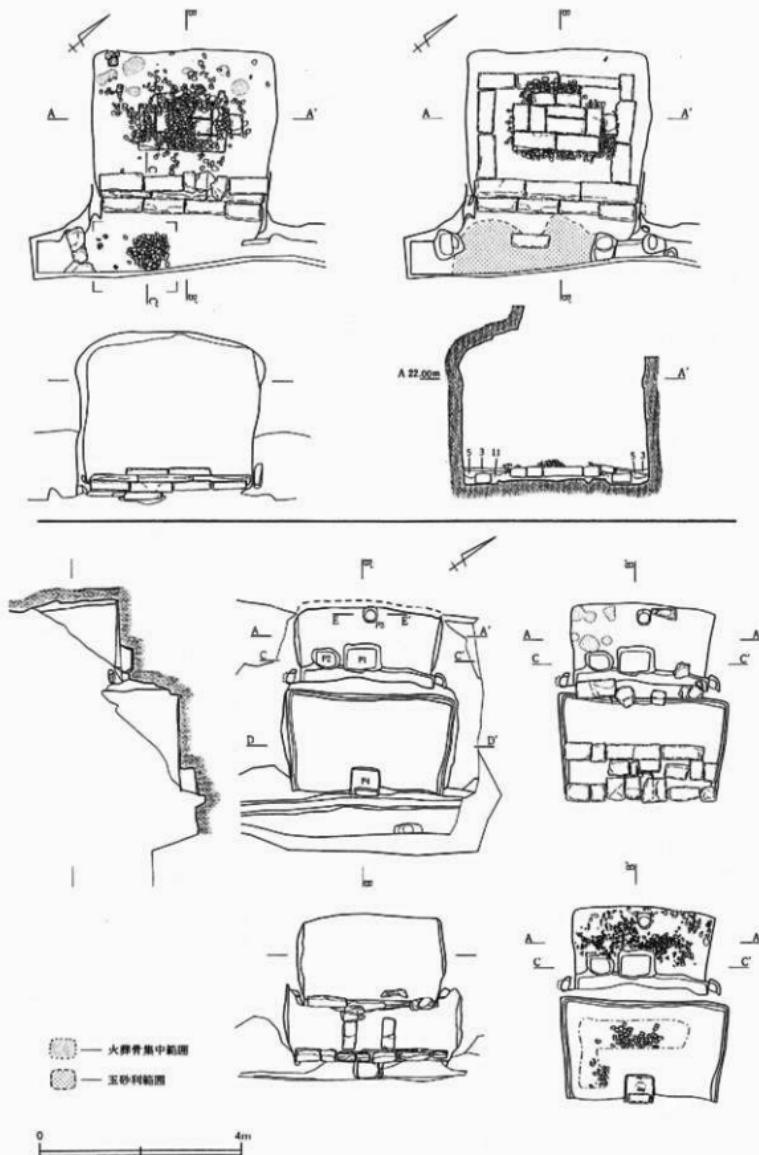
本やぐらは南東に向かって開口し、平面形態が横長の長方形を呈する玄室に、一段下がってほぼ同じ幅で奥行きの短い前庭部が設けられている。全長は3.75mで、玄室の幅は奥壁直下で3.45m、奥行きは2.95mを測る。奥壁の形状は家形を呈していて、奥壁中央で高さ2.8mである。天井は崩落していて、前庭部まで天井で覆われていたかどうかは不明である。玄室床面中央部には、直方体の切石（鎌倉石＝凝灰質砂岩、以下全て同じ）を9個用いた長方形の基壇が主軸と直交する方向に設けられていた。その規模は幅1.7m、奥行1.9m、高さ0.19mを測る。さらにこの基壇を取り巻くように合計11個の切石を用いて、外郭の圍いが設けられている。外郭の切石列は床面の岩盤を掘り込んで配置され、中央基壇よりも一段低く設置されている。前面を除いて、その他の辺は切石の大きさが一定していない。基壇の下部及び玄室内にも、納骨穴のような掘り込みはまったく認められなかった。外郭前面の切石は玄室前の段に合わせて配列され、一段下がった前庭部側にはこれに接して4個の切石が配列されて階段状を呈している。これとは別に、玄室先端の左右両側壁には前庭部切石列の上面とほぼ同じ高さに小穴が穿たれている。

前庭部は奥行き0.8m、幅3.2mで、床面は玄室床面より0.1m下がっていて、緩やかに傾斜しながら前面の造成面に続いている。中心よりやや外れた位置には切石1個体が岩盤を掘り込んで据えられていて、その周囲には玉砂利が敷かれていた。また基壇の上面から周囲にかけては炭化物を多量に含んだ焼土層が認められた。基壇外郭前面の切石列の上には焼土・炭化物層を挟んで15cm程上に再度切石が配列されていた。この切石列は基壇上面とほぼ同じ高さに作られている。これは火災後に玄室内を取り片づけて改めてやぐら内を整備したことを示すものである。

基壇の周囲と上部には径7~15cmの玉石が積み上げられていた。基壇上部には2ヶ所に玉石の空白部が認められ、この部分に石塔（五輪塔）が立てられていたものと推定される。しかし玄室床面では、何ら埋葬施設は確認されていない。基壇脇には瀬戸窓四耳壺の藏骨器が置かれていて、奥壁際には火葬骨を納めた凝灰岩製小形五輪塔が立てられていた。また基壇周辺には火葬骨が11ヶ所埋納されていたが、これらも改修後に追葬されたものと判断される。さらには1号の外側に隣接する4号やぐらは火葬骨のみを埋納した小規模なものであり、これが1号やぐら内に入りきらない納骨を納めるための納骨施設と考えることも可能である。基壇の側面に積まれた玉石は焼土や炭化物層に覆われていた。さらに基壇の周辺からは多量のかわらけも出土しているが、その多くは正位に置かれて、供養のために供えられたものと推定された。前庭部の底面より0.9m上部で、径0.8m程の範囲に玉石が積み上げられた状態で検出された。これは玄室を区画する切石列最上段が埋まった時点に対応するもので、同じ土層面でやぐら入り口左端を区画するように岩盤塊を用いた配石が検出されているので、やぐらの存在を意識して積まれていると考えられる。この玄室内及び前庭部から出土した玉石には、経文や光明真言を墨書きで書写した経石（=鎌石経）が含まれていたが、これについては後述する。

(2) 3号やぐらの様相

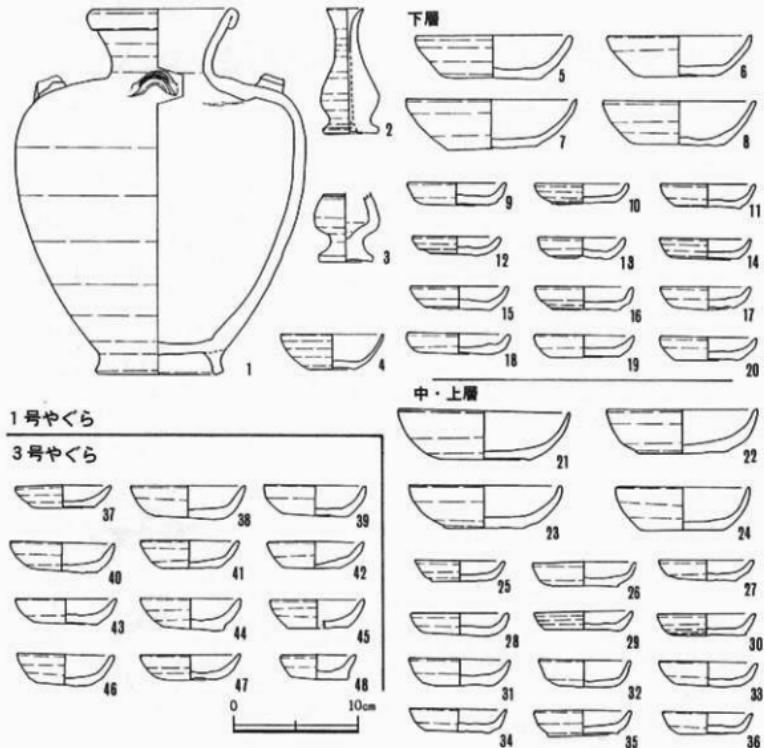
本やぐらは南東に開口している。玄室と前庭部で構成されるが、玄室と前庭部床面とは1.2mの比高差があり、さらに玄室よりも前庭部の規模が大きいため、別の遺構として造られた可能性もあるが、玄室前面から前庭部にかけての切石の落ち込み方などから、同時に存在していたことは間違いないものと思われる。玄室の平面形は横長の長方形を呈し、規模は奥行きが1.64m、最大幅は2.82mである。天井は全く残っていない



第1図 山王堂東谷やぐら群1号(上)・3号(下)やぐら(1/100)

が、奥壁で確認された天井部との境は、高さ1.7mである。玄室入り口先端は床面より8~14cmほど低くなっているが、その前面左側にはややずれた位置に切石が認められ、本来はここに切石が配列されていたものと考えられる。さらに玄室先端の左右両壁には横方向への掘り込みが認められるが、両者が向かい合う位置にあることから、この穴に横木を差し渡して、忌垣（玉垣）のような施設が作られていたと考えられる。なお、前庭部奥壁の中央部には玄室側からずり落ちたような状態で2本の切石が立った状態で検出された。左側の切石の上部には小さい切石が積まれていて、その上面は玄室前面の切石下部に接する位置にある。玄室床面には径5cm以下の小さな玉石が敷かれていた。その上部特に玄室左側には多量の火葬骨が埋納されていたが、これを取り上げる過程で少なくとも6ヶ所の埋納が推定された。さらに玉石を除去すると、下部の岩盤面では奥壁寄り中央に1ヶ所納骨穴があり、入り口側の中央部と右側壁側に各1ヶ所方形の掘り込みが認められたが、これらには火葬骨は入れられてはいなかった。

前庭部の規模は奥行き2.03m、幅は奥側で3.3m、入り口側では2.97mと入り口側がやや狭い台形状を呈す



第2図 山王堂東谷やぐら群1・3号やぐら出土土器（1/4）

る。天井は当初より無かったと考えられ、奥壁及び両側壁の直下には周溝がめぐる。前庭部先端の中央には方形の掘り込みが認められたが、外側に面する部分は壁がなく、切石がはめ込まれていた。

前庭部の前面寄りには切石が敷き並べられていて、直方体のものと直方体の切石を切って立方体にしたものを組み合わせて、主軸に直交する方向に3列に並べられていた。なお一部には切石のない部分があり、整然とした状況とは言えない。切石が敷かれていらない範囲の下層には焼土混じりの炭層の広がりが認められ、特に床面中央付近に於いて厚く明瞭であった。焼土・炭層中には玉石・銅製品・鉄製品・かわらけ・炭化した木片に貼られた金箔等と共に火葬骨片や歯が出土していることから、この場所で火葬が行われたことが確認された。玉石も炭層範囲内から出土していてタール・ススが付着していた。特に3列目の奥側では寄せ集められたような状態でまとまっており、一部は切石に寄りかかっていた。玉石の一部には経文を書写した経石が認められている。

(3) やぐらの年代

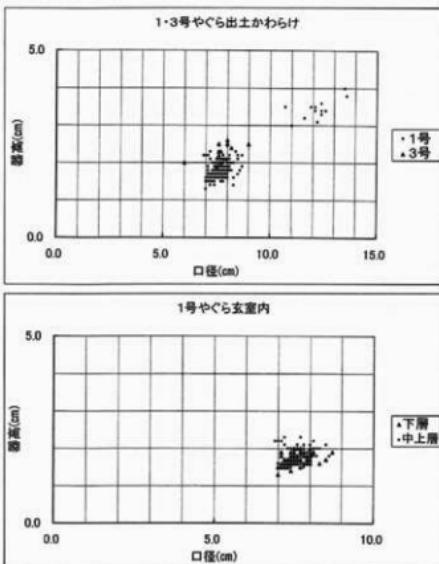
次に1・3号やぐらの年代について触れておきたい。第2図1~4は1号やぐら玄室内から出土したものである。いずれも古瀬戸前期様式で、1は灰釉四耳壺で前IIb期、2・3は灰釉仏華瓶で2は前II期、3は前III期、4は入れ子で前II期に相当する。1は基壇脇の玉石上面に乗せられていたもので、追葬と考えられる。2は奥壁直下の底面地下より出土したもので、3は焼土層と上層から出土したもののが接合している。4は上層から出土した破片である。古瀬戸編年では前II期からIII期の間を1250年頃に置いている(藤沢1995)。

第2図右側には1号やぐらから出土したかわらけを、下層と中・上層に分けて代表的なものを示した。出土したかわらけは圧倒的に小形のものを

主体としていて、中・大型ものは極く僅かである。手づくね成形のものは出土しておらず、いずれもロクロ成形である。

大型のもののうち、下層の焼土層中から出土した5~8は、2次の被熱や黒化、器面剥離などが顕著に認められているため、火災を受けたことが明らかである。

これに対して前庭上層から出土した21~24ものは一部の口唇部にススが認められるが被熱した痕跡は認められない。法量的にはややばらつきがあるため両者を分けることが出来ないが、後者はいわゆる「薄手丸深」と呼ばれる13世紀末~14世紀前半に特徴的な器形を示している。また前者は口縁部直下で屈曲して口唇部が内湾する形態を呈するもので、典型的な「薄手丸深」形態の初期段階に見られるものと考えられる。両者は層位的に前後関係を示しているが、厳密に出土位置を記



第3図 1・3号やぐらかわらけ法量比較表

録していないため、これを単純に認めることはやや問題があろう。一方、小形かわらけは口径の大きなものは少なく、全体に径の小さなものが主体であり、やや新しい様相を示しているということは否定できない。しかし、第3図に示したように下層のものは法量的にはかなり限定した範囲に集中するのに対して、上層では器高がやや大きいものが認められる。

3号やぐらでは大形のものではなく小形かわらけのみが出土した。いずれも典型的な「薄手丸深」形態の小形でも器高の高いものであり、1号やぐら出土かわらけとの違いは明瞭である。

1号やぐらの年代を考える上で注目されるのは下層で確認された焼土層があげられる。遺跡名にも示されているように遺跡の西側に位置する谷は『吾妻鏡』に出てくる「名越山王堂」の推定地となっている⁽³⁾。本遺跡が「名越山王堂」に含まれるかどうかはともかく、『吾妻鏡』には13世紀中葉～後半にかけて「名越山王堂」にまで及ぶ3回の火災が記録されている。しかし、その最も新しいものでも弘化三(1263)年である。1号やぐらの焼土層をこれに対比した場合、瀬戸窯製品の生産年代には近いものの、かわらけの年代観とは合致しないことになるであろう。報告書では現行の主体的な編年観と瀬戸窯製品の年代を考慮して、1号やぐらを13世紀末～14世紀前半に、3号やぐらについては14世紀中葉という年代に位置づけた。

2. やぐらの構造と特質

1・3号やぐらにはいずれも切石を用いた基壇状の施設が見られたが、その構造には大きな差が認められた。ここでは、それぞれのやぐらの構造を推定して、その特質について考えてみたい。

1号やぐらでは、玄室内中央に切石を長方形状に組み合わせた基壇とそれを囲む外郭の切石列が基壇よりやや低く据えられて開墾されていた。基壇と外郭の構造は玄室内全体におよんでいて、玄室底面にその他の納骨穴等の施設が認められないなどの理由から、この基壇は本やぐらの構築当初から意図された構造と考えられる。注目すべきは、基壇が外郭の切石列よりも一段高く設けられている点で、入り口側の切石列が改修された段階でも、基壇上面を大きく越えないように設置されている。さらに特徴的なのは、基壇上及び基壇周辺には玉石(経石)が積み上げられていたことである。基壇上面玉石敷きの空白部分には石塔が造立されていたと推定したが、ここに立てられていたのは恐らく火葬骨を納めた五輪塔であろう。玄室前面は切石を2列に配して階段状の構造となっていた。さらに両側壁に掘られた穴には角材を差し渡して、忌垣(玉垣)状の区画施設を設けていたものと考えられた。本やぐら群では、2号・3号やぐらでも同様な穴が確認されている。垣をめぐらした区画施設は、中世墓地を描いた絵巻物にも描かれているものであるが、同じ様な施設としては新善光寺やぐら群の中央部コ字区画遺構で発見された「横状の跡」があげられ、田代郁夫はこの横状の施設を「門または鳥居」と「垣」であろうと考えられている(田代1992)。

1号やぐらの施設が区画施設であるという根拠は次の点にも示される。1号やぐらの前面には岩盤を削平した造成面が認められたが、報告書ではこの造成面に掘られたビットを建物の柱穴と考え、これがやぐらと密接な関係を有するものと推定した。ビットはやぐらの穿たれている切岸に接して配列され、やぐら入り口の両脇にもそれぞれビットが認められるなど、やぐらの存在を意識した状況が観察される。また、入り口右側のビットの1つは実際にはやぐらの前面にかかっているが、前庭部中央に据えられた切石はこのビットと左側ビットとのほぼ中间に位置している。また玉石敷きはこの二つのビットの間に広がっていた。つまりこの玉石敷きを造成面側からやぐら内部に至る通路と推定すると、玄室中央に据えられた切石がやぐらの主軸

からややずれた位置に据えられていることが説明できるのである。この様な推定が許されるとするならば、本やぐらは建物からの出入口施設によって、常時眺覗することが可能であったわけである。玄室前面の施設はこの意味からも閉塞施設ではなく、開放的な区画施設でなければならぬと考える。

また1号やぐらの基壇施設周辺の焼土・炭化物層は前部から前面の造成面にも広がりが認められ、やぐら前面の建物施設が火災にあったものと推定された。この火災を原因とする改修にあたっても、基壇前面を区画する切石列のみはほぼ同じ位置で復元されていた。またこの改修時かあるいはその後に、前部では経石を集石状に積み上げる供養が行われていた。このように1号やぐらは本やぐら群の中でも中心的な位置にあるもので、特別な施設として管理修復されていた様子が窺われる。

3号やぐらでの前部で発見された切石敷きは、1号やぐらのような整然としたものではない。切石敷きの無い部分には、焼土混じりの炭層がほぼ全面に分布していて、この場で火葬が行われたことが分かっている。焼土の分布から切石敷きは火葬が行われた後に前部を片付けて構築したものと考えられた。玉石は2次的に集積された可能性が考えられるが、焼土や灰層は比較的純粋な形で残されていたため、火葬後やや間をおいて上に若干の土が堆積してからこれを掘り込んで切石列が設置されたものと推定される。従って切石列は構築当初のものではなく、火葬が行われた場で切石を敷き並べ基壇状の施設を構築したと見ることが出来るであろう。この切石敷きの上には石塔を建てていた可能性が高いが、その痕跡は認められなかった。ここで火葬された骨が玄室内に埋葬されたかどうかは不明である。しかし、火葬を行った場所に石塔を造立して墓所とする例は、中世の文献にも記録が認められるものであり、石塔のみではあるが多宝寺覺賢塔でも火葬後に石塔が建立されたことが確認されている（高橋他1976）。なお、玄室内玉石上の火葬骨と共に経石1点が出土しているが、墨書きが不鮮明なため判読不明であり、これが前部の経石と同時のものであるかどうかは判断できなかった。

やぐら本体の形態を見てみると、調査されたやぐらの中では3号やぐらがやや形態を異にするものの、他の3基はいずれも全体の形状が長方形を呈し前部を一段低く作るという特徴から、水井正憲が馬場ヶ谷やぐら群で行った型式分類（永井他1986）に比較するとI b型とされたものに相当する。馬場ヶ谷やぐら群では横道を有するもの（I型）と、横道を持たずに長方形平面ものの（II型）が14世紀初頭から併せて営まれたとされている。また佐助二丁目の松谷寺やぐら群では13世紀後半～14世紀前半の遺物が出土しているが、比較的規模の大きなやぐらはいずれも横道を有する形態である（宗臺他1998）。このようにやぐらの形態は群によつて構成を異にしていて、一元的な形態変化を示すものでないことは明らかである。その初期の段階から横道をもつものや持たないものなど、幾つかの形態が存在していたと考えられる。既に指摘されているように、やぐら群及び個々のやぐらの形態は、それぞれの役割と密接な関係を有しているのである（田代1990）。

本やぐら群で見られた1・3号やぐらの様相から最も近いと考えられるのは、多宝寺跡やぐら群10号やぐらと新善光寺跡やぐら群のコ字区画造構であろう。多宝寺跡10号やぐらは平面「L」字形を呈しているが、長方形平面の玄室の一方の側壁を拡張しているので、前面には切石を配列している（学習院大学輔仁会史学部1966）¹⁴⁾。この部分のみについてみれば、3号やぐらの前部切石敷きはこの10号やぐらの入り口部と同様にやぐら内部と外界を区画する意図を持つものという可能性も考えられる。一方、新善光寺跡コ字区画造構については一般的なやぐらとは異なる造構とされている（田代前掲）。天井構造を有していないというのが、その最も大きな理由と考えられる。確かに多宝寺覺賢塔（高橋他1976）のように斜面下部を方形に掘り込んで、周間に周溝を巡らした状況と類似したものといえる。しかし中・上段の造構面と下段の造構面を、それぞれ違

う遺構として分離して考えた場合、下段の遺構については本来天井があつてそれが崩落したものと考えられ、玄室内に五輪塔を建てその周囲には經石を積み上げてさらに垣をめぐらしたやぐらという認識が出来るのである⁽¹⁾。元々軟弱な凝灰岩質の砂泥岩を利して掘られているやぐらは、その造営当初より断続的な崩落が続いたものと推定される。海底からの隆起した基盤層は隆起以前あるいは以後の多数の断層帯が内在しており、場所によっては驚くほどの亀裂が縦横に走っている。立木の根による浸食と切岸によって露出した岩盤面からの風化はさらにその剥落を進行させる。鎌倉市内でのやぐらの総数が3,000~5,000基と推定されている(河野1995)が、それはやぐら群の多くが崩落土に覆われていて実数を掴みきれないからでもある。この遺構がやぐらとして造営されていたとしても、その特殊性は変わらない。周囲に分布するやぐらとの関係は、崩落後に配列される宝篋印塔群にも見られる様にここが特別な場所として意識されていたことを示している。前壁・横道構造を持たない大形のやぐらは、前面に垣を作つて区画されていたものと推定され、折に触れる年毎に供養が行われる場として計画的に造営されたものであり、やぐら群内で中心的な位置にあつたものと考えられるのである。

3. 経石を伴う供養について

本やぐら群においては1号やぐら玄室内と前庭部の集石中、3号やぐら前庭部の合わせて3ヶ所より經石(礫石經)が出土している。やぐら内における經石の出土は、赤星直忠の研究により5ヶ所の出土例が報告され、初めてその存在が指摘された(赤星1957)。その後多宝寺址やぐら群・新善光寺やぐら群でも確認されたが、その出土事例は極めて少ないと見えよう。こういった状況の中で、本やぐら群の經石は、書写内容・書写方法が特定できるという点と、複数のやぐらから時期および書写内容の異なる經石が確認されているという点で、やぐらにおける礫石經の書写・埋納を考える上で貴重な事例と言える。

平安時代から見られる埋經には、礫石經以外に紙本經・瓦經・銅板經・滑石經等が用いられる。これらのうち、中世前半まで紙本經の埋經の中心となる「如法經」⁽²⁾の場合には書写的な手順を記録した史料が多く残されているが、礫石經の場合にはそういう史料は確認されておらず、書写における全体的な手順は不明である。礫石經自体は近世に特に隆盛したことが知られているが、発掘資料の増加により、13世紀末から14世紀初頭にはすでに行われていたことが確認されている。中世段階での礫石經についての史料としては『平家物語』(『経嶋』⁽³⁾・応保元~3年营造)と『統史愚抄』(永享元年7月16日の条)(8)が知られており、その他石塔銘や頬文に礫石經供養の記載が残るのみである(松原1994a)。

礫石經供養の過程については、一般的な經典書写供養と同様に準備段階・書写・納經(埋經)供養の3段階に分けられるものと思われる。まず、これらの段階に沿つて本やぐら群出土の礫石經を検討してみよう。

(1) 準備段階

礫石經の書写に当たっては、書写を行う石の採集が不可欠である。從来確認されている礫石經の多くは、「河原石」と総称される角の摩滅した扁平な礫が用いられており、山間部で採集したと考えられる角張った礫を用いた例はごく少数のみにとどまる。こういった礫が用いられる理由としては、書写を行うのに適したある程度扁平な礫を一括して多量に採集するのが可能であるという点がまず考えられる。1号やぐら玄室内出土の經石を例にとると、判読可能な經石の書写文字数は片面でおよそ30~110字程度であり、仮に法華經全てを連続して書写したとすると概算で310~1150点の石が必要となる。實際には經文以外の文言や光明真

言等が書写されている点を鑑みれば、石の必要数はさらに増加するため、多量の礫が必要となる⁽⁹⁾。本やぐら群においては、1号やぐら前庭部集石は凝灰質砂岩の礫を主体として採取地は不明であるが、1号やぐら玄室内の経石は相模川以西から小田原周辺、3号やぐら前庭部の経石は相模川東岸の茅ヶ崎周辺のいずれも海岸において採集された海浜礫ではないかとの指摘を受けた⁽¹⁰⁾。また、新善光寺跡内やぐら群コ字区画造構より出土した経石についても、早川・横府川・相模川などの相模湾沿いの河口周辺において採集されたものと確認されている（前掲）。

鎌倉一帯は「鎌倉石」と呼ばれる凝灰岩質砂岩を基盤層とする地域であり、やぐら自体も岩盤を掘り込んで構築されているため、河原石を運搬するよりも一帯で産出する石を用いることも十分に考えうるものである⁽¹¹⁾。しかし、こういった条件下にあっても遠方から運ばれた海浜礫が用いられていることには、河原石そのものを用いることに何らかの宗教的背景があると思われる。海岸の石は、扁平度が高く書写する面が広いこと、礫の表面の磨滅が進んでいるため墨が乗りやすいなどの利点が考えられる。また、海路をもって運搬すれば、多量の礫を一度に運搬できるということも考えられよう。これらの採取地が鎌倉より西方に位置するということも、西方淨土という見方から類推すると興味深い点である。河原石に書写することの意義については、石田茂作が「一字一石法華経」について「妙利は舍利に通ず。」としているように、河原石をあえて用いるという点の宗教的背景についてさらに検討していく必要性があろう（石田1930）。

（2）書写段階

石の採集後、経典の書写が行われる。書写にあたっては様々な仏教的儀礼が行われたと思われるが、実際には不明な点が多い。書写段階における具体的な供養の内容としては、石への書写方法・書写する手順・書写された内容の3つの点が問題となる。

石への書写方法については不明な部分が多い。これまで確認されているやぐら群出土の経石は10例（表1）であるが、いずれも石の各面に多字・多行の経文を書写したもので、いわゆる一字一石経は確認されていない。「一字一石」と「多字一石」とについては、いずれも石に経典を書写するという点では共通しているが、書写供養にあたっては、両者は明確に意識されて区別されていると考えられる。「多字一石」の場合、石への書写面順・書写方向は、石の平らな面を選んで一般的な写経と同様に右から左方向へ書き次いでいる。この傾向は中世以降の多字の事例にも多くみられる。ただし、1号やぐら玄室内出土の経石では、左から右方向への書写や、各面が連続性を持たないという特異な書写方法も確認されており、基準となる書写方法が存在したとは必ずしもいえない。またいずれも一行の文字数はまちまちである。書写方法については紙本経の書写方法をある程度踏襲しつつ、個々の石に合わせて臨機応変に書写を行ったといえるだろう。さらに、1号やぐら玄室内出土の経石では少なくとも二人以上の筆跡が確認されており、それぞれの筆跡で書写された部分が重複していないため複数による分担作業で行われたと考えられる。

書写されている内容においては、これまでやぐら出土例では法華経が多く確認されているが、3号やぐらでは無量寿経が書写されているため、赤星直忠が指摘するように法華経のみと限定することはできない（赤星前掲）。法華経は特定宗派に限定されず幅広く用いられる經典であり、鎌倉の寺院は諸宗兼学の傾向があることが指摘されている点も含め、宗派等による特徴を見出すことは極めて困難である。一方、中世墓研究においては、宗派等の影響はあまり見受けられず、形態的に全国的な共通性が指摘されている。やぐらにおける経石の埋納も、宗派による特質よりもむしろ供養に伴う埋經（納経）という側面を強く有するものであると考えられる。

(3) 納経供養

書写終了後、やぐら内に経石を納めるにあたっては、納経供養が行われたものと考えられる。本やぐら群において納経時の状況を留めているとみられるのは1号やぐら玄室内出土の経石である。1号やぐら玄室内においては切石によって基壇を構築し、経石は基壇上部を中心に周辺に広がるように集石状に展開しており、基壇中央には石塔が造立されていたとみられる。こういった状況により、経石は基壇上の石塔周辺に敷きつめられたものであり、基壇構築・石塔造立の後にそれほど時間をおくかず経石が納められたと考えられる。基壇の周辺には多数のかわらけが出土しているが、納経に伴う供養に使用されたものが含まれている可能性がある。

かわらけの出土を除けば、同様の出土状況は多宝寺跡やぐら群10号・14号やぐらにおいてもみられる。特に10号やぐらにおいては、火葬骨を納めた五輪塔のうち最も古い形式を示す1基の下部を除いたやぐら内一面に経石が敷かれており、後にはこの経石上に別の石塔の造立が行われている。またやや状況が異なるが、新善光寺跡やぐら群コ字区画遺構においてはピットによって囲まれた長方形の区画内に経石を積み上げている。この下部には火葬骨を納めた白磁四耳壺が埋納されたピットが発見されている。これらの事例においては「やぐら」の造成後に、火葬墓の造営あるいは石塔の造立に伴って経石が納められたと考えられる。こういった事例から、やぐらにみられる経石の書写供養が、葬送一時に造墓・造塔に伴う供養の一つであることが改めて確認できるものである。

また、山王堂東谷3号やぐらの前庭部においては、底面近くの焼土・炭化物層中から懸仏・飾り金具・鉄釘等や火葬骨片・齒と共に出土していることから、この場所で行われた火葬に伴うものと考えられている。出土状況から経石自体も火の中に投げ込まれた可能性が高いものである。

墳墓における埋經（納経）については、近年特に藤澤典彦によって中世墓の側面より研究がなされており、中世墓における埋經（納経）の事例には墓地の形成に先行して行われる例と造墓と共に行われる例があることが指摘されている（藤沢1991）。前者は、經典・經筒の出土は確認されていないが静岡県一の谷墳墓群（磐田市教委1993）や奈良県広瀬地藏山墓地の事例に代表され、集団墓が造成されるにあたって先行して經典を埋納した、あるいは經典を埋納してあった場所の周辺が墓域として用いられるようになったとするものがあり、12世紀末頃の年代が指摘されている。後者は単独の墳墓に対して行われる事例が確認されており、卒塔婆としての怖経や史料に見られる紙本経の事例が挙げられている。

14世紀代までの事例のうち、墳墓より発見された砾石経はやぐらを含めて18例が確認されている（表1）。墳墓以外の出土例では、塚より出土しているものが2例、柱穴内・基壇周溝内・庭園池中よりの出土が各1例である。出土事例があまり多くないという点をふまえても、墳墓・墓域に伴う事例が多いといえるだろう。

この中で火葬墓上に経石を敷いている事例としては、長野県坂城町観音平經塚（若林1999）が挙げられる。ここは14~16世紀前半を中心に丘陵斜面にテラス状の墓域を形成する形で構築された中世墓地であり、経石は斜面裾部に近いテラス上、平均30cmほどの厚さに敷かれた玉石中より確認されている。テラス中央には火葬骨を納めた古瀬戸四耳壺を石組みの石郭状施設内に納めた墓壇が営まれ、東寄りに火葬骨片と焼土を覆土中に含む土坑を検出している。後者の土坑は火葬骨を骨蔵器に納めた後に、残りの火葬骨や焼土等を一括して埋めたものと思われ、両者を造営した後にテラス全面にわたって経石を敷きつめ、供養を行ったと推定される。経石の産地は特定されていないが、写真では全体的に扁平で角のやや取れた礫が中心である様に見受けられ、河原石を用いたものと考えられる。經典は法華経であるが、經典不明のものも確認されている。年

第1表 墳墓出土経石一覧

番号	名称	所在地	年代	出土位置	書写状況	經典	共伴遺物	文献
1	多宝寺跡やぐら群10号	鎌倉市扇ヶ谷2丁目	14世紀前半	やぐら玄室	全面、多行	判読不能。	古瀬戸瓶子(骨蔵器)	①
2	多宝寺跡やぐら群14号	鎌倉市扇ヶ谷2丁目		やぐら玄室	詳細不明			②
3	新善光寺跡やぐら群2号 区画道構	鎌倉市材木座4丁目	14世紀中葉	床面中央、 納骨穴上	全面、多行	法華經/四門真言 (梵字)・阿弥陀 三尊名	白磁四耳壺(骨蔵器)	③
4	山王堂東谷やぐら群1号	鎌倉市大町3丁目	13世紀末～ 14世紀初頭	やぐら玄室	全面を片面 ずつ交互使用 ・多行	法華經/光明真言 (梵字)	かわらけ、古瀬戸仏像、 古瀬戸四耳壺(骨 蔵器)	④
5	山王堂東谷やぐら群1号	鎌倉市大町4丁目		やぐら前庭 集石	全面、多行	不明	かわらけ	④
6	山王堂東谷やぐら群3号	鎌倉市大町4丁目		やぐら前庭 玄室	全面、多行	無量寿經	かわらけ・瓦質香炉、 銅製聖龕、金具類、鉄 釘頭、火葬骨片	④
7	まんだら堂やぐら群	鎌倉市大町4丁目	14世紀前半	やぐら内	全面、多行	法華經		⑤
8	名旅山やぐら群17号	鎌倉市大町5丁目		やぐら内	全面、多行	法華經		⑤
9	葛原山やぐら群	鎌倉市佐助2丁目		やぐら内	詳細不明			⑤
10	瑞泉寺裏山やぐら群	鎌倉市二階堂		やぐら内	詳細不明			⑤
11	觀音堂やぐら群	鎌倉市二階堂		やぐら内	詳細不明			⑤
12	山寺魔寺	長野県大町市社	13世紀後半	集石墓 骨蔵器蓋	全面、多行	法華經	古瀬戸瓶子・四耳壺、 青磁水注	⑥
13	般若平	長野県塩尻郡坂城坂城 般若平4355	13世紀～14世 紀12四半期	集石墓	全面、多行	法華經	和鏡、開元通鑑、皇宋 通鑑、古瀬戸四耳壺	⑦
14	金剛寺多宝塔	大阪府河内長野市天野町	12世紀末～ 13世紀前半	多宝塔下、 骨蔵器蓋 ・台石	全面、多行	宝鏡印陀羅尼經 (蓋石)・その他の 不明	かわらけ・瓦部鏡、白 磁小壺(骨蔵器)、銀 忠貞、金銅製宝瓶	⑧
15	小兒石	新潟県柏崎市阿田尾	13～16世紀	土坑墓上	全面、多行	仏説阿弥陀經		⑨
16	大門山	宮城県名取市高館麻野堂	13世紀中葉～ 14世紀中葉	集石墓、墓 石	全面、多行	法華經・天台宗 「札位」・四弘誓 願(願文か?)		⑩
17	木ノ内	千葉県香取郡小見川町本 内		採集	詳細不明		火葬骨、常滑三筋壺	⑪
18	東照寺址	長野県諏訪郡下諏訪町高 木	13世紀末～ 14世紀中葉	集石墓	多行	教若經		⑫

- ① 学習院大学韓仁会史学部 1966 「中世墳墓『やぐら』の調査」
- ② 鎌倉市教育委員会 1976 「多宝律寺遺跡発掘調査報告書」
- ③ 新善光寺跡内やぐら発掘調査団 1988 「新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書」
- ④ (財) かながわ考古学財団 2001 「山王堂東谷やぐら群」
- ⑤ 赤堀直志 1957 [鎌倉の経緯]「考古学雑誌」42-4 日本書考学会
- ⑥ 大阪市教育委員会 1987 「長野県大町市遺跡詳細分布報告書 大町の遺跡」
- ⑦ 長野県埋蔵文化財センター 1999 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2-1」
- ⑧ 国宝金剛寺塔婆及鐘樓修理事務所 1940 「国宝金剛寺塔婆及鐘樓修理工報告」
- ⑨ 柏崎市教育委員会 1991 「小兒石」
- ⑩ 名取市教育委員会 1988 「大門山遺跡発掘調査報告書」
- ⑪ (財) 千葉県文化財センター 1980 「千葉県文化財センター紀要」5
- ⑫ 下諏訪町教育委員会 1990 「殿村・東照寺址遺跡」

代は、墓域内に埋納された骨蔵器が12世紀後半の所産であり、経石の埋没後にテラスを再造成して造立された五輪塔群の年代が14世紀第2四半期に位置づけられる点より、13世紀以降14世紀第1四半期までが考えられる。経石を伴う墓はこの墓域の中でも最も古い時期に当たり、この墓を中心背後の斜面地に墓域が展開している。ただし、経石を敷き始めた上面には石塔などを造立した痕跡は確認されておらず、経石を伴う墓域と背後の墓域や五輪塔群について直接的な関連性を考えるには不明な部分も多い。

一方、墓域よりやや離れた地点からの出土で、出土地自体が調査範囲外にあたるため遺構の状況が明確ではないが、宮城県名取市大門山遺跡（名取市教委1988）も同様の事例である可能性がある。13世紀中葉から

14世紀代を中心に營まれた板碑を伴う集石墓群であり、墓域内での如法經の埋納も確認されている。経石は如法經が納められたテラスより斜面下方において確認されていた扁平な礫の集中部において出土している。書写内容には法華經のほか、菩薩名を連記したものや偈の一節と思われる文字を記したものがある。さらに、名取地方においては法事の際に河原石に願文を記して墓に納める風習が存在していたことも指摘されており、墓地における礫石供養を考える上で興味深い事例である。

また、横穴墓を転用して内部に経石を敷きつめた宮城県利府町道安寺横穴墓（利府町教委1978）の事例も、やぐらと同様な役割を考えることのできる事例である。道安寺横穴墓群では他に板碑を納めた横穴墓も確認されており、中世段階にはすでに開口して再利用されていたものと考えられる。経石はA区1号墳と呼ばれる横穴墓内床面に敷きつめられていた。石の産地等は特に比定されていないが、扁平で角の丸い石が使用されている。判読された書写内容から弘安6年（1283）の紀年銘と摩訶摩耶經の章題と本文が確認されている。

一方骨蔵器と共に経石を納める例としては、大阪府河内長野市金剛寺多宝塔（国宝金剛寺塔婆及鐘樓修理事務所1940）では基壇下より出土した須恵質の甕に火葬骨を納めた白磁小壺と、小碟に梵字数文字を墨書きした経石や金銅製宝瓶等が納められていた。この甕は土坑内に台石として納められた経石上に据え置かれ、さらに上部に経石を蓋石として用いている。これらは塔の造立時のものか骨蔵器の追納段階の供養に伴うものである可能性が考えられる。経石は扁平で角の丸い石が用いられており、いずれも梵字で書写されているが蓋石のみ宝印陀羅尼經が判読されている。年代は12世紀末～13世紀前半に比定されている。また長野県大町市山寺庵寺跡（大町市教委1987）では、火葬骨を納めた古瀬戸瓶子を埋納した上部に1点のみ蓋石状に置かれていたとされる。石はやや扁平な角の丸い礫が用いられており、經典は法華經のうち不輕菩薩品が書写されているのが確認できる。遺構の状況は不明であるが、周辺から骨蔵器として用いられた古瀬戸瓶子・四耳壺等が出土している。年代は古瀬戸瓶子が13世紀後半の所産と見られる点から、13世紀末～14世紀代が想定される。同様の事例として長野県下諏訪町東照寺址遺跡（宮坂他1990）があり、13世紀末～14世紀中葉と考えられる集石墓群のうち、複数の集石墓より経石が出土しており、いずれも違う人物の筆跡によるものである。また、詳細は不明であるが、千葉県香取郡小見川町木ノ内遺跡（千葉県文化財センター1980）では火葬骨や常滑三筋壺と共に経石が出土している。

以上述べたように、墳墓における礫石經の出土例からは、墓あるいは墓域上に多数の経石を敷きつめる形で納める事例と、骨蔵器と共にごく少ない数を納める事例が確認されている。山王堂東谷やぐら群の場合、1号やぐら玄室内出土の経石は前者と同様のものであると思われ、3号やぐら玄室内出土の1点は後者に属する可能性がある。また、1号やぐら前庭部で集石として検出している経石はこれらに対して追善供養として書写されたものであろう。3号やぐら前庭部出土の経石に関しては、同様に経石を火葬の際に投入したと考えられる事例は確認されていないが、死者の靈魂を鎮魂・浄化させて極楽往生させるための葬送儀礼であろう。

4.まとめ

これまで長々と述べてきたが、1号やぐらでの造営から廃絶までの様相は下記のように整理できる。

やぐら掘削 → 基壇の造営・石塔の造立 → 火災による改修 → 火葬骨追葬 → 機能喪失
 経石納入供養 改修供養（集石） 納骨供養 人骨投げ込み

一方、3号やぐらでは玄室と前庭部が同時に存在していたとする次のように整理できるであろう。

やぐら掘削 → 前庭部で火葬 → 基壇設置・石塔の造立 → 火葬骨追葬 → 機能喪失

葬送供養（経石）	(玄室内埋葬?)	納骨供養
----------	----------	------

それぞれに経石を用いた供養が行われているが、経石については先にあげた例以外にも13~14世紀代の塚（経塚）に伴う例が近年各地で発見されている。やぐらにおける経石の埋納も、この様な流れの中でやぐら内における造塔供養や追善供養の一部として導入されたものと考えられる。経塚や墳墓での出土例ではそれぞれ多様な様相を示しているため、特定の宗派に限定されるものではないが、浄土宗や念佛衆との関係が指摘されている。やぐらで行われた供養には、様々な宗派あるいはそれを兼ね備えた人々が参画して営まれていたことを示しているものと思われる。

本遺跡で認められたやぐら内部における基壇の造営や造塔供養は、多宝寺跡の中央平場で発見された石造遺構のように、本来平地墳墓や墳墓堂にみられる様式を取り入れたものと考えられる。またやぐら前面に建物が存在することは既に上行寺東やぐら群（戸田・小林1985）で確認されて以来、その他のやぐら群でもその存在が推定されるようになって来ている。本遺跡の1号やぐらでは両者が一体になった墳墓堂もしくは供養堂として計画的に構築されたものと考えることが出来る。そしてその造営時期は、出土したかわらけなどから13世紀末から14世紀初頭には確実に存在していたのである。

やぐらと墳墓堂・供養堂との関係は、やぐらの発生と絡めて既に多くの指摘がなされてきている。赤星直忠は鎌倉に群集した武士達が丘陵に開口する横穴に納骨したことがやぐらの発生を促した可能性があるとして、武士達の仲間に急激にこの風習が広まり、その納骨窟を墳墓堂として莊嚴したとする。このようにして鎌倉中至る所に営まれていったが、鎌倉市中に墳墓を営むことの禁令⁽¹⁰⁾が出されたことから、墳墓は鎌倉を取り巻く丘陵の尾根をめぐって群集するに至ったとされている（赤星1959）。これに対して大三輪龍彦は、禁令が禁止の対象としたのは平地の墓所についてであり、鎌倉の都市整備の大きな障害となつたので平地部分の確保を目的に禁令が発せられ、これによって周囲の丘陵にやぐらという新しい形の墳墓を作つて改葬されたため急激にやぐらの発展を促したとした上で、このことからやぐら発生の年代は仁治3年（1242）頃と言わざるを得ないとされた。さらには北条氏と律宗の結びつきから、北条氏による鎌倉の都市整備と仁治の禁令によって、木造墳墓堂の代用として土木技術を持つ律宗僧侶達が生み出した墳墓の新様式がやぐらであるとしている（大三輪1976）。仁治の禁令に関しては、やぐら出土の紀年銘資料と年代差が指摘されている。しかしこの法令は豈後守護大友氏が所領の府中に発したものであるが、法令自体も幕府法の影響下に作られたものであろうから、鎌倉市中でも既に同様な禁令が出されていたという考え方も示されている（石井1979）。一方、田代郁夫は鎌倉に集中した御家人達が鎌倉に彼らの墳墓を集中させたという考え方方に疑問を呈している。始めは僧侶階級の墓制の一つであった「やぐら」が、複数である北条氏一門や有力御家人達が帰依した僧侶の墓所の傍らに自らの墓所＝やぐらを築かせて分骨を納めさせ、一方地方に父祖伝来の墓所を持つ一般御家人にあっても、分骨をもって鎌倉で帰依した高僧の墓所の傍らに葬られることが出来たとする。そしてやぐらの中には、ある時期いわゆる納骨信仰の場として靈場化するものがあると指摘している（田代1990）。またやぐらから出土した骨蔵器等を分析した田代は、骨蔵器は瀬戸・常滑共に概ね13世紀中頃から14世紀中頃にかけての年代が与えられるとした上で、これらの埋納状況からは石窟（＝やぐら）の造営と骨蔵器の埋納が一体の行為であったと推定し、まさにこの時期が骨蔵器と骨蔵施設を設けた石窟が発生し展開した中心時期であるとしている（田代1998）。

やぐらから出土している蔵骨器は、1号やぐら出土の四耳壺のように古瀬戸前期様式の13世紀前半代のものが認められるが、板碑等の紀年銘資料では朝比奈紳やぐら出土の弘安九年（1286）銘を最古とする。形態的には、近年調査されたやぐら群の様相から見ると、既に13世紀末の段階から前壁構造をもつものと持たないものの両方が存在したものと予想される。また玄室の構造については、多くの納骨穴を周間に配列するものではなく、特定の納骨穴もしくは納骨器としての石塔を中央部に設置したもので、その周間に追善供養としての造塔や追葬としての納骨あるいは造塔がなされたものと考えることができるであろう。そしてその被葬者（納骨あるいは供養された人々）は、寺院の僧侶及び檀家である有力御家人であったろう。ここで明確に示すことは出来ないが、やぐらは初期の段階からかなり確立した構造として構築されたと考えられる。軟質な凝灰質砂岩である鎌倉の丘陵部とはいえ、企画性をもったやぐらの掘削には高度な技術が必要とされたはずであり、それには「土木技術を持つ律僧集団」が関わった可能性は高い。しかし、実際のやぐらの構造や形態の検討から示されたわけではないので、この方面での検討が必要であろう。

1号やぐらの基壇構造が平地墳墓の形をやぐら内に取り入れられたものとしたが、石塔や蔵骨器などの供養・納骨方法そのものだけでなく、中心的なやぐらを取り巻くように造営されるやぐら群は中世的な墳墓の在り方を丘陵斜面を掘り込んだ横穴の中に入れ込んだものという見方が出来るわけで、大三輪の考え方はこの点において正しいと言えるだろう。しかし、鎌倉市内においては、やぐらに先行する形での墳墓の在り方は、まだ明らかになってはいない。13世紀代における墳墓の在り方とやぐらの発生に関しては、さらに多方面からの検討が必要とされよう。やぐらは僧侶を中心とする特別な階層の特権的な墓制として成立したものと思われる。田代はやぐら発生の原因を「南宋仏教文化の影響」とするが、中国仏教文化の影響は考慮すべきだが、具体的にやぐらの形態や内部構造の比較によって示されない限りは受け入れにくいと考える。

1号やぐらにおける経石を伴う供養は、基壇上に建立されていたであろう石塔内に納められていた火葬骨（舍利）の鎮魂と死體を浄化するとともに、石塔周辺を含めたやぐら内を聖地化させる（松原1995）ことを意図したものと考えることができる。本来死體を厭う寺院境内に墓地を造営するために様々な仏教的儀礼を経なければならなかったと思われるが、逆にこれらの儀礼を利用してやぐら内を聖地化させ、さらには寺院内部を聖地・靈場化させたのではないかのか。それが多くの寺院が集中する鎌倉において、有力御家人のみならず一般御家人や台頭する商人達をも檀家として、またやぐらへの被葬者（納骨者）として取り込んでいく手段であったのではないだろうか。その結果が、「14世紀中葉から後半以降に追加される小型化した石塔や瀬戸・常滑製の骨蔵器を用いない分骨」（田代1998）による納骨が盛行することにつながっていくのである。

おわりに

山王堂東谷やぐら群の検討を通じて、やぐらの性格の一端を示すことが出来たのではないかと考えている。やぐらの変化と再利用については、最近次第に明らかにされつつあるが、個々のやぐらでの葬送・供養、あるいは形態的な差異の意味などまだまだ不明な部分が多い。またやぐらの成立と展開については、鎌倉の政治・社会的な背景を抜きにしては語れないが、今回はあえてその部分を抜きにしてまとめた。勉強不足な部分が多くあると思われるが、御批判・御指導いただければ幸いである。

本稿の執筆は、はじめにと1を池田が、4を船場が、その他を宍戸が担当した。

また本稿を作成するにあたっては、坂詰秀一、関秀夫、大三輪龍彦、池上悟、小川裕久、樹潤規影、小林康幸、宗臺富貴子、鈴木庸一郎の各氏に御教示を頂いた記して感謝申しあげたい。

註

- (1) 赤星直忠による研究史は田代1997に詳しい。
- (2) やぐらを「石室遺構」として総合的に考えようとする視点は、十分理解され頗る信するものであるが、「石室遺構」という名称についてはさらには意味的な印象を拭いきれない。混乱をさける為にもある程度共通した認識として受け入れられている「やぐら」という呼称を使うことにする。
- (3) 山王堂東谷やぐら群は衣張山から派生する丘陵の一角に立地し、周辺には釈迦堂口やぐら群・釈迦堂奥やぐら群を始め多数のやぐら群が集中して分布する地域の一つとされている。本遺跡の所在する小支谷は南に広がる名越谷の一部でもあり、調査地東側の谷奥には北条氏政の別邸があったとされていて、その後は名越北条氏の拠点であったとも言われている。一方本遺跡の西側に位置する谷は『吾妻鏡』にも見られる「名越山王堂」の推定地である。赤星直忠等による『鎌倉史跡巡り舗石記録(二)』によれば山王堂の東側の谷を「赤門」と呼ぶという記述があり、地元の方にも同様な話を伺うことが出来た。本やぐら群での様相は、やぐらの前面に推定される遺構との密接な関連性を窺わせるものであった。本やぐら群を含めた谷奥全體に寺院址が存在することはほぼ間違いないものと思われる。それは「名越山王堂」の一帯であるか、あるいは名越北条氏に関連するものと推定することも可能であろう。
- (4) 多宝寺跡10号やぐらでは前面側に鎌倉石の切石が5列に配列されていることが図示されているが、これに関する説明がないため、詳細は不明である。
- (5) 報告書に示された実測図では左奥壁の立ち上がりに屈曲が認められる。また、両側壁上部は直線的に表現されていて、上面にテラス面が存在したのではないか。
- (6) 特定の作法にのっとって経典を書写する供養、または書写された経典そのものを指す。日本では慈覚大師円仁により始められた天台宗における法華經の如法經が知られ、後円仁の書写した如法經を法滅に備えて土中へ納めたり、埋葬まで含めた儀礼となる。經簡銘に多く如法經の文字が残り、中世前半までの紙本經の埋經の主流となる。
- (7) 平清盛により折津国輪田泊に築かれた島。応保元(1161)年墓造を開始したが、台風により崩壊したため応保3(1163)年再築され、その際に人柱の替わりに石の面に一切經を書写したもの用いて築いた。後に、清盛の遺骨をこの島に納めたとする。
- (8) 江戸中期の公卿柳原紀光が編集した歴史書。正元元(1259)年龜山天皇から安永8(1779)年後桃園天皇まで521年にわたる。諸家の記録、社寺の旧記などを参照して編まれ、天皇の日常生活、朝廷日々の行事、神事仏事などを記し、各条に典故を付している。永享元年(1429)七月十六日の条に「奉為先帝公卿殿上人等向西院達書一石一字法華經云」とみえる。
- (9) 黒書の確認できないものも含めると、1号やぐら玄室内では1,426個の罐が出土している。1号の前庭部では209個、3号やぐら前庭部では100個を数える。
- (10) 松島義翠氏の御教示による。報告書では純文時代の石器が含まれていたことから河川の河床罐と考えていたが、罐の扁平度ではいずれも平均値0.6を示すことから海浜罐と考えされることを確認した。
- (11) 鎌倉石では規格的な切石のみならず、多くの五輪塔が製作されていて、やぐらの造営を含めて専門的な工人の存在が推定される。
- (12) 新御成敗状(仁治三年正月十五日)「府中墓所之事」。

引用・参考文献

- 朝日新聞社 2000「仏教がわかる」『A E R A M o o k』56
- 赤星直忠 1957「鎌倉の経塚」『考古学雑誌』第42巻4号(有岡堂「中世考古学の研究」1980所収)
- 赤星直忠 1959「やぐら—鎌倉における中世墳墓の様式ー」『鎌倉市史考古編』吉川弘文館
- 網野善彦・石井進編 1988「中世の都市と墳墓」日本エディタースクール出版部
- 池田治・井辺一徳 2001「山王堂東谷やぐら群」「かながわ考古学財団調査報告」117
- 石井 進 1979「中世都市と鎌倉研究のために一大三輪龍彦氏の近業によせてー」『三浦古文化』第26号
- 石井 進・萩原三雄編 1993「中世社会と墳墓」帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集』名著出版
- 石田茂作 1930「我国における法華經書寫の技巧に就いて」『清水龍山先生古稀記念論文集』(思文閣出版「佛教考古學論叢三編」1977所収)
- 大三輪龍彦 1976「かまくらのやぐらーもののふの津土ー」かまくら春秋社
- 大町市教育委員会 1987「長野県大町市遺跡詳細分布報告書 大町の遺跡」
- 学習院大学輔仁会史学部 1962「多宝寺跡やぐら発掘調査概報」
- 学習院大学輔仁会史学部 1966「中世墳墓「やぐら」の調査ー鎌倉市、多宝寺跡、東林寺跡、東御門ー」
- 河野眞知郎 1995「中世都市鎌倉 遺跡が語る武士の都」講談社現代新書メチエ9
- 国宝金剛寺塔婆及鐘樓修理事務所 1940「国宝金剛寺塔婆及鐘樓修理報告」
- 小林康幸 1999「鎌倉水福寺経塚の造営に関する考察」『考古学論究』第6号 立正大学考古学会
- 齋木秀雄 1990「名越・山王堂跡発掘調査報告書」山王堂跡発掘調査団

- 斎藤 忠 1993「中世の火葬墳墓と一ノ谷中世墳墓群遺跡」『一ノ谷中世墳墓群遺跡』鎌倉市教育委員会
- 品田高志 1994「越後の中世墳墓・墓地」第7回北陸中世土器研究会 中世北陸の寺院と墓地 北陸中世土器研究会
- 宗臺秀明 1992「中世、14世紀かわらけの変遷」『考古論叢神奈河』第1集 神奈川県考古学会
- 宗臺秀明 1999「正法寺遺跡」東国歴史考古学研究所報告第22集中世石窟修復の調査Ⅱ 東国歴史考古学研究所
- 宗臺秀明・宗臺富貴子 1998「松谷寺跡内やぐら」『東国歴史考古学研究所報告第15集中世石窟修復の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所
- 鈴木康一郎 2000「鎌倉城（大町3丁目）所在やぐら」『かながわ考古学財団調査報告』89
- 高橋政雄他 1976「重要文化財淨光明寺五輪塔修理工事報告書」淨光明寺
- 田代郁夫 1990 II. 総括—中世鎌倉におけるやぐらの存在形態とその意義』『昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業にともなう発掘調査報告書』
- 田代郁夫 1993「鎌倉の「やぐら」—中世葬送・墓制史上における位置付けー』『中世社会と墳墓』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集』名著出版
- 田代郁夫 1995「鎌倉の「やぐら」」『シンポジウム・やぐらへ中世びとの浄土～発表資料』
- 田代郁夫 1997「赤星直忠博士による「やぐら」の研究—研究略史ー』『鎌倉』84
- 田代郁夫 1998「中世石窟「やぐら」の盛期と質的転換」『考古論叢神奈河』第7集
- 田畠佐和子 1991「やぐらの研究（1）—鎌倉における分布と出土遺物についてー』『中世都市研究』第1号 中世都市研究会
- 田畠佐和子 1992「やぐらの研究（2）やぐら内に掘られた摺鉢状ピットについて—無量寺やぐらの調査事例を中心としてー』『中世都市研究』第2号 中世都市研究会
- 多宝寺跡発掘調査団 1976「多宝寺跡発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会
- 多宝寺跡発掘調査団 1977「多宝寺跡発掘調査第7次発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会
- 玉林美男 1986「鎌倉の葬制」『仏教芸術』164号 毎日新聞社
- 千々和 到 1991「中世の墓と石塔をめぐって」『争点日本の歴史4 中世編』新人物往来社
- 千々和 到 1994「特論石の文化」『講座日本通史』9 岩波書店
- 千葉県文化財センター 1980「千葉県文化財センター紀要5 考古学から見た房総文化の解明 歴史時代」
- 繼 実 1991「佐助ヶ谷遺跡内やぐら」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業にともなう発掘調査報告書—佐助ヶ谷遺跡内やぐら、弁ヶ谷遺跡内やぐら、方公屋敷内やぐら、瑞泉寺周辺遺跡内やぐら』同発掘調査団
- 手塚直樹他 1988「淨妙寺跡迦堂ヶ谷遺跡」『淨妙寺跡迦堂ヶ谷遺跡発掘調査団』
- 戸田哲也・小林義典 1985「上行寺東やぐら群の調査」『第9回奈良川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
- 永井正憲 1986「馬場ヶ谷やぐら群にみられるやぐらの型式について」『馬場ヶ谷やぐら群発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 名取市教育委員会 1988「大門山遺跡発掘調査報告書」
- 原 広志 1983「新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書—中世墓の発掘調査—昭和62年度鎌倉市材木座地区内急傾斜地崩壊対策事業に伴う調査」新善光寺跡内やぐら発掘調査団
- 日野一郎 1975「墳墓堂」「新版仏教考古学講座第七巻墳墓」堆山閣
- 藤沢典彦 1988「日本の納骨信仰」『仏教民俗学大系4 祖先祭祀と葬墓』名著出版
- 藤沢典彦 1990「墓地景観の変遷と背景」『日本史研究』第330号
- 藤沢典彦 1991「墓上祭祀の諸問題」『歴史手帳』第19巻1号
- 藤沢良祐 1995「瀬戸古窯址群Ⅲ—古窯戸前定期式の継承ー」『財团法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第3編
- 船場昌子 2001「山王堂東谷やぐら群出土の礎石経」『かながわ考古学財団調査報告117山王堂東谷やぐら群』
- 松尾剛次 1995「鎌倉新仏教の誕生 効用・汚れ・破滅の中世」講談社現代新書
- 松原典明 1994a「礎石経研究序説」「考古学論究」第3号 立正大学考古学研究会
- 松原典明 1994b「礎石経の地域別—3箇所甲信越」『考古学論究』第3号 立正大学考古学研究会
- 松原典明 1995「礎石経の諸相—特に中世墓の出土例をめぐってー」『立正考古』第33号 立正大学考古学会
- 宮坂光昭他 1990「殿村・東照寺址遺跡」下諏訪町教育委員会
- 山川公見子 1999「経塚造営の作法とその用具—埋経作法の行儀書に見られる用具ー」『考古学論究』第6号 立正大学考古学会
- 吉田 清 1993「如法経会」「仏教民俗学体系1 仏教民俗学の諸問題」名著出版
- 利府町教育委員会 1978「苦谷道安寺横穴群」
- 若林 卓 1999「観音平経塚」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書41上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 21』

研究紀要 7

かながわの考古学

発行日 平成14年(2002)3月29日

発行 財團法人かながわ考古学財團

〒232-0033 横浜市南区中村町3-191-1

TEL 045-252-8661 FAX 045-261-8162

印刷 野崎印刷紙器株式会社

KANAGAWA NO KOUKOGAKU

Vol. 7

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

CONTENTS

Palaeolithic Remains in Kanagawa Prefecture(1)	1
-Project Team for Paleolithic Studies-	
The Transition of the Jomon Culture in Kanagawa Ⅱ	
: An Example in the Late-Middle Period - An Aspect of the Kasori-Etype Pottery Period .	
Part2 : Pottery chronology	17
-Project Team for Jomon Period Studies-	
A Study of the Miyanodai-type Pottery(1)	35
-Project Team for Yayoi Period Studies-	
A Study of Forms and Structures for the "Yokoana-bo" (Cave style Tomb) (8)	51
-Project Team for Kofun Period Studies-	
A Archaeological Study of The Nara-Heian Period in Kanagawa (Ⅲ)	67
-Project Team for Nara-Heian Period Studies-	
The Corpus of "Kawarake" (earthen-wares) in Kanagawa (6)	87
-Project Team for Medieval Age Studies-	
Compilation of Early Modern Age Remains in Knagawa Prefecture (2)	101
-Project Team for Early Modern Age Studies-	
Individual paper	
Burial and Memorial service of Yagura : On the KiriishiKidan and	
kyouseki discovered at the Sammodohigashiyatu Yagura Complex	127
-Shingo Shishido Osamu Ikeda Akiko Funaba -	

March, 2002

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan